

守護者の観る水平線

根無草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロー体は剣で出来ている

血潮は鉄で、心は硝子

幾たびの戦場を越えて不敗

ただの一度の敗走もなく、ただの一度の勝利もない

彼の者はやがて独り、大海原で黒鉄を穿つ

なればその生涯は意味を宿す

その体はロー不変の剣で出来ていた

Fateシリーズの登場キャラ、英霊エミヤと艦これのクロスオーバーになります。

主役はFateの英霊エミヤですが世界観は艦隊これくしょんになります。

作者による独自解釈があります、ご注意ください。

原作との矛盾や不快な表現等ありましたら遠慮なくご意見いただけると有り難いです。

更新不定期になりますがそれでも良いという方はよろしく願います。

目次

召喚	1
そして守護者は鎮守府へ	21
守護者と提督	45
密談の時間	68
英霊着任	98
一問一闘	124
暴れ天龍	160
絆が欲しけりや胃を掴め	206
【幕間】エミヤ提督の1日	239
サヨナラ日渡提督	261
初陣	282
眠り姫と英霊の過去	299

守護者と保護者	325
お姫様の誓い	354
【幕間】ホッポちゃんのいる日々ー前編ー	376
【幕間】ホッポちゃんのいる日々ー後編ー	405

召喚

「……やれやれ、またぞろお呼び出しか」

この世界の何処とも言えない場所。

それは概念であり、あるいは神域であり、神秘そのものともいえる次元……英霊の座。そこに登録されし一人の英霊はそんな独り言を零した。

英霊とは言っても彼は歴史にその名を刻んだ者ではない。

生前、偉業といえば偉業を成し遂げてはいるのだろうが、それは決して神話に讃えられるようなものではなく、人々の記憶に刻まれるものでもない。

己が信念、理想に基き世界と契約せし異例の英霊。

曰く『霊長の守護者』。

炎のような真紅の外套を纏いしその男は溜息をついて眼を閉じる。

幾度となく体験したその感覚……誰かが自分を呼んでいる。

それが救いを求める声なのか、勝利を望む者の召喚なのか、あるいは世界の――
(なにせよ戦いであることに違いはない、か……)

意識が深く沈んでいくような感覚の中、彼は皮肉気に微笑した。

閉ざしたその眼を開く時、そこには間違ひなく戦場がある。

それが劇的か、喜劇的か、はたまた悲劇的かはさておき、そのような戦場に赴く為に彼自身はあるのだから――

「……は……海上か？」

沈んでいった意識が再び覚醒していく感覚を覚えた彼が眼を開ければ、そこには一面の水平線が彼の現界を迎え入れた。

とは言つてもそれはバカンスを連想させるような煌びやかなコバルトブルーの海ではなく、嵐を予兆させる曇天と荒波が渦巻く大海原。

召喚される場所という意味では全ての場面に共通してろくな思い出はない彼であったが、海の上で呼ばれるというのは長い英霊としての経験の中でも始めての出来事であり、いささか戸惑いを覚える。

そしてその場所が海の上であるのなら、彼は何処に立っているのかといえば――

「だ、誰だあんた!?……まさか救助信号で来てくれた海軍の人間なのか!？」

声に振り向けばそこには見るからに人相の悪い大柄な男が額から血を流して縮こまっている姿が。

そして辺りは所々炎上し、至る所で見塗れの人間が倒れ、見るも無残な惨状が広がっていた。

「どうやら船の上のようだが……釣りと洒落込むような状況ではないらしい。さて、海軍などという的外れな物言いから察するに君が私のマスターという事はなさそうだが如何かな？」

「マ、マスター？何を言つてやがんだあんた?! いや、それよりも海軍の人間じゃねえつてんなら何者だ!」

喚き散らす男の声を聞き流しながら、彼は冷静に現状の分析を始める。

（これはこの船が何者かに襲われていると見て間違いなさそうだが……どういふ事だ？ 召喚されたのであればマスターである筈の人間がいる筈だが姿はおろか魔力すら感知できん。それに……）

彼は鷹のような鋭い眼光で曇天の空を見上げた。

（異常なまでに濃いこの魔力は……召喚呼び声に導かれた筈だが状況を鑑みるに今回の現界はまさか英霊としてではなく抑止力の……）

瞬間、今にも沈んでしまいそうな船に追い打ちのような轟音が響いた。

「ひいっ！ 奴らの攻撃が再開しやがった……俺たちはもうお終いだっ!!」

黒煙に包まれる船の上、屈強に見える男はその容姿とは裏腹にまるで少女のように涙

を流しながら身を縮めて叫んだ。

「奴ら、と言ったな？ 状況は把握できないままだがこのまま船を沈められてはうまくない。現状を打破してから話を聞かせてもらおう」

「何を言ってるやがる……俺やあんたみたいな人間風情が束になってかかった所であんな化物に太刀打ちできるはずー」

「生憎……随分と前に人間は辞めた身でね。敵はどこだ？ 数はどれだけいるか把握しているのかね？」

この切迫した状況においても彼はニヒルな笑みを浮かべて余裕を示す。

「秘策でもあるのか!? いや……あったとしても『艦娘』でもねえ男のあんたにやー」

「このまま何もせず死にたくないのなら素直に答えんかたわけっ！ 敵の場所と数だ！」

「ひっ！ て、敵は恐らく3匹っ！ 確認できた限り潜水艦はいねえ筈だから海上に浮いてる筈だ！ だが、あれは人間にどうにかできるようなー」

「結構。君はそこでおとなしくしていたまえ」

それだけ告げると彼は船首の方へと躍り出た。

（あの男、気になる事を言っていたが……『艦娘』といったか？ それに敵は『3匹』、さらには潜水艦はいない、と。となれば敵は人間ではない……？ いや、それを抜きにしてもこのような中型の民間船が潜水艦に襲われる危険がある世界とは……）

頭の片隅で様々な思考を走らせながら、その鋭い眼光で海上を見渡す。

本来ならある筈のマスターからの魔力供給は感知できないままだが、不思議と魔力は漲っている。

これならば本来の自分の戦いを遂行するにあたって支障はないだろう。

感覚を確かめるように自身の魔力回路に魔力を回しながら周囲の警戒をしていると、彼の視界に不思議なものが映った。

「あれは……魚類、という訳ではなさそうだな」

その眼が捉えたものは、海上に浮かぶ黒い影。

一見すると鯨やイルカのように見えなくもないが、その眼は不気味に発光しており、口元にはおぞましいまでに剥き出しの巨大な歯が並んでいる。

生前はおろか、数ある聖杯戦争で得た記録の中にもあんな生物は該当しない。

何よりもその生物から感じる禍々しい魔力が、まともな生き物ではないことを雄弁に語っていた。

となれば当然の帰結としてあれが脅威の根源であり、並びに何者かの使い魔に属するものであることは確定的である。

「トレス、オン
投影開始」

彼はその生物から眼を逸らす事なくその手に弓と一刀の剣を握った。

勿論、元々用意していた武器ではない。

彼の能力である投影魔術で創られた武器である。

彼が創り出したその弓に剣をつがえて弦をひくと、弓のしなりに応じるように刀身が針のように細く鋭く一本の弓矢のような形へと変形した。

「まずは一匹——」

放たれた剣は衝撃波を生み出すような速度と共に、真つ直ぐと目標へと飛来して大爆発を起こす。

海の上だということにも関わらず、直撃したと思われる着弾点からは爆炎が立ち上った。

しかし攻撃を的中させたからと言って彼が油断をする事はない。

彼がまだ人としての人生を送っていた頃、住居に併設された道場で竹刀を握っていた経験、並びに数々の戦場を傭兵として渡り歩いてきた人生——武道における残心が骨身にまで染み付いている彼が戦場の真つ只中で慢心する事などあるはずがなかった。

未だ立ち上る爆炎に警戒と細心の注意を払いながら、猛禽類のようなその眼光は更なる獲物を補足する。

「揃いも揃って同じ見た目とは……術者の趣味の悪さが伺えるな。……むっ！」

海上から顔を出した生物は先程射抜いた生物と同一の容姿をしており、やはり生気を

感じない虚ろな目で彼を見ていた。

違う点といえば、その巨大な歯が並ぶ口を大きく開けていること。

そして次の瞬間、その口は予想外の爆炎を吹いた。

「これはまさか砲弾かつ!? くつ、『熾天覆う七つの円環』!」

飛来する砲撃が着弾するその刹那、彼を守るかのように現れた桃色の花卉のような防壁がその業火を防いだ。

（魔術的要素のない化学兵器による攻撃……あれはまさか生物ではなく機械なのか? いや、確かに魔力は感じる。ならば魔力駆動の機械人形か）

突然の、まして全く想定していない攻撃によつて面食らいはしたものの彼はそれすらも戦時には日常茶飯事と言わんばかりに平然とした様子で体制を立て直す。

術者本人の姿がこの場に見えない以上、使い魔であるはずの機械人形をいくら破壊したところでその場のぎでしかないがそれも仕方のない事だと内心で愚痴り、再びその手に弓を投影した。

だが目標へと攻撃を仕掛けようとした矢先、初撃で捲き上る爆炎の中から気配を察知、彼の手前の海面が爆音と共に大きな水柱を上げたのを確認して攻撃の手は止まることとなる。

「ちつ、成る程……見た目の造形はともかく、頑丈さはそれなりのようだな」

見れば先程の第一射で仕留めたと思われたあの奇怪な生物が彼へと向けてその大口を露わにしていた。

つまりは仕留めそこない、反撃を受けているのだ。

荒れ狂う波のおかげかその砲撃は的中こそしなかつたものの、これで戦況は2対1——明らかに劣勢である。

が、彼はそれに臆した様子もなく冷静にその射線を見定めて必要最低限の防御と回避を行い反撃の好機を伺っていた。

そして——

「ならばそれ相応の技をもつて討ち取るまでだ——」カ
ラ
ド
ボ
ル
グ
ー
ー『偽・螺旋剣』——

先程の剣とは異なる刀身の捻れた剣を矢として射出したそれは、初手とは比べものにならない程の威力と速度を持って目標へと突き刺さった。

その威力は凄まじく、目標を海から引きずり出してなお勢いを増し、そのまま数キロ後方へと吹き飛ばしてしまった。

「ふん……殲滅できたかはわからんがこれだけ後方へ吹き飛ばされれば即座に戦線復帰はできない。こちらの個体も同じ末路を辿ってもらおうとしよう」

徹底した現実主義。

理想や信念のみで数多の戦場を生き抜いてきた彼の性格はそれに徹底していた。

現状で例えるならば、彼の最優先事項はあくまでもこの沈みかけた船の守護であり敵の殲滅ではない。

数の上で劣勢な状況の中、戦闘力も未知数な相手に対して無理を押しでも撃破を優先するより、いち早く戦線離脱させる事の方が余りにも効率が良いと判断したのだ。

「これで……2匹目っ！」

全く同じ武器の投影を瞬時におこない攻撃へと転じる。

投影魔術、こと武具の投影に関してはもはやお家芸とまで言えるレベルのそれは一連の流れに一切の無駄がない完璧な威力とタイミングで2匹目の敵を遥か彼方へと吹き飛ばした。

しかし彼の眼は未だ警戒心を緩めない。

この船の乗組員と思われる男が言うには敵は少なくとも3匹——

つまり最低でもあと1匹はこの船の近くにいる……いや、それも1匹だと決まった訳ではないのだ。

360度の視野を持たない彼にとって四方を海に囲まれたこの状況で油断などありえない。

いつでも迎え撃てるよう新たに剣を投影するとそのままこの船で1番の視点を確保できるであろう操縦室の屋根へと跳躍した。

英霊としての能力の中でもアーチャーのクラスに属する彼の視力は常人のそれではない。

例えどれほど遠方であろうとも、海がどれほど荒れようとも、この視点からであれば彼が見逃すはずがない。

程なくして彼の眼は波間に浮上するように現れる黒い影を確認した。

「まさかアレも同類に属する生物なのか？」

普通の人間であれば黒い豆粒のようにしか見えないであろうその影を彼の眼は正確に全容まで捉えていた。

だからこそ、彼は疑問符の残る所感を抱いたのだ。

その影は先程の2匹とは異なりまるで人間のような腕と胴体を有していた。

全身に装備した装甲や砲のような物は先程の2匹と同様にドス黒い鉄のような物質で構成されているが生身と思われる部分はまるで屍人のように白く、それでいて本来ならば顔があると思われる部位が存在しない。

それを生物として定義していいものかすら疑わしい容姿であった。

(どうあれ敵である事は間違いないのだろうが……こうなると機械人形オートマトンというより人造生物ホムンクルスだな)

いかに英霊とはいえ、彼も元は人間——つまりは常識的な感性は持ち合わせている。

そんな彼をしてその生物は、とてもじゃないが見ていて気持ちの良いものではないというのが率直な感想だった。

目標との距離、うねり狂う波の動き、それらの条件を頭の中で計算しつつ剣を弓に番える。

最後まで敵の目的や生態については不明なままだったが、この一射でこの戦場の鎮圧は完了する。

未だ何の動きも見せず、攻撃の予兆さえ感じさせない目標に狙いを定めたその時——彼はこの戦いの中で始めての油断を見せてしまった。

「ぐっ………何事だっ!」

まさに弓を射るというその瞬間、何の攻撃も受けていなかったというのにも関わらず彼の乗る船は轟音と共に大きく傾いた。

飛び散る水飛沫、曇天を更に黒く染め上げんばかりの黒煙——何かしらの攻撃を受けたことは明白。

衝撃から察するに既に死に体の船が受けたダメージは良くても航行不能、悪くすれば沈没に至るものである事は想像に難くないものだ。

(ちっ、馬鹿かオレは! 敵の攻撃手段が科学兵器に属する物であることは既に知っていた……ならばどうして水中爆撃、魚雷の存在を失念していた!)

攻撃の残滓から魔力の痕跡は感じられない、ならばこの衝撃も物理的な攻撃であることは間違いない。

何の動きも見せない相手に一方的な攻撃を仕掛けるといふ優位な立場に胡座をかいて油断を見せた己の甘さに歯噛みする。

実際には敵がその姿を見せた時には既に魚雷と思われる攻撃はこちらへと迫っていたはずなのだから。

しかし過ぎたものをあれこれ言っているも状況は好転しない。

戦場において一瞬の迷いや後悔など、己の命を脅かすものでしかないのだ。

自分の中に湧き上がる怒りのような感情を今は押し殺し、彼は再び敵とその間に広がる海を注視する。

(やはり魚雷のように水中を走る攻撃か！数は4発……どう凌ぐ?!)

黒く蠢く波の合間に見えるのは4本の白線。それは真つ直ぐにこの船へと侵攻してきており、的中までの猶予はそう残されていない事を告げていた。

(アイアスでは数と範囲的に受けきれん……ならば着弾前に全て撃ち落とすか!?!この揺れの中で水中を走る魚雷4発……確率は五分といったところか)

地上における戦いで彼が的を外すなどありえない事だがこの場合はあまりに条件が悪すぎた。

揺れ動く船の上、目視のできない複数の目標に対して正確無比を要求される4連射――

それも威力は申し分ない割に敵の身体から想像できる魚雷のサイズは彼の知る軍艦から発射される物より遥かに小さい物だろう。

そもそもが自身を過大評価などしない彼にとつてそれはあまりに分の悪い賭けのように思えた。

『とつておき』を使えばあるいは現状を打破できる可能性もあつたが、このような場所で、しかも魔力供給すらままならない今の自身がそれをやればどうなるかわからないという懸念もある。

迫り来る魚雷を前に彼がとつた行動は最悪を想定した上での最善解――

「……同調開始」
トレス・オン

片膝をついた彼は甲板に手を添えて何かを探り始める。

(――基本骨子、材質確認、欠損箇所特定……修復開始)

脳内にイメージされる船の全体図、およびその破損。

自身の魔力を使いその欠損を臨時的に投影魔術で補強した。

(この規模の物を投影で修復するとなればそれなりの魔力を消費するが今はそうも言つてられん。これで撃ち漏らしがあつたとしても沈む可能性はいくらか低くなるだろう)

どれだけ低くとも勝利する為の可能性があればそれを手繰り寄せる。それは英霊として決して決して強くない彼がこれまで数多くの勝利を収めてきたひとつの要因。

どれだけ絶望的であろうとも最後まで諦めないその姿勢はまさに英雄だった。

その彼が再び矢を構える――

「どこの何者かは知らんが……そうやすやすと好きにはさせせん！」

迫る魚雷へと向けて手数勝負の矢を射っていく。

投影魔術の特性上、魔力さえ底をつかなければ残弾に制限はない。

まるで絨毯爆撃のように降り注ぐ彼の矢は確実に目標を捉えていった。

「まずは一発、次っ！」

船の手間で爆音と共にあがる水柱、それが一本、二本と数を増やす。

そして水柱が3本目を数えた時、それまで動かなかった敵に動きが見えた。

「くそっ、やすやすと好きにさせないのはそちらも同じか！」

それまで不動であった敵がとつた行動はその身体に装備された砲による一斉射撃。

遙か遠方の敵であつても彼の目にははつきりと砲口が火を噴く瞬間が写っていた。

(これは残り1発の魚雷が船に到達するのと砲弾が直撃するのはほぼ同じタイミング！

くっ……1発であれば耐えられると信じるしかないか！)

残りの魚雷を撃ち落としてからでは砲弾に対する防御が間に合わないという瞬時の判断で彼は弓を消失させると再び桃色の花弁を投影して防御態勢に移る。

瞬間、船尾に直撃した魚雷が船を大きく揺らした。

被弾箇所から沈んでいく様子はないようだがこんな状態でいつまでも浮いていらるはずもない。

船の上はもはやそれが船なのかすら疑わしい程に凄惨な光景へと変わり果てていた。一方の彼もまた熾天ロ!覆ア!う七イ!つの円環ス!によつて飛来する砲撃は防いだものの被害は甚大。

直接的なダメージはなくても自分に課せられたこの戦いの勝利条件を思えば精神的なダメージが大きい。

更にこの後からくる攻撃が同じような手段をもつて行われることを想定すると袋小路のような状況に頭を抱えたくなる。

（相手の残弾がどれ程かはわからないが空中と水中を同時に攻められては……敵を叩く以外に手段はないがこの距離では偽・螺旋剣カラドボルグーでも保証はできん。何か手段は……）

敵の能力が未知数である以上、彼の有する攻撃の中でも上位に位置する偽・螺旋剣カラドボルグーを持つてしても仕留められると断言はできない。

音速を超えて飛ぶ矢でも音速を超える反応で対応できる英霊を彼は知っている。敵

がそれだけのポテンシャルを秘めていたとしたら始末に負えない。

万が一にも仕損じた時は、こちらが攻撃に転じたぶん隙も大きくなる。

次に直撃する魚雷が1発ですむとは限らないのだ。

そしてそんな堂々巡りの思考に陥っている彼とは関係なしに敵はまた動き出す。

あれがどういった理屈で装填、射出をしているのかは知らないがこちらへ向けて再び魚雷と砲弾をばら撒いてくるのは確認できた。

(こようなれば消耗戦しかあるまい。こちらが沈む前に敵の弾が切れる事に賭けて被害を最小限に食い止める！)

最後まで諦めない姿勢をより一層強く持ち、彼は再び弓を持つ。

この船にはまだ命が残っている、かつて誰の死も見たくない願った彼が戦う理由はそれだけで十分だった。

例え可能性は限りなくゼロに近くても、どれほどの泥仕合だとしても、そこに救えるかもしれない命があるならばそれは彼が諦める理由にはならないのだ。

そこからの攻防はまさに一進一退。

防御が間に合うギリギリのタイミングまで魚雷へと向けて剣を放つ。

もう数など数えてはいられない。その眼が捉えた物から迅速かつ正確に撃ち落とす。

それはゴールの見えないマラソンのように彼の精神を削っていく作業――

僅かな隙を見ては沈没を免れる最低限の補強を行い、また剣を放ちそして防御する。効果の程は期待できない程度ではあるが反撃も織り交ぜて交戦すること数度、依然として敵の残弾が限界を迎える気配はない。

——持久戦としても限界が迫っていた。

それを悟つてか敵の攻撃も苛烈さを増す。

敗戦色濃いつ況の中、彼の精神もはや限界に達しようとしていた。

(もはや——までか……せめてこの乗員達だけでもどうか……)

どうしようもない窮地に置かれて尚、そこにある命をどうにか助けようと足掻く彼が諦めかけたその時——

(なんの音だ!? これは空から……こんな状況だというのにまさか新手か!?)

空から無数のエンジン音が聞こえてきた。

ただでさえ手一杯であり、絶望的な状況だというのに敵の援軍とは——彼は心の中で自分の運の無さを呪った。

(万事休す、か……現界して早々、座に還ることになるとはな)

力無き自分自身を皮肉るように内心で愚痴る。

世界と契約してまで理想を追った拳句、英霊になって尚、何も救えない現実を恨めしく思いながら目を閉じかけた。

だがその時——彼にとつて予想外のことが起きる。

「ひゃつはあ——者共かかれえ——!!」

何処からともなく聞こえてくる世紀末な声、それと共に曇天の空から無数の飛行機らしきものが舞い降りてきた。

それだけならまだしもその飛行機群は彼の乗る船を守るように敵に向け爆撃を始めたのだ。

いかに戦場に慣れていて彼といえども、この状況は全く理解できなかった。

わかることはただ一つ、この戦闘機と思われる群団は敵ではなく、そしてこれは反撃のまたとない好機という事だけだ。

諦めかけた心に再び火が灯る。

「誰かは知らないが助太刀感謝する、これならば撃ち落とせる——」

敵が無数の爆撃に悪戦苦闘している隙を見て、彼は水中の魚雷を端から射抜いて行く。

砲撃による妨害がなくなった彼の集中力は凄まじく、迫る脅威を漏らすことなく撃ち晴らしてみせた。

そして魚雷の処理を終えた彼が敵がいた方を見てみれば、そこには黒煙が立ち昇るのみでその姿は既に確認できなくなっていたのだった。

（ふう……ひとまず脅威は去つたと見て良さそうだな。いや、ぬか喜びは少々早いかな。先程の戦闘機のようなものは一体なんだつたのだ？）

安心するも束の間、未だ謎のままである援軍の存在が彼の不安を駆り立てる。

気付けばあれだけの数で飛び回っていた筈の飛行機が綺麗に姿を消しているのも不気味だ。

本当に敵ではないのか？

だとすれば何の目的で自分の援護をしたのだ？

疑惑の正体を探るべく、戦闘によつて昂ぶっていた気持ちを落ち着かせていつでも投影を行えるだけの備えをしながら辺りを見渡す。

そんな彼の目に飛び込んできたのは、先程の敵とは違つたベクトルで理解不能な者の姿だつた。

「いやあ、凄いいじゃないかお兄さん！まさか魔法が使える人間が実在するとは思わなかつたよ！ところで……あんた何者？」

それはツンツン紫髪の近代的かつ独創的な陰陽師風衣装に身を包んだハイテンションの女性と、その後ろで明らかにこちらを警戒している少女数名の姿であつた。

何より奇怪で理解できないのは――

「魔法などではないのだが……それを言うなら君達こそ魔法使いではないのかな？どう

「いう理屈で水の上に立っているのだ？」

その少女達全員が当たり前のように水面に立っている事だ。

「あははっ！このご時世に私たち艦娘を知らないなんて無理な言い訳は通らないよ？ま、なんでも良いけどこの船に乗ってる人間は全員密輸の現行犯でご案内しまーっす！お兄さんの不思議な魔法とか犯行動機については陸でゆっくり聞かせてもらおうよ」

衝撃の事実を無駄に明るく告げる女性。

意味がわからず乗組員である男を見てみれば出会った時とは違う意味で項垂れていた。

依然として置かれた状況は理解できないものの、なんとなく最悪な立場に立たされている事を悟った彼は思い出せないほど久しぶりに一言呟いた。

「なんでさ……」

これが彼『英霊エミヤ』と、この世界の守護者たる『艦娘』達との邂逅であった。

そして守護者は鎮守府へ

「……そんなしかめっ面してないでさあ、ケチケチしないで何か話とくれよ。あつ、なんなら一杯やるかい？それなら話も弾むつてもんさあ！」

「自白剤でも飲ませたいのならばともかく、取り調べの最中に酒盛りとは関心できないな。それに私には話すべきことは何もないと云っているだろう」

——あの戦いの後、エミヤと船の乗組員達は艦娘達に牽引される形で最寄りの港へと帰港した。

幸いな事に船員の中に死者はなく、傷の具合と犯罪者というその立場はともかくとして、船の沈没と乗組員の全滅という最悪の結果は回避された。

現行犯などと呼ばれていた彼等は港にて待機していた国家権力のパンダカラーな車に乗せられて連行されていき、傷の酷い者は赤い十字マークの車で運ばれていく。

そして例に漏れずエミヤもその一派として扱われ、そのままどこも知れない収容施設へと連れていかれる手筈だったのだが——

「ちよいと待つとくれお巡りさん、その赤い服の男は私のところで身柄を預かるよ」
あのハイテンションな陰陽師風の女性の申し出によってそれは遮られる。

元々が不幸體質のエミヤは特に抵抗する素振りも見せず、タイミングを見計らつて退散しようとしていたのだが彼女の進言が気になりその様子を見守つていた。

「あの男をですか？しかし彼もこの船の乗組員である以上は例外を認める訳には……」

勿論、正義の指標となるはずの彼等も女性の申し出を快諾できるはずが無く、犯罪を犯した以上は平等に連行するべきなのだがどうにもバツが悪そうな顔をする。

察するに彼等よりも女性の方が立場が上になるのだろう。

見た目からはとても想像できない上下関係だが彼女達の会話がそれを物語つていた。

「んー、それがどうにもあのお兄さんはこの船の一派じゃないみたいだね。それに、さつき海で深海棲艦とやりあつてきたんだけど……あのお兄さん、私たちが到着するまで一人で奴らとやりあつててさ、私の偵察機の報告によると2匹の深海棲艦を仕留めたらしくてねえ」

「な、なんと!?!大砲ですら効果のないと聞く深海棲艦を2匹も？確かに体格は良いですが生身の人間である彼がどうやって？」

「あー、その辺は機密事項になるかもだから詳しくは話せないだよねえ。ともかく艦隊司令部的にもその戦闘について聞かなきゃならない事があるつて訳さ。それにあのお兄さんの引き取りは日渡提督ひわたしさんの命令だから後々の問題もないと思うよ？」

「日渡提督とはあの横須賀鎮守府の!?!ああ、そういえば昨日からこちらの鎮守府にいら

していると聞きましたね……わかりました。では、詳しい手続きと書類等は後ほど鎮守府の方に送付します。彼と艦娘の皆様はよろしければ鎮守府の方へお送りしますがどうされますか？」

「いやあ無理言つて悪いねえ、助かるよ！じゃあお言葉に甘えて送ってもらおうかな」（仕留めたという自覚はないのだが……まあ良しとしよう。しかしー）

トントン拍子に進む会話を聞きながらエミヤは思考の中に沈んでいく。

薄々は感じていたこの世界の異常。聖杯戦争とは無縁であると思われる世界な筈であり、マスターの存在も依然として感知できない。

それであつて世界^{アラヤ}の意思が介入している訳ではなく、自身が召喚された理由が全くわからない。

それに艦娘と呼ばれる彼女たちの正体も不明瞭なままだ。

善良な者である事は間違いなさそうだが有した能力は通常の人間のそれではないだろう……あの敵がそうであつたように彼女たちもまた超常の存在なのだろうか？

また、口振りから察するに警察機関よりも上位の組織……おそらくは海軍に属するものだろう。

そんなものが彼を引き取る理由は何だというのだ？

（この現界にはイレギュラーが多すぎる……目下の課題は情報収集になりそうだな）

どれだけ頭を捻ろうとも答えの見えない疑問に溜息をつくとき、エミヤは空を見上げる。さつきまでの曇天が嘘のように晴れ渡った空には大きな入道雲と、2匹の海鳥が彼の苦悩を啜うように踊っていた。

「さてお兄さん、突然で悪いんだけどお兄さんは別行動だ！」

無気力に空を見上げるエミヤの元へ駆け寄る女性。

それに気付いたエミヤがその視線を彼女へと戻す。

女性としては長身の部類であるはずの彼女もエミヤと並べばその身長差に自然と彼を見上げる形になる。

「……業腹ではあるが犯罪者の誹りそしを受けた私を引き取るというのは問題なのではないのかね？」

「ありや？さつきの会話、聴こえてたのかい？お兄さん地獄耳だねえ！んなら話は早い！お兄さんには私達と一緒に鎮守府まで来てもらうよ」

バシバシとエミヤの肩を叩く彼女は人を連行するというのにまるでピクニックにも行くかのようなテンションで告げるのだった。

「繰り返すが今の私の扱いは犯罪者だろう？君のような弱い女性が連行するには些か物騒だと思うのだが？」

目の前の女性のテンションと快活な笑顔のおかげで脳内にか弱さとは無縁の謎の

虎つばいご婦人を思い描いてしまったが心当たりがないので頭の隅へと追いやる。

「か弱いときたかあ……ちよつと聞いた!? 私のことか弱くて可憐なお嬢様だつてさ!」

存在しない文言を付け加えられた会話を自慢気に振る女性に対し、彼女の後ろに控えていた少女2名は聞かなかつた事にしたのか咄嗟に目を逸らした。

確かに服装を正し、黙つてさえいればお嬢様と呼ばれることもあるのであろうが……一度でも会話をしてしまえばそんな幻想は夢の彼方だ。

「ま、大丈夫つしよ! だつてお兄さん、犯罪に加担なんかしてないんでしょ?」

一通り照れなのかご満悦なのかわかりづらいうらりアクションをとつたあと、再びエミヤを見つめる彼女はあつげらかと告げた。

「む、確かに私の主張としては冤罪を訴えたいところだが……それにしてもそれはあくまで容疑者側の主張であつて信用にたる証拠も無いのだぞ?」

「そりやそうだけどさあ……せつかく信じるつて言つてるのにそこまで必死に容疑者になろうとするかねえ?」

「そ、そうではなくてだな! 君には余りにも危機感がなさすぎると言っているんだ! これが本当の犯罪者の言葉なら君はきつと利用された挙句に海か山に捨てられるぞ!」

「かあ、それは勘弁だねえ。でもほら、私だつて流石に人は見るよ。あの時のお兄さんは船を守る為に戦つてた。ましてや乗組員とも初対面だつてのに命がけで。そんな人

を現状証拠だけで色眼鏡にかけるほど私もバカじゃないんだよ」

「ぐっ……そこまで言うならもう知らん。好きにしたまえ」

英霊エミヤ、この世界に召喚されて初めての敗北の瞬間だった。

「良かったよ、あの魔法みたいなので暴れられてもしたらどうしようかと思ってたんだ」
「……何のことは知らんが私は魔法なんぞ使えん。容疑が晴ればさっさと退散させてもらう」

観念したかのように送迎のパトカーへと歩を進める。

運転手は当然パトカーを運転する権利を持つ警察官であり、助手席には陰陽師風の女性が乗り込んだ。

暫定的に容疑者候補から外されたとはいえ、その疑惑が完全に晴れたわけではないエミヤは当然のように後部座席の中央に乗せられた。

つまり、今のエミヤは両サイドを謎の少女2名に挟まれた形になる。

「あつはつはっ！両手に華じゃないかお兄さん！男冥利に尽きるつてもんだろお？」
助手席に座る彼女は悪戯な笑みを浮かべて振り返ると後部座席の3人を見て笑うのだった。

これがパトカーの中でなければ微笑ましい光景かもしれないが、当人にとっては頭痛の種にしかならない。

「そういう物言いはやめてもらおうか。私とて好きでこんな目にあっているわけではない」

「またまたあ、本当は嬉しいって顔に書いてあるよ？あ、そういうえばお兄さんの名前教えとくれよ。できれば出身と経歴なんかもさ」

ピクリと彼が反応したような気がした。

本来ならばマスターにさえ認知されればそれで事足りるはずの存在がサーヴァントである。

一般人にその存在を証明しようとすればそれなりの無理が生じるのは明らかだ。

彼は早々に自身の説明を諦めた。

「生憎だが、人に名乗るような名前は持ち合わせていなくてね。出身、経歴も同様に君達に話せる事は何もない」

それは明確な拒絶だった。

行動こそ共にしているし、こうして拘束される事も特に拒否しない。

だがそれはあくまでも自身が潔白であり、逃げなければならぬようなやましい事もないからである。

実際にはそれ以外にも理由はあるのだが……

だがしかし、それよりも彼はまず英霊であり魔術師でもある。

神秘の秘匿は絶対であり、神秘そのものとも言える今の彼がその正体を明かすなどありえない。

これが彼の知る相性の悪い槍使いの英霊ならば、さきの戦いを目撃された時点で皆殺しにしてもおかしくないくらいには秘密事項なのである。

ましてや彼女達の方こそ常人の域を超えた存在である可能性が高いのだから、その縛りは尚更だ。

が、そんな彼の内心を知ってか知らずか、助手席の女性が放った言葉は斜め上をいったー

「……………え、これがまさか厨二病ってやつ？」

先程までの快活な笑みも影を潜め、わかりやすくドン引きしていますといった苦笑いでエミヤを見つめている。

「だつ、誰が厨二病か！私はただ話せるような事は何もないと言っているだけだ！」

「何もつて……………名前も出身も何もかもつてことでしょ？いやあ、謎をほのめかすのがカッコいいか思っちゃう男の心は理解しかねるよ……………でもさあ、お兄さん見るからにいい歳いつてるでしょ？流石にそういうのはもう卒業した方が」

「だから違うと言っているだろう！そういうった思春期のものとは別の意図があつて話せないというのだ！」

「うーん……まあそういうことにしといてあげるけどさあ。それならお兄さんはどうやって身の潔白を証明するってのさ？何も話さずに自分は無実ですって言われてもねえ？」

完全論破、英霊エミヤの2度目の敗北。そしてー

「うぐつ……ならば君達はどうなんだ？人に物を訪ねるのであればまず己から名乗るのが礼節だと思うのだから」

英霊エミヤ、まさかの悪足掻きであった。

「そりゃあぐもつともだ！じゃあ遅ればせながら自己紹介といこうか。私は隼鷹、艦種は軽空母さ！」

彼女はそんなエミヤの悪足掻きを笑うこともなく笑顔で答えた。

彼にとつては聞き慣れない、およそ自己紹介には入らないであろう単語と共に。

そしてエミヤの両サイドに座る少女達も隼鷹に続く。

「わ、私は電いなすまといいます。艦種は駆逐艦なのです……」

エミヤの右隣に座る少女もまた自身の紹介に艦種なるものを付け加えて名前を名乗った。

「同じく駆逐艦の響だよ」

左隣の少女もまた己を駆逐艦と補足した上で自己紹介をする。

服装から察するに電と名乗る少女と響と名乗る少女は同じ学校にでも通っているのか、お揃いと見られる制服のようなものを着ていた。

いや、このような場所に小学生、よくしてもせいぜい中学生の少女が当たり前のように同行しているのが既に異常なのだが――

「待ちたまえ。揃いも揃って軽空母に駆逐艦などと言っているがそれはどういう意味なんだ？ まさかとは思うが、それぞれが海軍に属する何らかの部隊に所属し、更にはそれぞれが自分の管理する軍艦を所有しているなどは言わないだろう？」

何の悪ふざけだとも言いたげな苦笑いを浮かべてエミヤは尋ねる。

先程の警察官との会話を思い返せばこの隼鷹と名乗る女性は100歩譲ってそういった立場も考えられなくはない。

しかし彼の両サイドに座る少女達はどう見てもそんな役職につける年齢ではない。どころか社会人にさえなっていないだろう。

この世界の事情こそ把握していないエミヤだったが、どんな世界線であれ概ねの常識的観点は共通している筈だ。

故に彼女達と言う艦種がどうであるなどという与太話は到底、納得も信頼もできなかった。

「んん？ お兄さん、まさか艦娘について本当に無知!? 見るのが初めてだからって混乱し

てるとかじゃなくかい!？」

助手席の隼鷹はそんなエミヤの言葉があまりにも腑に落ちなかつたのか、シートベルトの限界まで身を乗り出してエミヤを凝視する。

「……度々出てくるその『艦娘』という言葉だが私にはさっぱりわからない。軍事に関する事は一通り学んでいる筈だがそんなもの知りもしなければ聞いたことすらないね」

隼鷹を始め、電と響もよほどの衝撃を受けたのか大きく目を見開いて彼の顔を見つめている。

「な、なんだというのだね。私はそこまでおかしな事を言ったのか?」

「……質問なんだけど日本を代表するミュージシャンのサザンオールスターって知ってるかい?」

「突然なんの質問なのだ?……名前くらいは知っているとも。生憎と音楽を嗜むような性分ではないので拝聴したことはないがね」

以前に行われた聖杯戦争の際、聖杯からの知識でそのような名前の音楽グループを知ったので間違いはないはずだ。

「で、では国民的人気アニメのトラえもんは知っていますか?」

矢継ぎ早に質問するのはエミヤの右隣に座る電である。

「それも名前だけならば知っているさ。だが見ての通りアニメを見るような歳でもなけ

ればそのような趣味もない。つまりそちらに關しても内容は知らないものだ」

これに關しても聖杯からの知識だ。

それに冬木の街を出歩いた時にそのような名前のグッズを販売しているのを見かけたこともあるので間違いない。

「なら私からも質問だよ」

お次は左隣の響。

そして響の質問は彼の正体の核心に迫ることになる――

「お次は君かお嬢さん……良いだろう、同じような質問であれば快く答えよう」

まるで合コンのように次から次へと向けられる他愛ない質問に警戒心を緩めたエミヤは苦笑しながらも響へと視線を向けた。

「日本が最後に参加した戦争といえばなんだい？軍事について学んだならわかるだろう？」

響からの質問は予想に反して真面目なジャンルのものだった。

だがそれすらもエミヤの目から見れば他愛ないものであり可愛げのある質問にしか聞こえないのだが――

「ふつ、お嬢さんは学校で習った知識の自慢をしたいのかな？勿論知つてるとも、参加したという言葉は些か曖昧だが軍事支援などを抜きにすれば答えは1941年の太平洋

戦争だろう。それを一側面とするならば広義の意味では1939年の第二次世界大戦と言えば満足かな？」

音楽にアニメときた後でやつと自分にも真つ当に答えられる真面目な質問に気を良くしたのか、得意げとも取れる態度でエミヤは答えた。

そしてその返答の意味するところはエミヤにとつて全く予期せぬ事態を招く。

「あちゃー……」

「これは確定だね」

「はい、間違いないのです……」

それぞれの質問に対し誠実に答えたつもりのエミヤだったが彼女達の態度は芳しくない。

どころかとても残念なものでも見るように頭を悩ませてさえいる。

「なんだというのだ。私の返答におかしな点はなかったはずだが？」

「いやあ、音楽とアニメに関しては何もおかしくないよ？ただ最後の質問に関してはぶつちぎりにおかしい。というかやつぱり全部おかしい」

隼鷹は乗り出した身体を戻しつつも、頭だけはエミヤに向けたまま続ける。

「いいかい？まずはさつきお兄さんが知らないって言ってた艦娘についてだけどねえ、今の日本を始め世界的に見ても艦娘の知名度っていえばそりゃあサザンオールスター

やトラえもんと並ぶかそれ以上なはずさ」

「なんだと……それは本当か？」

「大マジだとも。そんな誰でも知ってて当たり前なものを本当に知らないってんなら……お兄さんは今まで情報を遮断された山奥に住んでたか、監禁状態にあつて外界との接触ができなかつたときかと思えないんだよ。ましてお兄さんは音楽もアニメも名前くらいは知つてるときたもんだ、全くの情報音痴って訳じゃない。なら極端な話だけのお兄さんは艦娘なんてものが存在しない世界からやつてきたって言われる方がしっくりくるねえ」

「し、しかしそれを知らない者がいても不思議ではないだろう。音楽やアニメのようにそこに興味がなければ——」

「ありえないね、艦娘は娯楽の対象とは訳が違う。この国の生命線とも言える存在なんだから知らない訳がない。言い換えればコンビニを知らない、警察を知らない、海を知らない、空を知らない……お兄さんの言つてることはそういう事だよ」

「艦娘とはそこまでのものなのか……ならば君達は？」

「そう、私達はその艦娘さ。それぞれに特徴があつて私は軽空母の艦娘、その子達は駆逐艦の艦娘つてな具合さね」

隼鷹から告げられたのは予想もしていなかつた衝撃の事実。

その知名度の指標は不明だが、それでも万人万国で共通の知識だということくらいはエミヤにも容易に理解できた。

「そして最後に私がした質問、それが一番の問題なんだよ」

押し黙るエミヤに追い打ちをかけるように響が話し始める。

「貴方の言う戦争は確かに過去に行われた日本が参加した戦争で間違いない。だけどそれが最後の戦争かといえればそうじゃない」

「なっ……いや、そんなはずはないだろう。あの戦争の後に日本は戦争放棄国家となった筈だ。現代において日本がどの国と戦争をするというのだ!？」

生前から通し、死後も世界と契約し抑止力として数々の戦地を見てきたエミヤだからこそ響の言葉は隼鷹の話よりも信じがたいものだった。

聖杯戦争のような極めて小規模な争いこそあったものの、国家をあげての戦争など今の日本がするはずがない。

そんなことがあれば守護者であるエミヤはその度に日本にも召喚されていたはずなのだから。

「日本は……いえ、世界は今も戦争中なのです……」

戦争という言葉に思うところがあるのだろう、どこか悲しげな表情で電が呟く。

「現在も世界が戦争状態だと？はっ、ありえんな。何の意図があつてかは知らんがその

ような絵空事はとても信用できません」

「本当の事なのです！ただ……恐らくそれはあなたが思う戦争とは違うものだと思うのです」

「私の認識とは違う？ならば一体君達の言う戦争とはどんなものなのだ？」

本来ならばこのような少女を相手に向けるはずのない鋭い眼差しをもってエミヤは尋ねた。

「深海棲艦」

そんなエミヤの問いに答えたのは先程までの人懐っこい笑みを消し、真剣な表情で彼を見る隼鷹だった。

「この言葉を聞いて思い当たる事はないかい？」

「それも先程耳にした言葉だが私には覚えのないものだ。それが世界戦争と何の関係があるというのだね？」

「関係も何も、その深海棲艦つてのが日本を始めとする全ての国が戦ってる相手の名前さ。さつきお兄さんが海で戦ってた生き物、あれが深海棲艦だよ」

エミヤは今度こそ耳を疑った。

見飽きる程の戦争を体験し、反吐が出る程の悪意や絶望を目の当たりにしてきた彼だが――

それは全て人間同士の争いに他ならない。

政治的であろうが魔術的であろうが、理由はどうあれ人間は常に人間と争い、そして人間を殺してきた。

それがまさか人外の生物と生存競争をする為に国家レベルの戦争を世界中で行なっているなど誰が信じるというのだ。

そんな話のかの英雄王が存命であつた神代の時代に終わっている。

現在においてそのような未確認生物と本気で戦争をしているというのならそれはもう彼の理解を遥かに超えた話としか言えないものだ。

だが1つの証拠として自分が戦つたあの生物が既知のものでないという真実が彼の動揺を更に大きくする。

「ついでに言えば艦娘つてのはその深海棲艦に対抗しうる唯一の存在なのさ。だからこそ艦娘は世界的に有名であり貴重なんだよ」

「待つてくれ……話が飛躍しすぎて全く理解が追いつかん……君達が艦娘であるというならば君達はあの生物と同等に戦っているというのか？いや、その前に艦娘が唯一の対抗手段とはどういう事だ？そもそも、その深海棲艦とやらはどこから来てどのような被害をもたらしている？」

冷静であるはずのエミヤらしくもない動揺はそのまま無数の質問となつて口に出る。

「あー、その辺の話は鎮守府についてから提督に聞いてくれ。長い話になりそうだし私達から説明するのも限度があるからねえ。っと、その前にこっちからも質問だよ」

エミヤの動揺とは裏腹に、その表情をほがらかにした隼鷹は話を脇へと追いやった。

「聞きたいことは山ほどあるのだが……質問とは？」

「そりゃあ勿論お兄さんの名前さ！こっちはこれだけ話したんだ、お兄さんだけだんまりつてのは無しだよ？」

そういえばそんな話をしていたのだったかと思いついてエミヤは再び思考する。

現状において彼女達の言葉を全て鵜呑みにする訳にはいかないが、かといって敵対勢力という気配もない。

神秘の秘匿に関しては依然として絶対的なものだがここで情報を得ておかなければこの先で対応できないことも多くありそうだ。

何よりこの異質な世界での現界にあたって艦娘の存在が無関係だとは思えない。

ならばここで協力できる関係を作っておくのもひとつの手段として有効なのは。

そんなエミヤの内心を察してか両サイドの少女達も追い打ちをかける。

「あの船の人達をあんな必死に守った人を悪い人だとは思えないのです。だからお名前だけでも教えて欲しいのです……」

「私達は敵という訳じゃない。貴方が犯罪者でないというならここは素直に名乗ってお

いた方が身のためだと思うよ?」

響の言葉はどこか不穏な意味合いを感じるが年端もいかぬ少女にここまで言われて口を噤んだままというのも躊躇われる。

様々な考察の後、エミヤは重い口を開いた。

「……私の名はエミヤだ。本来ならばこのエミヤという名前も私の名前ではないのだが名を名乗れと言われればそう答える他ない」

「いや、だから厨二病設定はもういいって……」

「違うと言っているだろうたわけっ! 本来の私には既に名前と呼べるものがないが個人の名称としてはこれ以外にないのだ!」

それを世間は厨二病と呼ぶという事実をエミヤ本人は知らないのだからしょうがない。い。

艦娘にしてみれば世界^{アラヤ}って何? 守護者^{アラヤ}って給料いいの? のレベルなのだから話が噛み合わない事もあって当然。

こればかりは諦めて強く生きようエミヤ!

こうして一同を乗せた車は鎮守府を目指してひた走る。

道中はそれ以上の深い話をする事もなく、主にエミヤの厨二病キャラを弄ることに終始した女子会(?) トークで終了。

あまりにもこの世界の常識から外れたエミヤを怪しむあまり、運転してきた警察官から必要以上の警戒をされたものの無事に鎮守府へと到着した。

そして話は冒頭の会話に戻る。

「さつき車で弄りすぎたのを怒ってるなら謝るからさあ、少しくらい話してくれても良いじゃないか」

「そんなことに怒ってなどいないわ！私はただ君達の話の信憑性に疑問を覚えているだけだ」

鎮守府に到着した後、エミヤと隼鷹を残して響と電は先に建物へと入って行った。

なんでも件の男を連れてきたことを上司に報告しに行つたらしい。

エミヤと隼鷹は、鎮守府の中にある使われていない個室へと移動してこれから行われる取り調べに備えて待機している段取りである。

「信憑性って言われてもねえ。何か疑われるような事でもしたっけ？」

「君の対応がという意味ではない。いや、君の対応も問題はあるが……そうではなくこの場所だ！こんな場所へと連れてこられて何を信用できるといふのだ」

エミヤが訴えるのは連行されたこの場所について。

それは取り調べに使われる部屋という意味ではなく、この鎮守府そのものがという意味の言葉だった。

「どう見てもここは学校だろう!? 鎮守府などと言うからには軍の基地かと思えばこのような学童の集う場所に連れてこられるとは……やはり君達は私を担いでいたのか?」

それは海沿いに建てられたそこまで規模の大きくはない校舎、学生が走り回っていても不思議のないグラウンド、どこか懐かしい音を鳴らすチャイム——とてもじゃないが軍の所有する施設とは程遠い建築物。

そう、エミヤが連れてこられた鎮守府と呼ばれる施設は学校そのものだった。

「あの電や響といった少女達もこの生徒で、君はこの学校の教師というオチはないだろうな?」

「あ、なるほどお。そりや確かに一見さんからすりやもつともな意見だねえ! でも安心しとくれよ、ここは確かに私達の鎮守府で軍の基地として機能してる場所だから」

「それが信憑性に欠けると言っているのだが。このような場所で国の安全のために戦っているなどと言われて信用する者がいると思うか?」

「その辺の説明もこの後で提督さんからされる筈だよ。まあ簡単に言えば今の日本には立派な鎮守府を建てる余裕さえないって事さね。この鎮守府だって昔使われてた学校を改築して利用してるくらいだしねえ。ま、こんな海沿いの学校なんていつ深海棲艦から攻められるかもわからない場所に我が子を通わせる親がいる筈ないんだからしようがないんだろうけどさ」

エミヤの疑念などお構いなしに机を挟んで向かい合うように座る隼鷹はケラケラと笑いながら話した。

「それに見た目はボロだけど船渠ドックや居住区、入渠設備に食堂と中身は意外と充実してるんだよ？空き部屋が多いのも事実だけどねえ。外壁だつて見た目の割に深海棲艦の砲撃にもある程度は耐えられる造りになってるんだから」

「はあ……ますますもつて理解できん……」

連行とは言ったもののエミヤの中では情報収集の為に自ら望んでやってきたと思つている節すらあつた。

だが、現状を見るに自分はとんでもない無駄足を踏んだのではないかという感情が首も擡げている。

未知の世界とはいえ、ここで得られるものが本当にあるのだろうかという疑念がどうしても払拭できないからか、おのずと心労が募つていくのも感じた。

そしてもういつそ適当な理由をつけてここから退散しようかと考え始めたその時——

彼らがいる教室のドアがノックされた。

瞬間、それまでの砕けた態度だつた隼鷹がサツと立ち上がり見事なまでの直立姿勢をとる。

「失礼するよ。待たせてすまなかつたね、私は横須賀鎮守府で提督をしている日渡輝ひわたしあきらという者だ」

「私はこの鎮守府の提督代理を勤めている高速戦艦の金剛デース！ Youが報告にあった魔法使いですネ？ よろしくデース！」

開かれた扉から入室してきたのはエミヤよりも少し年上に見える男性。

自らを提督と名乗るその彼はエミヤ程ではないが長身で、体つきも鍛えられている事が伺えるガツシリしたものであり、短く整えられた黒髪と穏やかな顔つきが好印象な男であった。

それだけなら問題ないのだが、エミヤが目を引かれたのはそこではなく――

(この男はどうして肩にぬいぐるみを乗せているのだ!?)

彼の肩に乗せられた女の子のぬいぐるみであった。

そしてもう一人、その後ろから入室してきた女性。

隼鷹とはまた違ったバクトルでハイテンションな彼女は自らを提督代理と名乗った。

隼鷹達と同じように自身を高速戦艦などと紹介するあたり彼女もまた艦娘という事だろう。

その姿は巫女服をベースにしているのだろうが露出が高すぎてもはや巫女とは呼べないものであり、そのテンションと謎のカタコトも相まってかエミヤの疑念をさらに増

大きせた。

(よし……この場所にもう用はない)

落胆と疲労のせいで思考は既に逃走へと向かっているエミヤだが、彼はまだ知らない。

この邂逅こそが、この世界における英霊エミヤの大きなターニングポイントになる事を。

守護者と提督

柔らかな午後の日差しが差し込む校舎の一室、学舎にはおよそ不釣り合いな面々が給食でも食べるかのように机を囲んで向かい合う。

「さてと……エミヤ君、といったね？突然の同行すまなかつた。協力に感謝するよ」
彼の対面に座る真つ白な軍服に身を包んだ男性は穏やかな笑顔で切り出した。

「先程も名乗りはしたけれど改めて自己紹介を。僕は日渡輝ひわたしあきとら、この鎮守府の所属ではないんだけどね……諸事情でたまたま訪問していたところだ。普段は横須賀鎮守府で艦娘達の提督を務めている。この場では海軍本部の責任者として話を聞かせてもらうよ」

爽やかな笑顔に丁寧な物腰、おそらくエミヤに関する前情報は『魔法使い』『厨二病(笑)』などとロクなものはないだろうに、その態度にはエミヤを色物として扱うようなものは感じられず、肩に乗せた女の子の人形にさえ目をつむればあくまでも軍に対する協力者として敬意を払っているのが伺えた。

「私は高速戦艦の金剛デース！現在は提督代理としてこの鎮守府の事実上の責任者をさせてもらっているマース！よろしくネ！」

日渡提督の横に座る女性、提督代理だという彼女は金剛と名乗った。

まるで向日葵のような笑顔で接してくる彼女もまた、エミヤを犯罪者や変わり者としてではなく1人の人間として接しているようだ。

「この2人がこの鎮守府における最高責任者さ、お兄さんの潔白も含めて事の判断はこの2人に全て委ねられる。ほら、お兄さんも自己紹介くらいしておきなよ?」

エミヤの隣に座る隼鷹は既に自己紹介を含めたやりとりを終えているのであえて名乗る事はなく、その接しやすい態度のままエミヤへと自己紹介を促した。

「……私の名はエミヤだ。そちらが私に聞きたい事はおおよそ想像のつくものだが、私の方にも質問は山程ある。ここまでおとなしく同行したのもその為だ、私に話を聞きたいというのならそちらも私の質問に答えてもらおうか」

終始しかめっ面のエミヤはその表情を崩すこともなく、まるで睨みつけるようにして口を開いた。

「ちよ?!その態度はなんなのさ?ここに喧嘩を売りにきた訳じゃないだろうにもうちよつと物腰の柔らかいやりとりはできないの!」

当然、自分の上司にそのような態度をとられた隼鷹は焦る。

クールを気取った厨二病もどきなのは承知していたがまさかここまでとは……

隼鷹としてはこのままエミヤに問題を起こされでもしたらたまったものではない。

彼をここまで連れてきたのは隼鷹なのだから、それがいくら日渡提督の命令であった

とはいえ危機管理の面で責任でも追求されれば泣きつ面に蜂だ。

「身に覚えのない犯罪者の汚名を着せられた挙句に身柄を拘束されているのだから当然だろう。それにだお嬢さん、話し合いというからにはお互いに情報の開示をするのは当然ではないかね？」

「だからって人の上司を威圧する必要はないだろうに……そもそもお兄さん、私達に話すことは何もないって言ってたじゃないか」

「私のマス……上司という訳ではないのだからそんな事は知らんさ。それに私は情報の提供を拒否しはしたが、それはそちらから得られる情報にもよる」

「な、なんて上から目線なのさっ!？」

隼鷹は自分の精神疲労が急速に蓄積していくのを感じた。

事務作業は得意としていないのだがこれは始末書案件かもしれないなど思考する。

しかし、溜息をこぼす隼鷹とは対照的に日渡提督の対応は笑顔のままだった。

「うん、冤罪を前提とすれば彼の言うことも一理ある。こちらに答えられる事であれば答よう、金剛君も彼の話を聞くのはそれから構わないかな？」

「No problemデース!それでエミヤさんは私達に何を聞きたいデスカ？」

どうやらこの2人はエミヤの態度に関して不快に思うことはなかったようだ。

そんな2人の対応に隼鷹は安堵し、エミヤはひとつ頷くと質疑を開始する。

「まず、さきほど襲撃を受けていた船に乗っていた人間の被害はどうなったのだ？」

「それなら報告が入っているよ。骨折や火傷などの被害はあったものの死者は無かったらしい。もちろん命に関わる重体患者もなかった、あの被害状況の中では奇跡とも言える結果だよ。君が守ってくれたおかげだ」

「私が守ったというのは誤解だ。だが……そうか、死者はなかったか……」

エミヤは感慨深そうに眼を閉じる。

あの場で見た限りでは多少の被害はあると思われたのだが最悪は免れていた……それがエミヤという英霊にとってどれほどの僥倖であるかなど、この場の誰も知る由はない。

「しかしあの船は犯罪に加担する船だったのだろうか？密輸と聞いたがそれは薬物や武器の類なのか？」

命を守れた安堵こそあれど、悪を成す者を身を呈して守った事などほとんどないエミヤはそこを尋ねずにいられなかった。

しかし、その質問がよほど予想外だったのか日渡提督と金剛は疑問符の付いた返答をする。

「薬物や武器だって？このご時世にそんな物を密輸してどうするんだい？積荷のほとんどは日本製の家電や生活雑貨だったよ。まったく……どれほど嚴重に規制しよう」とこ

の手の犯罪が減る事はない。頭を抱えたくなるよ」

「その通りデース。こんな時代だというのに各国の富裕層というのは貴重になればなるほど物欲を強める一方……それを守る身にもなつてもらいたいデス」

彼等の口から語られたのは何の変哲もない犯罪の対象にすらならなそうな物ばかりだった。

エミヤの所感に沿って言えば、そんな物ならわざわざ密輸などしなくても普通に輸入輸出すれば良いだろうと思う。

そんなエミヤの様子を見て、どこか納得したように今度は日渡提督が質問を投げかける。

「そういえばエミヤ君は深海棲艦や艦娘について知らないんだね……君も見たであろうあの深海棲艦は今や世界の全海域に存在している。深海棲艦の生態についてはまだ不明な点が多いんだが、どの個体にも共通して言えることは人間を優先的に襲うという事だ。それが意味するところは君にもわかるだろう?」

「つまり……制海権はあの化物に制圧され、外交はおろか物資の供給さえままならないという事かね? そのような生活雑貨を密輸する輩が続発する程にか?」

「御名答。正確に言えば制海権どころか海の上に位置する空でさえ深海棲艦の支配下なのだが概ねその通りだ。おかげで国外の物資は価格が高騰し、一部の人間にはそれらの

物資が裏ルートで法外な価格によって取り引きされているらしい」

「さらに厄介なのは深海棲艦には人間の持ちうるあらゆる兵器が効果を持たない事デス。それなのにリスクよりも欲を優先して密輸なんてするから深海棲艦に襲われて沈没する民間船が後を絶ちません……」

「……あらゆる兵器とはまさか軍の所有するミサイルや核兵器を含めての意味ではないだろうか？」

「そのまさかだよ。流石に条約の関係で核兵器の使用は確認されていないけど軍の所有する戦闘機や軍艦からの爆撃等は終ぞ戦果を得られなかった。これまでに被った軍や民間を含めた我々人類の被害は甚大であると同時に人間が仕留めた深海棲艦の数は記録に残る限り0のままだ」

「というか電と響の報告では半信半疑だったけど本当に何も知らないのネ……」

日渡提督と金剛の口から語られたのは深海棲艦の脅威について。

その事實はエミヤにとつて到底想像もしていなかったものであり、それと同時に今の自分が置かれた立場がどれほど悪いものであるかを嫌でも悟ってしまう。

何せエミヤはその深海棲艦を単身で2匹も仕留めているのだ。

日渡提督や金剛の言うことが事実であるならばそんな人物が普通である筈がない。

むしろこのように簡易的な事情聴取で済んでいる現状が軽すぎる程だ。

「しかしそれはあくまでも十数年も前の話であり現在では多少の外交が行える程度には戦況も好転してきている。彼女達のおかげでね」

己の無力を恥じているのだろうか、何とも言えない笑みを浮かべた日渡提督は横にいる金剛に視線を送った。

「なるほど、唯一の対抗戦力……それが艦娘なのだったな」

「Yes！ 人類の持つ兵器では打倒できなくても私たち艦娘なら話は別デース！ 何の危険もなくとはいきませんが艦娘の持つ力であれば深海棲艦を倒すことができマス！」

見ただけで判断するならば戦闘とは縁もなさそうな女性である金剛は、そんなエミヤの見解などとは無縁な自信を持って答えた。

「さて……エミヤ君、君が本当に深海棲艦や艦娘について知らないというのなら聞きたい事というものもおのずと見えてくる。おそらくそれは深海棲艦や艦娘の起源、そしてこの戦争の歴史やその全容といったところかな？」

浮かべた笑みはそのままだが日渡提督の纏う空気が変わったのをエミヤは敏感に感じ取った。

先程までの穏やかなそれではなく、どことなく軍人としての威厳のようなものを感じる。

それは紛れもなくこの先の話はエミヤにとっても日渡提督にとっても一歩踏み込ん

だ話題になることを否応なく悟らせた。

「……どうしてそう思う？ 私はただ冤罪の潔白を証明しようとする一般人であり、その為の手段を質問するという線は考えないのかね？」

「それでも僕は軍人だからね、彼女達からあげられた戦闘報告もそうだが何よりもエミヤ君からは戦争を身近に経験する人間の気配がする。これはあくまでも僕の経験則だから間違っているのなら謝罪して訂正するよ」

「なるほど……曖昧だが悪くない答えだ。私としても知るべき情報が多いのは事実のようだし聞けるものは聞いておきたい。だがこの先の話は軍事機密の含まれるものになるのだろうか？ ノーリスクで手に入るようなものではないと思うのだが？」

情報不足のため仕方がなかったとはいえ、エミヤの振る舞いはこの世界においてあまりにも不自然だった。

深海棲艦も艦娘も知らない上に人類では打倒不可能とされる存在を2匹も倒しているのだから弁解は手遅れだろう。

その立場は既に犯罪者かどうかなんて生易しいものではなく、人類にとって未知の存在かもしれないというステージに上がっている筈だ。

故に日渡提督は『経験則でわかる』などと言ったのだろう。

その意味は暗に『お前の正体が普通の人間ではない事はわかっている』『こちらの情報

を知りたくばお前も正体を開かせ』とも取れた。

逆説的にここで交渉のテーブルに着かないのならば法的な措置を持って対応するとも取れる。

勿論そんなことになればエミヤは容易く逃走できるだろう。しかし、それをしてしまえばいつまで続くかもわからないこの世界での活動が圧倒的に不利になるのは目に見えている。

そんな日渡提督の意図を汲み取ったからこそエミヤも『曖昧だが悪くない答えー』と答えたのだ。

『お前の言っていることは的を得ているが、このままでは何も話すことはできないぞ』と、暗に示すため。

それは己の存在を認めると同時に秘匿の必要があることを意味している。

もちろんエミヤとてここまでできてリスクを負わないなんて選択肢はないのだからある程度の条件は飲むことを前提とした返答だ。

そしてそんな水面下の探り合いが意味する事は――

「隼鷹君、そして金剛君、悪いがしばらく彼と2人にしてもらえないかな？」

エミヤと日渡提督、2人のみの話し合いであった。

「そ、それは無理デスよ日渡提督！いくら彼が犯罪に加担してないと判断したとはいえ

不自然な事は変わりない以上、何があるかは分かりませン！万が一の時にどうやって提督の身を守るデース!？」

「そうですよ日渡提督！せめて私か金剛さんは同席してないと！」

当然、艦娘である2人はその申し出を拒否する。

エミヤは知らないが艦娘にとつて提督という存在がどれだけ大切に貴重なものかなど彼女達の反応を見れば一目瞭然。

それが自分達の提督ではないとしても艦娘全体で見れば万に一つも危険に晒す訳にはいかないのだ。

ましてやそれが海軍本部となる横須賀鎮守府の提督ともなれば尚更である。

しかし当の本人である日渡提督は何の不安も無いと言わんばかりに笑顔で答えた。

「大丈夫だよ2人とも。エミヤ君だつてここで犯罪を犯すくらいなら冤罪の証明のために同行したりはしない筈だろう？彼とは少し込み入った話になりそうだからその氣遣いつて事で了承してくれないか？」

「し、しかし……」

「できることならこんな事で提督命令なんて使いたくないんだ、甘いかもしれないけど君達は大切な仲間だからね。命令よりもお願いで済ましたいんだが、ダメかい？」

「その言い方は卑怯デース……わかりました、私達は退室しますが有事の際は呼んで下

「ささいネ？」

「勿論だとも、ありがとう」

そう言つて隼鷹と金剛は退室していった。

去り際に隼鷹が小声でエミヤに変なことはするなと忠告してきたが特に反応するこ
となく彼女達を見送る。

「良かったのかね？随分と簡単に守りを引かせたがこれで君は丸腰に等しい状態だろ
う、私が犯罪者じゃないと決まつた訳ではない筈だが？」

「ははは、意地悪を言わないでくれ。さつきも言つたが君が私を襲う理由はない。仮に
密輸グループのメンバーだつたとしても鎮守府内で私を人質にするほど愚かには見え
ないしね、何より君はそういつた手荒な真似をするタイプには見えない」

「私を戦争慣れしているような扱いの発言があつた割には真逆な事を言うのだな」

「それはそうさ、戦争と暴力は違うものだ。無益な暴力を行使する輩と戦争で命をかけ
る兵士が同じじゃないことくらい君にもわかるだろう？」

「もつともだ。だが私が前者の人間ではないという保証にはなるまい」

「なるとも、君は何よりもまず船員の安否について質問した。一見すればそれは密輸グ
ループの一員とも取れる質問だが、欲に溺れて海に沈むような輩なら仲間の心配よりも
物資の心配をするだろう。つまり端的に言つて君は優しくて信頼に足る男だと僕は考

える」

エミヤは言葉に詰まった。

この男は穏やかに見えて会話の端々から必要や情報を拾う視野と、その情報を使つて場の空気を握るだけの能力がある。

それは認めようーしかし、どうにも発言に甘さが目立つ。

まるでどこかの正義の味方を志す阿呆のような発言は、エミヤが素直に受け入れられるようなものではない。

「私を優しいなどという思い違いはやめてもらおうか。質問の順番など些事にすぎんだろう」

「理由はそれだけじゃないさ。ならばこれは本線とは外れた質問だけ……エミヤ君は何も話さないと宣言していたにも関わらずどうして逃げずにここまで来たんだい？」

「何を言いだすかと思えば……あのように四方を軍や警察の人間に囲まれていては逃げようがあるまい。それに私はここに聞きたい事があつて来たと言つたはずだが？」

「それは嘘だね。君は深海棲艦とまともに戦つていたと聞く、そんな君なら海上で艦娘相手にならともかく陸地において逃げるなんて造作もないはずだ。情報収集にしてもわざわざ鎮守府まで来なくとも時間さえあれば他のルートから探る事も可能だろう？」

「……君は何が言いたいのだね？」

エミヤは思ったローヤりにくい相手だと。

「君が逃げなかったのは隼鷹、電、響のためじゃないのかい？」

「何を根拠に——」

「あの場での責任者は艦娘である彼女達だ。重要参考人である君を逃してしまえばその責任は当然彼女達に降りかかる。君はそれを知った上で逃走をしなかったと読んだのだけど、どうかな？」

日渡提督の見解は間違いなく的を射ていた。

それが全ての理由ではないにしても、あの時の彼はそこに気を使って逃げなかったのも事実である。

誤解のないよう説明するならば、それは相手が女性だからといった下衆な理由ではなく、戦場において助けられた恩義からであるという事は主張したいところだ。

が、当然エミヤがそんな事を認めるはずもなく——

「話にならない。それはあくまでも君の想像の話だ、私は自分のために動いただけであつて彼女達の立場に気を回したつもりはない。私がああの化物とまともに戦つたという報告も何かの間違いだろうさ」

ここに英霊エミヤに厨二病の他、ツンデレの属性が付与された。

勿論、そんな彼の内心など日渡提督には見透かされていたようで少し笑いを堪えているようにも見える。

「まあエミヤ君が優しい男だという感想は僕の所感だ、君がそう見られたくないのならばこれ以上の言及はやめておこうか。しかし深海棲艦とやりあつたという点は事実なんだろう？聞いただけではいまいち要点を得ないけど何も無い所から剣のような物を取り出して弓矢のように扱っていたとか。電はまるで手品か魔法のようだったと興奮していたよ」

ここで日渡提督が一步踏み込む。

雑談のような気軽さで言つてはいるが、手品か魔法のような戦いぶりと言われたその説明は彼の正体を明らかにする話題だ。

「……さてどうだったかな。断つておくが私は魔法など使えない、そこらにあつた銃火器で応戦しているのを彼女達が見間違えたという可能性もあるんじゃないか？」

「なるほど、そういう見方もあるね。しかしそうなると彼女達は戦場においての活動報告で虚偽の情報を提出した事になる。そうなれば嚴重な処罰の対象となつてしまう訳だが……エミヤ君の主張はそれで間違いないね？」

「この狸め……君は性格が悪いと言われた事はないかね？」

「いやあ、恥ずかしながら良く言われるよ。特に一番の親友には会うたびに言われてい

たものだ、彼もエミヤ君のように優しい男だったんだが僕にはどうにも辛辣でね」

ここにきてエミヤは日渡輝という男の評価を改めた。

確かに発言には甘さを感じるし、お人好しな態度もどこかの誰かを思い出させて受け入れがたい。

しかし、この男にはそれにも増して手にした情報とそれを使って有利をもぎ取る狡猾さがある。

それはまさしく戦場に生きる上で必要なものでり、提督という責任ある立場の人間が持ち合わせているべきもの――

(未熟者を装った策士か……ふつ、まったくもってやりにくい相手だ)

それと同時に嬉しさのようなものも込み上げてきた。

少なくともエミヤの目の前にいる日渡輝という男はそれだけの能力を有した者であり、更にはエミヤの必要とする情報を持つ者として最高の立場にある。

そんな相手に現界初日から巡り会えたのは不幸体質のエミヤにしてみれば幸先の良いスタートともいえるからだ。

「彼女達に責任の追求をする必要はないさ……良いだろう、腹の探り合いはここまでだ。ここからはお互いに真実を語るとしよう」

「ふふつ、その言葉を待っていたよ。ではさっそくなんだが――」

「待ちたまえ」

嬉しそうな笑みを浮かべた日渡提督の言葉をエミヤは手を突き出して遮る。

「最初にはつきりさせておこう。これから語る事は私にとつても重要な機密だ、そしてそれを語るのはあくまでも日渡輝という個人にであり日渡提督という軍の人間ではない」

「……つまりここからの話は僕とエミヤ君だけで共有するものであつて軍への報告を含めた一切の情報漏洩を禁じるということかな？」

「理解が早くて助かるよ。その条件が飲めないのならば話す事は何もない、私は手段を問わずにここから立ち去らせてもらう」

突き出した手の向こうにはエミヤの殺気にも似た感情を宿した瞳があつた。

そしてそんな眼に睨まれた日渡提督も物怖じせず真つ直ぐ彼を見据えて答える。

「了解したよ、ここでの話は僕と君だけの秘密にすると約束しよう」

「感謝する。私にとつても相当なリスクのある話なのでね、くれぐれも今の約束を忘れないでくれ」

「大丈夫だよ、そこは信用問題だから僕を信じてくれとしか言えないけどね。しかし万が一にも僕が口を滑らせたらどうするんだい？」

日渡提督に意地悪のつもりはなかつた。

単純にエミヤの言うリスクというものがどれほどのものか気になっただけの言葉であって他意はない。

しかしその言葉によってここまで余裕のある笑顔で対応してきた日渡提督の顔は驚愕に染まる。

「君が口を滑らせた場合か……それはなー」

言うが早いか、突き出したままのエミヤの手には刀身の黒い剣が握られた。

そして次の瞬間には日渡提督の目の前にいたはずのエミヤはその背後へと移動しており、握った剣は日渡提督の首筋へと添えられていた。

「君を含め、その情報を聞いた全ての人間を消す。例えそれが軍の組織全てであろうともだ」

「……なるほど、確かに君ならばそんな事も可能だろう。改めて約束するよ、ここでの秘密は絶対に漏らさない」

もちろんエミヤに殺戮の意思はない。

彼はケルト脳ではないし何より守護者なのだ。

秘匿義務の為とはいえ大量殺戮なんてする筈がない、これは単なる脅しである。

だがその脅しはそれなりの効果を発揮したようで、日渡提督の言葉にも自然と力が籠っていた。

それを確認したエミヤは首筋から剣を離してゆっくりと元の席へ着席する。

「それにしても凄い力だね、電があれだけ興奮していたのも頷ける。というかやつぱり君は魔法使いだったのか」

「違うと言っているだろう。君達にその違いを理解しろという方が難しいのだろうかこれは手品でも魔法でもない……魔術というのだ」

エミヤの手に握られた剣は光の粒子となつて霧散した。

「私のような能力を扱う者は魔術師といつてね、本来ならばその存在は人に晒して良いものではない。神秘の秘匿は君達が軍の機密を守るのと同様に漏洩などあつてはならないものなのだ。まあ、私は魔術師として少々特殊だから今回は特例としておくがね」

「ではその魔術で君は深海棲艦と戦っていたと？まさか剣を持って白兵戦を挑んだ訳じゃないだろうし君の能力にはまだまだ幅があると見て間違いないかな？」

「そのような物だと言つておこう。今から魔術についてあれこれと説明するには時間がかかり過ぎてしまうので割愛させてもらうが、私の魔術は投影魔術といつて見たものや構造を把握した物を複製コピーする物だ。無論、投影する物に限度はあるがこのような事もできる……投影開始」

そう言つたエミヤが何も無い空中に手をかざすと、そこにはまるで神が降臨でもするかのように光の粒子が集まりひとつの勉強机が形成された。

それは使い古された机であり、その過程でついたと思われる小さな傷や金属部分の腐食具合までがエミヤの目の前に置かれた机と見事に一致する物だった。

「これが魔術なのか……いや、素直に驚かされたよ。まさか艦娘以外にこんな奇跡を起こす者がいるとは。しかしわからないのはこの力を秘匿にする理由だ。もちろん秘密は厳守するけど、これほどの力ならば公にして世のために役立てた方がよほど有益だと思うのだけどね」

日渡提督は確かに目の前の光景に驚きはしたが、それと同時に既視感にも似た感情を覚えた。

エミヤがおこなった投影はまるで、艦娘が艦装を装着する際におこる現象そのもののように見えたからだ。

そしてその艦娘といえど今や世界的にもその名を轟かす存在であり、『神の使い』や『奇跡そのもの』といった通り名を欲しいがままにしている。

ならばエミヤもそのように世間に向けて力を示し、もっと活動しやすい場を整えた方が良くだろうというのが日渡提督の率直な感想だった。

しかしエミヤのそれは艦娘とは事情が違ってくるー

「艦娘という存在がどういったものかという質問はこれからさせてもらうとして、はっきり言えることは艦娘と魔術師とは立場が異なるということだ。これはどちらが優

れているかという意味ではなくその特性を指して言っている」

「艦娘と魔術師の違い……差し支えなければその違いというものについてご教授願えるかな？」

「ふむ……雑談に近い内容になるので詳しく話すのはまたの機会にするとして、簡単に言えば魔術とは神秘の具現化だ。それは祈りであったり伝承であったりと様々だが、形無き力を形に変える力と言ったところだろうか」

「……つまり神秘性を失えば同時に魔術としての力も失うと？」

「必ずとは言えないがそういうことだな。蜃気楼やオーロラなどが良い例だろう。これらの現象は現代において科学的見解から神秘性を剥奪されてしまっているが古代においては魔術的にも大きな力を持つ現象のひとつだった。その正体を看破された現代ではただの自然現象にすぎないがね。つまり神秘の秘匿は魔術師の生命線に直結する、艦娘のように世間に周知されるなどもってのほかだ」

「だからこそ表舞台には立たないと……益々持つて事の重大さを理解したよ、話してくれてありがとう。どうやら僕はこの話を墓場まで抱えていく必要があるらしい。……しかし良かったのかい？ 僕のような初対面の人間にそんな重要な話を話してしまつて」

自分の認識とは大きくズレた魔術師という存在の在り方に、日渡提督は心から申し訳なさそうな表情を浮かべる。

このあたりはエミヤの思う通りにお人好しと言える部分なのだろう。

「ふつ、君が将来的に人理を脅かす程の反英霊にでもなつて魔術の存在を根底から覆すのなら問題もあるだろうが軍の提督として手腕を発揮している内は問題ないさ。一般人の一人にその存在を知られたところで影響はないよ、それにもし影響があるならばあの密輸船の乗組員をただで帰すはずがないだろう?」

エミヤはニヒルな笑みを浮かべて答える。

そこにはもう脅すだとか優位をとるだという感情はなく、まるで秘密を共有した同士をからかうような悪戯っぽささえ伺えた。

「反英霊? それも魔術師の専門用語か何かかい? まあその辺りの詳しい話はまた今度聞かせてもらうよ。とりあえず、君が問題ないと言うのなら過剰に気にするのはやめておくさ。あ、それと隼鷹、電、響には僕から嚴重に口止めしてこう。彼女達には悪いがそこは提督命令を行使すると約束する」

「お気遣い感謝するよ、もつとも彼女達はその命令を厳守できるかは定かじやないが今は信用するでしょう」

「そこは大丈夫だと保証するよ。彼女達も艦娘という特殊な立場とはいえ本質は軍人だ。現場で命をかけているという意味において仕事への誠実さは僕達にも勝ると言える。守秘義務は必ず守るさ。それにしても……いや、やめておこう」

エミヤの眼をしつかりと見返しながら安全を保障する日渡提督。

それだけでも彼と彼女達にある信頼関係が容易に想像できた。

それにしてもどこか愉快そうな顔で何かを言い淀む日渡提督に対しエミヤは不思議そうに尋ねる。

「それにしても、なんだね？そこまで言いかけたのならはつきり言いたまえ」

「いや、言ったら君が不機嫌になりそうだから遠慮するよ。僕だつて君のような相手から怒りを買いたくないからね」

「ますます理解できんな。この場においては互いに腹の内を明かすと言つたばかりだろう？私としてそこまで短気だと思われるのも心外だ、言いたいことはハッキリと言えばいいや」

「本当かい？絶対に怒らないんだね？なら言うけど……何、やつぱりエミヤ君は優しくて正義感に溢れる男だなあと関心してたんだよ」

エミヤは絶句した。

怒らないと言つた手前ではなく、単純に呆れかえつたという意味で。

「君は今しがた殺されかけたばかりだと言うのにどうしてそうなるんだ……」

「殺す気どころか脅す気さえ無かつただろう？エミヤ君が本当にそのつもりなら交渉のテーブルに着く必要なんてない、その能力で好きなように悪略を練つて暗躍すれば良い

んだからね。それでも自分の秘密を打ち明けてまで公平な交渉に望むのだからそれは間違いなく正義であり優しさだ」

もつとも、誤解は受けやすそうだけどねと付け加えて日渡提督は笑う。

「本当にやりにくい男だよ……やはり君は性格が悪い」

諦めたようにエミヤも笑う。

その人を見透かしたような性格にはやはり慣れないし、軍人としての能力の高さは油断ならない。

それでも根底に悪意は見えず部下である艦娘にも気遣いのできるこの男を、この世界で活動する上では信用してもいいだろうと判断するのだった。

気付けば日差しも傾きかけている。

だが積もる話はこのからだ。

こうしてゆつくりと、だが確実に二つのFate^{運命}は溶け合っていくー

密談の時間

「つまり深海棲艦と呼ばれる生物に起源はなく、いつの間にか自然発生していたと。それもその生息域は瞬間に全海域に広がった、か……」

難しい顔で口元に手を当てたエミヤは日渡提督が語った深海棲艦についての情報を頭の中で反復していた。

「期待していたような返答ができずに申し訳ない……だがこれは軍の機密を隠すだとかそういう訳ではなく本当に不明なんだ。自分達の無能さを主張するようで恥ずかしい限りだが誓って嘘ではない」

日渡提督によつて語られた過去。

それはまだ艦娘さえ存在しなかった頃から続く地獄を絵に描いたような戦いの歴史であった。

初めて日本海域で深海棲艦の存在が確認されたのは今から数えて13年前、発見者は中型の民間漁船の作業員だと思われる。

『思われる』というのはその人物が既にこの世にいないので暫定的にそうだった筈という意味だ。

同時にその漁船の乗組員こそが日本における最初の犠牲者だったらしい。

緊急無線によって救助要請を受けた海上保安庁は大至急で巡視船を向かわせたのだが、それから程なくして巡視船からの連絡は途絶えた。

事態を重く見た海上保安庁は軍への捜索を要求。

後日、海上を漂っていた漁船と巡視船の残骸が発見された。

巡視船から回収されたレコーダーとカメラの映像からその場の凄惨さと未知への脅威が露見する。

船を破壊され、海に投げ出された人間はまるでピラニアの前に投げ込まれた餌のように黒い化物にその身を貪られていた。

海を真っ赤に染め上げながらその場にいたであろう人間の全てを食い殺した化物は静かに海へと消えていったらしい。

それが深海棲艦との戦いの始まりであり、まさにこの世の地獄の入り口だった。

そこからの2年間は過酷を極めたものになる。

日本軍に飛び込む出動要請は増える一方、だというのに戦死者は後を絶たず人員的にも経済的にもその被害はもはや国家の存亡にまで影響を及ぼすほど悪化していった。

外交は勿論、海外への援軍要請すらできない。

その頃には日本だけでなく、世界のあらゆる海域は既に深海棲艦の支配下だったから

だ。

どれだけの戦闘を重ねても具体的な対策案は浮かばず、いたずらに被害だけが増えていく。

生物でありながら兵器のように応戦する深海棲艦に対し人類はあまりにも無力だった。

当然、その被害は国民の生活にまで及んでくる。

自給率が高くない上に四方を海に囲まれた日本にとって、海が支配されたという現実
は実質の死刑宣告に近かった。

さらに被害はそれだけに留まらず、その数を増やした深海棲艦はついに陸地への侵略
を始めたのだ。

軍の奮闘も虚しく、海沿いに面した街は軒並み崩壊した。

それでも今日までこの国が生き残ってこれたのは最後まで諦めなかつた兵士達の尽
力と、深海棲艦の特性によるものが大きい。

海上において無敵に近い深海棲艦ではあるが、陸地においてはその限りではない。

動きは鈍重になり砲撃の狙いも定まらない上に魚雷は使えないのだ。

空爆被害に関しても深海棲艦が認知できない地域に関しては発生していない。

人間は深海棲艦を仕留める事はできなくとも、海へと押し戻すことでその被害を最小

限に留めて耐えていた。

他にも細かい被害まで含めればきりが無い。

そのような明日も見えない戦いが2年――それは掛け値無しの地獄だった事だろう。「当時の僕も軍艦乗りの兵士として数多くの戦場や被災地を飛び回っていた。行く先々では決まって血が流れ、人が死ぬ……僕の仲間や部下達も数え切れなくらい殉職していったよ」

「なるほど……戦争放棄を宣言してもなお戦い続けている経緯はそういう事だったか」

「ああ……それに戦闘訓練はしても未知の生物との戦争は想定していなかったからね、戦争開始当時はまともな戦闘すらできなかった。それでも今日という日があるなら無駄な戦いだったとは思わないけれど」

在りし日に想いを馳せているのか、日渡提督は悲しげに微笑んだ。

そして人が死んでいく現場を多く見てきたエミヤには理解できた――救われない地獄で救いを求める心も、不条理や理不尽を呪う気持ちも、何より生き残ってしまった苦悩も……

「だからこそ僕はどんな手を使ったとしてもこの戦争を終わらせる。先に逝った仲間達や何の罪もなく殺された人々の為にも……何より今に絶望することなく強く生きる全人類の為にも」

日渡提督は力強く宣言する。それはエミヤに対する宣言ではなく他の誰でもない自分自身に向けたものかもしれない。

（ふつ、人が違えば同じような境遇でも歩む道は違うという事か……一歩間違えれば『正義の味方』など目指しかねない危うさはあるがこの男は良い仲間に使われたのだろう）
エミヤは内心でほくそ笑む、日渡提督の眼に宿るのは戦争を憂う悲しみではなく確固たる決意だったのだから。

「話が逸れてしまったね、申し訳ない。ここからは艦娘について話そうー」

戦争は国家の滅亡という最悪のシナリオをそのゴールへと向けて加速度的に進んでいく。

戦いを続けるにしても資源不足の日本には軍艦を建造したり兵器を開発する余裕さえなくなっていた。

敵である深海棲艦についても何もわからず、学者達は突然変異の海洋生物説や地球外生命体説などを唱えるばかりで具体的な対策案はまるで見えてこない。

兵士も戦争開始当時に比べてその数を半数にまで減らし、国民は生活に活気を忘れて毎日を自宅や避難用施設で過ごすだけの日々ー

誰もが絶望のどん底にいた。

そんな過酷な戦況の中、ついに人類は一筋の希望を見つける。

それは首都近海にて巡視をしていた軍の駆逐艦からの緊急無線に始まった。

深海棲艦による襲撃を知らせる無線を受けた海軍は仲間の窮地を救うべく船とヘリを現場に急行させる。

だが、そこで待つていたのは見飽きる程に繰り返してきた惨状――昨日まで笑いあっていた仲間は海の藻屑と消え、鉄の要塞である軍艦はただの鉄屑へと姿を変えてしまっていた。

奮闘の跡は見て取れたが結果は目を背けたくなる悲劇ばかり――仲間の無念を汲むように兵士たちは無言で作業にあたる。

そして涙を流しながら海に広がる無数の残骸を回収する中、それは発見された――それは海面を漂う女性だった。

海軍の制服とは違うどう見ても一般人なその女性は本来ならばそんな場所にいるはずもなく、また他の隊員が全て消え去った戦場に生存している事もありえないことだ。

しかし兵士達にとってそんな事はどうでもよかった。

多くの仲間が散った場所でありながら、それでも生きてくれている人がいた――それだけで彼らの心は僅かだが救われたのだから。

そして、目を覚ました少女は一人の兵士に告げる。

『貴方が……私の提督ですか？』

後に『始まりの艦娘』と呼ばれる彼女の第一声。

足掛け2年、繰り返された悪夢のような日々、光が射した瞬間である。

彼女は自身を艦娘と名乗り、黒鉄の化物を深海棲艦と示した。

艦娘の在り方や、深海棲艦の脅威、提督たりうる人物の条件……彼女は様々なことを人類に教えた。

もちろん最初は軍部としても彼女を全面的に信用する事ができるはずもなく、少女によつてもたらされた情報にも半信半疑だった。

だが、彼等の目の前で彼女が深海棲艦を沈めてみせた事でその信用は確固たるものになる。

そこからの戦況は僅かずつではあるが確実に変わっていった。

無論、艦娘と人類が最初から良好な関係であったかといえばそうではない。

人外の力を持ち、海の上をその足で自由に駆ける存在を忌避する者も少なくはなかった。

中には深海棲艦の回し者だと言つて非難する者もいた。

それでもその艦娘は兵士や人々の為に奔走し続け、どれだけ傷付こうとも彼等を守り続けたのだ。

そうして少しずつ、だが確実に人類と艦娘は歩み寄っていく。

兵士達も人間とは違う存在とはいえ、女性である彼女に戦闘を任せきりにする事はなく互いに手を取り合いながら戦った。

時には犠牲も出てしまいが人類は確かな前進を感じていた。

さらに僥倖なのは新たな艦娘の発見だった。

『始まりの艦娘』である彼女によって収められた戦場には、稀に新たな艦娘が発見される事があったのだ。

そこに関する因果関係は結局のところ今日まで解明されてはいないが、深海棲艦を沈める事によって現れる艦娘はまるで何かから解放されたかのようだった。

それからおよそ10年の月日を経て艦娘は少しずつ増えていき、現在という艦娘在住の鎮守府が設立されるにまで及ぶ。

「――艦娘も深海棲艦と同様にその起源は不明か。私は艦娘も超常的な力を持つ人間だと思っていたのだがな、どうやら認識からして違っていたらしい」

一通りの話を聞き終え、エミヤは己の認識から余りにもかけ離れたこの世界の事情に溜息をつく。

「いや、細かい事を抜きにすればエミヤ君の認識で間違いないよ。彼女達にも感情はあるし食事でも睡眠もとる、僕達と何も変わらない。これは僕の個人的な意見だけど共に戦う彼女達は大切な仲間であり人権ある一人の女性だと思っている。中には兵器だとか

道具のように言う者もいるのが残念な現実でもあるんだけどね……」

「それはそうだろうな。人間とは未知を恐れ異端を許さないものだ、それは私のような魔術師であつても変わらない。例え今は味方だとしても明日もそうである保証がないならば全ての人間に理解しろという方が無理だろう」

「そうかもしれないね……ならエミヤ君も彼女達をただの兵器だと論じるかい？」

「……」覧の通り、私は現実主義でね。力のある者と手を組むならその扱いには注意するべきだとは思うが、意思の疎通がかなう相手を前にして兵器や道具であるかのような認識は持たないよ」

エミヤは艦娘の正体が何であれ艦娘を命あるものとして認めているようだった。

その意見を聞かてか、日渡提督の顔も綻ぶ。

「良かったよ。今や前線は彼女達の力で保たれていると言つても過言じゃない。だと云うのに彼女達に向けられる目が温かいものばかりじゃないのも事実だ……そんな中でもエミヤ君のような人間がいてくれるだけで僕や彼女達も救われる」

「私は現実主義だと言つたばかりだろう？感情ある女性として艦娘を見るならば下手な発言で怒りを買いたくないだけだ。女性の癩癩ほど手に負えないものはないのでね」

何かを思い出したのか、遠くを見るような目で苦笑いを浮かべるエミヤであつた。

(それにしても……艦娘とはまるでー)

エミヤはあえて口にしなかったが、第一印象として艦娘に抱いた感情は『自分と似ている』だった。

それは性格が似ているという意味ではない。その存在の在り方が自身に酷似していると感じたのだ。

エミヤは元は人間とはいえ現在は英霊である。

それ故に生前には無かった筈の力を得ているが、その在るべき場所は英霊の座であり現世にいるエミヤはあくまでも英霊の座にいるエミヤの一側面だ。

そんな自分の存在を艦娘に置き換えれば、艦娘とはまるで英霊のようだと感じないはずがない。

どこから来たのかは不明、特殊な能力を所有、提督マスターを必要とする――

勿論エミヤの知る限り彼女達のような英霊は存在しないし、隼鷹や金剛などといった名前の英雄なども聞いたことがない。

それが仮名である可能性もあるにはあるが、日渡提督の話聞く限り艦娘が仮名で活動する英霊という線はないだろう。

それよりも考えられる可能性にエミヤは早い段階で気付いていた。

「これは私の勝手な推測にすぎないので見当違いかもしれないが……艦娘とは軍艦の化身なのか？」

「あれ？その説明までした覚えはないけど……どうしてそう思ったのかな？」

「駆逐艦と名乗った電と響、軽空母の隼鷹、そして先程の高速戦艦金剛……私が会った艦娘はその4人のみだがいずれも旧日本海軍が所有した軍艦と同じ名前だ。彼女達の起源が不明で、その名前が軍艦に由来するものならば自然とその答えを想像するだろう？」

英雄の中でも近代における戦争というものに縁のあるエミヤには彼女達の名前に聞き覚えがあつた。

エミヤはまだ見た事がないので知る由もないが、彼女達の戦闘方法を見ればその予想は確信に変わる事だろう。

「一般人とは一線を画すと思つていたけどまさか軍艦についての教養もあるとは驚いたよ。確かに艦娘の中には自身の前世を軍艦だつたと語る者もいる……しかしエミヤ君はそんなオカルトを信じるのかい？」

「今更だな。オカルトだというのなら魔術師は勿論、深海棲艦もオカルトのようなものだろう。それに彼女達が軍艦の化身だというのなら納得もいく」

「納得ね……なぜ君はそんなにも簡単に納得できるのか聞きたいね」

サーヴァントとは霊的な存在だ。

英霊にも反英霊などを含め様々な者が存在するがその基本は変わらない。

故に英霊とはそういったスピリチュアルな部分に敏感であり、エミヤも初対面の艦娘に対して似たような感覚を覚えたのだ。

英霊ではないが人間とも違う存在。

最初こそ異常に濃い大気中の魔力マナによる影響や、艦娘の特殊な能力による認識の差異かと思っていたがそれは日渡提督の話で確信に変わった。

彼女達は自分と同様、人間とは違う者だと。

しかしエミヤは魔術を暴露したものの、英霊の存在について話してはいない。

聖杯戦争とは無縁の世界、更には世界アラヤの介入も感じられなくなれば英霊の存在がどういった影響を及ぼすのかが不透明すぎるからだ。

（私が呼ばれた意味がこの戦争に無関係とは考えにくい。だがこの世界には守護者たる艦娘が既に存在している……仮に私が艦娘と同類にあたる存在として呼ばれたならばあるいは——）

様々な可能性を考慮した上でエミヤはひとつの答えを出した。

英霊と非常に近い存在である艦娘がその存在を公にしているという事実。

そして幾らか好転してきているとはいえ、依然として人類存続の危機である事に変わりない戦況。

何より——自分はこの世界で成すべき事があるという直感。

それらを加味してエミヤが出した答えは――

「荒唐無稽な話に聞こえるだろうが……私は人間ではない」

自身の在り方を率直に明かす事だった。

「陳腐な言い方になるが私は幽霊のようなものでね、こことは違う世界から何者かによつて呼び出されたからここにいる。いわば傭兵の霊のようなものだ。故に近い存在である艦娘についても感覚的に人間とは異なる者だと理解した。軍艦の化身と言われれば納得もするさ」

「君が幽霊だって？ ははっ、影や足がある幽霊なんて初めてだよ。しかしその不思議な能力や艦娘の正体を看破してみせる辺り冗談ではなさそうだ。異世界から来たのなら艦娘や深海棲艦について知らなかったのも頷ける。……で、それが君の正体って事で良いのかな？」

もちろん影や足が無い幽霊すら見た事がない日渡提督は驚きはしたもののエミヤの話を疑う様子はなく、むしろ初めて目にする存在に好奇心旺盛な笑顔を向けた。

「私は生前から魔術師だった、この力は死後に強化されただけで霊的な者が全てこの能力を持つ訳ではないさ。しかし君の方こそこんな話をよく信じられるな？」

「それはそうさ、僕達はこの十数年間で数えきれない惨劇を目にしてきたけど同じくらしい奇跡も目撃している。艦娘なんて存在と共闘しているのだから今更になって幽霊

が出てきても驚かないよ。それに君は悪霊つてわけではないんだらう?」

「どうだろうな? 自分で言うのもなんだが霊的な存在とは基本的に未練や後悔が原因で発生するものだ。私が悪霊かは知らんが始末に負えないとは思うがね」

「大丈夫、エミヤ君が悪霊じゃない事は僕が保証するよ。艦娘と近い存在だというなら尚更だ」

エミヤとしても普通の人間に比べれば多少は理解のある男だとは思っていたが、まさかここまであつさりとなつ得されるとは思っていなかつたので呆気にとられる。

が、彼等が置かれた状況を鑑みればそれも不自然な話でもないのかもしれない。

言うまでもなく英霊についても日渡提督には秘匿としてもらうのだが、それでもすんなり納得してもらえたのはありがたい事だ。

「さて、魔術や霊的な存在について深く掘り下げるのはいつでも良いだろう。少なくとも私から出すべき情報はこれくらいだ。他に聞きたい事があれば答えるが?」

「そうだなあ……エミヤ君の生前や君がいた世界について聞くのはアリかな?」

エミヤから提示できる極秘情報の開示はあらかた済んだ。

だというのに日渡提督は悪戯な笑顔でそんな予想もしていない事を訪ねる。

「はあ……プライベートな事に関してはお断り願いたいのだがね。まあ、それについては今後も良好な協力関係を築いていけたのならいざれ話すこともあるかもしれないが」

「ははは、やっぱりダメか。いや、これは僕の興味から聞いただけだから別に構わないさ。いつか話してくれるというのならそれを楽しみにしておくよ」

特に残念そうな様子もなく引き下がる日渡提督。

少なくとも今後の関係を良好に保つ気はあるらしい。

そんな彼が声のトーンを落として真剣に尋ねる。

「ああ、でもこれだけは聞かせてほしい。エミヤ君……君はこの世界で何をするつもりなんだい？」

おそらく日渡提督にとってこの質問こそが本命なのだろう。

エミヤの事を人類の脅威として見てはいないのだろうか、野放しにして問題のない相手かもわからない。

提督として人類の脅威ではないという確約を取らない訳にはいかないのだ。

それに対しエミヤもどこか物悲しげに答える。

「私は……戦うのだろうか……人類の危機を取り除くことが今の私の仕事だ、ならばその脅威を絶たねばならん。深海棲艦がその根源だというのなら君達と敵対する事はないだろう。だから君が心配するような事はないと誓うよ」

「そうか……いや、すまなかつた。疑うようなつもりはないんだけどこちらも仕事なんですね」

「構わんさ。私のような存在を信じろというのも無理が過ぎる……秘匿を厳守してくれ
るならそれ以上の望みもない」

ここまで『霊長の守護者』について語ってはいないが、エミヤの言葉には自然と哀愁
のようなものが籠っていた。

だからこそ日渡提督も深く追求せずに信用を置いたのだろう。

もつとも、今回の戦いは人間を殺すものじゃないだけでもエミヤにとつては僥倖なの
だが、それは日渡提督の知るところではない。

「しつこいようだが秘密は厳守する、これは絶対だ。そして僕から話せるこの戦争につ
いての話はこれくらいなんだけど、エミヤ君こそ他に質問はあるかい？」

「そうだな……細かい事は今後でも構わないがあえて聞くならば一点、いや二点か」

「なんだらう？ 僕に答えられる事なら何でも聞いてくれ」

「ではまず一点目、君はこの鎮守府の所属ではないと言った。そして金剛という艦娘は
提督代理だと……ならばこの鎮守府の提督はどうしたのだ？」

ここに來てからまず抱いた疑問。

とは言つても大凡おおおよその答えは見えるのだが、やはり指揮官の存在といふのは氣になると
ころだった。

そしてエミヤの予想はやはり的中していた。

「……この鎮守府に提督はいないよ。二ヶ月程前にこの近海で起きた深海棲艦の襲撃で殉職してしまった。本来ならば提督が前線に出ることは稀なんだがその日はたまたま鎮守府を新設予定だった無人島へと渡る予定があつてね。彼はその渡航中を襲われた……」

一瞬、戸惑うような表情を見せた日渡提督は白い手袋に血が滲むのではと思うほどに拳を握りしめてポツポツと語る。

「艦娘所属の鎮守府はその特性上の理由で海沿いに建設される。それ故に提督は深海棲艦の脅威に最も近い場所に着任するのだから襲われる事も珍しくはない……だがあの日の襲撃は不自然な点が多すぎる……!」

「不自然な点? さしつかえない範囲で構わないから話してもらえるかね」

「……提督が船に乗って海に出ると言う行為は危険が伴う。深海棲艦にしてみれば敵の元締めが手の届く所に出てくるのだから当然だ。だからこそ、その任務は厳重な警戒と綿密な計画をもって遂行される。特にこの近海は既に制海権を取り戻しているのだから本来ならば安全に終わる筈の任務だったんだ!」

「だが予測もしない襲撃を受けたと?」

「ああ……それもこの海域では見たこともない強力な個体の深海棲艦だったと聞く。艦種さえこの辺りにはいないものだった。その周到さはまるでこちらの計画を見越した

上で襲撃したとさえ言える」

明確な怒りを宿した瞳は窓の外に広がる海を睨んでいた。

深海棲艦に戦略を練るだけの知性があるのかは不明だが、軍の極秘任務を知る術がない以上は不幸な事故だったとしか説明できない。

その歯痒さは今も日渡提督の中で消えない炎として消えずに燻ったままだ。

「……戦場に生きる者ならば不慮の事故など隣り合わせだ、その提督もわきまえていた事だろう。しかし提督が不在の鎮守府というのは問題ないのかね？」

相手が人間であれ化物であれ、戦場における残酷さや不条理など見尽くしている。

運が悪いだけで人が死ぬのは当たり前で、それが嫌なら戦場になど立たなければ良い。

それでも戦いに身を置くのなら相応の覚悟を持っていた筈だ。

だからこそエミヤが目を向ける先は過去の惨劇よりも目下の課題なのだ。

それはいつけん冷徹に見えるが、過去の犠牲をひとつたりとも無駄にしないというエミヤの信念の表れ。

そして同じく戦場に生きる日渡提督にもその真意は伝わっている。

「その通りだ、彼も危険は承知の上だった……取り乱してすまなかつたね。エミヤ君の言う通り提督不在の鎮守府は問題が多い、現在は金剛君や周りの助けでなんとか回って

いるがそれもいつまで持つだろうか……」

「しかし司令としては君や金剛がいるのだろうか？ 突き詰めた話、私が聞きたいのは提督がいない事による具体的な弊害についてだ」

「まさかそこを聞いてくるとはね……わかかって聞いているならその洞察力は軍人以上だ。察しているかもしれないが艦娘在住の鎮守府において提督という立場の人間は通常の海軍提督とは訳が違う。率直に言えば艦娘にとつて提督とはエネルギー源、つまり原動力とも言える存在だ」

「なるほど、やはりそういう絡線からくりか……」

「その口振りはやっぱり察していたようだね。どうしてそう思ったんだい？」

「簡単な理屈だ、さつきも話したが私と艦娘は似ている。今の私は特殊な状況にあるせいか雇い主となる人間がいけないのだが本来ならば雇い主と契約して魔力を供給されることで現界を可能とする。それに基づいて考えるなら提督とは私でいうところの雇い主に当たる存在だろうか？ ならば何かしらの需要と供給が発生するはずだ。それが魔力ではない事は確かだがね」

「ご名答だよ。そして提督が艦娘に与えるのはもちろん魔力なんかじゃない、それは『絆の力』と呼ばれるものだ」

「絆？ 随分とアバウトなものが出てきたな。それは氣の持ちようではないのかね？」

「いや、聞こえはアバウトかもしれないが実際の数値としても絆の力は立証されている。理屈はわからないが信頼できる提督の元では同じ艦娘の能力も桁違いに伸びるんだ。逆に提督がいなければ艦種が戦艦の艦娘であつても優秀な提督の指揮下にある駆逐艦にすら及ばない」

「この世界には魔力に変わる原動力があるという事か。ならばこの鎮守府にいる艦娘は無力化しているという事になるのか？」

「いや、今はまだそこまで深刻ではないよ。その為に僕がここに来ているんだから」

「どういう事だ？君は彼女達の提督ではないのだろうか？」

「これも機密の一部ではあるんだけど、全ての艦娘は発見されたその日から実戦投入される訳じゃないんだ。海上で発見された艦娘はまず僕の所属する横須賀鎮守府で訓練を受ける。つまり全ての艦娘は必ず僕の指揮下に配属されるのさ」

「つまり擬似的にはあるが君は全ての提督の代わりができるということか？」

「絆の力を発揮するには本来の提督には遠く及ばないけどね。それに僕にも横須賀鎮守府での任務がある……こうして出向いて提督の代わりをするにしても限界なのが現実だ」

エミヤは内心で驚くと同時に関心していた。

「どうやら目の前の男はエミヤが思う以上に重要な人物であるらしいという事につい

てだ。

全ての艦娘の提督にあたる人物なのだ、少なくとも海軍という組織において簡単に接触できるような立場にはいないのだろう。

「どうやら私は大変な人物と密談を交わしていたようだ。まさか提督の元締めにあたる人物だとはな」

「ははっ、そんな大層なものじゃないよ。たまたま横須賀鎮守府が艦隊司令部本部というだけさ。それにしてもこの鎮守府の現状なんて聞いてどうするつもりなんだい？」

「私は戦うためにここにいるのだ、この鎮守府を中心とした海域の守りが薄いならば私の活動拠点になり得るだろう？無論、君達の活動を妨害するような事はしないから心配はいらんさ」

エミヤは戦争の規模やその被害、全国にあるという鎮守府の位置情報などはこれから整理していくとして、目下の活動拠点としてこの近海を定めたようだ。

「それは構わないけど海に立ってない君がどう戦うつもりなのかは大いに気になるよ……まあそれは置いておくとして、二点目の質問について聞こうか？」

「ふむ……二点目の質問、それは——」

エミヤの鋭い眼光が日渡提督を捉える。

「君の狙いはなんだ、という質問だ」

エミヤが剣を突き付けた時とは比にならない殺気。

軍人である日渡提督でなければ過呼吸でも起こしかねない張り詰めた空気。

そのエミヤの態度はこの先のやりとりに少しでも誤魔化しや虚言があれば命の保証さえ危ういと感じさせた。

「……狙いとはどういう意味かな?」

「狙いという言葉が腑に落ちないなら要求と言い換えるべきかね? どうあれ、君は私に對して何か重要な事を企てているだろう?」

エミヤが抱いた微かな違和感。

それは日渡提督と話していく中で徐々に膨れ上がり今まさに爆発の一手手前という所までできていた。

「企てとは参ったな……ちなみに君がそう感じた理由を聞いても良いかい?」

「この密談が成立していることがそもそもおかしいのだ。君は軍人という割には甘さが目立つがそれにも増して口が回るし頭もキレる。感情に流されて大義を見失う愚か者にも見えん」

「これは随分な高評価を頂いたものだ。でもそれとこの密談の成立に何の関係が?」

「君にメリットがないと言っている。この密談は平等に見えるがそれは違う、君が払うリスクに對してリターンがなさすぎるのだ」

エミヤの疑問。

それは軍の中でも艦娘という括りで見た時の日渡提督は最高司令官に値する人物だ
というのに対等な会話が成立している事だった。

エミヤという不確定要素を持つ人物の素性を知るためとはいえ、初対面のエミヤに軍
の機密情報を漏洩するのはリスクが高すぎる。

だというのに日渡提督はエミヤの提示した条件を二つ返事で了承した——そこに裏
がないとは思えなかったのだ。

「リターンならあったろう？ 僕はエミヤ君についての情報を得ることができたんだ。こ
れは軍にとっても有益な情報だとえないかい？」

「愚問だな。ならば私についての情報を誰にも口外しないという条件を飲む意味がな
い。君にとって有益であったとしても情報伝達ができない以上は軍にとっては無益だ」

「僕が軍に情報を渡す可能性もあるだろう？」

「それはありえないと断言する。君は最良の結果を得るために最善の選択ができる人間
だ。私という異能の力を持つ戦力をわざわざ敵に回すようなデメリットを犯しはしな
いよ」

エミヤの中で日渡輝という男の評価は高い。

だからこそエミヤは疑問を抱いたし、その真意が図れずにいた。

「デメリットを飲み込んででもエミヤの情報欲したその真意だけがわからないのだ。加えて言うならば、君が軍の人間として私に仕事を依頼する事はないだろう。そうであるならば最初から共同戦線を申し出れば良い。君程の立場にある人物ならば私の存在を隠しながら立ち回れることも可能だろうからな。つまり、君が私に望むのは軍人としてではなく個人としてのものだ。違うか？」

これに関しては確信があった。

日渡提督が何を企んでいたとしても、それは軍としての依頼ではない。

いくらエミヤの存在を隠さなければならぬとしても日渡提督ならば秘密裏にエミヤの活動を支援するくらいの事は造作もないだろうという予想があるからだ。

さらに言うならば、軍としてエミヤを利用したいならわざわざ2人だけで密談する必要がない。

話の確約を取るため、さらには身の安全を保障するためにも艦娘や他の兵士を同席させるはずなのだ。

それを嫌ってあえて2人になったのなら彼にとつても他の介入を良しとしない理由があったという事になる。

「……まいった、降参だよ。本当なら電君と響君に泣き落としでもしてもらおう予定だったんだけどね」

日渡提督はあつさりとエミヤの主張を認めた。

とは言ってもエミヤが言うような重要な企てを思わせる様子はなく、まるで悪戯がバレてしまった子供のようにバツの悪そうな苦笑いを浮かべるだけなのだが。

「ふん、私がそんなものに惑わされるように見えるか？私を脅迫や口車でどうにかできるとは思わない事だ。まあ良い、それよりも君の要求を聞こう。断つておくが私怨からくる殺人の依頼なら他をあたれ」

「大丈夫、ありがたいことに殺したくなるほど憎い相手はいないよ。そうだな……：なら僕をお願いを話す前に確認しておこう。エミヤ君はこの子をどう思う？」

あまりに血生臭いエミヤの言葉に少しだけ引いた様子の日渡提督は、苦笑いのまま自身の肩に乗せた女の子の人形を指差した。

「……君は私をバカにしているのかね？」

「とんでもない！とても真剣な質問だとも」

「はあ……他人の趣味にあれこれ言うほど野暮ではないが、仮にも君は軍の中でもトップクラスの人間なのだろう？そんな人物が人前で人形遊びとは関心しないな」

先程までの張り詰めた空気はどこへやら。

空気を和ませる為だとしても幼稚にすぎる日渡提督の態度にエミヤは落胆の色を浮かべる。

しかし、当の日渡提督は張り巡らされた罫に獲物がなかったかのような今日一番の笑顔を浮かべた。

「ふふ……やっぱりエミヤ君には見えてるんだね？」

「何？」

まるで地縛霊のような不気味な台詞を吐く日渡提督。

そして次の瞬間、エミヤにとつてもつとも理解できない現象が起こる。

『はじめまして！私は横須賀鎮守府で事務補佐を担当する妖精さんであります！以後お見知り置きを！』

日渡提督の肩からピヨンと飛び降り、エミヤの前に置かれた机の上でピシッと敬礼する妖精さん。

側から見れば可愛らしい姿なのだが、あまりの衝撃で深海棲艦を相手に一步も引かなかったエミヤがビクリと身体を震わせた。

「な、なんなのだこの生物は!? いや、そもそも生物なのか!？」

「ぷっ、あつははははは！わかるわかる！僕も最初に妖精さんと出会った時はエミヤ君と同じ反応をしたよ。さて、確認も取れたし本題に入らせて貰おうか」

日渡提督は子供のように涙を滲ませて笑ってからエミヤに向けてその企みを語る。

「この子達は妖精さんといってね、ある意味では艦娘よりも重要な立場にあるとても大

切な存在だよ」

「よ、妖精だと？この小さな人形のような生物が？」

もちろん、英霊であるエミヤが妖精の存在を否定することはない。

多くの英雄譚の中も妖精とは数多く登場し、様々な加護や救済を授けるものだからだ。

しかし、エミヤが思い描く妖精と目の前の小さな女の子ではあまりにも掛け離れすぎていてその実感は全く湧いてこない。

「そうだよ？まさか僕が趣味で女の子の人形を肩に乗せて出歩くような人間だと本当に思ったのかな？だとしたら心外だなあ」

「いや待て……だからと言って肩に妖精を乗せて出歩く男だと見抜ける奴がどれだけいるというのだ……」

「ははは、確かにその通りだ。だってこの子達は普通の人間には見えないからね」
「……見えない？それはどういう事だ？君には見えているのだろうか？」

霊的な意味で言っているのではないのだろう。

どこか含みのある日渡提督の物言いはエミヤに嫌な予感を覚えさせた。

「艦娘は軍艦の化身だと言ったろう？その意味で言う妖精さんはその軍艦の乗組員なんだよ。彼女達の装備に乗り込み共に戦う仲間であり兵士という訳だ。さらには鎮守

府において武器の整備や資源の管理などの補佐も妖精さんがやってくれる。そして何より重要なのは妖精さんが見える人間だけが艦娘の提督になる資格を持つという点だ」「提督になる資格？それはつまり……どれだけ努力して出世を志したとしても妖精が見えない者は提督になれないと？」

「その通り。妖精さんが見えなければどれだけ仲良くなろうとも艦娘が絆の力を発揮する事はない。妖精さんが見える条件は未だ研究中だけど、こればかりは生まれ持ったものとしか言えないんだよ。そしてこの条件の厳しさが提督という人材の不足の原因さ」

心が綺麗だとか、祖先が軍人だとか、そういった信仰があるだとか――

その手の可能性を全て置き去りにしてごく一部の人間にのみ姿を見せる妖精さん。

そうした奇跡を乗り越えてやっと着任できる提督という役職。

だが妖精さんを見れるのが必ずしも軍人だとは限らない。

中には一般市民でありながら妖精さんを視認できる者もいる。

そしてそんな一般市民が妖精さんを見れるからといって命の危険が伴う提督業務に就くかといえば、その殆どがNOである。

それでも給与や名声が目くらみ、勇んで提督になる者もいるが大抵は軍の激務に耐えきれなかったり艦娘との絆が築けなかったり、最悪の場合は殉職という形で退任して

いく。

エミヤは全国にどれだけの提督がいるかも知らないが、その人数は軍という組織で見てもほんの一握りなのだ。

「まあ、妖精さんとは会話が出来ない……というか、妖精さんは言葉が話せないから意思の伝達には苦労するんだけどね。それでも僕達にとつて大切な味方だ」

「話せないだと？こんなにはつきりと喋っているではないか」

「……え？」

「あ、いや……今のは違う！何でもない！」

会話の流れで答えたエミヤだが、口にした瞬間にしくじったという感情に支配された。

『ほー、やはり聞こえてるでありますか』

「やめろ、聞きたくない……」

「エミヤ君……君の素質は理解した。僕の要求はたったひとつだ」

「聞きたくないと言っている……」

エミヤは元々が察しの悪い人間ではない。

頭の回転も早く、洞察力も高い、それでいて経験則も申し分なしだ。

そんな彼の本能がこの密談のゴールを嫌でも予測してしまう。

「たのむ、この鎮守府の提督になってくれ！」

『お願いするであります！』

エミヤの予想を寸分も裏切ることなく、全く予想していなかったゴールをもって密談は終了。

運命の齒車は剣の丘を越えて廻りはじめた。

英霊着任

『マイクチェック、マイクチェック、ワン・ツー、ワン・ツー……日没の時刻となりました、演習中の艦娘は速やかに帰港して下さい。夜間哨戒の艦娘は工廠で艤装整備を確認してから船渠ドックまでお願いします』

とつぷりと日が暮れた校舎にどこか懐かしいチャイムの音と聡明さを感じさせる女性のアナウンスが流れる。

鎮守府として使用されてはいるが、基本的な設備は学校だった頃から変わらずに使われているため、夕暮れ時ともなると少しだけ不気味な雰囲気醸し出す。

もつとも、トイレに花子さんはいないし、1人歩きする人体模型も存在しない。

二宮金次郎の銅像にいたっては、海軍のお偉さんと思われる人物の銅像にその役目を奪われて久しい。

ちなみに、これは後に判明する事だが、この鎮守府に唯一住み着く妖怪で、「妖怪紅茶くれ」と呼ばれる者がいるらしいが、その話はまた後日。

そんな校舎の中、淡い蛍光灯の光に照らされる廊下を2人の男が歩いてた。

「悪い話じゃないと思うんだけどなあ。それに妖精さんからそこまで懐かれる人だって

珍しいんだよ?」

「悪い話ではないかもしれないが即決できる話でもないだろう……というかこの妖精は何で私の肩から降りないのだ……」

「さあ? 君に言葉が通じるのがよっぽど嬉しかったんじゃないのかい? なにせ妖精さんの言葉が聞き取れる人物なんて過去に一人もいなかったからね」

「勘弁してくれ……」

純白の軍服に身を包み、爽やかな笑みを浮かべる日渡輝。

それとは対照的に真紅の外套に身を包み、苦虫を噛み潰したような厳しい表情のエミヤ。

そして――

『妖精さんであります! 日渡提督の言う通りエミヤさん程の素質を持った方ならきつと素晴らしい提督になるであります! 何を迷うことがあるでありますか?』

「……………」

そんなエミヤの心中など完全度外視ではしやく妖精さんであった。

先程までは日渡提督の肩に乗っていたのだが、エミヤに言葉が届くと知ってからはエミヤの肩から動こうとはしない。

『むむつ? 無視でありますか? シカトでありますか? 私の声、聞こえてるでありますよ

ね?』

「……………」

『うう……なぜ返事をしてくれないでありますか!? 私があかしたであります!!』

「……………」

『聞こえつ……るで……ありますよね? 無視は……ウツク……イヤであります……ヒグツ……泣くで……ありますよ……?』

「くっ!! わかった! 聞こえているから泣くんじゃない! 無視するような真似をして悪かった。オレも理解が追いついていないというか……少し戸惑っていたんだ。オレが悪かったから泣かないでくれ」

どうもエミヤはこの妖精さんという存在に慣れないでいた。

迷惑な事に自分に提督適性があるという事を証明してくれる存在な上に、普通ならば聞き取れない筈の声までがはつきり聞こえるのだ。

おまけにそれが余程嬉しかったのだろう、妖精さんはすっかりエミヤに懐いてしまった。

霊長の守護者になってからというもの、聖杯戦争を除外すれば小さな女の子と接する事など皆無に等しいエミヤなのだ。

その扱いがわからないのも無理はない。

もつとも、小さな女の子にしても小さすぎるといいうレギュラーはあるのだが。

『グスツ……私のこと……嫌いじゃないでありますか……う？』

「も、勿論だ。オレは妖精を……いや、妖精さんを見るのが初めてだから何と話しかければ良いものかわからなかっただけで、君は元気で素敵な妖精さんだと思うぞ」

『素敵でありますか!? 日渡提督！私、エミヤさんに褒められたであります！嬉しいであります！』

涙を滲ませた目を大きく見開いた妖精さんは、向日葵のような笑顔を浮かべて日渡提督にパタパタと腕をふった。

「くくっ……何と言ってるのかは僕には聞こえないけど、とても喜んでるのはわかるよ。エミヤ君に褒めてもらえたのが嬉しかったみたいだね」

「貴様……何がそんなにおかしいのだ？」

「ごめんごめん、あまりにエミヤ君が大変そうでついね。どんなやりとりかはわからなけれど、一人称が変わるほど狼狽えるとは……もしかしてそっちが素なのかな？」

魂そのものとも言えるエミヤであったが、この時ばかりは口から魂が抜け出ていくほどに深い溜息をついた。

ちなみに、エミヤに対する提督職への着任依頼についてはエミヤの意思で保留となっ

た。

正確に言うならば、即座に辞退しようとしたエミヤを半泣きの妖精さんが必死で説得して保留に落ち着いた形になる。

今は提督業につくかもしれない事を前提に鎮守府の中を案内している最中。

日渡提督が横須賀鎮守府へと帰るまでの数日の間、エミヤもこの鎮守府で過ごす事となっており、提督になるかどうかはその日までに決める約束だ。

「真剣な話さ、エミヤ君が戦う事を活動の主体にしているなら鎮守府は絶好の根城だと思おうよ？衣食住について困ることはないし、軍からの情報も円滑に手に入る。妖精さんの言う通り、迷う事はないと思うんだけどね」

「それはメリットだけを挙げた話だ。それに霊的存在である私には基本的に食事も睡眠も必要ない。むしろデメリットも相当にあるだろう。例えば私は本来なら1人で戦う傭兵だ、誰かと組むだとか部下を従えて戦うのは専門外。それどころか言葉を変えれば私など単なる大量殺人者だ……そんな男が艦娘達との間に絆など築けると思うか？」

艦娘達はどこか別の設備にでもいるのだろう。

現在、長い渡り廊下には2人の靴音だけが響いていた。

「艦娘との絆は僕ら人間の交友関係と同じさ。一人一人に個性があつて付き合い方も違う。仮にエミヤ君が提督になった場合、彼女達は君の信頼しえる部分を探し、認め、力

になろうとするだろう。それがエミヤ君の性格なのか、その魔術なのか、それ以外の部分なのかは十人十色な事なので僕にはわからない……けどね、同じ目的に向かって走る仲間同士なら必ずわかりあえると僕は思う。だからエミヤ君の心配は杞憂に終わると思うよ？ 大切なのは過去より未来だからね」

足を止め、エミヤに向かって振り返った日渡提督は不安など感じさせない優しい笑顔でそう言った。

「……だとしてもだ、私はこの世界の人間ではない。どころか生きてすらない。いつ消えるかもわからない不安定な存在だ。軍の提督になるための身分すら持ち合わせていないのだから？」

エミヤの抱く懸念は他にも多々ある。

しかし本心を言えば助けてやりたいと思っていない訳ではない。

仮にこの鎮守府にこのまま誰も着任しなかったとしたら、ここの艦娘達は日に日に弱体化していくだろう。

それでも戦うために存在している彼女達は戦場に赴く、そして遅かれ早かれ待ち受けているのは確実な戦死だ。

ー救える命があるならば救いたい。

たとえそれが人ならざる者であっても、その魂がこの国を救おうとする美しいもので

あるならば助けになりたい。

しかし、それを叶えるためには提督になる事が絶対的な必要条件となると話は変わってくる。

絆が築けるかという問題は勿論だが、今回の召喚にあたってエミヤには何故かマスタ―がない。

加えて世界アラヤの干渉もない。

言うならば宙ぶらりんな状態だ。

そんな状態の自分が提督になったとして、果たしていつまで現界を保っていられるか――

抑止力の気まぐれで次の瞬間には座に戻されているかもしれないのだ。

先代提督を失つても絶望せずにここまで立て直してきた少女達。

それがやつと新たな提督を迎え、救われたかと思つた矢先に再び提督を失う絶望の底へと叩き落されるかもしれない。

そんな思いをさせるくらいなら自分が提督になどなるべきではない、と――

エミヤは思つてしまつていた。

しかしそんなエミヤの想いとは裏腹に、日渡提督は前向きに話を進める。

「君がいつまでここにいられるかなんて僕にもわからないさ。だからこそ、ここにいる

間はできるだけの事を協力するし君にも協力してほしい。君の身分についてもエミヤ君さえ提督になってくれるというなら僕がなんとかしよう」

「なんとかするとは言つてもだな……幽霊が軍の人間として働ける条件をどうやって整えるというのだ」

「あまり大きな声では言えないけどね……僕はこれでも軍の中では責任ある立場だ。そして僕に協力してくれる優秀な仲間も多い。人間一人分の情報を捏造するなんて簡単な事だよ」

「随分ととんでもない事を簡単に言うのだな……それは犯罪者の所業だ。他人に聞かれなくてもすれば君の立場がどうなるか、わかっているのかね?というか、あの密談はこれが狙いだったのか」

「犯罪行為なんて百も承知さ。だからこそ、仲間である艦娘とはいえ聞かれたらマズイ話だからね……自然、密談に持ち込む必要がある。妖精さんは僕の協力者だろうし最悪の場合でも妖精さんの声はエミヤ君以外には届かないから大丈夫だよ」

日渡提督が語ったのは列記とした犯罪行為そのものだ。

エミヤについて存在を証明するつもりならば、その出世や来歴、公的書類のあらゆる全てを現在の人間として偽装し作り上げると言っているのだから。

本来なら世界のどこにもいない筈の人間を實在させる行為。

それは軍の責任者が犯していいレベルの犯罪ではない。

万が一にも発覚してしまえばその輝かしい功績は一瞬で地に落ちるだろう。

どころか今の切羽詰まった日本の状況では最悪の場合、死罪まであるかもしれない。

「わからないな。君がそうまでして私を提督にしたい理由がどこにある？ そんなリスクを背負うのなら、これまで通り誤魔化しながらでも正規の提督が着任するのを待てば良いだろう」

日渡提督に対しては、最善手を選び最悪を回避できる能力があると評価しているエミヤだからこそ理解に苦しむ。

それも、こんな小学生でもわかりそうなりスクを犯す理由が全く見えてこない。

しかしその答えはエミヤが頭を抱えるほど難しいものではなく、とてもシンプルなものだった。

「わからないかい？ 僕はもうエミヤ君に話してるはずだけど」

「何を話したというのだ？ 犯行動機か？」

「そう、犯行動機さ。僕はね、どんな手を使ってでもこの戦争を終わらせると誓った。それは散っていった仲間達の為でもあるし今を生きる人々の為でもある。その為なら僕はどんな事だってするだろう」

「たしかに言っていたな。しかしそれと君が犯そうとしている犯行為に何の関係があ

る？」

「あるとも。次の提督適性を持つ人物を待つていたらこの鎮守府にいる艦娘は間に合わない。全滅とまではいかなくても必ず誰かが犠牲になるだろう……そんな事になるくらいなら僕はどれだけでも犯罪者の汚名を被るさ」

日渡提督は言った、艦娘のためだと。

メリットやデメリットの計算ばかりに目を向けて、そんなシンプルな答えを想像もできなかつた自分が恥ずかしくなるほど堂々と胸を張って宣言した。

「僕が救いたい人々の中にはね、艦娘だつて含まれているんだ。この国の為にどれだけ傷付いても戦い続けてきた彼女達が、平和になつたこの国で幸せになれないなんて嘘だろう？ 彼女達には笑顔で未来を生きる権利があるはずだ」

「だから……例えそれが犯罪行為とわかつていても私に提督を勤めて欲しいと？」

「ああ、その通りだ。改めてお願いするよ……どうか、彼女達を助けて欲しい。他の誰でもない、君にしか頼めない事なんだ……！」

日渡提督は深々と頭を下げた。

その姿はとも軍のトップとは思えないもので、仮にエミヤがこの場で土下座しろと要求したならば躊躇なく土下座するだろうと思わせるほどに真摯なものだった。

『日渡提督はこういう人であります……どこまでも真つ直ぐで優しいお方です。それだ

け艦娘を大切に思ってくれてるでありますよ』

常に日渡提督と一緒にいる妖精さんが言うのだから間違いないのだろう。

きつとこの男は本気で全ての人々を救うつもりでいるのだ。

そしてそれほどまでに誰かを助けようと奔走する姿は、遠い昔——並んで月を見上げたあの男を思い出させる。

もうかなり磨耗して擦り切れた記憶の中で笑う、疲れた顔の男。

手段や思想は日渡提督とは全く違う男だったが、あの男だつて目の前のこの男のような気持ちで人々を救っていたのだろう。

(そしてオレはそんな男に——)

静まり返る渡り廊下の静寂を破ったのはエミヤだった。

「顔を上げてくれ。君のような立場のある人間が私みたいな不審者に安く頭を下げるべきではない」

エミヤの声は穏やかだった。

それに反して顔を上げた日渡提督の表情はどこか思い詰めているようにも見える。

きつと優しい笑顔の裏側では艦娘達を救うための手立てをあれこれと考えて、日夜頭を悩ませているのだろう。

ここでエミヤに断られれば、せつかく見えた希望がまた降り出しに戻るのだ。その心

中は察するに余りある。

「断つておくが犯罪行為は関心しない……が、君の覚悟に免じてそこには目を瞑ろう。少なくともあの密輸犯のように下衆な動機だとは思えないからな」

「な、ならエミヤ君は提督にー」

「まあ待てと言っている。それに関してはやはり即答はできない話だ。しかし君の気持ちには理解した、私も前向きに検討するつもりでいる。ここで保留にするのは、あくまでも提督業が現実的な意味で私にこなせるかがわからないからという意味だ」

「それはつまり……?」

「この数日で君の仕事ぶりを見させてもらう。その上で私でも務まると判断したならば、提督着任の話……受けようではないか。さすがに着任しただけで中身が凡骨だったでは洒落にならんからね」

それだけ言うとエミヤはニヒルな笑みで右手を差し出す。

「は、ははっ……凄いで……夢みたいだ!この鎮守府にまた提督が着任するなんて!はははっ!ありがとうございます!ありがとうございますエミヤ君!」

子供のようにはしゃぎながら右手の手袋を外してエミヤの手をとる日渡提督。

その様子を見るだけで彼がどれだけの苦悩を抱えて戦ってきたかがうかがえた。

『ありがとうございますエミヤさん!いえ、これからはエミヤ提督でありますね!今後

ともよろしくお願いするであります!』

「だからまだ保留だと言っているだろう……」

「問題ないさ! エミヤ君のような有能な人物なら僕にでもできる仕事をこなせない筈がない!」

交わした握手をブンブンと振りながら喜ぶ日渡提督、そして肩の上でキャツキャとはしゃぐ妖精さん。

そんな2人の態度が照れ臭かったのだろう、エミヤは自然と視線を泳がせて窓の外を眺めた。

そこにはちようど満開を迎えた大きい桜の木が一本。

夜風に沙らされ、その花卉を風に舞わせていた。

(なるほど、この世界は春を迎える季節だったかー)

誰かが閉め忘れたのだろう、渡り廊下の窓から風に乗せられた花卉が1枚、エミヤの足元へと舞い込んだ。

桜の花に対して深い思い入れなど無いはずだが、舞い散る桜はどこか悲しげで不思議とエミヤの目を引いた。

「わかつたからいい加減に手を離れたまえ。……とここであの桜は?」

「ん? ああ、あの桜はこの鎮守府の裏庭に植えられた桜だよ。ちようど良いや、君に見せ

たい物もあるしちよつと行つてみようか」

桜の木はどうやら校舎の裏手にあるらしい。

予定ではこのまま金剛の待つ執務室へと向かうはずだったが、日渡提督の思いつきでそれは変更となった。

本来ならば効率主義のエミヤにとって、人を待たせた状況で花見に興じるなどあるはずのない選択なのだが、どうしてかエミヤ自身もその桜の木に惹かれていた。

例えるならば、まるでその桜の木がエミヤを呼んでいるかのような――

己の中に感じる不思議な感覚に首を傾げながら、エミヤは案内されるままに桜の木に向かう。

「そら、立派なものだろう？夜桜というのも風情があつて良いものだね」

『うわあ……本当に綺麗であります……』

日渡提督に案内されて裏庭に出たエミヤを迎えたのは、廊下から見たよりも遥かに幻想的な満開の桜。

校舎から漏れる光にうつすらと照らされたそれは、日本情緒という言葉に相応しい美しさを放っていた。

エミヤの肩に乗る妖精さんですら息を飲んでゐる。

しかし、エミヤは桜の美しさに酔いしれる2人を他所に、侘び寂びとは無縁の感覚に支配されていた。

(この場に漂うこの異常な魔力はどういう事だ!?この世界の魔力も通常では考えられない程に濃い……この魔力はその比じゃないぞ!それに――)

桜の木の周辺から感じる膨大な魔力、それはエミヤの感覚では固有結界に等しい力だ。

さらに異常なのはその魔力の流れ――

(これは……私に流れ込んできている?)

最初の戦闘から不思議に思っていた。

マスター不在であるはずのエミヤが『熾天覆う七つの円環』を始め、船の補強などの膨大な魔力を消費したにもかかわらず、自身に残る魔力量は全く減っていなかった。

正確に言えば、魔力は確実に消費した。

しかし、気付いた時には全快の状態に回復していたのだ。

さすがに現界が困難になる程の魔力を消費した覚えはないが、それでも疲弊して休息が必要になるくらいは戦闘はしたはずなのだ。

最初はマスターがいらない事から、世界からの魔力補助が働いているのだと思っていたが、どれだけ探ろうとも世界の意思は感じない。

故に、その魔力の根源がどこにあるのかが疑問だった。

しかし今、自身の魔力回路を確認してみればつきりと答えが判明した。

この魔力は、明確な意思を持ってエミヤへと流れ込んできている。

その量をわかりやすく例えれば、かの大英雄を苦もなく従えたイリヤスフィール・フォン・アインツベルンがマスターになったかそれ以上の魔力量と言えば理解しやすいだろう。

エミヤは更に深く探る——この魔力の源泉、流れ込む魔力の源を。

「これは……慰霊碑か？」

それは桜の木の傍らにひっそりと佇んでいた。

目を凝らせば、一枚の石版に数名分の名前のような物が彫り込んである。

魔力はその石版から一直線にエミヤへと向かっていた。

「……これがエミヤ君に見せたかった物さ」

黙って石版を見つめるエミヤに気付いたのか、日渡提督がそつと語りかける。

「ここにはね、この鎮守府で戦った仲間達が眠っているんだ。みんなとても優しく勇敢だった……僕はもう、この慰霊碑に誰の名前も刻みたくない。いや、刻ませない。ここには先に逝った先輩達にエミヤ君を紹介するために立ち寄ったのさ」

『私も初めて見たであります……』

舞い散る桜がまるで慰霊碑の涙のように見えた。

エミヤは何かに引き寄せられるように慰霊碑へと歩を進める。

【提督 倉敷朝日くらしきあさひ】

【秘書艦 金剛型戦艦三番艦 榛名】

【金剛型戦艦二番艦 比叡】

【鳳翔型軽空母 鳳翔】

【飛鷹型軽空母 飛鷹】

【高雄型重巡洋艦 高雄】

【高雄型重巡洋艦四番艦 鳥海】

【暁型駆逐艦 暁】

【暁型駆逐艦三番艦 雷】

エミヤの腰くらいの高さに位置する慰霊碑。

それに視線を合わせるように、膝を折ってそこに刻まれた名前を読んでいく。

「現在、この鎮守府には10名の艦娘が在籍している。ここに刻まれた娘たちが健在だった頃はもう少し賑やかだったんだけどね……」

「在籍10名に対して殉職者9名か……確かに壮絶な戦いなのだろうな」

『この鎮守府が担当する海域は比較的に戦闘も少ない海であります。それにここが設立

された経緯は特殊だと聞いてるであります、それゆえに他の鎮守府に比べて在籍する艦娘も少数だど。なのに半数もの方々が……」

19名中、9名が殉職——

激戦区と比較してこの海域の治安がどれ程のものかは定かではないが、少なくとも楽観視できるような戦況ではないのだろう。

数字として突き付けられれば、先程の日渡提督の緊迫した様子にも領ける。

確かにこのままでは、最悪の場合には全滅もあり得たかもしれない。

この鎮守府が歩んできた戦いの歴史、その一片に触れたエミヤも同じ戦場に生きる者として感傷に浸るように慰霊碑を見つめていた。

よく見れば献花台として使われているのだろう、慰霊碑の脇には手作り感のある木製の棚があり、沢山の花と様々な思い出の品と思われる物が並べられている。

それは弓であったり紙人形であったり、帽子やカチューシャ、指輪など——おそらくはここに眠る者の生前に由来するものだろう。

「なるほど、この者達はよほど愛されていたのだな……」

雑草の一本もなく、花も取り替えられたばかり、慰霊碑もピカピカに磨かれている。

誰が見たとしても大切にされていると一目でわかるその様子に、エミヤは自然と笑みを浮かべた。

「この娘達のほとんどは今もこの鎮守府で働く艦娘の姉妹艦だからね。血を分けた家族のようなものさ。それでなくても少数精鋭の鎮守府だ、仲間意識の強さは随一だと思うよ」

「そのようだな。これでは私のような新参者が提督として務まるのか危ぶまれるよ」
皮肉まじりの言葉とは裏腹に、エミヤの表情は穏やかだ。

日渡提督は『彼女達は新参だからといって余所者扱いなんてしない』と主張しているがエミヤの耳にはほとんど届いていない。

彼の心は確かな納得と戦士らしからぬ甘さに満たされていたのだから。

(なるほどな……私をこの世界へと召喚呼んだのは君達だったのか)

今もエミヤに流れ込む魔力。

それに説明をつけるとすれば、その答えは一つしか思い浮かばない。

艦娘にも英霊の座のような還る場所があり、それでも尚、残してきた仲間達を気遣う魂がエミヤを呼んだとしか思えないのだ。

日に日に弱体化していき、死を待つのみ仲間達を救ってほしいとー

故に、戦争というものに縁があり、他のどの英霊よりも近代的で軍事に長けた自分が呼ばれた。

概念が英霊を召喚せしめるなどという前例は聞いた事がない。

だが、英霊が英霊を召喚したという前例は存在する。

艦娘を英霊に近い存在だと仮定するならば、そんな奇跡を起こしうる可能性が存在しても不思議ではないだろう。

そんな曖昧な答えを自分の中に見出した。

それでも理屈としては些か苦しいし、正式な召喚の手順を踏んだ訳でもないのだから原因は他にあるのかもかもしれない――

しかしエミヤはそんな理由でも良いと思った。

聖杯戦争では良きマスターと共に戦ったとはいえ、人間同士の殺し合いだった。

世界と契約し、抑止力の装置として組み込まれた後は作業的に悪人を殺し続けた。

そんな彼が、そのような優しい理由で人類を守る事があるなどと誰が予想できたであろうか。

(ただ一人の人間も殺さずに人類を救う戦いか……そんなものもあつたのだな――)

感慨深く慰霊碑を見つめるエミヤは、その手を伸ばす。

なぜ触れようと思ったかはわからない。

まるで頑張った子供の頭を撫でてやるような、そんな気持ちだったと思う。

今は亡き、この海に散っていった勇者達に想いを馳せて慰霊碑に触れる。

そしてその手が慰霊碑に触れた瞬間――

『あの娘達をお願いします……美味しいご飯を食べて笑い合う未来を、どうかあの娘達にー』

『不甲斐ないばかりですが金剛お姉さま達をお願いしますね！私、気合い！入れて！！応援します!!! あっ、でも金剛お姉さまに変な事したら許しませんよー』

(これはー)

慰霊碑から流れ込む魔力に乗って、様々な声が聞こえてくる。

それはエミヤの霊核、心に直接響いた。

『みんなの事、よろしくね！特に隼鷹はあんな性格だから弱い部分を隠しがちだけど……お酒に逃げないように助けてあげてー』

『貴方が新しい提督さん……素敵な方で良かったわ。仲間達の事、よろしくお願い致します。妹達がまだこちらに来ないよう、どうかー』

『司令官さん、皆さんをお願いします。特に姉さん達は頼りになるんですがどこか危なつかしい部分があるので……力を貸してあげて下さいー』

その声はとどまる事なく、エミヤの中へと次々に流れ込む。

エミヤはそれを噛みしめるように、黙って聴き続けた。

『一人前のレディである暁がリタイアしちゃったのは手痛いと思うけど、頑張っつてね新司令官！妹達がこっちに来るような事になったら怒るんだからー』

『貴方が倉敷司令官に変わって司令官になる人なのね、お礼の言えない晝に代わってお礼を言うわ。ありがとう！私がない分、響と電にいっぱい頼ってあげてねー』

一人一人が想いを託すように語りかける。

残してきてしまった仲間、姉妹の身を氣遣うその言葉はエミヤの心にストーンと落ちていく。

『新提督……榛名が倉敷提督をお守りできなかつたばかりに、このような戦いに巻き込んでしまつてすいません。榛名達が届かなかつた平和な未来……どうか皆さんで手にして下さい、榛名達は見守っていますー』

最後に語りかけたのは、秘書艦として名前を刻まれている金剛型三番艦の榛名。

これで慰霊碑に刻まれた人数分の声が聞こえた。

殉職者だというのに悲観的な者は一人もおらず、全員がエミヤに対し希望を託していった。

その死後も、残る仲間に想いを託して前を向き続ける様は、まさに英霊と呼ぶに相応しいだろう。

そんな想いを受け取つたエミヤは、自然と身体に力が入る。

（ふつ、随分と勝手を言ってくれるマスターがいたものだな。いや、私のマスターなど毎回そうだったか……だがー）

エミヤはここに決意する。

己が何者としてここににいるのか、何を成すべきで何を託されたのか、その答えを得たのだ。

ならば進むべき道も定まるといふもの。

今一度、慰霊碑に刻まれた名前を読み返しながら覚悟を宿した瞳を向ける。

(そのオーダー、確かに承った。君達の残した戦いは私が完遂しよう)

だから安心して眠れとでも言うように、エミヤは優しく微笑んだ。

そんなエミヤへと語りかける者がもう一人――

『悪いな、俺の不始末を押し付けちまってよ』

それは男の声だった。

そして、慰霊碑に刻まれた男性はただ一人。

(倉敷朝日……この艦娘達の提督か)

『おうよ、正確には前提督だけだな。お前さんがどこの誰かは知らねえが、俺達が呼びつけて巻き込んだしまったのはわかる。悪かったな……』

どこかぶつきらばうな口ぶりだが、その声色からは申し訳なさが痛いほど伝わってくる。

『だがこれもわかるぜ。お前さんはこの戦いに必要な奴で、その為の力を持つてるって

な。身勝手は承知の上だ、それでもお前さんにしか頼めねえ……あいつ等を、よろしく頼む』

(……とても人にものを頼む人間の態度とは思えんがね。しかし、そんな所から私のような者を呼んでしまう程、彼女達が心配だったのだろうか？ならばその期待に応えるとしてよう)

『ははっ……お前さん、日渡の野郎とは違った意味でめんどくせえ奴だな。ま、うちの艦娘とならうまくやってけるだろうよ……暁の水平線、お前さんに託したぜー』

それを最後に声は聞こえなくなった。

辺りには桜の木が風に揺れる音と、遠くから微かに聞こえる波の音だけが響いている。

「エミヤ君？エミヤ君?!どうしたんだい?どこか体調でも悪くなったのか?!」

『返事をするではありません!エミヤ提督!生きてるではありませんか!』

随分と集中していたのだろう、全く気付いていなかったがエミヤの横には心配そうな顔で寄り添う日渡提督と、エミヤの肩をペチペチと叩く妖精さんがいた。

どうやらエミヤ自身が思ったよりも、深く長く慰霊碑に意識を向けていたらしい。

「なに、心配には及ばないさ。少しばかりマスターと話していてね、どうやら私は口煩くて心配性なマスターにつくづく縁があるらしい」

立ち上がったエミヤは皮肉気にやれやれというジェスチャーを返す。

もちろん、日渡提督と妖精さんにはエミヤが何を言っているかなどわかるはずもない。

「マスター？えつと……本当にどうしちゃったのエミヤ君？」

『昼間の戦闘で頭でも打ったでありますか？』

「こちらの話だ、気にするな。ところで日渡提督」

この時、エミヤは初めて日渡提督を名前で呼んだ。

「ん？僕のことを名前で呼んでくれるのかい？それも提督だなんて。どういう風の吹き回しかな？」

「君はこれから私の上司になる人物なのだ、それくらいはするさ。こんな立場になった後で人間社会で働くとは思わなかったがね……」

「上司！いや、嬉しいんだけどそれはまだ保留だつてー」

「好き勝手言ってくれるマスター達のおかげで状況が変わった。まったく……英霊をなんだと思っているのやら」

自身を英霊と呼ぶのもこれが初めてだ。

そんな文句を言いながら慰霊碑を見るエミヤの顔は、それでも誇らしげに笑っていた。

そしてここに、靈長の守護者としてではない、1人の英霊としてエミヤは宣言する。
「サーヴァント・エミヤ、召喚に応じ参上した。マスター達の命により、これよりこの鎮守府の提督として着任する。よろしく頼むぞ、日渡提督」

ここに、英霊提督エミヤが誕生した。

慌ただしくも輝かしい、そんな提督ライフが幕を開けた瞬間である。

『えいれい？さーぐあんど??マスター???エミヤ提督がおかしくなつたであります……』

一問一闘

「全ての艦娘は執務室に招集したよ……しかし、本当に良かったのかい？」

「無論だ。私はあくまでも効率を重視したにすぎない、後の事は日渡提督に任せるよ」

エミヤと日渡提督、それとエミヤの肩に乗る妖精さんは現在、『校長室』の札が取り付けられた執務室にいる。

そして、目の前には在籍の艦娘全員が並んでいた。

——慰霊碑を後にした一行は、そのまま予定通り金剛の待つ執務室へと向かった。

そしてその道中、エミヤがこの鎮守府に着任するにあたって、その身分をどう説明するかという話題になったのだが、ここでエミヤの口からまさかの言葉が飛び出す。

「私は自身の正体を偽るつもりはない」

エミヤは自身が英霊である事を隠さず公表すると言つてのけた。

当然、それが意味するところを聞かされていた日渡提督と妖精さんは狼狽え、当たり前だが止めようとした。

英霊の定義はいまいち理解できてはいなかったが、魔術師にとって神秘の秘匿がどれだけ重要なかは聞かされていた為、それは当然の反応だ。

しかしエミヤの見解は違った。

「私に必要とされているのは何よりも艦娘達との絆だろうか？ 私の身分が犯罪によって塗り固められた偽造の物だと後々で知られてもしたら信頼など望むべくもない。違うかね？」

「そ、それはそうだけど……だとしても君の能力は人々に知られて良いものではないだろう!？」

「無論、私の正体を明かすのはこの鎮守府に在籍する艦娘までだ。軍には勿論だが、他の鎮守府に所属する艦娘であっても秘匿は厳守してもらおう。例え君の直属の部下である艦娘でもね。なに、表向きには日渡提督が用意するという架空の人物像で通させてもらうさ」

『この鎮守府の艦娘のみとは言いますが、それでも知られた以上はエミヤ提督の力が落ちてしまう可能性はありませんか!？』

「ないだろうな。艦娘は人間というよりも、私のような英霊に近い存在だ。その存在が既に神秘そのものとも言える。ならば知られたとしても大した影響はなからう」

断固として意見を変えないエミヤ。

それ以降も日渡提督と妖精さんから様々な警告を受けたが、エミヤは頑なにそれを却下した。

信用を得るために隠し事はしないというスタンスは、日渡提督の目から見ても誠実で立派なものだが、それだけに不安も大きい。

そもそも、日渡提督にはこの鎮守府を救うという大義名分があったが故に、エミヤがどのような存在であったとしても受け入れる覚悟があった。

だからこそ、魔術や英霊などという見たことも聞いたこともない存在でさえ飲み込めたのだ。

しかし艦娘達はどうだろうか？

突然現れた男、それも今日の昼間までは密輸の容疑者候補だった男が自分達の提督になると言われ、その挙句には人間ではなく英霊で魔術師などと紹介されるのだ。

正直なところ、偽造した身分で接した方が幾分かマシな気がしてならない。

むしろ、そうしてくれた方が日渡提督としてもフオローしやすいというものだ。

けれど、そんな日渡提督の気苦労をよそに、エミヤの足は止まらない。

「とうにかさつきから足取りに迷いが無いけど、どうしてエミヤ君が執務室の場所を知ってるんだい!?!」

「構造把握など魔術師の基本だ、私のような狙撃手には特にな」

『すーいけど無茶苦茶であります……』

構造を把握した所でどこが執務室なのかを特定できる理屈はわからないが、エミヤは

ズンズンと歩いていく。

日渡提督と妖精さんは最後までエミヤの説得をしたが、終ぞ結果に繋がる事はなく、その気苦労を心に蓄積させたまま執務室へとたどり着いてしまった。

「随分と遅かったデスネ日渡提督。その様子だとエミヤさんの容疑は晴れたという事デス力？」

「あ、ああ……いや、その話は無事に解決したんだけどねえ……」

執務室では、パソコンの前で書類作業に励む金剛が出迎えてくれた。

ここまでのやり取りを知らない彼女には、これから起こるあれやこれやの珍騒動など予想できるはずもなく、持ち前の快活な笑顔で声をかけてくる。

それに対して日渡提督の態度はどこか落ち着かず、妖精さんも疲れきっていた。

そして、そんな2人の心労を知ってか知らずか、エミヤが追い打ちをかける。

「君はたしか金剛といったな。私はこれから、この鎮守府に提督として着任する事となった。至らないところもあるだろうが、よろしく頼む」

直球。あまりにも直球。圧倒的無配慮。

肩に乗る妖精さんも『マジでやりやがったであります……』と呟いている。

誰の目から見ても最悪のファーストコンタクト。

心の中で、『午前中の記憶すらないでありますか！』というツツコミを入れる妖精さ

ん。

新提督を探していた今日までとは違う意味で心が削れていく日渡提督。

しかし物の見方を変えてみれば、この金剛という艦娘は、提督亡き後もその代理を務め、仕事の過酷さで言えばこの鎮守府で最も重労働をしいられている人物だ。

つまり、新提督が着任するという事は金剛の負担が減る事とイコールである。

で、あるならば……事情は兎も角、新提督という話は意外とすんなり受け入れるのではないだろうか？

そんな淡い期待を込めた瞳で金剛を見つめる日渡提督と妖精さん。

そして、金剛が返した言葉は――

「……ごめん、ちょっと何言ってるかわからない」

アイデンティティであるカタコトも忘れ、完全にハイライトの消えた目でエミヤを見る金剛であった。

そこから、日渡提督が必死にフオローしたのは言うまでもない。

余裕のある笑みが特徴的であるはずの日渡提督が滝のような冷や汗を流して弁明し、それを見ながら「何か問題でも？」という態度のエミヤに半ギレする妖精さん。

所々が支離滅裂な説明になってしまったが、最終的には艦娘が全員集まってから説明すると言って、艦娘全員招集してこいという名目の元に金剛を追い出した。

「エミヤ君……もう少し話の順序とか考えてくれないかな……」

『そうであります！あれでは金剛さんを始め、その他の艦娘も理解できないであります！』

「私は本当の事を告げただけだ。それとも、私が提督になるという話は白紙に戻すかね？」

「『そういう事じゃなくて!!』」

言葉が聞こえていないはずの日渡提督が妖精さんとぴったりハモる程、エミヤは頑固者だった。

日渡提督と妖精さんの中で、思慮深く慎重派だと思っていたエミヤという男の認識が、融通が利かず猪突猛進な男というものに書き換えられた瞬間である。

「まあ、君達の言いたい事もわからないではない。しかし、私にも考えあつての事だ。彼女達が集まった後のことは心配無用とだけ言っておこう」

「……本当かい？君がこの鎮守府に来た時は仮にも密輸の容疑者候補だったんだよ？それでも彼女達が納得する説明ができるんだね？」

「百も承知だ。日渡提督は私について簡単な説明さえしてくれば良い、自己紹介は私からする。そこから先は任せるがね」

「最後の確認だ。本当に……君の存在をありのまま語って良いんだね？今ならまだ間に

合うよ?」

「心配性なのは結構だが、あまりしつこいと部下に嫌われると思うがね? 君は真実を語れば良いさ」

日渡提督とは対照的に、何の不安もなさそうな様子でエミヤは答えた。

知略や謀略を用いた頭脳戦こそが真骨頂の日渡提督にとつて、ここまで底の読めない対応をとられてはお手上げといつていいだろう。

澁々ながらも了解の返事をした日渡提督は、それ以上何も言わなかった。

そして息をつく間も無く、金剛とその他の艦娘がぞろぞろと執務室へと入室してきた。

小規模な鎮守府のうえに少数精鋭なのだから、招集にかかる時間など知れている。

とはいえ、日渡提督としては心の準備くらいさせてほしいのが本音だ。

「全ての艦娘、ここに招集完了です。さあ日渡提督、そのエミヤさんが新提督に着任するという話……ちやんと説明してください」

さすがは歴戦の猛者達――

金剛を始めとする全ての艦娘の視線は、ひとつの情報も零すまいという強い意志を持ってエミヤと日渡提督に突き刺さる。

そして、こうなってしまう後には引けない。

この話の結末が全員の納得を得られるかどうかは、全てエミヤに託すしかないのだ。日渡提督も、隠蔽や偽装を諦めて小さく話し始める。

「……こうしてみんなに集まってもらったのは他でもない、ここにいるエミヤ君についてだ。金剛君から大まかな話は聞いているだろうが、彼にはこの鎮守府の提督として着任してもらおう事になった」

日渡提督の言葉に艦娘が動揺の色を見せる。

いくら金剛から聞かされているとはいえ、艦隊司令部本部所属の日渡提督から直接言われるのは言葉の重みが違う。

「もつとも、彼についての話は隼鷹君などから聞いている者もいるだろう。我々とエミヤ君は今日が初対面であり、その邂逅は密輸船の上であったというのは疑いようのない事実だ。その上で、彼を提督として迎えるに至った経緯を説明する」

エミヤに対し一度だけ視線を送るが、本人は目を閉じて腕組みしたままで、特に止める素振りもない。

内心で溜息をつきつつ、日渡提督は話を進める。

「まず最初に、エミヤ君は密輸の犯人グループとは無関係だ。それは取り調べを担当した警察からも報告が入っている。僕の方でもエミヤ君の素性と合わせて確認が取れている事なので心配しないでほしい」

これについては本当だ。

エミヤにも言っていないが、隼鷹とエミヤが教室で待機している間に日渡提督には警察からの報告が入っていた。

犯人グループの誰もが『あんな男は知らないし見たこともない』と、口を揃えて証言したらしい。

それ故に、金剛も日渡提督もエミヤを目の前にして余裕のある対応ができたのだ。

もつとも、その情報をエミヤに明かさなかつたのは日渡提督の交渉スタイルが非常にひねくれているからなのだが。

「そして彼の素性についてなのだが……うーん……」

「……どうしたデスカ日渡提督？」

本来ならば、提督が話している途中で口を挟む事など軍としては許されない。

が、日渡提督のあまりの苦悶っぷりに金剛が代表して質問を投げかけた。

「いや、いざ説明するとなると上手い言葉が見つからなくてね……まあ、端的に言うところ……彼は人間じゃない……らしい」

執務室の時間が止まった。

否、凍りついた。

自分達を棚上げしている訳ではないが、艦娘以外に人間の見た目でありながら、人間

を逸脱した者などあるはずがないと誰もが思っているからだ。

この話をしているのが日渡提督でなければ、誰も聞く耳を持たないだろう。

「話の途中ですが失礼します。彼が人間じゃないのなら、なんだと言うのでしょうか？　このような話をしている場で、冗談だと言うのなら些か悪質では」

眼鏡の女性が金剛に並ぶように前へと出た。

綺麗な黒髪と丁寧な言葉遣いは、金剛とは違う雰囲気を持っているが、服装などから察するに金剛の姉妹艦なのだろう。

ただ、見た目こそ清楚で、金剛よりもお淑やかに見えるものの、眼鏡の奥に光る瞳はヤバイ筋の人のように鋭い。

『真の英雄は目で殺す』などと言っていた英霊もいたが、この女性は目で深海棲艦を殺しているのだろうか。

こころなしか頭の横に『!』という符号が見える気がする。

「さ、さすがの僕もこんな時に冗談なんて言わないよ。詳しい説明はこの後で彼に直接してもらおうが……エミヤ君が普通の人間とは違うというのは事実だ。その証明も得ている」

その眼光に気圧されながらも、日渡提督は冗談などではないとハッキリと否定した。

「証明を得ているとはどういう事デース？まさかエミヤさんが本当に魔法使いだっ
たというデスカ？」

「……その通りだよ。戦闘報告について聞いている艦娘なら知っているだろうが、彼は
本当に魔法使いだったという事だ。もつとも、彼いわくそれは魔法ではなく……魔術と
いうらしいけどね」

言葉だけならば子供のごっこ遊びのような会話だが、それを話す日渡提督の顔は真面
目そのもの。

普段の彼を知る者ならば、それが嘘ではない事など嫌でも理解してしまう。

そして、それは同時に艦娘の中で大きな波紋を生む。

人間ではないという衝撃のカミングアウトに加えて、馴染みのない魔法やら魔術など
というオマケ付きだ。

誰が『あ、そうだったんですね。納得です！』などと言えるものか。

ザワザワと落ち着きをなくす執務室で、こうなる事が目に見えていたから話の順序を
考えて欲しかったのにと、日渡提督は項垂れる。

「はあ……気持ちにはわかるがみんな落ち着いてくれ。とにかく、エミヤ君は君達のように
超常の存在であり、その目的は深海棲艦の撲滅だという。その上、彼には妖精さんが
見えている。いや、見えているどころか妖精さんと会話もできるらしい」

「それが真実と証明できるデスカ？日渡提督を疑う訳ではないデスが、妖精さんが見えるからといって彼が我々の味方だという根拠がわかりません。まして魔術という物についても皆さんUnknownネ」

「残念ながら証拠はない。彼を信用にたる人物だと判断したのは、全て私の経験則であり、直感に他ならないからね……だが、エミヤ君にはそれを証明する宛があるそう。そうだよな？」

エミヤの言う簡単な説明とやらは果たしたのだ、後は本人に委ねるしかない。神にすぎるような気持ちで話の矛先をエミヤに向ける。

その言葉を受けて、エミヤは艦娘達の前に立ち位置をうつした。

「紹介に預かったエミヤだ。聞いての通り、私は人間ではない。正確には元は人間だった者……ここにいる私は英霊としてマスターに召喚された傭兵のようなものだ」

それを理解できるのが当たり前かのように、堂々と話すエミヤ。

当然、全ての艦娘は絶句。

言いたい事は山ほどあるが、あまりの傍若無人な振る舞いに言葉が出てこない状態だ。

しかし、そんなもの御構い無しとエミヤは続ける。

「提督として着任するとは言ったものの、私は提督業に関して門外漢なのでね。これで

も戦場は多く経験してきたが至らぬ点もあるだろう、その時はよろしくたのむよ」

日渡提督は思った。

誰が着任の挨拶をしろと言った、と。

それも上から目線すぎるだろう、と。

そんな中、開いた口が塞がらない艦娘達を代表して金剛が動く。

「ス、St o p デース！提督になるという話の前にエミヤさんの謎をL e c t u r e し
てくだサイ！人間ではなくて魔術が使えて妖精さんと会話ができるなんて言われても
私達は納得できないヨ！」

「そうだろうな。だが、その前に覚えておいてほしい事がある。私はその気なら、この事
実を隠し、普通の人間として君達の前に立つ事もできたのだ。それをしなかったのは何
故だと思う？」

「そんなのわかる訳がないデース！」

「君達に嘘偽りをしないという証明のためだ。聞けば艦娘とは、提督との絆に応じて
力を発揮するのだろうか？ならば私が君達を騙す訳にくまい？私はマスター達に君達
の未来を託されているのでね。それがどれほど信じ難い事だったとしても、正体を隠す
ようなマネはしないさ」

エミヤは金剛やその他の艦娘全ての目を見るように視線を投げた。

その姿に動揺や後ろめたさはなく、むしろ護るべき対象を見守るような優しい眼差しだった。

「とはいえ、突然の話すぎて君達も信じる事ができないのは当然だ。そこで、今から質疑応答の時間をとらせてもらおう。私に質問がある者は名前を名乗った後で聞きたい事を聞きたまえ」

「……本当に全ての質問に嘘偽りなく答えてくれマスか？」

「勿論だ。それとも、君達は信用を置けない提督の元で戦って海に散るのが希望なのかね？ そうさせないために私はここに居るのだ。嘘などつくはずがない」

「わかりまシタ……では、質問のある方から挙手でお願いしマース」

話の主導権を完全に握られる形になってしまったが、疑惑の人物を質問責めにする機会を得たのだ。

これだけの艦娘からあれこれ聞かれれば、どこかでボロが出るかもしれない。

そうなればこんな怪しい男が提督として着任する事を防ぐことも可能だ。

それでもこの男が本当に提督として着任するというのはならば、せめてその化けの皮くらはい剥がしてやろうと、全ての艦娘が己に喝を入れる。

「ほんなら一番槍はうちやな！」

金剛の後ろに並ぶ艦娘の中で、小柄な女性が勢いよく挙手をした。

「ふむ、まずは駆逐艦の艦娘からか」

「いや、なんでやねんっ！うちは軽空母の龍驤や！駆逐艦でどういう意味なんキミ!」「す、すまない……そうか、軽空母か。それで龍驤、君が聞きたい事とは？」

キレのあるツツコミ、胡散臭き漂う関西弁、響や電と同じくらしいの背丈――

キャラ要素が濃すぎるツインテールの艦娘、龍驤が最初の質問に躍り出た。

「なんや地の文に悪意を感じるけどまあええわ……いやな、さつきも言うてたけど魔術やつたっけ？言われただけじゃイメージできんし、ちよつち見せてくれへんかな？」

悪戯な笑みを浮かべて前が出る龍驤。

エミヤには見えていないが、その背後に立つ日渡提督の心臓はドキリと跳ね上がった。

この龍驤という艦娘、見た目は幼さが残る可愛らしい少女のようだが、その中身は外見を見事に裏切っている。

日本が誇る艦娘の中でも古参と呼ばれる艦娘の一人であり、軽空母の中でもその実力はトップクラス。

更に、ひょうきんなキャラとは裏腹に、切れ者としても有名で、その観察眼は艦娘達にも一目置かれている。

それ故になのか、日渡提督にとって一番恐れていた質問をまさか最初にぶつけてきた

のだった。

「その質問は必ずされると想定していたが、まさか最初からくるとはな。いいだろう、少し離れていたまえ」

薄く笑ったエミヤは艦娘達を壁際に下がらせる。

「私の魔術は投影魔術といってね、この目で見た物を完全複製する事ができる。魔力消費の関係で、投影できる物に限度はあるが——投影開始^{トレス・オン}」

日渡提督に見せたのと同じように、エミヤの両手には白と黒が光る夫婦剣が投影された。

光の粒子を集めて造られたその剣に、艦娘達は目を奪われる。

「これが投影魔術だ。私の魔力を元に造られた物なので使い捨ても量産も自由にできる。満足いただけただけかな？」

「ほー、これは凄いなあ！でも、深海棲艦とやりあえるんなら、本当は他に隠し球があるんでしょ？」

「勿論、これを応用して剣を弓として使う事なども可能だ。私の戦闘を見たという艦娘はそれを目撃したのだろう。それ以外ならばこんな物も作れる」

夫婦剣は光の粒子となって霧散し、そのかわりに現れたのは軍艦の模型だ。

「軽空母龍驤といえれば旧日本海軍の中でも長きにわたり活躍した功労者だ。私でも模型

「くらいは見たことがある、お近づきの印に贈らせてもらうよ」

手渡されたのは軍艦としての龍驤の模型。

「わあお、こつちの姿を見るんは久々やなあ。これ、うちにくれるん？ありがとう！」

それを両手で受け取った龍驤は満足げに艦娘の列へと戻る。

「ええもん見せてもらったし、うちからの質問はこれで終わりや。後は他の子等に任すわ」

「一問一答って訳か。んじゃあ、同じ軽空母として次は私がいこうかな！」

続いて名乗りを上げたのは、エミヤにとっても始めて会話した艦娘である隼鷹だ。

「で、お兄さん。昼間は何を聞いても答えてくれなかったのに、こういう風の吹き回しなのさ？」

「なに、先にも言ったがマスター達の命令なのでね。今は君達の味方として接しているというだけの話だ。それで、君の質問とはなんなのさ？」

「やっぱ何を言ってるのかはさっぱりだわ……まあ良いよ。私からの質問は、人間じゃないって証明はできるのかってことさ。その魔術ってやつも人外の証明にはならないだろ？お兄さんが人間以外の存在だってんなら、何かしらの証明はできないもんかねえ？」

隼鷹からの質問は、英霊としての存在証明について。

これについても、本来ならば秘匿にするところなのだが、エミヤは二つ返事で質問を聞き入れた。

「英霊の在り方を証明するのは難しいが、しかし……私が人間でないと証明できれば良いのだな？」

「うーん……ま、それで良いよ！どっちにしろ、私達には英霊つてのも良くわからないしねえ。で、お兄さんは何をもってその話を証明するのさ？」

「簡単な話だ。こんなこと、生身の人間にできる事じゃないのだから」

そう言いながらニヒルな笑みを浮かべるエミヤ。

それと共に、艦娘や妖精さんにすら理解できない事が起こる。

『ど、どこに消えたでありますかエミヤ提督!』

蛭が一斉に飛び立つような、幻想的な光に包まれたエミヤは、まるで溶けるようにその場から消えてみせた。

跡に残ったのはエミヤの肩に乗っていた妖精さんのみだ。

「ちよ、ちよつと！どこに消えちゃったのさ!?まさか成仏しちゃったの!」

「ふつ、女性がそう大きな声を出すものではないと思うがね?心配せずとも私ならここにいる」

戦闘時さながらの緊張を持って周囲を警戒していたはずの艦娘達だが、その誰もが工

ミヤを感知できなかった。

どころか、エミヤは何食わぬ顔で響と電の真後ろに立っていたのだ。

「はわわ！びつくりしたのです！」

「Я ^驚был удивлен^た……これは暁がいたら失神レベルだね。まさか本当に幽霊がいたとは」

突然背後に現れたエミヤに対し、目を丸くして驚く響と電。

2人は昼間の戦闘を目撃していたのにも関わらず、それでも底の知れないエミヤという男に戦々恐々としていた。

「驚かせるつもりはなかったのだがな。今のは霊体化といって、私の身体を構成している魔力を霧散させて視認できなくしたものだ。これで、私が通常の間人でないと証明できたはずだが？」

エミヤは、どこか勝ち誇ったように隼鷹を見つめた。

「……こいつは驚いた。確かに普通の人間にできる芸当じゃないよ、うん。かといって手品つて訳でもなさそうだし……こりや、お兄さんの言う事を信じるしかなさそうだねえ」

「結構。それと私からも質問があるのだが、君に姉妹はいるかね？」

苦笑いを浮かべる隼鷹に対し、エミヤは不意をつくように姉妹について尋ねる。

それに対し隼鷹は、驚いたような顔をするも静かに答えた。

「姉妹っていうか……まあ、相手はいたよ。でもこんな世の中だからねえ、随分と前に沈んじまった。それがどうかしたの？」

「そうか……そんな君に伝言だ。君は気丈に振る舞うあまり弱い部分を隠しがちだそうだな？ それを酒に逃げないか心配していたよ。好きなのはわかるが人に心配される程飲むのは控えたまえ。美味しい食事がとれて誰もが笑い合える世の中を望む者に失礼のないようにな」

「よ、余計なお世話だよっ……ん!? 誰が心配してたっ!?」

エミヤは「さてね」とだけ答えて話を切り上げた。

「ところで今『暁』と言ったかね？」

狼狽える隼鷹はひとまず置いておき、今度は目の前の響と電に話しかける。

「……暁は私達の姉だよ。もう、ここにはいないけどね」

なんの気なしに口にした暁の名前に食いつくエミヤに対し、響はどこか気落ちした風に答えた。

隣の電も、顔を伏してしまっている。

「なるほど、そういうえば駆逐艦の響と電といえは暁型駆逐艦の姉妹艦だったな……という事は、あの声はやはり……」

口元に手をやり、なにやらブツブツと呟くエミヤ。

その様子に響が質問を投げる。

「何か言いたい事でもあるのかい？ どうやら暁を知っているような口振りだけど？」

「ん？ いや……暁から君達についてキツク言われていてね。暁型駆逐艦について思い出すのが遅れてしまったが、君達が彼女の妹だというのなら納得だ」

瞬間、響の目の色が変わる。

「……不思議だな、まるであの子と直接話したように聞こえるね。参考までに私達から質問するけど、暁に何を言われたんだい？」

既に轟沈している最愛の姉の話なのだ。

それを冗談や言い訳などで使ったのならば、いくら提督候補である男とはいえ容赦しない。

響の目はそれを如実に語っていた。

普段から冷静な響がここまで感情を露わにしているのだ、側で見ている電も心なしかオロオロとした表情を浮かべている。

しかし、エミヤはそんな敵意にも似た感情に染まる目を真っ直ぐに見返して口を開いた。

「妹達がこっちに来るような事があれば許さないと言われたよ。一人前のレディを自称

していたが、妹の事となるとやはり心配なのだろう。淑女とは言い難い必死さを感じたものだ」

膝を折り、響達と同じ目線に合わせたエミヤはありのままを語った。

性格に難ありだからか、少しばかり暁に対して皮肉めいた言い方になつてはいるものの、その目は「君達は良い姉を持った」と語っているようだった。

「その言い方……まさしく暁ちゃんなのです……」

「ああ、そういうえbaumう一人からも君達について言われている。名乗りはしなかったがおそらく雷という艦娘だろう。自分がいない分、君達2人を頼ってくれと言っていた」
「雷まで……確かに雷ならそう言うだろうね……С^{あり}п^がа^とс^うи^うб^うо、私達からの質問は以上だ……」

「そうか……他にも聞きたい事があるのなら、遠慮せずに後で私のところへ来たまえ」

響の顔からは剣呑さが消え失せ、電の目には涙が浮かんでいる。

本来なら、信用などできるはずのない話なのに、なぜかエミヤの言葉に嘘を感じなかった。

そのため、2人は何の反論もできずに言葉を詰まらせた。

「あのお、よろしいですか？」

続いて、立ち上がったエミヤに声をかけたのは、眩しい程の金髪と、群青色が特徴的

な軍服に身を包んだ女性。

「私は愛宕、重巡洋艦よ。先程からとても気になっていたんだけど……貴方はマスターという人に呼ばれたのよね？それは誰なのかしら？」

愛宕と名乗る女性の質問は、マスターについて。

そのタイミング、口振りから察するに、マスターの正体を少なからず予想してはいそ
うなもの、半信半疑である事が伺える。

エミヤは涙を流す電の頭をポンポンと叩くと、マスターについても隠す事なく語り始
めた。

「信じ難いだろうが、私のマスターは慰霊碑にその名を刻んだ全員だ。先程、日渡提督に
案内されて慰霊碑を拝見したが、その際に全員の声を聞いた。更に、私が現界するのに
必要な魔力だが、それはあの慰霊碑から流れてきている」

「魔力というのはわからないけど、全員つて……私の姉妹や倉敷提督の声も聞こえたの
かしら？」

「勿論だ。やはり名乗りはしなかったが、君が愛宕で重巡洋艦だというのなら高雄型な
のだろうか？言葉遣いの丁寧な女性が妹達をいたく心配していたが、心当たりはあるかね
？」

「っ!? あらあら……高雄つたらどこまでいっても世話好きなんだから……」

突拍子も無いエミヤの説明だが、愛宕がそれを言及する事はなかった。

いや、言及できなかったというのが正しいだろう。

エミヤの言葉を聞いた愛宕は、流れる涙を止める事に必死だったのだから。

「つて、おいおい泣くなつてば愛宕姉ねえ！つーかお前、今の話は本気で言つてんのか!」

「嘘はつかないと言つたはずだが？それより、名前を教えてもらつていいかなお嬢さん？」

「アタシは高雄型重巡洋艦三番艦の摩耶様だ！お前の言つてる事はどうにも胡散臭い！

高雄姉も鳥海もみんな沈んでるのにどうやって会話するつてんだよ!」

会話が困難な愛宕に変わつて名乗り出たのは、愛宕の妹でもある摩耶だ。

言動は乱暴に聞こえるが、内容はここにいる艦娘全員が疑問に感じているものであり、全員がエミヤを注視している。

「君も高雄型重巡洋艦だったか。服装が違うのでわからなかったが……なるほど、末の妹に心配されるのもうなずけるといふものだ」

「あん？末の妹つて……まさか鳥海とも何か話したつてのによ!」

「ああ、姉は頼りになるがどこか危なっかしいので力を貸してくれと言われているよ。

高雄の後で語りかけてきた物静かで知的な雰囲気の艦娘だったが、妹の鳥海ではないかね?」

「鳥海の奴……余計なこと言いやがって……」

「おや？その様子だと、私の話を信じていると受け取れるが？」

「う、うるせえ！誰がそんなオカルト話を信じるもんか！」

摩耶は完全に言い負かされた。

そもそも、言葉の駆け引きや勝負をしている訳ではないので、これに関してはエミヤの皮肉が炸裂しただけの話なのだが。

しかし、これについての説明はまだ終わっておらず、この話題こそが艦娘達にとって最も重要なポイントになる事は明白だ。

それを理解してのことだろう、この鎮守府の提督代理を勤める金剛も質疑応答へと参加する。

「Hey、エミヤさん。貴方は慰霊碑の全員がマスターだと言いまシタ。それは具体的にどういう意味なのでショウ？」

「ふむ、良い質問だ。では順を追って説明していくとしよう」

突っかかるようなスタンスの摩耶とは異なり、全容の説明を求める金剛。

さすがに皮肉や冗談を話す雰囲気でもないことはエミヤも承知している。

「私のような存在を英霊という。そして英霊とは本来、魔術的な術式を用いて儀式を執り行い、その英霊を呼ぶに相応しい触媒をもって召喚するものだ。私とて、その例外で

はない」

「ですが貴方は慰霊碑と呼ばれたと主張しています。その儀式の内容は知りませんが、殉職者である者達に儀式を執り行う事は不可能では？」

「すまないが名前を教えてもらいたい、説明する上で名前を知らないと不便が多くてね」

「失礼しました、私は金剛型戦艦四番艦の霧島です」

「助かるよ。確かに慰霊碑自体には魔力こそ充実しているものの、儀式を執り行うことは不可能だ。触媒については心当たりがないでもないが……私を召喚できた理屈については説明できないとしか言いようがない」

「つまり……全てはエミヤさんの作り話である可能性も否定できないという事ですか？」

金剛の言葉に艦娘一同は固唾を呑む。

これを否定できないならば、エミヤの話など御伽噺のそれではしかないのだ。

しかし――

「ああ、その通りだ。あの慰霊碑が私を召喚したという証拠はなく、全ては私の推測にすぎない」

エミヤはあっさりとそれを認めた。

それは金剛やその他の艦娘にとっても予想外の言葉だった。

「私が言うのもなんですが……そんなにあっさり認めたら良かったネ？ 場合によっては提督着任もできないかもしれないデスヨ？」

「ならば嘘をつけば良かったか？ あらかじめ言つてあるように、私は君達に嘘偽りをしない。ただ、私のマスターがああのお慰霊碑の者達だという確信はある」

「確信ですか……貴方は何をもちてそこまでの確信を得ているのでしょうか？」

「君達には感知できないだろうが、今この瞬間もあのお慰霊碑からは魔力が流れ込んできている。そして、その魔力に乗って私に届けられた声は、まさしく君達を救わんとする仲間からの呼び声だった。私はそれに呼ばれたのだと信じたくてね」

「それは精神論デース、もしそれが真実ならどれだけ嬉しい事か……ですが、証拠もなしに信じられる程、Simpleな話でもありません」

「ああ、精神論だとも。だが、その声を聞いて君達を助けると誓つたオレの心は本物だ。オレを呼んだあの声も、それを受け取つたオレの心も、それはきつと間違ひなんかじゃない！」

「ーそこに理屈などなかった。」

聞く人が聞けば、それは酷い暴論であり、与太話もいいところだろう。

しかし、そんな与太話を笑える者はこの場にはいない。

それはエミヤが見せた強い決意に押し切られたからだろうか。

それとも、今は亡き仲間達がそうさせたのだろうか。

執務室には怖いほどの沈黙が続いていた。

「……最後に、私と霧島にはもう2人の姉妹がいます。彼女達とも会話はしましたか？」

「ああ……比叡と名乗る艦娘には熱く激励されたよ、気合いを入れてもらった。それと、金剛お姉さまにもしもの事があつたら許さないなどと脅されもしたな」

「フフ……比叡らしいデース」

「榛名という艦娘には謝られたよ、自分が提督を守れなかつたばかりに私を戦いに巻き込んでしまつてすまないね。それと、自分達が届かなかつた平和な未来は、みんなの手で掴んでくれと言つていた……それを見守つているともな」

「榛名はあの日の事を未だに……それでも優しい榛名らしい言葉です。そうですね、お姉さま？」

愛宕に続き、金剛姉妹からもそれ以上の言及は聞かれなかつた。

聞きたい事など山程あるだろう、疑わしい事柄など山の如しだ。

それでも、このエミヤという男が提督になるといふ事を拒否する気力が沸いてこない。

自分達は騙されているのかもしれない。

しかし、エミヤの口から語られた姉妹達の言葉——それはまるで、本人の口から聞かされたかのように彼女達の心に染み渡り、それ以上の反論を許そうとはしなかった。

「今すぐに私の事を信じろとは言わない。もしどうしても信用ならないというならば、その時は改めて日渡提督へと談判したら良いだろう。しかし、今は私を信じてほしい。私は、この中の1人たりとも沈ませはしない」

それは全員に向けた言葉だった。

少なくともそれは、マスター達の命令だからという義務的なものではなく、エミヤ自身の気持ちがかもった言葉だ。

それに対して意義を唱える者など、もうここにはいない。

ただ1人を除いて——

「あー、良い話の途中で悪いけど俺からも良いか?」

「……君は?」

「俺は天龍型軽巡洋艦の天龍だ。こっちは妹の龍田。さつそくで悪いんだけどな、俺はテメエの話なんて全く信用できねえ。テメエが提督になるだなんてまっぴらゴメンだ」

左目を眼帯に覆われた女性、天龍。

そしてその横には不敵に微笑む龍田。

天龍の態度は、ここが戦場かのように猛っており、いつ襲いかかるかもわからないよ

うな敵意を纏っている。

もちろん、そこまでの態度をとって日渡提督や金剛が黙っている筈がない。

「天龍君、彼を提督に着任させると決定したのは僕だ。つまり、君の発言と態度は僕に対するものも同然だとわかつているかい？」

「つたりめーだろ？俺の態度が気に食わねえってんなら左遷なり解体なり好きにすりゃいい。俺はどうあつてもこいつを認めねえ」

「と、とにかく落ち着くデース！龍田からも何とか言つてくだサーイ！」

「あらあ、私も天龍ちゃんの見解に賛成だから止めないですよ？それに……そちらのお兄さんも譲る気はないみたいだしねえ」

落ち着いた雰囲気は一転、執務室には殺伐とした空気が張り詰める。

艦娘達も、天龍という艦娘の性格がわかつているからだろう、その一挙手一投足を警戒し、いつでも動ける態勢をとっていた。

そんな中、エミヤだけが何の焦りもなく天龍と対峙する。

「大丈夫だ日渡提督、ここは私に任せてくれたまえ。それに、彼女の言うことも語気が強いというだけで全く理解できない訳ではない。提督権限で黙らせるなど、それこそ横暴というものだろう？」

「し、しかしエミヤ君……」

「大丈夫だと言っている。それで天龍、君は何に納得できないと言うのだね？」

「決まってるだろ？全部だよ。お涙頂戴の話でこいつらを丸め込もうって腹なのか知らねえけどな、そんなもん日渡提督からの前情報があれば好きなかだけ作り話もできるつてもんだ。テメエが倉敷提督の使いだなんて、冗談も休み休み言え」

「あいにくと冗談は好まない性分だね。私が話した事は全て真実なのだが」

「ああそうかい。だがな、100歩譲って真実だったとしても俺はテメエを認めねえ。そもそもテメエは軍事経験もない素人トシロだろ？そんな奴が提督として俺達に命令を下すなんて冗談じゃねえ。こっちは使い捨ての道具じゃねえんだ！素人判断で戦場に送り出されて犬死したんじゃ、先に逝った奴等に顔向けできねえだろうが！」

執務室が揺れるほどの怒号が響いた。

天龍の怒りが何に向けてのものかは定かでないが、その矛先は真つ直ぐエミヤに向けられている。

「ごもつともだ。だが、提督がいなければどの道この鎮守府の艦娘は弱体化し、いずれは戦死という末路を辿るだろう。君は私にどうしろというのだね？」

「黙ってここから消えろ。心配しなくても少し提督がいなくらいで沈むほど俺もこいつらもヤワじゃねえ」

「聞けない注文だな。それでは私もマスター達に顔向けできん」

「またふざけた事を……じゃあ、これなら言うこと聞いてくれるかい？」

その刹那、天龍の手にはまるで投影魔術のように一本の太刀が握られた。

その刃先はエミヤの喉元を捉えている。

「おとなしく出てかねえってんなら、ぶった切って叩き出すぞ？ テメエが人間じゃねえってんなら、最悪ここで殺しても日渡提督にすら処分できねえんだからな」

「天龍っ！……ここを何処だと思ってる！ 提督命令だ、武装を解除しろ！」

「うっせーぞ！……そもそもアンタがこんな訳のわかんねえ奴を連れてくるからこうなったんだろうがっ！ さあ！……ここから出てくか、ここで死ぬか、好きな方を選びやがれ！」

日渡提督が声を荒げる程に緊迫した空気。

何が天龍をここまで頑なに動かすのかは不明だが、今の彼女には本気で殺しかねない気迫がある。

「残念だが、私はここで君達を守ると誓った。出て行く事はできないな。そして、こちらも残念な事だが、君では私を切るなど到底できないだろう」

「んだとテメエ……俺が本気でやれねえとも思ってたのか！」

「やる気の問題ではない、不可能だと言っているのだ。日渡提督、ここに道場のような施設はあるかね？」

剣を突き付ける天龍の目を見据えたまま、エミヤはひるむ事なく尋ねた。

「体育館だった設備が屋内訓練施設として使われているけど……それを知ってどうするつもりだい？」

「丁度いい。天龍、君が納得できずに引く気もないというのなら、ここは勝負で決着をつけられないか？」

緊迫した状況だとは思えない、余裕のある態度で勝負を申し出たエミヤ。

当然、この場にいる全員が耳を疑った。

「君が勝ったならその要求を飲む。いや、君にその覚悟があるのなら、いつそのことを斬り殺すのも良いだろう。君が言った通り、私は既にこの世の者ではない。殺した所で君を処分する法が存在しないのだからね」

「……本気で言ってるのか？ちよつとガタイが良いくらいで調子に乗ってんならやめとけ。艦娘の身体能力は人間水準なんて軽く超えてんだ、その駆逐だって大の男が束になつても敵わねえんだぞ？」

「心遣いは感謝するが、その心配は無用だ。私を提督にしたくないと言うのなら、殺す気でもかかってきたまえ」

「上等だ……恨むんなら、こんなところに面白半分で首を突っ込んできたテメエのバカさを恨め」

それだけ言い残すと、天龍は執務室を出て行った。

恐らくは、体育館へと向かったのだろう。

その後を追うようにして龍田も退室した。

残された艦娘達はどこか気まずそうな顔を浮かべるばかりで、誰も口を開こうとはしない。

誰の目から見ても、天龍の行動はやり過ぎており、最悪の場合は軍事裁判に発展しかねない態度だった。

エミヤの話は確かな確証こそなかったものの、誰もが信用してしまう説得力があった。

少なくとも、天龍のように激怒し、実力行使に及ぼうなどと思わないくらいには、エミヤの存在を受け入れていた。

しかし、天龍の言い分に共感する部分があるがゆえ、誰も言葉が出ないのだ。

そんな艦娘達の心中を察したのだろう。

沈黙を破り日渡提督がエミヤへと歩み寄る。

「私がいながら申し訳なかった、まさかあそこまで激昂する艦娘がいるとは……しかし、なんだって勝負なんて持ちかけたんだ!?!天龍君が言う通り、艦娘の力は我々とは比べ物にならないぞ!彼女にその気がなかったとしても大事故に繋がりがねない!勝負なんてバカなマネはやめるんだ!」

天龍達に声が届かないことを確信してだろう、日渡提督は声を荒げてエミヤに詰め寄った。

「まったく……私の心配をするくらいなら、この後の天龍のメンタルを心配したまえ。何度も言うように彼女の主張は何も間違っていない。態度や言動はアレだが、真に過ちを認めるべきは、私のような正体不明を独断で提督に据えようとした君自身だと思おうが？」

「それは確かに僕の責任だろう……天龍君には改めて謝罪するつもりだ。だが、それとこれとは話が別だ！エミヤ君の力は凄まじいが、だからこそ、そんな強力な者同士を勝負なんてさせるわけにいかない！」

「勘違いをするな日渡提督。私は勝負という言葉は使ったが、天龍と殺し合いをするつもりはない。ここの艦娘を守るために呼ばれた私が彼女達に刃を向ける筈がないだろう？」

「な、何を言ってるんだ君は!?!それじゃあエミヤ君は罅^{なぶ}り殺しにされるつもりか？」
「そんなつもりは毛頭ない。まあ、それは見てればわかるだろう。それと断っておくが、彼女の態度を懲罰の対象とすることは私が認めん。君にも落ち度があったと認めるなら今回の事は水に流してやるのだな。……だから君達もそんな心配するような顔をするな」
不安そうな顔でエミヤを見つめる艦娘達に、エミヤはなるだけ優しい声色で告げる。

「天龍を傷付けるつもりはないし、私も死ぬ気はない。天龍を含め、君達には納得した上で私を提督として認めてもらわないと困るのでね。さて……行くとするか」

エミヤは執務室の扉へと歩を進める。

天龍の性格や、エミヤの能力を考えれば、恐ろしい結果を想像しない訳がない。

だが、扉を開け放つ彼の背中には、不思議と有無を言わせぬ力強さがあつた。

そんなエミヤに1人の艦娘が駆け寄る。

「あ、あのっ！本当の天龍さんは、遠征の時も電や響ちゃんを気遣つてくれる優しい方なのです！だから……だから……っ！」

今にも泣きそうになるのを堪えているのだろう。

電は必死に何かを伝えようとするのだが、言葉がうまく出てこない。

そんな電に対しエミヤは――

「わかつているさ、心配するな」

一度だけ振り返つて、電の頭を優しく撫でてから執務室を後にした。

暴れ天龍

思い出すは、もう戻る事のない日々の記憶――

『つたく、朝から長い風呂になっちまったぜ。さてと、整備に出してた艤装の調子でもーって、いってええええ!』

『よお天龍。独断行動で夜戦突入した挙句、中破して朝から長風呂とは良いご身分だなコラ』

『げっ!?提督!いや、もうちよいで敵艦隊の本丸を叩けそうだったから……って、いきなりゲンコツかますことあねえだろ!』

『知るかボケ!それでてめえ等が沈んだら何の意味もねえだろうが!無線ブチってまで勝手こいてんじやねえぞ馬鹿野郎!』

『沈まねえよ!つつーか龍田だつてノリノリで進軍したんだから俺ばかり怒るなよな!』

『あらあ、私は止めたんですけど天龍ちゃんが聞かなくなつて。それでも、私や駆逐艦のみんなは無傷だったけどねえ?』

『だ、そうだ。何か言い残すことはあるかバスタブ番長?』

『なっ!?裏切る気か龍田!?!いや、戦果はあげたんだから不問でもいいだろ!』

『ほう、反省の色なしか。わかった、罰として今日から三日間、てめえの眼帯は榛名お手製のクマさん眼帯に変更とする。後で執務室に来やがれ』

『マジかよ!?!待ってくれよ提督!提督!提督!』

——戦況は厳しかったが、充実していた。

バカをやつたり、喧嘩したり、勝利に歓喜したりと、満ち足りた毎日だった。

それは今でも輝かしい思い出として、天龍の心に刻まれている。

だからこそ、天龍はエミヤを——

「すまん、待たせてしまったようだ」

体育館の重い扉を開け放ち、真紅の外套に身を包んだエミヤが入場してくる。

その後ろからは、エミヤに続くようにして日渡提督や他の艦娘達も同行してきていた。

「ちっ……あのまま尻尾巻いて逃げてりやあ良かったものを……そんなに死にてえのか?」

「私は君と龍田に提督着任を納得してもらうためにここへ来たのだ、死ぬつもりなどないさ。安心したまえ、観戦の者は手出し無用と伝えてある」

「ああそうかい……バカは死ななきや治らねえって事だな」

劍呑な顔つきで、天龍はその手の太刀を構えた。

そこに手加減の気配はなく、どこまでも本気の敵意をエミヤへと向けている。

「あいにくと既に死んだ身でね。馬鹿は死んでも治らないのだろう……トレス・オン投影開始」

天龍に応えるように、エミヤは自傷気味な笑みを浮かべながら二本の劍を投影する。

しかし、それは愛用の夫婦劍ではなく――

「おい、なんだそりゃ?」

「知らんのかね?これは竹刀といって剣道で使用される竹製の劍だ」

「そういう事を聞いてんじゃねえ!そんな玩具で俺とやりあおうってのか!?さっき見せた白黒の劍はどうした!」

「私が呼ばれた理由を忘れたか?君達を護る為であつて傷付ける為では断じてない。ならば刃を向ける筈がないだろう?なに、君の話を聞くだけならばこれで十分だ」

そう言うと、エミヤは二本の竹刀を構えて天龍と対峙する。

殺し合いさえ覚悟していたのだ、それを愚弄するかのようなエミヤの態度に、当然だが天龍は激昂した。

「ふざけやがって……死んで後悔しやがれ!」

勿論、エミヤに天龍を愚弄する意思はない。

どこまでも天龍を傷付けずに納得を得るため、最善をとつた末の行動だ。

故にエミヤは冷静なまま天龍に告げる。

「待ちたまえ、戦う前に聞いておきたい。君が私を拒絶する理由、それは私が英霊だからという訳ではないのだろうか？」

「なにを抜かすかと思えば……それ以外の何があるってんだよ！普通に考えて、テメエみたいな正体不明すぎる奴を信用すると思うか!？」

「ふむ……それはもつともだ。だが、私にはそうは思えなくてね。君が私を認めないのは倉敷前提督に起因する理由からではないかね？」

「テメエがその名前を口にするんじゃないかね……良いぜ、テメエが勝つたらなんでも答えてやるよ。その時まで……テメエが生きてたらなっ！」

何かが天龍の逆鱗に触れたのだろう。

瞬間、天龍はエミヤに向けて地を蹴った。

艦娘の身体能力は凄まじく、まるで弾丸のような速度で迫る天龍は、あっという間にエミヤとの距離を潰す。

(なるほど、早く鋭い……これが艦娘か)

瞬きの間に眼前に迫った天龍は、その手に持つ太刀をエミヤの頭へと叩きつけるために振り上げた。

スピードの乗った一撃、それも艦娘の力で振るわれるそれを竹刀で受けきれぬ筈もな

く、エミヤは半身を引くことでその斬撃をかわす。

しかし、その行動を読んでいたかのように天龍は横薙ぎに第2撃を繰り出した。

距離とタイミングから回避は間に合わないと判断したエミヤは、太刀の刃ではなく腹をカチ上げる事でそれを防ぐ。

「へえ！思つてたよりやるじゃねえか！」

「それはどうも、君も中々やるようだ。しかし、想像通りだが想像以上ではない！」

カチ上げられた太刀を袈裟懸けに振り下ろす天龍だが、その一撃は力を受け流すようにして捌かれた。

そのまま重心を崩された天龍はあっけなく背後を取られ、その脳天に鮮やかな面打ちが炸裂する。

竹刀での殴打は、竹特有の軽い音と共に天龍の髪を跳ねあげた。

「これが真剣ならば頭を割られて絶命だ。戦場に生きる者としては些か甘いと思うのだが？」

「あん？んなもん何食らつても死にやしねえんだから、いちいち防ぐ勘定もしてねえつてだけだ」

「なるほど、ならば嫌気がさすほどお見舞いしてやろう」

「やってみやがれ！その前にテメエが斬られてなきやな！」

攻防は天龍の優勢。

だが、その全てを必要最低限の動きでかわし、時には受け切っているエミヤの方が実力的に上をいつていた。

しかしそこは艦娘。

持ち前の身体能力で繰り出される斬撃はまさに一撃必殺。

並大抵の実力者ではあつという間に勝負は決していただろう。

それを涼しい顔で捌いているエミヤの実力が人知を超えているのだ。

その認識は天龍の中にも徐々に芽生えはじめ、だからこそ攻撃が当たらない事への苛立ちが加速度的に募っていく。

「テメエー！ちよろちよろと逃げてばつかじゃねえか！ちったあ向かってきやがれオラア！」

「既に何発も脳天を殴打されている者の言葉とは思えんな。君は先人達から何も学んでいないのかね？そら、もう一発だ！」

通算7発目の面打ちが決まった。

ここまでエミヤにダメージはなく、天龍にも肉体的な意味でのダメージは0だ。

それでも、攻撃の全てが当たらない事と、いいように頭を叩かれる事のストレスで天龍の怒りはどんどんエスカレートしていく。

一歩間違えば致命傷という攻撃を、紙一重でかわすエミヤ。次々と必殺の一撃を繰り出す天龍。

そんな高次元の攻防を前に、観戦者も自然と手に汗握り、その視線を右往左往させていた。

「す、凄いのです……天龍さんを相手にあそこまで戦える人がいるなんて……」

「X^ハo^ラp^ラo^{ショ}o。それも竹刀で太刀の攻撃を受けてるのに折れもしないとはね。よっぽど剣での戦いに慣れてるんだろう」

「ああ、僕も驚いてるよ。エミヤ君の実力がこれ程とはね。殺す気満々の天龍君にもどうかと思うけど……僕なら本気の艦娘の前に立とうなんて恐ろしくて考えられないよ」

「No、日渡提督。あれはエミヤさんが挑発しすぎて天龍が手加減を忘れてるだけデース！いくら天龍でも最初から殺す気なんて……多分なかったネ！」

「しかしお姉さま、エミヤさんの実力は本物ですよ。私のデータによれば、この戦いが始まって11分と38秒、彼が致命的な危機に追い込まれた場面はありません」

「いざつちゆう時は爆撃で大破させてでも止める気やったけど、これならいらん心配やったみたいやねえ」

「いやいや、いくらなんでも大破はやりすぎだつて龍驤さん……つて、体育館で艦載機を飛ばすつもりだったのかい!?こんな時間に!」

それぞれが驚きを隠しきれない状況。

それは決して天龍が弱いだとか、動きが悪いという意味ではなく、単純にエミヤが闘慣れしすぎていうという点について。

一般的な英霊がどうかは知らないが、少なくとも人間が艦娘を相手にここまで戦えるなどありえる事ではないのだ。

最初こそ、艦娘が人間に本気を出すという危険や、エミヤの能力によつて天龍が損傷を負うという心配の目で見えていた一同だったが、現在ではその戦いぶりに見惚れてさえる。

しかし、そんな中でも高雄型の愛宕だけは違う視点から戦いを観察していた。

「天龍ちゃん、このままだと危ないかもしれないわねえ……」

「んあ？危ないってどこがだよ愛宕姉？^{ねえ}あの兄ちゃんは攻撃するつもりはないみたいだし、竹刀でいくら打たれても艦娘がやられる事ねえだろ？」

「そうじゃなくて、天龍ちゃんかなり怒ってるじゃない？何か心配で……」

「平気平気！案外このまま引き分けて決着ついちゃったりするんじゃないやね？」

「もう、摩耶ったら。けど、そうなれば良いんだけどねえ……」

愛宕の抱く不安、それは愛宕自身にもわからないほど小さなものだ。

例えるならば、広大な湖に一滴の水滴が落ちたのを気にするような微々たる不安。

だが、その水滴が起こした波紋は漣となつて愛宕の胸に去来する。

原因が何なのか不明な以上は言葉にもできないので、摩耶に至つては心配すらしていないのだが、戦いを見守る愛宕の目は天龍とエミヤの行く末を案じていた。

そんな各々の想いを他所に、戦いは進展を見せる。

「はあはあ……クソツ、やる気あんのかテメエ！そんな玩具が何発当たつたところで俺が倒せるわけねえだろ！」

「威勢は良いようだが息が上がっているぞ？この程度の戦闘でその有様では、倉敷前提督もさぞ落胆している事だろう」

「んだとコラ……はあはあ……テメエがその名前を口にすんなつたつてんだらろおが！」

大きく肩で息をする天龍の動きは、序盤に比べてだいぶ鈍くなっていた。

流れる汗も滝のようで、まるでサウナにでも入っているかのような有様だ。

対するエミヤは、呼吸ひとつ乱していない。

どころか、剣を交えるたびにその精度を増しているかのようにすら見える。

「なるほど！エミヤ君の狙いはこれか！」

そんな2人の様子を見て、日渡提督が目を見開いた。

「どうしたんだい日渡司令官？あの人の狙いつて何のこと？」

「いや、響君や他の娘にはいまいち実感もわかないだろうけど、エミヤ君の狙いはおそら

く天龍君のスタミナ切れだ」

「スタミナ切れ？艦娘を相手にそれは無理がないかな」

「だから響君には実感がわかないと言ったろう？白兵戦とは相手の呼吸や足運びに注意しながら、自分も常に動かなきゃならない。それも砲撃戦とは違って相手との距離は常に超近距離だ。僕も軍人として武道は学んでいるけれど、精神的な疲労から気付かないうちに体力の限界を迎えてたなんて良くある話さ」

「Hey、日渡提督！聞き捨てなりません！確かに白兵戦については知りませんが、砲雷撃戦も中々Hardネ！艦娘がスタミナで負けてる筈ないネ！」

「勿論、君達の戦いが簡単だとは思ってない。でもね、慣れた戦闘と不慣れな戦闘では消耗のスピードも段違いだろう。白兵戦でのペース配分なんて天龍君が知ってる筈ないからね」

「なるほど、つまりエミヤさんが天龍さんを傷付けずに勝利する条件は体力勝負だと。今後のデータに加えておきます」

「ましてやあそこまで激昂した状態で暴れているんだ……天龍君の消耗は僕らが思うより激しいんじゃないかな」

日渡提督の言葉を受けてから天龍達を見てみれば、その言葉は的を射ていると誰もが納得した。

今の天龍に初撃の勢いは見る影もなく、フットワークも重くなり、いいようにあしらわれている。

対するエミヤは、無駄な消費を抑えて最小限の動きで立ち回っていたからか、まだまだ余裕のある戦いを繰り広げていた。

「何度も言わずなたわけっ！打ち終わりの隙が大きすぎだ！そんな為体ていたらくだから日渡提督や散っていった艦娘達が私を呼ぶ羽目になるのだろう！」

「ぐっ……ゲホッゲホッ……偉そうに……はあはあ……指導してんじやねえ……っ！」
通算13発目の面打ち。

相変わらず天龍のダメージは見て取れないが、その動きは満身創痍そのもの。

真剣勝負だというのにも関わらず、2人の姿はもう指導をする者とされる者、そんな印象を抱かせる程だ。

日渡提督の言葉が正しいのならば、この戦いも終幕が近いのだろう。

その場にいた艦娘達はそんな風に認識していた。

しかし、ここで龍驤がとある疑問を口にする。

「スタミナ切れねえ……ほんまにそれが狙いなんやろか？」

「どうしたってのさ龍驤さん？あのお兄さんには他にも狙いがあるって言いたいのかい？」

「いや、狙いつちゆうより不自然つちゆう感じやな。あの兄さん、天龍を説得するために戦ってるんやろ？それも傷付ける事のないようにわざわざ竹刀まで持ち出して」

「んー、まあ真意はわからないけど天龍を倒すつもりがないってのは確かだろうさね。じやなきや竹刀なんて使わずに、あの不思議な剣でバツサリいくだろうしねえ。そもそもお兄さんからは全く殺気みたいなものを感じないじゃないか。で、そのどこが不自然だったのさ？」

「いや、それだけ天龍の事を想って戦ってんやったら、どうしてあそこまで挑発する必要があるんやろうと思うてなあ……」

龍驤の疑問、それはエミヤの言動であった。

天龍や龍田に提督として認めてもらう。

これはその為の戦いであり、だからこそ天龍を傷つけるつもりはないと言ったのは他にもないエミヤ自身だ。

しかし、そのエミヤの口から出てくる言葉は、説得や説明とは程遠い、倉敷提督達の名前を用いた挑発ばかり。

これでは、納得させるどころか益々反感を買うばかりだろう。

そんなこと、エミヤでなかったとしても簡単にわかりそうなものなのに何故……そんな疑問が龍驤の中で首を擡げ、他に何かしらの狙いがあるのではという疑惑を生んだ。

「うーん……案外お兄さんも頭にきててさ、攻撃はしないまでも口撃くらいしてやろうなんて腹なんじゃないのかい？」

「いや、なんでやねん。確かにひねくれた兄さんやけど、そこまで幼稚でもないやろ。ま、今日が初対面やしそこまで深くはわからんけど……この喧嘩ゴタ、そこまで簡単に片付くかわからんよ」

それは艦娘の中でも古参兵である龍驤だからこそ抱いた所感なのだろう。

観察眼において艦娘随一とも言われる彼女には、この戦いの顛末がスタミナ切れで終わると思えなかった。

しかし、戦闘は既に2人だけのものであり、誰の介入も良しとしない。

今更2人の間に割って入り、エミヤにその真意を問いただすなど不可能だ。

結局、愛宕や龍驤が抱く不安や疑問など置き去りにして、2人は終結に向かって戦い続ける。

そして、その場面は間も無く訪れた。

「どうした天龍！それでもお前は倉敷朝日が誇る艦娘か！」

「ぜっぜっ……黙れ……はっ……黙れええええ！」

チアノーゼのような状態の身体に鞭打って剣を振るう天龍だったが、その剣がエミヤを捉える事はついに無かった。

闘牛士のように天龍をかわしたエミヤがその背中を軽く押しただけで天龍はバランスを失い、まるで糸の切れた人形のように倒れこむ。

必死に起き上がりとうしているのだろうが、気力が補える限界を超えたその身体が立ち上がる事はなかった。

「……もう良いだろう、君はよく頑張った」

四つん這いの状態で息を切らず天龍にエミヤは言う。

これまで散々な挑発を繰り返しておきながら、今更なにを言うのだと言い返したかったが、その言葉すら天龍の口から発する事はできない。

それに変わってエミヤは天龍の秘めたる核心に迫る。

「剣とは時として、言葉を交わすより雄弁に相手の事を語ってくれるらしい。まあ、これはとある騎士の受け売りだがね……しかし、君の剣を通してはつきりと理解したよ」

「ゲホツゲホツ……っはあはあ……っせえぞ……」

「君が戦う理由は怒りにまかせたものに見えてそうではない。そんなものを理由に戦う者が、ここまでの奮闘などできるものか。君は倉敷提督の名前にこそ反応し、とうに限界な筈の身体を突き動かしていた」

「うるせえ……はあはあ……うるせえ……っ！」

「君は倉敷提督を想うあまり、それ以外の提督に仕^{つか}える不義理を許せなかったのではな

いか？それをまるで裏切りのように捉えていたのだろうか？」

「うるせええええっ!!」

エミヤの指摘によほど思うところがあつたのだろう。

既に限界を超えてる筈の天龍は、それでも片膝をつきながらも身体を起こして慟哭した。

「なんでっ……なんでテメエなんだ！俺が、俺達がつ！あいつらを失つてどれだけ絶望したと思う!?！どれだけ泣いたと思つてやがる！それを何で……その声を聞いたのがテメエみたいな顔も名前も知らねえような他人なんだよっ！」

天龍の目は真っ赤に染まっていた。

それでも真っ直ぐにエミヤを睨みつけ、その目を逸らす事はない。

滝のような汗がそう見えるのか……エミヤの目に映つた天龍は、まるで親を探して泣き叫ぶ幼子のように見えた――

それはまるで鬼の慟哭……恥も建前もかなぐり捨て、天龍はその胸の内を吐き出し続ける。

「俺達はそんなに頼りにならねえのか?!こんな見ず知らずの他人を呼び出すくらい情けねえのか?!死んじまうその日まで、一緒に戦つてきた仲間だろうが！どうしてテメエには語りかけて俺達には何も言わねえんだよ！」

「待て天龍、彼等はそんなー」

「うるせええええ！俺は絶対にテメエだけは認めねえぞ!!」

血反吐を吐くのではと思わせる程の咆哮。

しかし、それを聞いた艦娘や日渡提督が発せられる言葉なんてひとつもなかった。

天龍の想いなど、等しく全員が胸に抱いているのだ。

声が聞きたい、顔が見たい……そんな願いなんて、何度夢に見たかもわからない。

それでも叶わない夢だから、全員は心が絶望に屈しないよう言葉にしなかったし、前を向こうと懸命に努力した。

だからと言って、誰も天龍を責められやしないだろう。

彼女の叫びは、真っ直ぐで純粹なものだからこそ、その場の全員から言葉を奪い、心に突き刺さったのだから。

しかし、急変した事態は悪い方に加速していく。

エミヤが天龍の本心を看破したことによって、天龍の理性のタガが外れてしまった。

それはエミヤですら予測していなかった事態を引き起こす。

「やっぱり……！駄目よ天龍ちゃん！それをやったら後戻りできないわ！」

「うおっ！マジかよあのバカ!」

声を上げたのは高雄型の2人。

特に愛宕は、戦闘中も言い知れぬ不安を抱えていたのだが、その不安の正体がようやく理解できた。

結果として、理解するのが遅すぎたのが悔やまれるのだが――

天龍のその身体、そこには殺意の権化と化した艦装が展開されていたのだ。

「それが……お前の辿り着いた答えか？」

「おうよ……もう後戻りは効かねえ。それに、本気の艦娘の戦いは砲雷撃戦じゃねえとな……」

「確かにオレを殺しても問題ないだろうが、基地内で仲間を巻き込む砲撃に及んだとなれば話は別だ。こんな所でそれをやれば、その後の君がどうなるかわからん訳でもないだろう？」

「つたりめーだろ？ここまで好き勝手にやったんだ……どの道、俺の解体処分は免れねえだろうさ。だがな、あの提督バカがいねえ戦場に未練なんざねえ。テメエの指揮下に入るくらいなら、ここで死ぬまで暴れてやるよ」

「……仲間は、妹はどうする？残された者の気持ちかわからない君ではあるまい？」

「天龍型をなめんな。俺がいなくなった程度で何もできなくなるような、か弱い妹を持った覚えはねえ」

会話の間にある程度の体力は戻ったのだろう、未だフラついているものの、天龍は緩

慢な動きで立ち上がる。

その顔は様々な想いを孕んだ複雑な笑みを浮かべていたが、目だけが笑っていないかった。

今にも泣き出しそうなその目は、エミヤだけを捉えて離さない。

そんな天龍から目を逸らさずに、エミヤは一言だけ呟いた。

「この、たわけが……」

エミヤの過去など誰も知らないが、彼は今の天龍をかつての自分と重ねていたのかもしれない。

まだ見ぬ人々を救うため、我が身を案じてくれる身近な人を置き去りに戦地へ赴いた。

数多くの人を救う代償に、ごく少数の人間を見殺しにした。

その果てに待っていたのは、他の誰でもない、自分自身の理想に裏切られる最悪の結末だった。

深い絶望に打ちひしがれ、意固地なまでに現実を呪い、戻る道の無い戦いへと身を投じた過去――

理由も境遇も全く違う2人だが、そこに全くのシンパシーを感じなかったと言える嘘だろう。

外野は何かを叫んでいる。

仲間を止めようと必死に声を上げるその中には泣き声すらも聞かれた。

「これ以上は見てる訳にいかない！提督命令をもって命ずる！総員、迅速に天龍君とエミヤ君の確保を——」

「やめろっ！」

叫ぶように呼びかける艦娘達の中、日渡提督は提督命令で事態の收拾に打って出ようとしたが、エミヤの怒号によってそれは制止される。

「オレに任せろと言ったはずだ。大丈夫だ、天龍は必ずオレがどうかする」

「し、しかし……」

来るなど言わんばかり伸ばされたエミヤの右手。

それはそのまま、対峙する天龍へと向けられた。

「天龍よ、いつかお前が倉敷前提督と再会する日が来る。だが今のオレの目的は、お前を含めたこの鎮守府の艦娘達を守ることだけだ。随分と焦っているようだが、倉敷提督達との再会は延期にしてみようぞ」

「はっ……そんな事は俺が終わった後で他のやつ等にも言っつてやれ。その時にお前が生きてればな」

「そうさせないためにオレがここにいるのだ。真髓を……そして真実を見せよう——」

am the bone of my sword.
目を閉ざしたエミヤ。

そんな彼を中心に蒼白い霧が巻き起こる。

それは段々と激しさを増し、まるで暴風のように天龍を始めとした全ての存在を巻き込んでいく。

魔術というものに対してあまりにも無知な面々は、突如発生した謎の現象を前にして、慌てるばかりで何をすることもできない。

そんな周りの喧騒も気に留めず、その中心に立つエミヤは詠唱を呟いて止まらない。

苛烈にして繊細で、何よりも哀しいその言葉は、これだけの暴風の中でも不思議と全員に響いていた。

「I steel is my body, and fire is my blood.
od.

I have created over a thousand blades.

Unknown to Death.

Not known to Life.

Have withstood pain to create many we

a p o n s .

Y e t , t h o s e h a n d s w i l l n e v e r h o l d a n y t h
i n g l e]

得体の知れない蒼白い霧は、もはや雲の中にいるのではと錯覚する程に体育館の中を覆い尽くし、日渡提督達からはエミヤと天龍の姿を確認する事すら困難を極めている。

そんな中、エミヤと天龍の2人だけは見つめ合うように向かい合っていた。

呆然と立ち尽くす天龍に対し、エミヤはその最期の一章節を紡ぐ。

「彼等が託したものの、その想いの何たるか、刮目して焼き付けろ！……So a s I
P r a y , U N L I M I T E D ^ア_ン ^リ_ミ ^テ_ツ ^ド_! B L A D E ^ブ_レ ^イ_ド ^ワ_ー ^ク_ス」

エミヤが閉ざしたその目を見開いた瞬間、立ち込めていた霧が粉塵爆発でもしたかのよう^にに発火した。

それは紅蓮の業火となって世界を焼き尽くし、その視界を真っ赤に染め上げる。

日渡提督や艦娘達は、その炎を天龍の砲撃によるものかと勘違いしたが、戦艦でもなければ改二にも至っていない天龍の火力ではありえない規模の炎だ。

なにより、そんな思考がまともに働く前に全員が炎に飲み込まれた。

迫り来る炎に目を閉ざし、次に目を開けた時に何が起こっているかも知らずに――

「これは一体……はっ！全員無事か!?何が起きたんだ!？」

「とりあえずは無事みたいデース……しかし、ここは何処なんデスカ!？」

「全く知らない場所なのです……こんな寂しい景色、見覚えもないのです……」

目を開ければ、見知らぬ荒野が彼女達を出迎えた。

どこまでも続く草木も生えない荒れ果てた大地、その至る所には墓標のように突き刺さった夥しい数の刀剣。

空は夕焼けに燃え、分厚い雲に隠れるように孤立した歯車の群れが、他とは噛み合わないまま孤独に回り続けている。

幻想的とはいい難い、しかしこの世のどこにもないであろう不思議な場所。

身を焼く炎に包まれた筈が、次の瞬間には見知らぬ場所に立ち尽くしているという現実。

それは全員の言葉を奪うには十分すぎる現象だった。

そんな中に、哀愁の漂う低い声が聞こえてくる。

「ここはかつてオレが行き着いた場所。終わる事のない争いの輪から抜け出せなくなつた、愚かな男の到達点だ」

声を追って視線を向ければ、小高い丘の上に声の主であるエミヤが立っていた。

その前方には他の艦娘と同様、理解が追いついていないといった顔の天龍が立ってい

た。

「これも……テメエの言う魔術だかつてやつで作った場所なのかよ？」

「ああ、そうだ。ここは私の心象世界、ここに見える全ての剣が私の武器として手足のようには操れる。天龍、お前が本気で砲撃に臨むというのなら、オレも本気で迎え撃とう」
空を見上げて呆然とする天龍に対し、エミヤは己の本気を誇示した。

もつとも、その本気とは殺意を孕んだ意味ではないのだろう。

こうして向かい合っているこの瞬間ですら、エミヤからは殺気の欠片も滲んではないのだ。

しかし、その言葉に敏感に反応するからこそその天龍型。

どんな場所、どんな相手、どんな理由だろうと、本気で戦うのなら全て関係ない。

歯車を見上げながら見開いていたその目は、既に獰猛な笑みと共にエミヤへと向けられている。

「こりやスゲエ……俺の最期の相手は鬼級なのか姫級なのかなんて考えた事もあったが、まさかテメエみたいな奇天烈野郎がその相手になるなんて想像もしてなかったぜ！
相手に取って不足なしだ！」

「オレは最期の相手として名乗りを上げた覚えはないのだがな。しかし、どうあつても止まる気はないのだろうか？」

「……ああ、止まれねえ。これが俺の最期の砲雷撃戦だ！」

こんな荒野では雷撃の類など使いようもなく、砲雷撃戦など望むべくもない。だが、天龍はここを最期の戦場と定めてしまった。

重たく鈍い鉄の音と共に、その砲口はエミヤに標準を合わせる。

「そうか……良いだろう！お前が挑むは倉敷提督や散つていつた艦娘達が未来を託した英霊だ！恐れずしてかかってこい！」

「上等だこの野郎っ！」

投影こそしないものの、やる気のエミヤ。

今の天龍を相手に、会話で説得することの無理難題を理解したのだ。

視線はフラットに天龍の全身を捉え、重心は爪先に集中して常に動き出しを意識する。

魔力回路には、今も送られてくる倉敷^{マス}提督^{ター}達からの魔力が十全に通った状態。

それはまさしく本気の戦闘態勢だ。

そして、ガチャリという音と共に天龍の機銃・単装砲へ弾が装填されーそれはとうとう火を噴いた。

轟音と共に巻き起こる砂塵と爆炎。

エミヤを人類だとカテゴリーするならば、艦娘による人類に向けての砲撃は、これが

歴史上初めての事だろう。

見守る仲間達の目も真剣さを増し、言いようのない不安に手を握りしめている。

しかしエミヤは人類である事を売り渡してまで英霊となった男だ。

そう簡単に討ち取られる程、簡単ではない。

右へ左へと縦横無尽に駆け回り、機銃の射線から身体を外し、迫り来る砲弾の雨には刀剣を射出して対応する。

既に体力の消耗が限界を超えている天龍は、その足に根が生えたように踏ん張り、まるで天龍そのものが一つの固定砲台のように火焰を吐き出し続ける。

攻防の形は攻める天龍と守るエミヤとして変わっていないが、動きの内容は先程までとは逆転してしまった。

常に動き回りながら四方に警戒を要するエミヤの額に汗が滲む。

(本来の艦娘とはこれ程のものなのか……ここが海の上だつたらと思うと恐ろしいものだ)

先程までの白兵戦から、天龍の戦力を過小評価していたことを改めた。

本来の戦いをすれば、いくらエミヤとて簡単な相手ではない。

何せ彼女達には、今日まで日本を守ってきた実績があるのだ。弱い筈などあるはずもない。

未だ直撃はしていないとはいえ、砲撃の余波で巻き起こる爆風や熱量だけでも相当なものだ。

それに紛れるように飛来する機銃の雨を捌いているのだから、エミヤの体力も白兵戦とは比べものにならないスピードで削られている。

「オラオラア！さつきまでの偉そうな態度はどうしたよ！逃げ回ってばかりで手も足も出ねえってか？そんなんじやテムエを呼んだ倉敷提督の人選も間違ってるつてもんだよなあ！」

まさしく水を得た魚の様な戦い振りの天龍。

体力こそ底をついているのだろうが、その闘志は些かの衰えも見えない。

「意趣返しとは良い性格をしているのだらうが、だがな……まだまだ甘いぞー！」

劣勢を強いられているエミヤだが、彼にも戦略はあった。

元々は弓兵である彼にとって、飛び道具の短所など百も承知だ。

特に、砲撃などの絶大な火力を誇るものになればその弱点は顕著に表れる。

つまり、距離さえ潰してしまえば、自身を巻き込んでしまう高火力の飛び道具は驚異足り得ないという事実。

それを見逃すエミヤではない。

通常の間であれば、飛来する数多の砲弾を掻い潜って天龍まで辿り着くことなど

底できることではないだろう。

しかし、エミヤにはそれを可能にする眼と力がある。

刀剣の弾幕を展開しながら、左右に弾をかわしつつ、最短距離を天龍に向けて駆け抜けるエミヤ。

後は接近戦で天龍を組み伏せるのみと思考したその刹那――

「甘えのはテメエだっ！」

2人を中心に特大の爆発が巻き起こる。

爆炎に包まれる瞬間、エミヤの眼はそれを確かに捉えていた。

その手を伸ばし、あと数歩で天龍を捕まえるというタイミング――

天龍は、その足元へとありつたけの砲撃を行ったのだ。

当然、エミヤと共に天龍も爆撃に巻き込まれる形となり、ゼロ距離のそれは深刻なダメージを2人に刻む結果となる。

「ガハツ……くっ、正気か!? そんな自爆紛いの攻撃に打って出るなど何を考えている!」

いまだ立ち込める硝煙と砂塵の中、かろうじて天龍の姿を確認したエミヤは初めて動揺を見せた。

「へへっ……正気なもんかよ。紛いどころか正真正銘の自爆技だ……けどな、どつちにしろ解体される俺にとつちゃこんなもん屁でもねえ」

咄嗟の判断で魔力による防御をとったエミヤに対し、天龍の損傷は軽微とは言えないものだった。

艤装を始め、衣装までもがボロボロになり、至る所が焼けて破れてしまっている。

身体もあらゆる部分から出血が確認でき、頭から流れる血は眼帯をつけた左眼あたりを真っ赤に染めていた。

「これでテメエは迂闊に接近できねえ。爆散して死にたくなけりや、テメエも俺を殺す気できやがれ！」

流れる血を気にも留めず、天龍は砲撃を再開する。

それはダメージを負った身体に無理を押しつけて戦っているとは思えない苛烈さでエミヤを追い詰めていく。

対してエミヤは焦っていた。

体力的にはまだ回避する分に問題はないだろう、ダメージはあるものの動きの精彩を欠く程に深刻ではない。

ただ、手立ただけが圧倒的に手詰まりだ。

天龍を倒すというのなら他にやりようなど幾らでもあるのだろうが、止めるとなると難易度が一気に跳ね上がる。

接近して拘束するとなれば、天龍は何のためらいもなく再び自爆技に頼るだろう。

天龍の身体がそれに何発耐えられるかもわからない上に、そんなやり方で天龍が戦闘不能になる事が勝利と呼べる筈もない。

(ならばオレが撃ち倒されるか？ 霊核さえ無事ならば回復の余地も……いや、ダメだな。そんなやり方で戦いを納めたとしても、それでは天龍の居場所は無くなるだろう。ならば――)

思考の末、縦横無尽に逃げ回っていたエミヤは、ある地点で足を止めた。

それは天龍の真正面。

距離的にも絶好の的になる死地で仁王立ちしたまま、微動だにしない。

「ダメエ……そんな所で棒立ちなんざしやがって何のつもりだ！ もう諦めたってのか？ 倉敷提督に託されたんだろうが！ ビビってんじやねえぞ！」

「誰が諦めるか、たわけ。なに、お前の気概に免じてオレも自爆技に賭けようと思つてな……これが真正銘、最後の撃ち合いだ、天龍！」

その手には相変わらず剣すら握られていない。

だが、幾多の死線を越えてきた天龍には、エミヤの言葉が虚言でない事など良くわかっている。

これは、嘘やハツタリを言う者の顔ではないと本能が告げるのだ。

「こんなとんでもねえ場所に連れてきた拳句、まあだ隠し球があんのかよ……良いぜ！

俺の最後の全力だ……食らいやがれ！」

それは、嘘偽りなく天龍の持てる全ての力を注いだ最後の砲撃なのだろう。

動かないエミヤを仕留めるには十分すぎる物量の砲弾。それがエミヤ一人に吸い寄せられるように飛来する。

外野にはエミヤの考えなどわかるはずもなく、スローモーションのようなその光景を祈るように見つめるのみ。

この距離、タイミングで回避などできる間に合わない事は全ての艦娘にも理解できていた。

「俺の……勝ちだああああ!!」

天龍の咆哮と共に、その全ての弾は余す事なくエミヤへと着弾する。

鼓膜を突き破る程の轟音、人間一人を抹殺するには余りに過剰すぎる砲撃。

それを見守る日渡提督や艦娘達の頭には最悪の結果だけが思い浮かぶ。

エミヤの言葉やその能力に胡座をかいて、こうなることを止められなかった事への後悔なのか、日渡提督は立ち上る黒煙を見つめて拳を握りしめている。

艦娘達も、徐々に認め始めていたエミヤという男が死んでしまった現実と、仲間である天龍が一線を超えてしまった事の悲しみから悲痛に顔を歪ませていた。

——しかし、これで終わらないからこそ、エミヤは英雄なのだ。

「なっ、なんだってんだ!? 身体が……動かねえ!」

エミヤの方にばかり気を取られていた一同が、苦悶を訴える天龍に目を向ける。

そしてその姿に驚愕した。

「アレは……chain^鎖デスカ?」

一同が見つめる先、そこには足元から飛び出した鎖に拘束され、雁字搦めになった天龍の姿が。

振り払おうと足掻く天龍だが、艤装すら満足に稼働できない状態だ。

「はあはあ……どうやら……この勝負はオレの勝ちらしいな……」

全員の心臓が跳ね上がる。

黒煙の晴れていくその向こう、そこに見えたのは爆散したと諦めていた真紅の外套だった。

桃色の花卉に守られながらも、身体は土埃や煤にまみれ、口元には血が滲んでいる。

片膝をついて疲弊するその姿は、どこから見ても満身創痍そのものだが、それでもエミヤは生きていた。

「何をしやがった!? 身体が動かねえどころか艤装も稼働しねえ! また手品の類か!」

「それは『天の鎖』といってな。その鎖に捕らわれた者は無条件に自由を奪われる、神性の高い者なら一層効果は絶大だ。もつとも、それは模造品でランクも段違いに下げたあ

るからな……全快の艦娘なら容易く千切れるのだろうが、今のお前なら逃れる事はできない」

「神性だあ？俺のどこが神様だっつーんだよ!？」

「君達は軍艦の化身だろう？軍艦といえば武神や護国の象徴として神仏と同様に祀られている。同様に、軍艦の化身である艦娘の神性も高いのだろうさ」

桃色の花卉が散っていく中、いつものニヒルな笑みを浮かべて天龍を見据えているエミヤ。

彼が投影したのは『天の鎖』と呼ばれる宝具。

それは彼の英雄王が所有する宝具のひとつにして、神が造りし神造兵装と呼ばれる兵器。

本来ならば、あらゆる対象を拘束し、その自由を無条件に奪う宝具であり、その拘束力たるや大英雄ヘラクレスさえも容易に戦闘不能に陥れる威力を誇る。

とは言っても、エミヤが投影したのは明らかな劣化版であり、通常の鎖に『天の鎖』が持つ効力を付与した程度の物ではない。

だが――

（魔力の殆どを持つていかれたか……あれだけランクを落としてもこの有様では完璧な複製など不可能だろうな。やはり神造兵装、しかも剣以外の投影ともなれば無理もな

い。靈核が砕けなかっただけでも良しとしよう……)

余裕そうに天龍へと語りかけたエミヤであったが、その実、深刻なダメージを抱えているのはエミヤの方だった。

神造兵装の投影には莫大な魔力を必要とする。

それも、剣の投影を得意とするエミヤにとつて、鎖の宝具を投影する負担は計り知れないものだ。

エミヤは強気に言っていたものの、ランクを下げた投影したのは天龍が弱っていたからではなく、本物をそのまま複製すれば瞬く間にエミヤ自身が消滅してしまうからに他ならない。

現に、エミヤの靈核は今にも砕ける一歩手前というところまで深手を負っていた。

澄ました顔をしていても、この勝負は崖っぷちのギャンブルであり、こうして成功した事が奇跡に近い結果だと言えるだろう。

「ちっ、どつちにしろこんな鎖が無くても指一本動かさねえ……テメエの勝ちだ」

「当たり前だ……と、言いたい所だがな。今回はたまたまオレに有利だったに過ぎん。これが海の上で戦っていたのなら結果は逆だった事だろうさ」

「下手な慰めはいらねえ……どの道、こんな場所に引き摺り込まれたら海だろうが山だろうが関係ねえだろ」

「どうだろうな……しかし、これだけやれば気も済んだろう?」

「……ああ、全部出し切ったからな。負けは気に入らねえけど悪い気もしねえ」

エミヤはゆっくりと立ち上がって天龍へと歩み寄る。

一步を踏み出すたびに全身を引き裂かれんばかりの苦痛が身体を走るが関係ない。

そして、天龍の前にたどり着いたエミヤは、再び腰を落として天龍の目を見つめた。

「勝った自覚はないが、君が負けを認めるといふのならオレの話を聞いてはくれないか?」

「……なんだよ?」

「倉敷前提督の事だ。あの慰霊碑に触れた時、艦娘達が語り終わったその最後……オレは倉敷前提督からも言葉をもらったのだ」

倉敷前提督の名前に、鎖に繋がれたままの天龍の身体がビクリと反応する。

しかし、俯くようにして目を逸らしたものの、エミヤの言葉を遮る様子はなく、その沈黙を受け取ったエミヤは言葉を続けた。

「彼はオレにこう言った、どこの誰かは知らないが、君達の事を頼む、と。言葉は行儀のいいものとは言えないが、オレを戦いに巻き込む事を申し訳なさそうにしていたよ。この意味がわかるか?」

「……わかんねえよ……全然わっかんねえ……っ!」

「たわけ……彼等はな、死んでも尚、残してきた仲間を救おうと必死に足掻いているのだ。死者である自分達ではどれだけ手を伸ばしても生者である君達に届かない。だからこそ、同じ死者であり……英霊であるオレを呼んだ」

エミヤは守護者という言葉を飲み込んだ。

ここにいるエミヤは抑止力の意思とは関係のない理由で戦おうとしている。

それは正しく英霊としての姿であり、同時に今の彼は彼女達のためだけの守護者なのだ。

「どこの誰かもわからない相手にさえ助けを求めろのだ、どれだけ必死かも容易に想像がつく。だがな、そんな必死な想いだからこそ、儀式も踏まずに英霊を呼ぶなどという奇跡を起こしてみせた。君の仲間達は強い……誇りに思うといい」

天龍の身体は小刻みに震えていた。

俯いた顔は前髪で隠れて見えないが、その足元の乾いた大地を濡らす雫は、きつと天龍の涙なのだろう。

「つぎけん……そんなに心配ならさつさとくたばってんじゃねえよ……死んでまで余計な世話を焼きやがって……」

音も無く天龍を拘束していた鎖は消滅した。

身体の自由を取り戻した筈の天龍だが、その身体は力なくへたり込んで動こうとはし

ない。

そんな天龍の肩に、エミヤの手がのせられる。

「今一度問おう。天龍、オレを君達の提督として認めてくれないか？君達がそれを認めてくれるならば、倉敷前提督に変わってこの戦争を終わらせてみせる。君達の誰一人として沈ませやしない」

肩に乗る大きな手からは、力強さと暖かさを感じる。

滲む視界の向こうには、真っ直ぐな瞳で天龍を見つめるエミヤの姿。

その姿に重なるのは、在りし日の倉敷提督――

『「こんなくだらねえ戦争は俺達でちやつちやと終わらせんぞ。だから、その日までは何があっても沈むんじゃねえ」』

水平線を見つめていた彼の眼は、どこまでも力強く真っ直ぐで――

「お前みたいな眼をしてたっけなあ……」

「……なんの事かね？」

「認めるつつつたんだよ。あんたになら、あいつ等を任せられる……あいつ等の事、頼んだぜ」

天龍は、涙を潰すようにその眼を閉じて微笑んだ。

最後まで過去に囚われ、前に進めなかつた天龍が、やっとエミヤを認めたのだ。

しかし、その未来に自分が立っている姿は描けていなかった。

「まるで他人事のように言うのだな」

「これだけやっちゃったらな……あんたが何と言おうと軍の処分は絶対だ。かと言って倉敷提督達を守ろうとしたこの国と喧嘩するつもりもねえ……俺は大人しく処分されるさ。なあ、最後にひとつ、頼み事があるんだけど聞いてくれねえか？」

「……聞くだけなら聞きさ、言ってみたまえ」

「あんたは……俺達の提督になるんだよな？」

「無論、そのつもりだが？」

「ならよ……あんたの手で俺を処分してくれねえか？俺の最期の相手で倉敷提督達が未来を託した男なんだ、そんな奴の手で逝くなら悔いもねえ……なあ、頼むよ提督」

奇しくも、天龍はこの鎮守府の中で誰よりも先にエミヤを提督と呼んだ。

その言葉には確かな信頼と、同じくらいの悲壮感が籠められており、その命の終わりを悟らせるだけの重さを感じるものだった。

「それが……君の望みか？」

「ああ……」

「そうか……ならば応えよう」

エミヤは静かに立ち上がってその手を振り上げた。

遠くでは艦娘達の泣き叫ぶ声が聞こえる。

誰もが天龍の愚行を止めようと、声の限りに叫んでいた。

俯く天龍が目を向ければ、日渡提督が必死にこちらへと駆けてくるのが目に入って、何故だか天龍は笑いそうになる。

(騒がしい奴等だったけど面白かったぜ……悪いな龍田、後は任せた……)

最後にチラリと見えた龍田の顔は、彼女らしくない真面目な顔で、それが胸の奥をチクリと痛める。

それでも、思いの丈をぶつけて力の限りに戦った天龍は満足気に目を閉じた。

そして、エミヤからの処分が無慈悲にも下される――

「こんの……たわけがっ!!」

英霊エミヤ、渾身のゲンコツが天龍の脳天にクリーンヒット。

それは数十発に及ぶ竹刀の殴打を軽々と上回る激痛を持って天龍を襲った。

その凄まじい打撃音に艦娘達はドン引いており、各々が『うわあ……』という顔を浮かべている。

日渡提督に関しては芸術的なまでのヘッドスライディングを披露する始末だ。

「つてええええ!!このっ……何しやがる!!」

「君が処分を望んだのだろう?それに応えたというのに何を怒るのだ?」

「処分つっつーのはそういう意味じゃねえ！俺は解体されんだぞ？つまり死ぬんだよ！ゲ
ンコツで済むような軽い話じゃねえだろ！」

「だからたわけだと言うのだ。私がおこにいる理由は君達を生かす為だと何度言わせる
つもりかね？良いか天龍、死を覚悟するのは勝手だが、死に急ぐ事は許さん。覚えてお
け、これは提督命令だ」

提督命令という言葉に天龍は押し黙る。

脳天はヒリヒリと痛むし、理由の不明な涙は出てくるが、エミヤのその言葉は不思議
と胸に落ち着いた。

「つたくよお、とんでもねえ提督もいたんもんだな」

「こちらの台詞だ。着任初日に殺されかけるとは、どうやらとんでもない職場に連れて
こられたらしい」

向かい合う2人に剣呑な空気は無い。

互いに苦笑いを浮かべながらも、それはまるで憑き物の落ちたような晴れやかな表情
だった。

その時、突如として世界が揺れ動く。

大地震のような揺れと共に、空はヒビ割れ、歯車も地に落ちんばかりに鳴いている。

（『天の鎖』の影響か……固有結界の維持も限界のようだな）

それはエミヤの魔力切れによる固有結界の消滅を意味していた。

無論、エミヤが現界する分の魔力こそ残っているものの、供給される魔力ではここまでが現界らしい。

「時間のようだ、立てるか？」

差し出された手を握る天龍。

その手はやはり大きく、暖かかったー

空が降るようにして世界が終わる。

ガラス細工のように散っていく世界の後に残ったのは、皆が見慣れた体育館。

先程までの喧騒が嘘のように静まり返ったその場所は、風に揺れる木々の声と、遠くで響く波音だけがやけに大きく聞こえていた。

「2人とも無事かい!？」

そんな2人の元へと日渡提督が駆け寄る。

よほど心配をかけたのだろう、顔面蒼白のその表情は、普段の余裕など全く感じられないほどに弱々しく見える。

「日渡提督……さつきは、怒鳴っちゃまって悪かった。その上、あれだけやかした挙句に生き恥晒して戻ってきちまって……なんつったら良いか……」

日渡提督に頭を下げる天龍は、さつきまでとは別人のようにしおらしくなっていた。

「いや、僕の方こそ謝らなければならぬ。君にとつてこれ程までに大切な事を独断で決定してすまなかつた。君達を想つての事だつたのに、君達を傷付けてしまふとは……全く情けない限りだ。申し訳ない」

言うなり、日渡提督が深々と頭を下げた。

それは艦隊司令部本部の提督が、こんな小さい鎮守府の艦娘に対してとる行動ではなく、それがどれだけ艦娘を想つた上での行動かを悟らせるには十分な謝罪である。

「ちよ、やめてくれよ日渡提督！あんたが頭を下げる必要はねえつて！それに……あんたがするべきは謝罪よりも処分だろ。俺の今後は日渡提督の判断に任せるからよ」

「そうはいかないさ。君の本音を聞いて、僕の行動がどれだけ早計で軽薄だつたかを思い知つた。今回の件において、その全ての責任は僕にある。故に、天龍君の処分は不問とさせてもらふよ」

天龍の必死の懇願をもつて顔を上げた日渡提督だが、その表情は相変わらず申し訳なさでいっぱいという雰囲気を感じ出している。

そんな態度、自分のような末端の兵士に向けて良いのかと驚愕する天龍だつたが、さらに理解できないのはその言葉だ。

「不問っ!?!いやいや、本当にどうしちまつたんだよ!?!俺が何をしたか見てたよな? 日渡提督に暴言吐いた挙句、仮にも人間相手に砲撃したんだぞ!?!」

「あー……いや、不思議なことにそんな記憶はないなあ。夢でも見てたんじゃないのかい？それに、天龍君が砲撃に及んだ証拠なんてどこにもないじゃないか」

言われた天龍が呆気にとられた顔で辺りを見回す。

そこに映るのは見慣れた体育館と見慣れた仲間達。

その何処にも損傷はなく、確かに砲撃の痕跡は見取れない。

固有結界なんてもの、誰もが始めて見たのだ。

あれを現実として受け入れると言うのなら、確かに夢でも見てたと判断する方が気楽だろう。

「それにねえ……ここで判断を誤ると僕の今後がとて心配だからさ、大人しく言う事を聞いてもらえないかな？」

別の意味で顔を蒼くした日渡提督が指差す先、それを追うように振り返ってみれば、何故か両手に干将・莫耶を握りしめたエミヤがこちらを見て難しい顔をしていた。

「ふむ……確かに戦闘の痕跡が無い以上は何を処分するのだという話にもなるだろう。日渡提督がそう言うのなら何も無かったのだろうな」

そう言うのと、エミヤの手から剣が消える。

「おい……あのヘンテコな場所を作ったのはこれが狙いだったのか!？」

「狙いとは人聞きが悪い。気遣いのできる男と言ってもらいたいものだな」

冷や汗をダラダラと流す天龍を嘲るあざけように鼻で笑うエミヤ。

この結果までを見越して戦っていたとすれば、こいつの眼にはどこまで先が見えているのだと戦慄する日渡提督。

もう話についていけないと、エミヤ達をそっちのけで何かを密談する艦娘達。

「まあ、なんつーかよ……あんたのおかげで死にぞこなったんだ。こうなりや最後まで付き合ってもらうぜ、提督！」

いっそ開き直ったのだろう。

困惑の色は消えないままだが、それでもニカツと笑う天龍が右手を差し出す。

「お互い様だ。ここままで好きにやったのだ、今後の活躍に期待させてもらおうか」

その手を握り返し固い握手を交わす。

その上限など知る由もないが、ここに始めて『絆の力』が誕生した。

そしてもう一人、エミヤが語りかける相手——

「さて、君の姉はこう言っているが、君は納得してもらえたかね？ 龍田」

それは壁際でニコニコと笑顔を浮かべる天龍型二番艦の龍田。

戦闘中もいつさい口を挟む事はなく、手出しもしなかった天龍の妹だ。

「ああ、私は天龍ちゃんが納得したのなら何も言う事はないですよ？ これからよろしくね、提督さん」

甘ったるい程に穏やかな声で龍田はエミヤを認めた。

しかし、その声とは裏腹にエミヤの心中は心労を抱えていたのだった。

(良く言ったものだ……戦闘中、絶えず私へと殺気を振り撒いていたというのにな。いつ背後から襲われるかと肝を冷やしたが、これでひとまずは安心できる)

強敵とは別の意味での底知れない恐怖を抱きながらも、エミヤは胸をなでおろした。これをもって、やっと危機感から解放されたエミヤ。

だからこそ、そこに忍び寄る脅威に反応できなかったー

「Heeeeeey！テイトークー!!」

安心しきって油断したエミヤの腹部に、どこからともなく突進した猪^{金剛}。

その勢いのまま、エミヤの身体を吹き飛ばしてマウントポジションを取った。

これに殺意がないのなら意味不明である。

「こ、金剛……そこを退け……いや、待て……内臓が……内臓が面白い具合に……」

「私達もDiscu^話ssi^合on^いして決めたネ！全員、エミヤさんを提督として認めマース！」

戦闘中も見せなかつた苦悶を浮かべるエミヤを他所に、金剛は天真爛漫に宣言した。

「君達は……納得できたのか？いや、その前に君はそこを退く気はないのか!？」

「Yes！身を呈して天龍を助けようとしたエミヤさんを見て、信用できない筈がない

ネ！私、釘付けだったヨ！」

「私の分析によれば、エミヤさん程この鎮守府に相応しい提督はいないという答えが出ました。これから宜しくお願いしますね、提督」

「いやー、痺れたでー！これはうちも負けてられへんなあ！これからよろしゅうな、提督さんー！」

「密輸船で見た時はこうなるとは思わなかったけどねえ、出会いっつてのは不思議なもんだよー！よろしくね、提督！」

「ふふつ、クールに見えて意外と熱い人だったんですね。高雄と鳥海が頼りにする訳だわ、これから宜しくお願いしますね、提督さん」

「この摩耶様がいる鎮守府の提督になるんだ、大船に乗ったつもりでいろよな！」

「天龍さんの事、ありがとうございました。あの時の司令官さん、とっても格好良かったのです！電達の事、宜しくお願いしますね」

「Xoporo、良いものを見せてもらったよ。これからよろしくね、司令官」
馬乗りになられたエミヤを囲むように、艦娘達からエミヤを認める言葉がかけられる。

距離感だつてわからない、英霊というものも理解できていない、それでも、彼女達の眼は暖かくエミヤを迎え入れていた。

そんな艦娘達の言葉に目を見開いて驚くエミヤ。

彼が決死の覚悟でとつた行動、そしてそれを託した倉敷提督達の想いは、ここに実を結んだ。

「ふっ……ならばその期待に応えましょう」

金剛を無理矢理ひっpegがしたエミヤは優雅に、余裕を持った佇まいで立ち上がり、何にも気後れする事なく宣言する。

「私が着任する以上は一人も沈ません。これから先、何があつてもだ。その上で勝つぞ、この戦い」

「了解！」

息の合った敬礼で応える艦娘達。

ここに、壮絶を極めた着任初日は幕を下ろした。

絆が欲しけりや胃を掴め

鎮守府の朝は早い。

それは前線で戦う艦娘達や、指揮を取る提督であつても関係のない共通事項。

午前6時には起床、総員起こしのアナウンスで鎮守府の1日は始まる。

その後、身支度を済ませて執務室へと集合。

当日の任務確認や情報伝達、朝食、装備点検などを済ませて8時には活動を開始。

夜間哨戒に出ている艦娘達も午前5時には帰港し、鎮守府のメンバー達と共に食事や補給を済ませて休息につく。

それがこの鎮守府のルーティーンだ。

今朝も早くから、校舎内の至る所に取り付けられた歴史を感じるスピーカーが1日の始まりを知らせている。

『マイクチェック、ワン、ツー……起床時刻になりました。支度を終えた艦娘は、執務室まで集合して下さい』

天気は快晴。

昨夜の喧騒が嘘のように爽やかな朝だ。

「おや？おはようエミヤ君。随分と早いお目覚めのようだけど、ちゃんと休めたのかい？」

時刻は午前6時手前、執務室へと最初にやってきたのは日渡提督。

出迎えたのは来客用のソファで足を組みながら新聞のようなものに目を通すエミヤなのだが、エミヤは最初にやって来たのではなくて、元からそこにいた。

「おはよう。おかげで昨夜は静かに過ごさせてもらつたよ、身体の方も問題はない。日渡提督こそ気苦労が絶えなかつただろう、十分な休息はとれたのかね？」

「はは、さすがに昨日は疲れたみたいだね、久しぶりに深く眠っていたらしい。おかげで疲労はすつかりさ。ところで、妖精さんと会わなかつたかい？エミヤ君を起こしに行くよう頼んだんだけど、この様子じゃ入れ違いだったかな？」

「ああ、それはすまない。生憎と、私はずっとここにいたのでね。当てがわれた部屋にはいなかったのだ。きっと妖精さんも私が部屋にいないとなれば執務室へとやって来るだろう」

そう言うと、エミヤは手に持った紙を机の上に置いて首の凝りをほぐすように頭を回した。

「部屋にいなかったって……ずっとここにいたのかい？休めるような場所ではなかつただろう？」

「英霊には基本的に睡眠や食事が必要なくてね、魔力消費を抑えて過ごしていれば自然と回復する。食べる事も眠る事もできるのだが、昨夜はこれを読んでいて気付いたら朝だった」

エミヤの前に置かれたテーブル、その上にはエミヤが読んでいたという書類の山が置かれていた。

「これは……戦闘記録だよな？こっちは艦娘のステータス記録に資材の管理表……これを夜通し読んでいたのかい？」

「昨夜、休む前の金剛に頼んで出してもらった。戦闘記録については2ヶ月前の物から目を通したが、随分とブラッくな運営をしているものだな」

2ヶ月前といえば、倉敷提督が殉職した時期と一致する。

それ以前に轟沈した者、倉敷提督と共に轟沈した者、その時期こそ個人差はあるのだが、倉敷提督が殉職してからの勤務状況は劣悪を極めていた。

当たり前のように艦娘の休日はなく、昼夜を問わずに出撃の繰り返し。

かろうじてシフト制度を取り入れているのだろうが、隔週入れ替わりで昼と夜をローテーションしているのみで工夫を凝らしている様は見受けられない。

「こんな管理体制で良く士気を保ってこれたと感心するよ。英霊と違って彼女達は食事も睡眠も必要とするのだろうか？ならば、休息も取って然るべきでないのかね？」

「その通りだとも。以前までは倉敷提督が出撃シフトを組んでいて、それに応じて艦娘にも休日割当てられていたんだけどね……今の人員ではそれができないのが現状だ」「ふむ、目下の課題が増えたといったところか……まあ良いだろう。ところで日渡提督、これからの予定と私の身分についてはどうなっている？」

「エミヤ君には提督業務の把握を目標に今日から5日間の研修をしてもらうよ。その時までは僕もここに滞在するし、それまでに君の身分についても揃えておく。エミヤ君にもいくつか記入してもらおう書類があるからそのつもりでいてくれ」

「5日とは随分と短く感じるが……軍事経験もない者が5日で提督に着任するような特例を押し通せるものなのかね？」

「予定ではエミヤ君の人物設定は海外派遣されていた僕の指揮する特殊部隊の所属という事で通そうと思っている。こんな時代だからね、海外の事情を細かく入手する事は不可能だ。そこから生還した人間となれば軍部における信用もある程度は保証されるだろう」

「これはまた無茶な設定をしてくれたものだな。まあ、日渡提督がそれで通せるというのなら一任するがね」

「もちろん、上層部の人間にはある程度の説明と面接なんかが必要になってくるけど……そこはエミヤ君にも頑張つて乗り切ってもらうことになる。こちらで用意する資

料通りに話を合わせてもらえれば問題はないけどね」

「具体性が皆無だな……善処はするとしよう。では、本日の業務に取り掛かるとするか」
書類の山を整理しながら、やっと明るくなってきた外を見る。

小鳥のさえずり、木々の漣、穏やかな海、そのどれを取っても戦争中とは思えない平和なものな風景。

柄にもなく今日という日に何か良い事でも起きそうな予感すら感じるエミヤだったが――

歩く爆心地の登場でそんな風情漂う朝の平穏はブチ壊される。

「Good morning!! あーっ！ エミヤ提督やっぱりここにいたのネ！ 部屋まで起こしに行ったのに不在だったので探し回ったデース!!」

『助けてくださいであります……金剛さんのバーニングが止まらないであります……』

執務室だというのにノックもしないどころか、ドアを破壊する勢いで入室してきた金剛。

その肩には、しがみつくようにして息を切らす妖精さんの姿。

「お、おはよう金剛君……今朝は随分と元気がいいね？ 何か良いことでもあったのかい？」

「Good morning、日渡提督！ 今日からエミヤ提督との鎮守府生活が始まる

と思うとワクワクして寝てられなかったデース！あつ、日渡提督の妖精さんとエミヤ提督の部屋の前で鉢合わせしたので捜索活動のHelpをしてもらったネ！」

『ヘルプ……ヘルプミーであります……』

捜索活動とは何だと聞きたい気持ちもグツと堪えるエミヤと日渡提督。

妖精さんの顔を見れば、おそらく知らぬが仏の案件である事は察するに容易い。

「ど、どうやら手間を取らせてしまったようだ。すまなかつたな金剛、それと妖精さん。明日からは部屋で休ませてもらうよ」

「問題 nothing！明日からもエミヤ提督の目覚めはこの金剛にお任せネ！」

「いや待て、私は特に朝が弱いという訳では……」

「遠慮はいりませーン！エミヤ提督は私が起こしに行くまで時間を気にせず休んでいてくだサーイー！」

『エミヤ提督、諦めるであります。残念ですが金剛さんは食らいついたら離さない系の艦娘であります』

ああ、穏やかな朝はどこへ……

休みも無く働いているとは思えないテンションの金剛に戦慄するエミヤ。

明日からの朝を思うと、まだ仕事前にも関わらず不思議な疲労を感じるのであつた。

「あつ、まだ皆さんも来ないデースし、Morning teaでもどうデスカ？」

時刻はまだ6時丁度。

艦娘達が全員揃うまでは時間に余裕がある。

「紅茶か……せつかくだ、私が用意しよう。日渡提督も紅茶で構わないか？」

「え？そりゃあ紅茶でも緑茶でもありがたくいただくけど……エミヤ君はそんな事もできるのかい？失礼かもしれないが全く想像できないなあ」

「そこまで言われると心外だな。縁あつてこういった事には慣れていてね。茶葉によつてもクオリティは変わってくるが、それなりの物を用意させてもらうさ」

そう言うのと、金剛が用意していた茶葉やティーカップを受け取り給仕スペースへと入っていく。

数分もすれば、執務室は上品な紅茶の香りで満たされた。

「3、2、1……良し」

温められたティーカップが各々の前へ並べられ、そこに紅茶が注がれる。

柔らかな湯気が立ち上り、それに乗って芳醇な香りが鼻腔をくすぐる。

「Wow……いつもの茶葉なのに香りが全然違いマース！まるで高級品で入れたみたいネー！」

「うん、味も深みがあつて美味しい。何か特別なものでも入ってるのかい？」

エミヤから出された紅茶に驚く2人。

特に金剛は紅茶に対して一家言あるのか、食い付き方が尋常ではない。

「特別な事は何もしていない。紅茶に限らず茶葉という物は単純にお湯で抽出して飲めば良いという訳ではないのでね。適切な量と温度、蒸らし時間、それを飲む時間などを考慮して淹れば自然と上質な物ができる。例えば、朝に飲む紅茶となれば目覚めを促し、尚且つ内臓に負担をかけないよう少し緩い温度で濃い目の物を用意するのが基本だとかね」

ソファに腰掛けて得意気に説明するエミヤ。

日渡提督は苦笑し、妖精さんは何やらメモを取っている。

金剛に至ってはどこか惚けたような目でエミヤを見ながらトリップしていた。

「おっはよーさん！ん、なんや？朝から紅茶とは金剛も好きやなあ」

「おはよー。今日もいい天気だねえ、花見酒にでも洒落込んでみるかい？」

香りに釣られたいのか、軽空母の2名が開けっ放しの執務室へと入室してくる。

「す、好きだなんて龍驤は大胆デース！私達は昨日会ったばかりなのに……で、でも好きじゃないって訳では……やっぱり時間が……」

「いや、何を言うてるん君？」

音に反応する往年の人形のようにウネウネと動く金剛と、それに氷点下の視線を向ける龍驤。

多忙が行き過ぎてとうとう致命的にどこか壊れたのかと頬を引きつらせている。

「おはよう隼鷹。花見酒は遠慮するが、紅茶で良ければご馳走しよう。朝のミーティングまで時間があるようならいかがかな？」

「えっ!?この紅茶、エミヤ提督が用意したのかい!?てつきり金剛さんが淹れたのかと思つたよ……」

「君もその反応か……私にとっては戦闘よりも給仕の方がよほど好ましいのだがな。で、紅茶はどうする？」

「うーん……ありがたいけど遠慮しとくよ!ミーティングの後は全員で朝飯だからねえ」

時計の針は6時15分を指している。

そろそろ執務室へと艦娘が集まってくる頃合いだ。

隼鷹にとつても執務室を満す紅茶の香りは魅力的だったが、ゆっくり紅茶を楽しめる時間なさそうなので辞退した。

そうこうしている間にバタバタと艦娘達が集まってくる。

「よし、これで全員集まったね。では、本日のミーティングを開始する」

ミーティングを取り仕切るのは日渡提督。

今は見習いという事で、エミヤはその様子を後ろから見学している。

紅茶の残り香は執務室に漂ったままだが、全員の表情は真剣そのもの。

あれだけハイテンションだった金剛ですら、日渡提督からの指令に直立不動で耳を澄ましていた。

内容は夜間哨戒の報告や資材の回収状況、本部や他鎮守府からの伝達、日中の哨戒ルートや資材ノルマの伝達などだ。

幸いな事に、昨夜の戦闘報告はなかったよう夜勤組も比較的穏やかな表情をしている。

簡単な質疑応答なども含め、時間にして40分、特に大きな作戦命令も無く午前7時にミーティングは終了。

「これにて本日のミーティングは終了だ、今日も誰一人欠けることなく1日を終わってくれ」

「了解！」

「では各自、食堂で朝食を済ませてくるように。僕達も追って向かうよ」

敬礼の後、執務室から出て行く艦娘達。

その背中を見送ってから日渡提督はホワイトボードや資料などを片付けていく。「これが一連の朝の風景なんだけど、どうだったかな？」

ミーティングで報告された内容を打ち込んでいるのだろう。

提督用の机に置かれたパソコンを操作しながら日渡提督はエミヤに尋ねた。

「どうかと言われてもね？教官の真似事ならば経験はあるが、提督となると畑が違う。しかし参考にはなったよ、無駄のないミーティングだった。艦娘達の気構えも好感が持てる」

「それなら良かった。僕が横須賀へ帰ったらこれらの仕事はエミヤ君にやつてもらわなきゃならないからね、今は流れを掴んでくれれば良いよ。内容については今日から必死で覚えてもらうけど」

そう言うと、日渡提督はパソコンの電源を落とした。

「さて、そろそろ僕等も向かうとしようか」

「向かう？どこへ向かうのだ？」

「食堂だよ。食事はなるべく全員が揃って食べるっていうのがこの鎮守府のしきたりらしくてね」

「英霊には食事の必要はないと言った筈だが？」

「でも食べる事も眠る事もできるんだろう？同じ食卓を囲むのは団結力の向上にも繋がる、これもこの鎮守府での仕事だと思ってエミヤ君にも参加してもらうよ」

そう言うのと同時に、日渡提督はエミヤの背中を押して執務室から連れ出した。

食べるという行為に強い執着がある訳でもないエミヤは戸惑ったが、同じ釜の飯を食

べるといふ行為は、摩耗した記憶の中でも懐かしさを感じるものであり、澁々ながらも日渡提督に同行する。

そうして歩いていると、渡り廊下を通った先に給食室という札が付けられた部屋が見えてきた。

中からは艦娘達の話し声が聞こえてきて、朝の団欒を楽しむ様子が伺える。

「Hey、エミヤ提督！こっちの席を空けておいたネ！日渡提督も一緒に食べまシヨウ！」

中は給食室という札からは想像していなかった内装になっており、それは小さな定食屋のように改装されていた。

カウンターの奥には厨房設備が見え、テーブル席が何組か設置されている。

各々が自由な席で朝食をとる中、奥のテーブルに座る金剛がエミヤ達に向けて手を振っていた。

「ありがとう金剛君に霧島君、エミヤ君もこっちに座らせてもらおうとしよう」

「あ、ああ……それ良いのだが……」

何名かの艦娘に声をかけられながら金剛達のテーブルに座るエミヤ達。

しかしエミヤにはそんな団欒を楽しむような気配は無く、むしろ険しい顔をしている。

「どうかされましたかエミヤ提督?」

「……すまないが霧島、君達が食べているソレは?」

「ああ、これは本部からの支給品です。エミヤ提督達の分もあちらに用意してありますので、あの中からお好きな物を選んできて下さい」

「浮かない表情のエミヤに疑問を覚えたものの、霧島はとりあえず朝食の用意について案内した。

言われるままに視線を移した先……それを見てエミヤの顔は一層険しくなる。

「日渡提督……これはどういう事なのだ?」

「どういうって……軍の要請で近くの惣菜工場に支給してもらってる食事だけど?」

そこにあつたのはビニールに包装された惣菜。パンやプラスチックの容器に入ったサラダ、レトルトの麺類や手作り感の皆無な正三角形のオニギリなどが並ぶバットだった。

「あそこに立派な厨房設備があるように見えるのは私の気のせいかな? 日夜、身体を酷使する彼女達の食事としては偏りすぎだと思ふのだが……たまたま今日だけは配送で済ませたという訳ではないのだろうか?」

「ああ……あの厨房設備は現在使われてないんだ。人員不足もあつて食事を作れる余裕がなくてね。前までは食事担当の艦娘もいたんだけど……」

「休息の件もそうだが人員不足にかまけて福利厚生を疎かにするのは関心しないな。ましてや駆逐艦の艦娘など育ち盛りだろう、こんな物ばかり食べさせているとは看過できん！」

「ちよ、ちよつとエミヤ君!？」

何がエミヤのスイッチを入れたのだろう。

ズカズカと厨房の中に入ってしまったエミヤは、あらかたの設置を確認した後、日渡提督に詰め寄るように宣言した。

「本日の予定はどうなっている？」

「どうしたんだい!?!今日は近海の深海棲艦の艦種やその特徴、艦娘によって異なる性能や運用の違いについて覚えてもらう予定だけど……」

「却下だ、それについては既に頭に入っている。ならば今日は自由にさせてもらうぞ?それと夜間哨戒の艦娘を一名、午前中のみ私につけてもらう」

「どちらが上司かわからない光景。」

しかもエミヤは提督として必要最低限の艦娘についての性能を覚えたと言いつつ。

当然、日渡提督は目を丸くする。

「待ってくれ!覚えたって、たった一晩で敵艦の特徴や特性を!?!艦娘の運用についても覚えたって言うのかい!?!」

「信用ならないのならばこの場で説明した方が良いか？まず近海で確認されている深海棲艦だが——」

絶句する日渡提督やそれを唾然としながら見守る艦娘をよそに、エミヤはスラスラと敵艦や艦娘について説明していく。

その説明のどこにも不備はなく、なんなら仮想の戦闘状況に応じた適切な艦隊運用例まで提示してみせた。

その様はベテラン提督とまではいかないまでも、提督業務をこなす上でなんら不足ない程度には有能である事を物語っている。

「——と、これくらいで納得してもらえたかな？」

「す、凄い……本当に一晩で覚えてしまうとは……でも、自由にさせてもらうって言っても何をするつもりかくらいは報告してもらわないと」

「それは昼にはわかる事だよ。さて……昨夜の任務に出ている者の中で私に付き合ってくれる者はいるか？心配しなくとも午前中には終わる仕事だ、睡眠時間を削るような事はない」

呆気にとられる日渡提督を言いくるめ、艦娘達に目を向ける。

夜間哨戒に出ている艦娘は電、愛宕、龍田、霧島の4名。

「私が行きたいところだけど艦装の整備で工廠に呼ばれてるのよねえ。ごめんなさい工

ミヤ提督」

摩耶と食事をとっていた愛宕は申し訳なさそうに辞退する。

「私も昨日の天龍ちゃん騒動のおかげで寝不足でえ、ごめんね？」

後ろで文句を言う天龍を見ぬふりしながら龍田も断りを入れた。

「なら私が立候補するデー……」

「私は日中の任務で出てしまってお姉さまに変わって秘書艦の業務を片付けなければならぬので……申し訳ありません」

元氣良く手を挙げる金剛を遮るように、霧島も目を伏せながら謝罪する。

「というか日中の任務があるのに立候補しようとした金剛は何を考えているのだろうか？」

霧島の隣で悔しそうに騒いでいる姿が不思議でしようがない。

と、なると……夜間哨戒組で残るのは——

「あの……電で良ければお手伝いするのです」

響と一緒にカッププリンを食べていた電が手を挙げた。

「すまないな電、助かるよ」

「平気なのです、司令官さんのお力になれば電も嬉しいのです。それに、雷ちゃんも電達に頼ってほしいと言っていたなら頑張らないと！」

あまりに健気な電に思わず笑みがこぼれるエミヤ。ありがとうと言いながらその頭を撫でてやる。

それを見て金剛がさらに騒いでいたがエミヤは気付かないふりをした。

「そういう訳だ、午前中は留守にするが構わないな?」

「はあ……エミヤ君が言っても聞かない頑固者だつてことは理解してるよ。それに、現状ではエミヤ君の自由を拘束する権利は僕達にはないからね。でも、艦娘を同行させる以上は時間厳守で頼むよ? 正午までには確実に鎮守府へと戻るように」

「頑固者は心外だが、理解には感謝するよ。心配しなくてもすぐに戻るさ」
こうして朝の騒動は収まった。

その後は渋い顔をしながらだが、サンドウィッチとサラダを食べて金剛達と談笑し、食後は各々が自由に休息を取る。

食堂で解散した後は、工廠と呼ばれる設備で多数の妖精さんに会い、ワラワラと取り囲まれて狼狽えたり、資材置き場や入渠施設に案内されてその役割などを教わった。

ちなみに、エミヤに妖精さんの声が聞こえる事がよほど嬉しかったのか、提督付きの妖精さんに立候補する妖精さんが後を絶たず、『妖精戦争』と呼ばれる争いに発展するのはまた後の話。

そして午前8時、定刻通りに出撃する艦隊を船渠^{ドック}で見送った後、エミヤと電は鎮守府

から外出する。

「ふう、鎮守府の朝というのはあんなにも騒々しいものなのか……というか、妖精さんとはあんなにも大量に存在するのだな」

「あはは、エミヤ司令官さんが妖精さんの声を聞けるのがよつぽど嬉しかったんだと思うのです。倉敷司令官さんはどちらかといえば妖精さんに怖がられていたので」

「ふつ、会ったことはないが、倉敷提督の口調では小さな妖精さんにとって恐怖の対象になつたのかもしれないな」

のどかな街並みを歩く2人。

その姿は歳の離れた兄弟のように見えているのだろうか。

ちなみにエミヤの服装だが、今日は真紅の外套は着ておらず、上下黒のシャツとズボンというシンプルな服装に落ち着いている。

街中を歩くのに外套のままでは悪目立ちするという気遣いなのだろうか。

電はいつもの制服姿だ。

「ところでエミヤ司令官さん、お手伝いとは何をすれば良いのです?」

「ああ、簡単な買い出しがしたくてね。私はこのあたりの土地勘が無い、電には道案内を頼みたかったのだ。食料品などを取り扱っている店が何店舗かあるとありがたいのだが、心当たりはあるかな?」

「それなら商店街があるのです。戦前に比べると物は少ないらしいですが、この辺りは農家の方も多くて比較的たくさんの食材が手に入るのです」

「それは助かる、これで少しはまともな食事も出せるだろう」

エミヤの言葉に電は耳を疑った。

「もしかしてエミヤ司令官さんは、電達のご飯の為に買い物をしようとしてるのですか……?」

「む、何かおしい事でもあるかね? 君達は前線で戦う重要戦力、ましてや全員が年頃の女性なのだ。きちんとした食生活は身体や心の健康に繋がる部分、提督として疎かにはできないだろう」

「はわわっ! 司令官さんにそこまでさせる訳にはいかないのです! それに支給されるご飯も美味しいのですよ?」

「私がやりたくてやっている事だ、電達が気にすることは無い。それに、どうせ全員が揃って食べるのならば出来立ての暖かい食事の方が良いだろう?」

ポンと電の頭に手を置いて微笑むエミヤ。

その笑顔は電から言葉を奪うに十分な破壊力を持っていたらしく、赤面した電は俯いてしまった。

電には伝わっていた。

エミヤの細やかな優しさ、道を歩く時もさりげなく車道側を歩いてくれたり、歩幅の違う電に歩くスピードを合わせてくれたり……そして、食事の話。

顔は俯いたままでも、その顔は満面の笑みを浮かべており、この優しい司令官を送ってくれた姉達や倉敷司令官への感謝を噛み締めるのであった。

そうこうしていると、目的の商店街入り口に辿り着いた。

いくつかの店はシャッターを下ろしてしまっているが、それでも人の往来は見て取れる。

戦時中だからと悲観せずに、前を向いて生きている人々の活気が感じられた。

「……なら基本的なものは揃うはずなのです。何かから見えますか？」

「そうだな……では野菜から調達していくとしよう。肉類は生物だからな、できれば最後に購入したい」

そこからのエミヤの活躍は目覚しかった。

野菜の選定、店主との値切り交渉、定期的な仕入先としての契約――

側で見ていた電は後に語る……あれこそが一騎当千なのです、と。

瞬く間にパンパンに膨らんだ買い物袋が3つ出来上がった。

「これで今週の野菜は確保できたか。では肉の仕入れに行くとしよう」

「まっ、待つてくださいエミヤ司令官さん！とても2人で持ち切れる量ではないのです

「！」

「問題ない、トレース・オン 投影開始」

現れたのは一台の台車。

創作主のこだわりなのか、カゴの側面には「鎮守府専用」の札が付けられている。

「なんでも……ありなのです……」

呆然とする電がその後のエミヤについていける筈もなく、アタフタとしている間に買い物は終了した。

台車には山のような食材といくつかの嗜好品がギツシリ詰め込まれている。

それを押しながら鎮守府への帰路についた。

「……エミヤ司令官さん、戦ってる時より活き活きしてたのです」

「私は戦闘狂という訳ではないからね、戦う必要がないのなら戦いたくないのが本音だよ。こうして献立を考えている時の方がよほど有意義だ」

「……電も、本当は戦いたくはないのです。平和な世界で……できれば沈んでいく敵も助けたいと思うのです。やっぱり……変、ですよね」

帰り道の他愛ない談笑の中、そんな話題になった時に電の顔に陰りがさす。

「敵も助ける、か……」

エミヤはある記憶に思い至る。

戦時中、暁型駆逐艦の電と雷は海に投げ出された敵兵を殺す事なく全員救助した逸話を持つ。

そのような経験が軍艦の化身として生まれ変わった時に、その性格へと影響を与えた可能性は大にあるだろう。

戦争のために生み出されながら、敵の命を救つてみせた軍艦——

ならば、目の前の電という少女がこれだけ心優しい性格なのも頷ける。

「電、君のその優しさは大切にするべき美德だ。変だなんて思うはずがないだろう?」

「でも、天龍さんには甘いつて怒られたりするのです……響ちゃんにも足元を掬われないうように注意されたり……」

「天龍や響の言う事も正論だ。電がどう思おうが、死んでも君を沈めようという気概で挑んでくる敵もいるだろう。甘さを見せれば死に繋がる、それが戦場だ」

「じゃあ、やつぱり電は間違つているのです……」

心なしか泣き出してしまいそうな電。

しかし、そんな電に対してエミヤがかけた言葉は予想外のものだった。

「間違いなにかじやない。私の知り合いに、手の届く全ての人々を救いたいなどという馬鹿げた理想を掲げた者がいてね、私はそんな理想など空想にすぎないと対立した」

「エミヤ司令官さんのお知り合いなのですか? 対立つて……喧嘩なのですか?」

「ふつ、まあ喧嘩のようなものだ。タチの悪い兄弟喧嘩とでも言おうか……ともかく、そんな理想を掲げた馬鹿者と私は戦った。そして……私は敗れた」

「エミヤ司令官さんが負けたのですか!? その方、とつても強いのです……」

「単純な武力では私の圧勝だっただろうな。だが、奴は心が強かった。そして私は言われたよ……人々を救うという理想、正義の味方になるという想い、それは決して間違いないんじゃない、と」

台車を押すのを止めて、エミヤは電の目線に腰をおろした。

電の目を見つめ、その頭を優しく撫でながら言葉が続ける。

「だからきつと、電の全てを救って平和な世界を望むというその気持ちは間違っていないんだ。君は君のまま、自信を持ってば良い」

そう言つて、エミヤは再び台車を押し始める。

「……そのお知り合いの方は、今どうしてらっしゃるんですか?」

「さてね、どこかで人助けでもしているのだろうか。そいつに言わせれば、その生き方に後悔だけはしないらしいからな。実際は後悔に塗れているのだろうか……できれば電にも後悔のない生き方をしてもらいたいものだよ」

「ありがたいございます……でも、電がそんな事を言っているせいでみんなに何かがあったらと思うと心配なのです」

「安心したまえ、そうならない為にオレがここにいるのだ」

その後、特に会話もないまま2人は鎮守府を目指した。

後ろを付いて歩く電の目には、エミヤの背中がやけに大きく見えたという。

閑話休題――

時は進んで、場所も変わって現在は食堂。

帰還した電は厨房へと食材を運んだ後、自室に戻って休息を取るようエミヤに言われて帰っていった。

そして入れ替わるようにやってきたのは日渡提督。

テキパキと凄まじいスピードで食材を処理していくエミヤを呆然と眺めていた。

「エミヤ君……生前は魔術師だったんだよね？料理人ではなく？」

「魔術師兼傭兵といった感じだったが、料理に関しては周りの環境的にもやらなければならぬ事が多くてね。自然と身についたといったところか」

「いや、どう見ても家庭料理の域を超えてるんだけど!？」

「世界中を回っているうちにプロの料理人達と交友を持つてね、知らぬ間にスキルアップしていた」

「それに厨房もかなり綺麗になっているような……」

「それは私の性分だ。前任者の使い方は大切に使用していたのだろうが、さすがに未使用

期間の埃や汚れは酷くてね。勝手だが掃除させてもらったよ」

提督業務はともかくとして、戦争に対する知識が豊富、さらに頭もキレて魔術なんてものまで使える。

その上、家事スキルがカンストしているとは……

頑固者で皮肉屋という点を除けばMr. パーフエクトではないか。

これには日渡提督も脱帽である。

「ん？ちよつと待って……この食材の費用はどうしたんだい？エミヤ君はこの世界のお金を持っていたのかな？」

「継続的にこの鎮守府で仕入れをする契約を取り付けてきた。支払いは月末にまとめて払うことになっている。ああ、悪いが契約の判子は昨夜引き出しの中に入れていた物を勝手に投影させてもらったよ」

「断りもなしに!?艦娘が運営しているのならともかく、提督が給仕を買って出るための経費が軍からおりるとは思えないんだけどなあ……」

「経費など必要ない、私の給与から賄うつもりだからな。この世界の金銭を貯蓄した所でいずれは消える身だ、それならばこういった事で使う方が有効的だろう？」

エミヤ、まさかのボランティア宣言。

確かに、いずれは座に還るエミヤにとって金銭はあまり意味のあるものではない。

しかし提督として着任する以上はそれなりの給与が支給される。

それらの給与を全て福利厚生にあてるといふのだから日渡提督は今度こそ言葉も失った。

「これからこの鎮守府の食生活については私に一任してもらおう。無論、それで提督業に支障が出るような事はしないと約束しよう」

「うん、言っていることは無茶苦茶だけど不思議な説得力がある……どの道、この鎮守府の管理者はエミヤ君になるんだ。君がやれるように運営してくれればいいよ。僕が教えられるのはあくまでも基本的な部分だけだ」

「結構、明日からのご教示もよろしくたのむよ日渡提督。さて、昼食までまだ時間もある……これならもう一品は仕込めるな」

意気揚々と調理に励むエミヤ。

思っていた以上にオーバースペックだったエミヤを残して退室する日渡提督だが、当初の予定とは大幅に違っているものの、今後の鎮守府活性化には目覚ましい期待が持てそうな事に内心では歓喜していた。

午前11時半、午前の哨戒任務兼資材回収に出ている艦隊が帰港する時間だ。

艦隊達は艀装の補給を行なった後、任務の結果報告をするために執務室へと向かう。

その道中、廊下まで漂ってくる食欲をそそる香りに一同は首を傾げた。

「なんやあ？めっちゃ美味しそうな匂いがするなあ」

「昼飯は豪華な出前でも取ってくれたのかねえ？エミヤ提督の着任祝いとか？」

「お祝いするなら夜なはずデース。摩耶は何か聞いてマスカ？」

「アタシは何も知らないよ？愛宕姉も何も言っただけだったしなあ……天龍はなんか知ってる？」

「俺もさっぱり。しっかし任務の後でこの匂いをかじらったら腹の虫が鳴きつぱなしだぜ！はやく食いてえなあ」

「Xopopo、こいつは旨味を感じる」

戦闘こそなかったものの、大海原を駆け回ってきた艦娘達にとってはたまらない匂いらしい。

食堂へと駆け込みたい気持ちを抑えて一同は執務室へと向かう。

「艦隊帰還したデース！って、アレ？エミヤ提督はどうしたデース？」

金剛達が執務室に入ると、パソコンを操作する日渡提督と書類整理に追われる霧島が出迎えた。

「お帰り、全員無事なようで何よりだ。エミヤ君は所用で外していてね、それより戦闘は無かったのかい？」

「制海権より遙か沖合いにはぐれのイ級が2匹おったけど侵攻してくる気配もなかった

し今回は様子見やね、それ以外に敵との遭遇はなかったよ」

「あんなのちよつと追いかけて沈めちまえば良かったのによお……みんなして止めるから仕留め損なつたぜ」

「お前の深追いで倉敷提督から何発ゲンコツ食らつたか忘れたのかあ？アタシはエミヤ提督のゲンコツなんてゴメンだぜ！あれは食らつたらヤバイやつだ」

「そうだね、あのゲンコツは天龍専用にしておきたい」

「まあまあ、とりあえず近海には私の艦載機を飛ばして警戒してるから問題ないはずさ。資材は倉庫に届けて妖精さんに記録してもらつたから」

「了解した、天龍君もやる気があるのは素晴らしいけど危険な戦闘はなるべく避けるようにね？さて、目立った報告もないようだしそろそろお昼にしようか？」

昨夜に続いて戦闘はなし、資材に関する記録書は後で妖精さんが届けてくれる。

手元の作業もひと段落ついたので確認して、一同は昼食をとることにする。

先程の匂いもあつてか、待つてましたと言わんばかりに食堂を指す艦娘達。

食堂前には夜間組の艦娘達も集まっていた。

しかし、誰も食堂へと入ろうとしない。

どころかドアの隙間から警戒するように中の様子を伺っている者までいる。

「Hey、どうしたデース？こんな所で固まってないで早く中に入るネ」

「えつと……あのね金剛さん、私にもわからないけど……エミヤ提督が中で凄い事になってて」

「What!?! エミヤ提督に何かあったデスカ!?!」

食堂前で固まっていたメンバーの中で、愛宕の口から語られる意味不明な言葉。

それを聞いた金剛は漂う香りも忘れて食堂のドアを開け放った。

そこに広がる光景とは――

「ん? ああ、君達か。午前の任務お疲れ様。ちょうど出来上がった所だ、好きなものを取って席につきたまえ」

カウンタ―に所狭しと並べられた料理の数々。

それらはまさに出来立と主張するように熱々の湯気を立てている。

品数も豊富で、煮物から揚げ物、お浸しや汁物まで用意されていた。

何より異彩を放っていたのは他でもないエミヤ自身。

真紅の外套はどこへやら、イケメンバーテンダー風の黒シャツと前掛け姿で取り皿などをサーブしていく姿はもはや提督でも英霊でもなかった。

「個人の好みを聞き忘れていたのでビュツフェスタイルにさせてもらった。夜間組にはこれが夕食になるのだろうか? その辺りも考慮して幅広く用意したつもりだが……他に欲しい物があれば注文してくれ」

「StooperハツキリとStooperデース!まさかコレ……全部エミヤ提督が作ったデスカ!」

「そうだが……何か嫌いな物でもあったのか?今からだと簡単な物しかできないが……」

「そうじゃないデース!どれも凄く美味しそうデースが……何でエミヤ提督が!」

並べられた料理を目の前に、全ての艦娘がザワザワと動揺している。

元から知っていたとはいえ、日渡提督ですらそのクオリティの高さに空いた口が塞がらない状態だ。

そんな艦娘達に囲まれて、さすがのエミヤも困り顔になる。

ある程度のリアクションは想定していたが、ここまで驚かれるとは予想外だったのだ。

そんな中、電がポツリと口を開いた。

「電達の為にしてくださったのです」

ザワつきが収まり、全員の視線が電に集まる。

「午前中、電が頼まれたのは買い物の案内でした。そこでエミヤ司令官さんが電達に料理を振る舞おうとしてる事を知った時、電も驚いたのです。ですが、エミヤ司令官さんは食生活は心と身体の健康に必要なもので、それを管理するのが提督であるなら疎かに

できないと……どうせ全員で食べるなら出来立ての暖かい料理の方が美味しいと言つてくれたのです」

そう言うと、電はエミヤに向き直つて頭を下げた。

「電達の事を大切にしてくれて、ありがとうございます。お料理、美味しくいただきました」

頭を上げた電は、取り皿を手にとると並べられた料理へと向かった。

その顔はとても嬉しそうで、艦娘という事を忘れてしまうようなあどけない少女の微笑みそのものだ。

「……そういう事だ、これからは君達の食事の世話は私の仕事とさせてもらう。さあ、君達も冷めないうちに食べたらどうだ？」

エミヤのその一言をきっかけに、料理に飛びつく艦娘達。

久しぶりの温かな料理がよほど美味しいのか、食堂は歓喜の声でいっぱいになった。

「うおっ、うめえ！おい龍田！これめっちゃうめえぞ！」

「はいはい、天龍ちゃん。お口にソースがついてるわよお」

「できる男やなあ提督さん！これだけでできる男もそうおらんよ？あつ、この唐揚げ美味しー」

「こっちの煮物も絶品だよお！鳳翔さんに負けず劣らずだ！こりや夜までとつといて酒

の肴にしたいねえ、たっはっはっ！」

圧倒的な主婦力。

お艦鳳翔の後継、オカンエミヤが爆誕した記念日である。

そこからは、これが夜なら大宴会という程の大騒ぎ。

相当な量があつた筈だがそこは10人以上の大所帯、あつという間に料理は完売した。

日渡提督の目から見てもこんな幸せそうに笑う艦娘達は、倉敷提督が殉職して以来はじめて目にするくらいだ。

「なるほど、艦娘達の事を一番に考えて行動できる……やっぱりエミヤ君は優秀な提督になる人なんだろうね」

食後のお茶を出された日渡提督はカウンター越しにエミヤへと語りかける。

「そう大層な事でもないだろう？それに、君が言つた事ではないかね？」

「えつと……僕が何か言つたっけ？」

「この国の為に戦う彼女達が、平和になつたこの国で幸せになる権利がないはずない、と。ならば、その平和を守る彼女達に温かい料理を出す事くらいはやって当然だろう？」

「そうだったね。うん、ありがとう」

昼の平穩な時間は満ち足りた気持ちで過ぎていく。

ここからは再び戦場に赴く時だ。

しかし、海へと出撃する艦娘達の顔はとても晴れやかだった。

「行つてくるぜ提督！晩飯も楽しみにしてるからなあ！」

「あつ、天龍は下戸だけどアタシ達は飲兵衛だからな！旨い肴があると助かるぜ！」

「心得た、腕によりをかけて準備するから君達も無事に帰ってきたまえ」

見送りに出たエミヤに手を振って出撃する艦娘達。

着任2日目にして、その距離はグツと縮まったように見えるのであった。

ちなみにだが、しばらくの間はエミヤの提督研修を厨房で行う事になった事は言うま

でもない。

「エミヤ提督……私のお嫁さんになってくだサーイ！」

「なんでさ!?!」

【幕間】エミヤ提督の1日

鎮守府の朝は早い。

が、エミヤ提督の朝はさらに早い。

午前5時に差し掛かる時分、春先とはいえ空はまだ仄暗く風も冷たい時間からその活動は始まる。

「フイーツシュー・ふむ、中々いいサイズのクロダイだなー」

船渠ドックから繋がる防波堤の一角、季節外れな薄手の釣り人が朝とは思えないテンションで陸釣りに興じている姿が。

言うまでもなくエミヤである。

手に持つ竿は見るからに高級なカーボン製のロッド、手元にはこれまた高級であろう電動式のリール。

傍らに置かれたクーラーボックスにはクロダイが2匹、イサキが4匹、メバルが4匹と中々の釣果を示していた。

余談だが、この世界において一般人が陸釣りなどしていたらもちろん犯罪である。

さらに言えば、軽犯罪とはいえ罰金刑に処されるなどの問題以前に、運が悪ければ深

海棲艦の的になる可能性も否めない。

ここが鎮守府の管理する湾である事と、エミヤがその鎮守府の提督であるが故に黙認されているグレー行為なのは外部とクラスのみんなには内緒の案件だ。

そんな事をしていると、夜間哨戒に出ていた艦娘達が帰港してくる時間になる。

「あら、おはようございますエミヤ提督。今日も釣れてますか?」

「む、もうそんな時間だったか。おかえり愛宕、全員無傷という事は戦闘はなかったようだな」

「いえ、鋼材採取地点の離島付近でホ級率いるイ級4隻と交戦しましたが私達に被弾は無し、イ級は電ちゃん和龍田ちゃんの雷撃で轟沈、ホ級は私の雷撃で大破したところを霧島さんの砲撃で轟沈しました」

「結構、ミーティングの際に詳細を聞かせてもらおうとしよう。私もこの魚を厨房で処理しなければ。各自疲れているだろう? ミーティングまでゆっくり休んでくれたまえ。希望があれば食堂でお茶でも出そう」

今日で着任4日目。

最初こそ自分達の提督が普通に陸釣りに興じ、「ヒヤッホー!」とはしゃぐ姿に驚愕した艦娘達だったが、さすがにそれも見慣れたらしい。

霧島も最初こそ注意していたが――

「提督権限だと思つて黙認してもらえると助かるのだがな。なにしろ全員分の食材を賄うにはこういつた自給自足も必要でね」

というエミヤの言葉に押し切られる形で渋々納得した。

これについては半分正解で半分は建前、むしろ理由の殆どがエミヤの趣味に偏つていゝる事を霧島は知らない。

飲兵衛組の隼鷹、摩耶、響、龍田あたりは、酒の肴に鮮魚が出るとあつてエミヤの釣果を毎日楽しみにしてゐる程だ。

尚、毎朝エミヤの部屋を訪れてゐる金剛は、今日まで一度もエミヤの目覚めに携わつていない事を地団駄を踏みながら悔しがつていた。

「凄いのです！お魚さんがいっぱいなのです！」

「そうねえ、しばらくお魚料理なんて食べてなかつたから楽しみだわあ。ありがとね、提督」

クーラーボックスの魚を見ながらご機嫌な様子の電と龍田。

エミヤが食事を担当するようになってからというもの、こうして和氣藹々と会話する機会も増えた。

特に龍田は最初こそ距離を置いた態度を取つていたものの、姉の天龍がエミヤをいたく気に入つてゐるからなのか、最近は砕けた会話もするようになってきた。

エミヤとしても、睡眠を取らない事は苦にならないし、こうして艦娘達が日常に楽しみを見出してくれた事を少なからず喜んでゐる。

「あら、エミヤ提督。釣竿になにやら反応が見られますが？」

「なにつ!?霧島!引け!引くんだつ!」

「えつ?えつ?こ、こうですか!?!」

「そうだつ!そしてフィッーシュと掛け声を叫ぶ!」

「はいっ!?ふい、ふいーっしゅ!」

慣れないどころか始めての釣りで慌てふためく霧島。

普段の冷静沈着な彼女の面影はどこへやら、少女のようにオロオロと竿を握りしめる。

それを傍で指導するエミヤと、ゲラゲラ笑う艦娘達。

今日も今日とて、鎮守府の1日は賑やかに始まった。

ミーティング前の時間は夜間哨戒の艦娘達と食堂で過ごすのが日課になりつつある。

わずかな空き時間ではあるが、その時間を使ってエミヤは艦娘達の朝食を用意している、夜間組はそんなエミヤを眺めてくつろぐ。

そんな艦娘の目線にも些か慣れたのか、雑談を挟みながらもエミヤの調理は着々と進んでいく。

栄養バランスの考えられたメニュー、それも飽きのこない多彩なパーティー。

最近では個人個人の好みも把握してきており、細かな気配りも忘れない仕事っぷりは艦娘達からの好感度上昇に大きく貢献していた。

「あら、そろそろ総員起こしの時間ね。エミヤ提督、私はマイクのチェックがあるので先に失礼します。後ほど執務室で」

「ああ、こちらもそろそろ仕込みが終わる。後は炊飯器のタイマーを入れるだけだ。それでは執務室で待っているよ」

そう言うのと霧島は放送室へと向かっていった。

エミヤも艦娘達の湯呑みを回収し、洗い物を済ませてから執務室へと向かう。

その後ろを龍田と電と愛宕がついて歩くのはもう見慣れた恒例行事のようなものだ。

「おはようみんな、今日もエミヤ君と出勤かい？既に人気者なんだねえエミヤ君」

「そういった無粋な茶化しをする輩には朝食抜きの返礼を見舞うところだが……アレはまたいつものか？」

「あー……いつものだね」

執務室では金剛が淹れた紅茶を嗜む日渡提督と、なぜかむくれつつらの金剛が待っていた。

まあ、4日目ともなると金剛が不貞腐れている理由もエミヤにはわかっているのだ

が。

「むー……今日も起こしに行つたのにエミヤ提督は不在でシタ！またFishing
デスカ？」

「す、すまない金剛。この時期は良い魚が多くてな、その上この辺りの魚は漁業が停止して
いた関係でスレてなく入れ食い状態なのだ」

「何を言つてるのか全くわかりませーん！もう……たまには構つてくれないと寂しいデ
ス……」

「そう拗ねないでくれ。金剛にも美味しい魚料理を食べてもらいたかっただけなのだ。
今日のディナーは豪勢にするから機嫌をなおしてくれないか？」

「えっ、私の為に……？ん……問題n o t h i n g!!早起きは三文の特ネ！今日も元
気に働きマース！」

金剛の乙女脳はエミヤの言葉を都合解釈したらしい。

こんなやりとりも日常化してきているせいなのか、一部の艦娘からはスケコマシ的な
汚名を着せられているエミヤなのだが、本人にその自覚はない。

当事者であるエミヤに至っては、金剛の態度について『提督代理のプレツシャーから
解放された反動で甘えたがっているのだろう』くらいの解釈しかないので、さらに
問題である。

「よし、全員集まったようだな？ではミーティングを開始する」

3日目からはエミヤ本人がミーティングの進行を行なっていた。

日渡提督によれば、エミヤの勤勉さは凄まじく、自分が教える予定だった情報を予習の段階で既に把握している他、それらの情報を臨機応変に使い分けた対応もできるとの事で、日渡提督監修の元、さっそく仮想的な独り立ちを実施中なのだ。

現に資材管理や艦装の整備など、妖精さんとのコンタクトが必要な件に関しては、会話が成立するエミヤの方が日渡提督よりも仕事が早い程なのだからそれも止む無し。

現状でエミヤに残された課題は、身分の取得と軍本部への申請、この鎮守府の特殊な役回りの把握など、極めて特例な部分しか残っていないなかった。

逆説的に、一般的な提督としての業務ならば既に最低限を把握しており、能力も申し分ないという日渡提督のお墨付きも貰っている。

「——以上が本日の仕事だ。何か質問がある者はいるかな？」

「はい、エミヤ提督。哨戒ルートがいつもと違うのは何故ですか？」

「敵の立場になって考えればわかるだろう。常に一定のルートにししか艦娘が現れないのならば、そのルート以外の場所に潜伏しようとするのは当然だ。そういった意味で今日からは試験的に新ルートの哨戒任務を行ってもらおう」

「なるほど……了解です」

「勿論、私の推測通り敵が潜伏していた場合は予期せぬ戦闘になるケースもあるだろう。敵艦隊がそこを拠点にしているようであれば思いがけない大きな戦闘も予想される。その場合は殲滅を急がず、確実に鎮守府へと帰港して状況の報告を優先するように。敵戦力が未確定である以上、深追いは厳禁だ」

「いや、なんで俺を見るんだよ！さすがに命令無視してまで深追いしたりしねえって！」
「……なら良いのだがな。無線がジャミングされたり戦闘の余波で故障などした場合は直接の指令が出せなくなる。今の言葉を忘れずに任務に当たってくれ」

「了解！」

「では解散。食堂に朝食が用意してある、各自冷めないうちに食べたまえ」

こうしてエミヤ提督のミーティングは終了。

内容や進行の組み立てを見ても、日渡提督の目には一人前の提督として映っていた。

「着任4日目だつていうのに大したものだよエミヤ君は。あの哨戒ルートはエミヤ君が考えたのかい？」

「そんなところだ、海流や海底の深度を計算してもあそこに潜伏する可能性は多少あるだろう。あのポイントではこれまで一度も深海棲艦を確認していないらしいが、だからこそ警戒する必要がある」

「なるほどね、それは戦場に生きた君の勘つてやつかい？」

「何度も言うが私は現実主義でね、勘に頼ることは滅多にない。これはあくまで石橋を叩いて渡る程度の警戒だよ。それに、万が一にもそこを拠点にされていたのならこの鎮守府の管理する海域でもかなりの近海に位置する場所だ。急に進軍でもされれば対応が間に合わない可能性も否定できないだろう？ そうなる前に手は打つべきかと思つてね」

「まったく……君の手腕が未恐ろしいよ。そのうち僕よりも上の立場に出世したりしてね」

「丁重に辞退させてもらうよ。私がマスター達に託されたのはこの鎮守府の事だ、海軍における出世に興味はない。さて、私達も食堂へと向かうとしよう」

こうして滞りなくミーティングは終了。

所変わつて食堂――

提督として指揮をとる時は引き締めた対応をするエミヤだが、厨房となるとまた話は変わつてくる。

「昼の任務につく艦娘は焼き魚定食だ、今日は型の良いイサキが釣れたので軽く干して塩焼きにしてある。汁物は里芋と油揚げの味噌汁、小鉢には胡瓜の酢の物、副菜はヒジキと煮豆の白和えを用意した。デザートには蜜柑のソルベがあるので食べ終わつた者から言つてくれ。では、よく噛んで食べるように」

前掛けをしたエミヤが朝食として用意した定食の配膳を済ませます。

日中の任務にあたる艦娘達は、まるで旅館の朝食のような献立に目を輝かせている。「夜間哨戒の者はこれが昼食になるからな、少しポリユームのある物にしてみた。メバルの唐揚げにはレモンと大根おろし、小鉢は蓮根と牛蒡の金平、副菜は鶏胸肉のオニオンサラダ、汁物はクロダイのアラ汁だ。アルコールに関しては昼時まで待ちたまえ、そのかわり酒の肴は希望のメニューを用意しよう」

生活習慣によってメニューを分けて提供するプロ意識。

提督としても高い意識で仕事に望んでいるのだろうが、食堂においてのエミヤは別の意味で活き活きと仕事に取り組んでいた。それはそれは不気味なほどに。

メニューの説明をする間もその動きに無駄はなく、水やお茶の少なくなった艦娘達を回ってはその世話を欠かさない。

しかも、ここまでの働きだけでも既にどちらが本業なのかわからない程の仕事っぷりなのだが、エミヤの一日はここからが本番だったりする。

午前8時、出撃する艦娘達を見送ったエミヤはその足で工廠へと向かう。

沢山の妖精さんがエミヤを出迎える中、艦娘の艀装を整備する妖精さん達の元へ腰を下ろすと、あれやこれやと教えてもらいながら一緒に武器弄りが始まった。

『エミヤ提督は本当に器用であります、本部の整備士でもここまで艀装を弄れる人間は

少ないでありますか?…どこかでメカニックでもしてたでありますか?』

妖精さんから見てもエミヤのスキルは人間の中でも相当に高いらしく、工廠を訪れた初日などは大変驚かれた。

魔術に対する知識など皆無な妖精さんには投影の基本である構造把握や解錠の説明をしてもチンプンカンプンだったようで、最終的にはエミヤのいきすぎた趣味のひとつということまで片付いている。

ともあれ、会話ができる強みからすぐに意気投合し、今ではだいぶマニアックな話もするようになってきているようだ。

余談ではあるが提督専属の妖精さんはまだ決まっていない。

ちなみにエミヤが工廠で何をしているかといえば、どうやら新兵器の開発やエミヤにも使用可能な装備の考察などを秘密裏に行っているらしい…が、その実態は不明である。

試しにエミヤが艦装を投影してみた結果、形だけなら複製できたもののいつさい稼働はしなかった。

やはり艦娘のように妖精さんとのリンクがなければ機能しないのか、投影による艦装の量産は諦める方向に落ち着いたらしい。

そして午前10時、工廠を後にしたエミヤが向かうのは執務室。

パソコンに送られてきた本部や他鎮守府からの情報整理や夜間の戦闘記録のデータ化、資材の管理などを行う。

2日目までは日渡提督の指導を受けていたエミヤだったが、3日目以降は誰の助けもなく全ての事務作業をこなすまでに至った。

時折入ってくる哨戒中の艦娘からの無線対応も問題ないようだ。

そのおかげで手が空いた日渡提督も、エミヤに関する身分の作成に手を回しているらしく忙しそうに電話や資料作成に追われている。

「気になっていたのだが、この鎮守府には戦闘に関する本部からの指令はくだされないのか？」

作業をひと段落したエミヤが日渡提督に尋ねた。

エミヤがこれまで確認してきた本部からの指令は物資の輸送や護衛任務などが殆どであり、その数も月に数回しかない程度のものであった。

戦争中というのならもつと頻繁に出撃命令でもあるのかと想像していたエミヤにとつて、これは少し予想外の内容だったのだ。

「ああ、そのあたりの説明はしてなかったね。結論から言うとこの鎮守府に激戦区への出撃命令がくだる事は滅多にないよ。というか、よほどの事態が起きない限りは大規模戦闘に招集される事もない」

「それはつまり、この鎮守府は戦力外とみなされているという事か？」

「そうじゃないよ、この鎮守府が設立された目的がそもそも戦闘のためではないのが大きな理由さ」

日渡提督の説明ではこうだ。

この鎮守府は横須賀鎮守府と呉鎮守府の中継地点として設立された鎮守府である事。

その為、少数の艦娘で運営しており、海域も比較的戦闘の少ない場所が選ばれたらしい。

主に呉と横須賀を往来する輸送艦隊などが補給のために立ち寄ったり、大規模な戦闘の際には緊急の予備施設としても機能するそうだ。

だからこそ在籍の艦娘が必要とするよりも多くの資材を備蓄し、人数に見合わせ大きな設備を設ける必要があった。

そして、戦闘に駆り出されないもう一つの理由は艦娘達の休息の地である為。

この鎮守府に在籍する艦娘は、その全員が古参と呼ばれる戦争初期から活躍してきた艦娘だという。

それ故に、新参の艦娘に比べて遥かに長い時間を激戦の真つ只中で生きてきた彼女達を少しでも労おうという目的も兼ねて作られた鎮守府でもあるとの事だ。

勿論、彼女達が古くて戦力外という意味は微塵もない。

むしろ長きにわたり戦ってきた艦娘なのだ、その練度たるや他の鎮守府に在籍する最新鋭の艦娘にひけを取らないだろう。

だからといって、制海権もある程度は取り戻し、新規の艦娘も増えてきた今、これからも最前線でこき使うのは忍びないという軍部の判断もあつてこのような形に落ち着いたらしい。

尚、同様の目的で設立された小規模の鎮守府は全国各地に点在するそうだ。

もつとも、意図せぬ轟沈や殉職の影響で結果的に他の鎮守府よりもハードな労働状況におかれているのは何とも皮肉な話だが。

「なるほど、つまりはこの国の主戦力たる鎮守府をバックアップするための鎮守府という事か」

「そんなところさ。かと言って今の海に絶対的な安全圏は存在しないからね……この海域においての平和と安全は、依然として彼女達に委ねられているとしか言いようがない」

「申し訳なきさそうにするものではないだろう。戦場に生きると決めたなら、それくらいの覚悟は誰もが持ち合わせているものだ。そんな顔をされれば彼女達も心外だと思いがね？」

エミヤの頭買い出しの際に戦いたくないと語った電の顔が浮かび、少しだけ胸が痛

んだ。

「それもそうだね。あれ、そろそろお昼の準備をする時間だけど大丈夫かい？」

「11時か……よし、仕事も区切りが良いし私は失礼するよ。すまないが金剛達からの報告は日渡提督に任せる、有事の際は食堂にいるので声をかけてくれ」

執務室を出たエミヤは再び食堂へ。

夜間組の艦娘は各々で訓練をしたり休憩したりと自由に過ごす中、エミヤは休む事を知らない。

哨戒任務の艦娘は11時前後に帰還するのであと1時間もすれば昼食だ。

足早に食堂へと向かったエミヤは手早く昼食の仕込みに取り掛かる。

そして12時、食堂は再び大賑わいだ。

「口元に米がついているぞ摩耶！そんなに急がなくてもおかわりはあるのだ、少しはゆっくり食べたまえ！隼鷹は隠れて酒を飲もうとするんじゃない！艦載機が行方不明になったらどうする！む、天龍！肉ばかり食べてないで野菜も食べるように！龍驤はまた牛乳ばかり飲んで……そんなに飲んでも背は伸びんぞ？なに、背ではない？そ、それはすまん。ん？金剛はおかわりか？少々待ちたまえ、すぐに用意する！」

オカン提督は今日も引つ張り凧である。

それでも朝昼晩と食べ盛りの艦娘達に食事を振る舞うエミヤに疲労の様子はない。

結局、食堂の喧騒が収まったのは13時手前。

手早く洗い物を済ませた後、午後の哨戒へと出撃する艦娘の見送りに出る。

夜間任務の艦娘達は各々の部屋へと戻り、エミヤにもやっと時間的な余裕が生まれる。

簡単な事務作業を済ませてから、エミヤは裏庭に出て行く。

目的は慰霊碑の手入れと、庭の草むしりや垣根の剪定だ。

空き時間を利用して商店街から購入してきた花の種に水をやり、慰霊碑の周りには芝桜が植えられた。

「ふむ……やはり声が聞こえる事はないか」

あの夜に慰霊碑に触れてからというもの、倉敷提督達の声が聞こえてくることはなくなった。

魔力については相変わらず供給されてくるものの、簡単に意思疎通ができるという訳ではないらしい。

「活動方針は私に任せるということか。まったく、やはり勝手なマスターだ」

ニヒルに笑うエミヤは庭の手入れを終えると海へ向かう。

どうやら釣りを再開するという訳でもなく、いつになく真剣な眼差しは彼方の水平線を睨んでいた。

（10……いや、12キロといったところか？やはり深海棲艦の魔力察知は困難だな。最低限8キロまではどうにかかなりそうではあるが補強は必要だろう）

鷹のような眼をそのままに、その左手には投影した黒い弓が握られる。

トレス・オン
「投影開始……ちつ、やはり酷い出来だな。我ながら呆れた欠陥品だ、キヤスタークラスの英霊にでも見せれば良い笑い者だろう」

続いて右手に握られたのは一本の矢と、その先端に括り付けられた真紅の宝石。

苦虫を噛み潰したような表情でそれを見ながら悪態をつくものの、諦めたように矢をつがえる。

「射出角、風向き、装填魔力量……こんなところか」

解き放たれた矢は空を漂う雲を射抜くようにして大空へと飛んでいく。

その動作を何度か繰り返してエミヤは海を後にした。

その後は何事もなく執務室で事務作業をしながら過ごす。

時折、金剛から暇電感覚で入ってくる無線に対応したり、明日には横須賀へと帰る日渡提督との最終打ち合わせをしたりしているうちに時間は過ぎていく。

気付いた頃には窓の外は既に夕焼けに染まり、茜色の海が1日の終わりを告げていた。

この時間になるといよいよ多忙なエミヤの最終業務だ。

まずは午後の哨戒任務から帰港する艦娘達を出迎えて、活動報告を受け取る。

「さすがエミヤ提督デース！哨戒ルートを変えた途端に多数の敵艦を確認したヨ！」

「何匹かは沈めてやったけど深追いするなっつーから取り逃がした奴も多かつたぜ？」

「結構、無事に帰ってこれたなら戦果として上々だ、対策はこれから練れば良いだろう。というか金剛、無線連絡の際に戦闘の報告はなかつたはずだが？」

「何を言うデース!? エミヤ提督の声を耳元で聞いているのに仕事の話なんてできないネ！」

エミヤ提督は正気デスカ!？」

「バカなっ!? こちらの台詞だ！」

慰霊碑よりも意思疎通が困難な金剛は置いておくとして、天龍が小破している以外は特に被害は見られない。

念のため天龍には入渠するよう伝えた後、戦闘報告は旗艦である金剛に任せて他の艦娘には休憩を取らせる。

軽空母の2人は部屋でゴロゴロしてららしい。

自室では電がまだ寝てるとあつてか、響は執務室のソファでくつろいでいるそうだ。しかしエミヤにはくつろいでいる暇などない。

戦闘報告をパソコンに記録した後は、食堂に向かつて夕飯の支度が待っている。

もちろん、エミヤの後を追うように食堂へと同行する金剛。

金剛にとってはこれが一番の至福な時間らしく、用意してもらった紅茶を飲んでカウ
ンター越しにエミヤと談笑している。

この時の金剛に気を使って執務室に残ったのであれば、響の精神年齢は金剛より遙か
に大人なのかもしれない。

「やっぱりエミヤ提督の淹れてくれる紅茶は美味しいデース。でも、来週は夜の任務担
当になるからこの時間もなくなると思うと寂しいネ」

「本当に紅茶が好きなのだな君は。心配しなくても時間さえあれば好きだけご馳走す
るさ」

「紅茶は好きだけど、今の私はエミヤ提督の淹れた紅茶が飲めればHappyデス！い
つか時間がある時はTea partyがしたいネ」

「お茶会か……以前は良く開いていたのかね？」

「Yes！比叡と榛名がいた頃は姉妹4人で良くやつてたヨ。休憩時間に裏庭で飲む紅
茶は格別ネ！桜の季節は景色も最高で楽しかったデース」

「確かに、あの桜を見ながら飲む紅茶なら味も一際美味くなるだろう。安心したまえ、そ
んな時間もこれからは取れるようになるさ。その時は私もとっておきのお茶請けを用
意するよ」

「本当っ!?!絶対に約束ですヨ！」

「嘘はつかないと言ったろう？もつとも、桜が散るまでに間に合うかは保証しかねるがね」

「Non problemデス！その時はお返しに、私の特製スコーンをご馳走しマース！えへへ、楽しみが増えてHappyデス」

自分の淹れる紅茶や特製のお茶受けをそんなに楽しみにしてくれるとはありがたい、などの的外れな勘違いを炸裂させているエミヤの内心など露知らず……金剛の乙女メーターは完璧に振り切れていた。

金剛限定にはなるが、エミヤの感知しないところでキラ付け職人の名前で呼ばれているのは他艦娘の証言である。

そして夜――

寝ぼけ眼を擦りながら夜間任務担当の艦娘達が起きてくる。

日中の任務にあたっていた艦娘達も1日の疲れを癒すように談笑しながら食堂へと集めた。

エミヤにとっての最終業務、晩御飯の時間である。

「つかあー！やっぱり労働の後にやる一杯は格別だねえ。うまい肴にうまい酒！骨身に染みるよお」

「相変わらずオッサンみたいやなあ……ま、言うてる事は同意やけどね！このクロダイ

の昆布締めなんて絶品や！」

カウンターには酒を嗜む艦娘達が並び、テーブルでは日渡提督と夜間任務の艦娘達が仲良さげに食事を楽しむ。

エミヤは相変わらず大忙しだ。

酒を爛につけたり、デザートの準備をしたり、夜間哨戒中のお弁当を作ったりとバタバタ動き回っている。

閉店時間は決まっていないためか、最終的にはカウンターの艦娘だけが残るのもお決まりの光景だ。

「ねえエミヤ司令官、さつきから作ったり片付けたりばかりだけどエミヤ司令官は食べないのかい？」

「お気遣い痛み入るよ響。しかし私は英霊なのでね、食べる事も眠る事も必要ないのだ。それより君は本当に飲酒が許可されているのか？甚だ信じられん……」

「艦娘は年齢の概念が薄いからね、生まれた時からこの容姿のままだしハッキリしてるのは性別くらいのものだよ。だから飲酒も問題ない」

「性別については船の概念によるものだろう。艦種を問わず船とは母体に例えられたりするものだから、その化身ともなれば自然と女性の姿を象るのも頷ける。だが……容姿がそのままとは些か不思議な話だ。君達に成長の概念はないのか？」

「知識や練度についての成長はあるけど身体的成長はどうだろうね。退役した艦娘については一般の人と同様の成長をしているらしいけど、現役の艦娘はその限りじゃないんだろう」

「いよいよ英霊じみているな。血肉と命を宿した英霊となると……いや、やめておこう。碌な実例がない」

「何を言っているんだい？ そんなことよりエミヤ司令官、おかわりを所望するんだよ」

エミヤ特製のフィッシュ&amp;チップスをつまみにウイスキーを飲み干す響。

幼い容姿には不釣り合いな筈のロックグラスは、響の大人びた雰囲気と落ち着いた物腰も相まって不思議と馴染んでいる。

どこの金ピカ王を想起したエミヤも我を取り戻したように酌をするのだが、やはり見た目が小・中学生である響の飲酒には抵抗を覚えるようだ。

——こうして鎮守府の夜は更けていく。

明日は日渡提督が横須賀鎮守府へと帰還し、エミヤが正式に提督着任する大切な日だ。

これから行われる大改革や、キャラの立った面々との珍道中、そして未だ見ぬ戦いの終わりを思わせぬように、夜の帳は静かに一日を締めくくった。

サヨナラ日渡提督

エミヤ提督着任5日目。

突き抜けるような晴天が眩しい日曜日。の昼下がりに、鎮守府の前にはいかにも高級そうな国産車が停車していた。

多くの国民にとって憩いの日である休日にも関わらず、車から降りてくるスーツ姿の男達は大小様々なダンボールを持って忙しく鎮守府と車を往復していた。

見る人が見れば反社会的勢力のお引越しも取れるそんな光景だが、彼らはれっきとした公務員であり日渡提督の部下でもある。

彼等の任務は2つ、日渡提督の送迎と極秘情報とされる荷物の運搬だ。

「失礼します！日渡提督、荷物の運び入れが終了しました！」

「ああ、ご苦勞様。中へと入ってください」

力強くノックされた扉の向こう、これまた力強い男の声が聞こえてくる。

扉はすぐに開かれる事はなく、日渡提督の了解を得て静かに開かれた。

入室してきたのは短髪黒髪の青年2名。

スーツを着用していてもわかる程に鍛えられた屈強な身体、日渡提督とエミヤの前に

静止して全くブレない直立姿勢、そのどれを見ても一般のサラリーマンではない事は明らかである。

「紹介するよ、この2人は横須賀鎮守府で艦隊補助特殊部隊の訓練を受けている僕の部下の金崎君と井上君だ」

「遠路はるばる送迎に呼びつけるとは、随分と上司思いな部下を持ったものだな日渡提督。ちなみに聞くが艦隊補助特殊部隊とは？」

「僕は荷物だけ送ってくれば良いと言ったんだけどね……いや、なんでもない。彼等の部隊はね、簡単に言えば艦娘の任務をバックアップする為の部隊といったところだよ。前線で損傷した艦娘を保護して鎮守府へと搬送したり、作戦によっては深海棲艦の注意をひく為に囷もこなしている特殊部隊さ」

艦隊補助特殊部隊――

通常の軍艦を運用する海上任務とは異なり、彼等が乗り込むのは2人乗りの軍用モーターボートだ。

機銃などの装備はあるものの本質はその機動力であり、砲弾飛び交う戦場において彼等はトビウオとも呼ばれている。

はくようしゆ等
船用主機などが破損して隊列から外れてしまった艦娘を保護して高速機動による前線離脱を試みたり、作戦内容によっては深海棲艦の眼前へと躍り出て砲弾爆雷の雨の中

を囚役として注意を引きつける役目もこなす。

海軍が抱える部隊の中でも極めて少数精鋭な豪傑の集まりであり、人間を優先して襲うという深海棲艦の性質を利用して遂行される任務では当然かなりの危険を伴う。

死傷者が出ることも珍しくはない部隊だ。

「初めまして！私は艦隊補助特殊部隊の訓練生、金崎であります！」

「同じく井上であります！この度は、海外派遣の特殊部隊長であられました衛宮提督とご対面できて光栄です！あのように過酷な海で数年も活動して尚、こうして無事に生還された衛宮提督とお会いできる事、とても心待ちにしておりました！」

機械で動いているかのようなキレイキレイの敬礼と、室内の体感温度が5度は上昇しそうな暑苦しい挨拶――

しかもその熱い眼差しは、幼い頃から憧れていたヒーローでも見るかのようにエミヤへと突き刺さる。

日渡提督の用意した人物像を信じきっているのだろうが、ありもしない空想の憧れを向けられたエミヤとしてはたまったものではない。

常に優雅に落ち着いた物腰を心がけているエミヤとは対局に位置する青年2人を前にして、自然と表情筋が痙攣するのをエミヤは自覚した。

「コホン……わざわざ私の荷物を運んでくれた事に礼を言うよ。そんなに畏まらなくて

構わないから楽にしてくれたまえ。今、お茶でも用意して——」

「いえ！衛宮提督のお役に立てたのであれば光栄の至りでありますっ！」

「はい！自分達の事はどうかお気遣いなく！他にご用がありましたらなんなりと申し付け下さいっ！」

「そ、そうか……」

熱い……いつその事、そういう効果の固有結界だと言つてしまいたいくらいに熱い。

細部に至るまでの情報こそ把握してはいないが、日渡提督はどのような人物像を設定してくれたのだろうか。

「ご覧の通り、彼等は極秘任務をこなしてきた衛宮君の事をとても尊敬しているようですね……今日の送迎もエミヤ君に会うために無理を押し立て候補したらしいよ」

「勘弁してくれ……」

金剛に追い回されるのとは別のベクトルで頭が痛くなるエミヤ。

彼の生い立ちを思えば孤独こそが日常で羨望の眼差しなど無縁なものであり、不愉快とまでは言わないが心地良い感情が湧くはずもない。有り体に言えば、慣れないのだ。

できることならば早急に日渡提督を連れて帰っていただきたい位には慣れない。

しかし、極秘とされているダンボールの中身について日渡提督の話の聞かない訳にはいかない。

深い溜息をつきながらも金崎と井上に執務室で待機するよう伝え、ダンボールの運び込まれた自室へと向かう。

「すまないね……あれで悪い子達ではないんだけど、どうにも融通がきかないというか、なんというか……」

「そのようなだ……私についてどのような誤解をしているのかは知らないが、あの熱さは改善してもらいたいものだ」

まだ午後の仕事も残っているというのに2人の顔には疲労が色濃く浮かんでいる。

鎮守府内を歩いているだけに、さながら宛てもなく砂漠を彷徨う旅人のような生気の無さだ。

結局、ゾンビのようにフラフラとエミヤの部屋へと向かう2人にそれ以上の会話はなかった——

「さて……」

2人が向かい合うのはエミヤの自室に運び込まれたダンボールの山。

大なり小なり、それなりの数がある箱をとりあえず開封していく。

「ああ、これはエミヤ君の制服だね。3セット用意したから替えにも困らないだろう」

「軍服か……これの着用は必須なのか？」

「基本的には必須だよ。どうしても着たくないなら鎮守府内で活動する分にはエミヤ君

の判断に任せるけど、任務で鎮守府外に出る時は着用を厳守してもらおう事になるね」
「はあ……やはり慣れないものだな。マスターのオーダーとはいえ、制服など用意されれば嫌でも人間社会の一部として機能していると思いき知らされる」

労働者という意味では『守護者』として働くエミヤはブラック企業の社畜とも言える労働のベテランではあるのだが、それでも現実の人間社会で就職することになるとは思ってもみなかった。

着任5日目にして何を今更と思うかもしれないが、こうして制服を目の前にすると急に現実味が増してくるものである。

「こればかりは軍則だからね、申し訳ないけど聞き入れてもらいたい。ああ、このダンボールはエミヤ君の個人情報だね」

ビニール包装されてシミのひとつも見当たらない軍服とにらめっこするエミヤに対して、日渡提督は少し小さめのダンボールをよこした。

中には小難しい書類がギッシリと詰め込まれており、エミヤがその箱の中から適当に数枚の書類を取り上げてみれば、それは全てエミヤの個人情報をまとめた書類だ。

「衛宮士郎ね……無粋な質問だけど、これはエミヤ君の生前の名前なのかい？」

日渡提督が手に持つ書類はおそらく戸籍関係の何かだろう。

勿論それは日渡提督の裏工作によって偽造された物ではあるが、そこに記載された衛

宮士郎という個人名は、登録する名前を聞かれたエミヤが自分でサインしたものだ。

「……馬鹿な事を言わないでくれ、そんな名前は適当につけた偽名にすぎない。私の本名など私ですら覚えていないのでね」

つまらなそうに日渡提督から書類を引っ手繰ると、いつもの仏頂面のまま書類整理の作業へと戻るエミヤ。

日渡提督もそれ以上の詮索はしなかったが、その顔は微かに笑っていた。

そこからは2時間ほどかけて細かな口裏合わせのような作業に没頭――

とは言ったものの、彼等が話せたのはダンボールに詰め込まれた情報のほんの一部についてのみ。

というのも、たった一晩で艦娘や深海棲艦について記憶したエミヤをもってしても、目の前に積まれた情報はあまりに膨大すぎたのだ。

特にエミヤが驚嘆したのはその情報量というより抜け目のない周到な裏付けについて。

彼が提督になると決めてから今日までは5日しか経っていないというのに、そこには『衛宮士郎』という人間が生きてきた人生が確かに存在していたのだ。

全てが架空の情報であり、両親や出身地についても出鱈目なものなのだが、それらのどこを見ても一切の矛盾がない。

それ以外にも架空の運転免許や銀行口座、果ては調理師免許のような様々なライセンスなどが多種多様に用意してある。

これらの偽造をたった5日でこなしてみせた日渡提督の手腕には、さすがのエミヤも舌を巻く他なかった。

「——うん、説明はこんなところかな。詳しい所は時間のある時にでも目を通しておいでなければ良いよ」

「簡単に言ってくれるのだな。これでは2ヶ月分の戦闘記録を覚える方が遥かに楽なのだ……」

時刻はもう午後の3時を過ぎた頃。

伽藍堂だったエミヤの自室は山積み書類によつて胡散臭い魔術工房のような有様だ。

そんな部屋で大きくのびをする日渡提督はある物をエミヤへと手渡す。

「最後に、これは君専用の携帯電話だ。任務中やプライベートを問わずに使ってくれて構わない。料金についてはエミヤ君の口座から引き落としになるから使いすぎに注意してね？」

「私の親にでもなったのかね君は？しかし携帯用タブレットか……いよいよ俗世への染まり方が英霊の域を外れてきたな。まあ良いだろう。それで？こっちは何用なのだ？」

エミヤが手に持つのは2台の携帯電話だ。

黒い機体のスマートフォンはエミヤ用の連絡用ツールとして活用して良いらしい。

そしてもう1台、レトロさを感じる白い折り畳み式携帯電話は――

「それは少し特殊な仕様になっていてね、残念だけど普通の電話としては機能しないものだ」

「ほう、ならば何の為に用意したのだ？」

「この端末が唯一つながらるのは僕の持つているこの同型の端末だけだ。独自回線を使っているから盗聴なんかの心配もない」

そう言う日渡提督の手にも、エミヤに渡されたのと全く同じ端末が握られている。

「いいかい、君が日常で使う分にはその黒いタブレットで構わない。しかし、それ以上の話になる時は必ずこちらの白い端末を使用してくれ。万が一にも君の情報を漏らさない為の僕なりの措置だ」

「まったく……恐れ入るよ。ここまで用意周到で世話好きとなれば提督より主婦の方が向いているのではないのかね？」

初日に交わした守秘義務について気にしているのだろう。

エミヤにその気はないのだが、どうやら提督という立場に巻き込んでしまった責任のようなもの未だに消えていないらしい。

日渡提督らしいといえればそうなのだが、やはり甘いと感じる——が、それも今更だ。日渡提督の用意した2台の携帯電話を見ながら皮肉を零すエミヤだが、どうやら悪い気はしていないようである。

『主婦はお前だ』というツツコミをすんでのところで飲み込んだ日渡提督も満足げに微笑んでいた。

「さて、と……これで一応の説明は終了したけど、他に聞いておくことはあるかい？この後は僕も横須賀へと帰ってしまうからね、それまでに確認しておけることがあれば答えしておくよ？」

「当面の職務については問題ないだろう。それよりも、軍の上層部に謁見する件はどうなっている？」

「それについては来月に一般公開される合同演習があるから、その時に時間を取ってある。お偉いさん達は下の人間なんていちいち把握してないからね……書類だけ確認したら何の疑いもなくエミヤ君の着任を承認したくらいだ、急ぐ必要もないそうだよ」「そう不満そうにする事もないだろう。仮に詮索されたとして、簡単に尻尾を掴ませるような粗末な仕事はしていかないのだろう？なんにせよ、時間があるのはありがたい。それまでにこの書類を丸暗記しておくとするさ」

これだけ綿密に用意したのにも関わらず、あまりにあっさりした上の対応に対して不

満気な日渡提督。

しかし国の存亡を争っている状態の軍などそんなものだろう。むしろ時間に余裕があるのはエミヤにとっても僥倖な筈だ。

「確かに容易に看破できるようなやり方はしてないけどね、命がけで戦っている部下達の顔と名前すら把握してない上部の連中も考えものだよ……おっと、ゆつくり愚痴を零している場合じゃなかった！あの2人も待つてくれてるし僕はそろそろ行かなきゃ」

「もうこんな時間だったか。今日は艦娘達も全員待機させている、見送りくらいはさせてもらおうよ」

「全員つて哨戒任務の娘もいるのかい？そんなに畏まらなくても良かったのに。でもありがとう、じゃあ行こうか」

こうして、日渡提督の5日間に及ぶ新人教育任務は終了した。

波乱に満ち、怒涛の展開で目を回した5日間だったが、過ぎてみればあつという間だ。共に過ごすのが当たり前になっていた事もあつてか、合流した艦娘達は揃って感謝の言葉を口にし、日渡提督もどことなく寂しそうな顔をしていた。

待機を命じられた金崎と井上が車を回す為に出て行った後の玄関前、この鎮守府の艦娘全員とエミヤが見送りに出る。

「エミヤ君、そして艦娘の皆、色々と忙しなく進展してしまつて迷惑をかけたと思うけど

すまなかつたね。次に会えるのは1ヶ月後の合同演習だ、それまでどうか無事に過ごしてくれ」

「勿論デース！日渡提督もエミヤ提督が着任したからといって音信不通はNOなんだからネ？たまには遊びに来てくだサーイ！」

「ははは、勿論さ。エミヤ君の料理は絶品だしね、また来れる日を楽しみにしているよ」
「ふっ、落ち着いて時間が取れる時がきたならいつでも御馳走しよう」

それぞれが思い思いの言葉を交わす中、車が玄関前へとやってきた。

黒塗りの高級車の中では空気椅子でもしているかのように背筋を伸ばした金崎と井上が笑顔を向けている。

『エミヤ提督！また会えるのを楽しみしててであります！横須賀の妖精さん達で歓迎するのでまたお喋りしましょう！』

「大勢で取り囲むのは勘弁してもらいたいのだが……しかし妖精さんにも世話になった、礼を言おう。これはほんの気持ちだ、車の中で日渡提督と食べるといい」

日渡提督の肩でピコピコと手を振る妖精さんに近寄ると、小さな包装紙を手渡した。

「中身はマカロンだ。本当なら紅茶と共に出したいところだがお土産ということで我慢してくれ。なに、味の保証はするとも。他の妖精さんに悪いからくれぐれも持ち帰らずに車の中で食べてしまうように」

『わあーありがとうございます！本当なら持ち帰って飾っておきたいくらいであります
が……有り難くいただきます！』

容赦ない気配りが妖精さんを襲う。

筋金入りにオカンすぎるエミヤに向けられているみんなの視線、それに気付かないエミヤはやはり色々と筋金入りなのだろう。

マカロンに目を輝かせた妖精さんはなんとも無邪気な笑顔ではしゃいでいる。

「それじゃまた会おう」

『サヨウナラであります！』

車に乗り込んだ日渡提督達はエミヤ達に見送られて帰って行った。

あの車の中で体育会系2名と数時間のドライブかと思うと日渡提督に同情しないでもないが、エミヤは内心ホツとしていたのは言うまでもない。

そんなことよりも、この瞬間からエミヤは提督として完全に独り立ちである。

「さて、ではさっそくだが提督としての仕事を果たすでしょう。金剛、悪いが全員を執務室に集めてくれ」

「夜間哨戒の娘もデスカ？早く休まなせいと任務に支障がでるかもしれませんヨ？」

「ああ、問題ない。寝不足のところ申し訳ないとは思っているが大事な話なのでね」

「OKデース。エミヤ提督がそこまで言うなら重要なお話なんでシヨウ？エミヤ提督は

執務室で待つて下サイ！」

日渡提督の車が見えなくなつてからエミヤは金剛に対して艦娘の招集を求め、それだけ告げると足早に執務室へと向かつてしまった。

どうやらまた何か企んでいるらしい。

しかし、この艦娘達も釣りや料理の一件でエミヤが突拍子も無いことをしでかすのには慣れたものらしく、金剛に声をかけられても嫌がる者はいなかった。

所謂『いつもの事』である。

そして執務室——

「Hey、エミヤ提督。言われた通り全員集めたヨ」

「ああ、すまなかつたな。とりあえずはこれを見てもらおう」

執務室で待つていたエミヤは艦娘達にプリントを配り始める。

「これは……シフト表なのですか？」

「そうだ、急ではあるが本日より夜間哨戒の任務は緊急を要する非常事態を除いて全面的に廃止することにした」

今日も始まったエミヤ節。

さすがはかの聖杯戦争において、召喚早々に活動方針でマスターと揉めただけの事はあるジャイアニズムだ。

開口一番で夜間哨戒の廃止などと言われれば艦娘達も絶句である。

「お待ち下さいエミヤ提督！私のデータでは日中の哨戒任務より夜間の方が敵艦隊との遭遇率は高いです！なのに夜間の対策を放棄する意図はなんなのですか!？」

「落ち着きたまえ霧島、夜間哨戒を廃止するとは言ったが対策を放棄するなどと言った覚えはないのだが？対策は既に打ってあるさ、文字通りな」

「対策は打ってあるってどういう事だよ？俺達にもわかるように説明してくれねえと困るぜ」

「魔術師が結界を張るのに使う宝石を複数投影してこの鎮守府から沖合10キロ前後の地点に沈めておいた。とは言っても私は魔術師として出来損ないなのでね、結界で敵の侵入を防ぐ事はできない……が、敵の侵入を察知するくらいの事はできる。つまりは夜間に敵が侵攻してきても十分に対策が可能という事だ」

「それにしてもどうしてこんな事をする必要があるのかしら？天龍ちゃんみたいな夜戦好きの娘もいるんですよ？」

「それに関しては先程配ったシフト表を見て貰えばわかるだろう」

言われるがままに全員がプリントへと視線を落とす。

「各艦娘に週1日の休日が設けられますね。エミヤ提督、もしかして私達の為にこれを？」

「愛宕の言う通り、君達には規則正しい生活と必要な休みをとってもらおう。戦う者にとって休む事も立派な仕事だ。それに、特殊な敵艦だと夜でも艦載機を飛ばす空母が存在するらしいが、幸いこの近海では目撃されていない。夜間であれば私だけでも対応はきくのだから休める時は休むべきだろう。夜戦好きな艦娘については仕事だと思つて諦めてもらうしかないが……緊急の事態になれば真つ先に頼らせてもらうさ」

「行動が迅速すぎて何も言えませーん……それともう一つ質問デスガ、この『特別訓練』とはなんデス？」

金剛がプリントの一部を指差して質問する。

そこには哨戒任務の他に、特別訓練と書かれたスケジュールが記載されていた。

「それは私が直接指導する白兵戦の訓練だが？」

ノンストップ・エミヤ節。

海の上で砲撃を主体とする艦娘に対して接近戦の訓練を行うと言つてのけたのだ、艦娘達は絶句を通り越して目が点である。

「ちよ、待つてくれよ提督！アタシ達が艦娘だつてわかつて言つてんのか!?!白兵戦なんて鍛えてどうするつてんだよ？」

「摩耶の言う通りだね。私達は艦娘で砲雷激戦が本業だ、白兵戦で戦うための存在じゃない。説明を求めろ」

「ほう……では聞くが摩耶、常に万全な状態を維持できるほど戦場は簡単なものかね？
響は艦娘なら白兵戦などするなと誰かから言われているのか？」

「いや……そりやそうだけだよ」

「……………」

「弾切れになったら？敵の砲撃が艦装に命中して戦えなくなったら？魚雷が主機に当たって航行不可になったらどうする？君達は黙って食い殺されるのか？」

一同が言葉を失った。

それはエミヤが無茶な事を言っているからではない。

過去に沈んでいった仲間達がどのような最後を迎えたかを痛いほど知っているからだ。

事実、海上において戦闘能力を失った艦娘など深海棲艦にとっては良い餌にしかならない。

「本意ではないのだろうが私は君達の生存率を1%でも上げられるのなら必要な事は全てやる。あらゆる武器が使用不能になったとしても身体一つで生還できるだけの能力は身につけてもらおう。意見があるなら聞くが？」

「……でも、これも生きて戦争を終わらせるためだと思つて我慢すつか！」

「コラ摩耶、俺みてえにってのは余計だ。でもまあ……実際に戦ったから言えるけど、あの戦い方は深海の野郎に距離をつめられた時には確実に有効だと思うぜ？」

「ПОНЯТНО^解、そういう事なら司令官に訓練をお願いするよ」

「納得できたのなら結構。できることなら敵に接近させずに勝利するのが理想なのだが理想的展開にならないのが戦の常だ、身につけた技術は無駄にはならないと思って励んでくれたまえ」

発言自体は突拍子もないエミヤだが意味のない事など言わないし、やらない。

困惑の色こそ残っているものの艦娘達はエミヤの真意に納得したようだ。

「では最後に秘書艦についてだが——」

その時、艦娘達に衝撃が走る！

エミヤのその言葉に、それまで真剣な表情で会議に臨んでいたはずの一部の艦娘が目の色を変えた。

龍田や響などは秘書艦のポジションに執着しないのだろうか、金剛を筆頭に何名かの艦娘はその限りではない。

むしろ立候補してでも手に入れたい役職だ。

実力は申し分なく、頭も良い。

ルックスだって世間一般的に言えば間違いない整っている部類だ。

極め付けは提督として働いている以上は収入も安定していて、何より家庭的。

性格や言動は多少のクセがあるものの、誰もが認める優良物件——それがエミヤだ。艦娘とはいえ、花も恥じらう乙女の心を持った年頃の女性達なのだ。

あくまで提督の決定である以上は出しやばった発言こそしないものの、その言葉を耳をダンボのようにして拝聴する。

「私としても色々と考えたのだが、やはり適任は君しかいないだろう。もちろん、嫌なら断ってくれて構わないが……頼まれてくれるか金剛？」

エミヤは——金剛の前に立った。

「バ……」

「……ば？」

「バアアアアアアニングツラアアアアアアブツ!!任せてエミヤ提督!この金剛、エミヤ提督の理想の秘書艦になってみせるネ!」

「ぐはっ!」

そして金剛がエミヤに突き刺さった。

「かあー!やっぱりエミヤ提督は金剛さんを選んだか!大穴狙ってたのにあてがはずれたねえ」

「だから言うたやん?むしろあれだけアピールされて他の艦娘を選んだらそれはそれ

で問題や」

「金剛さん、ちよつぱり羨ましいのです。電もエミヤ司令官さんに頼ってもらえるくらい頑張らないと！」

「ゴホツゴホ……待ちたまえ、君達は何を言っているのだ?！」

金剛を選んだ事に対して悲観的な意見は聞かれない。

誰もが心のどこかで予想はしていたし、金剛の想いも知っていたのだから批判などするはずもなかった。

まあ、肝心のエミヤには理解できていないのだが……

「ところでエミヤ提督、お姉さまを選ばれた人選に間違いはないと思いますが理由を聞いてもよろしいですか?」

各々が女子会のように盛り上がる中、金剛の妹である霧島が問いかけた。

もつとも、それは隙あらば秘書艦の座を奪おうなどという動機からではなく、どちらかと言えば金剛に対するサポートに近い。

ここで金剛を少しでも意識しているような言質を取ってしまったら、今後の金剛とエミヤの仲を取り持つ材料が増えるからだ。

しかし計算高い霧島にしては珍しい凡ミス。

相手は他でもない鈍感ニブチンキングのエミヤである事を失念しすぎている。

「理由か……それはやはり提督代理を勤めていた経験が大きな要素だ。私のような門外漢が判断に迷った時、きつと金剛の経験は何よりも力強い武器になるだろうからな。それに、どうも金剛は提督代理の重圧から解放されて提督という存在に強く依存している節がある。そういつた部分が少しでも緩和できればという意図も無いではない」

「……教科書に乗りそうなくらい綺麗な模範解答ですね。金剛お姉さまには申し訳ないですが私では力になれそうもありません」

「Shit……本心から言っているのがわかるから余計にDamageがあります……」

金剛、霧島、御艦^{オカン}エミヤの前にあえなく撃沈。

ともあれ、こうして無事にエミヤの研修期間は終了した。

目先の目標、横須賀鎮守府で開催されるという一般公開の合同演習へと向けて独り立ちしたエミヤ提督一行は帆を進める。

初陣

「おつ、やつてるやつてる」

哨戒任務から帰港した摩耶達の耳に届いてきたのは、体育館の床板を踏み鳴らす音と気合いの入った掛け声。

春の陽気が暖かい穏やかな昼下がり、鎮守府に併設された体育館は学び舎だった頃のような活発さを醸していた。

「てやあああああ！」

「踏み込みは良くなつたが攻撃に意識を割きすぎだ、打ち終わりがガラ空きだぞ！」

体育館では他の艦娘達が見守る中、電とエミヤが竹刀で打ち合っている。

「おーい、提督！摩耶様達の御帰還だ！飯にしようぜっ！」

「おつと、もうそんな時間か。昼食の用意なら既に終わっている、この辺りでひと区切りつけて私達も食堂へ向かうとしよう」

——日渡提督が横須賀鎮守府へと帰ってから既に10日が過ぎた。

あの日以降、夜間任務が廃止され、週に一度の休みも設けられた事から鎮守府の生活環境もだいぶ変化してきている。

基本的には哨戒と資材調達の任務に出て行くグループ、午前中に近接戦闘訓練を受けて午後から砲撃訓練をするグループに分かれており、そのシフトを日替わりで交代しながら休日設けるシンプルなシステムだ。

最初こそ夜間の警戒をエミヤ任せにする事に不安を覚えた艦娘達ではあったが、自由度の増した生活はその心に余裕を生んだらしく、最近では休日を利用して趣味のようなものを見つける者もいる。

先日は非番だった電のおねだりで、エミヤによるお菓子作りの指導などもあった。

それに端を発した「エミヤ提督のお料理教室」なるものも希望によつて開催される程である。

が、全員が満足の行く結果に落ち着いたかといえばそうでもなく――

「せっかく秘書艦になったのにエミヤ提督とすれ違いの生活なのは何故デス……」

「エミヤ提督は基本的に執務室にいませんからね……もしかしてお姉さまがこの鎮守府で一番エミヤ提督と過ごす時間が少ないのでは？」

「霧島……それは言わないでくだサーイ……薄々は気付いていても見ないフリでごまかしてるデス……」

活気溢れる昼の食堂、その片隅には負のオーラを撒き散らす金剛とそれを冷静に分析する霧島がいた。

自他共に認めるエミヤ提督オーブンラブな金剛であったが、秘書艦のアドバンテージに浮かれていたのは最初だけ。

実際に金剛を待っていたのはアドバンテージどころかハンディキャップであった。

訓練や給仕で執務室にいることの少ないエミヤ。

事務作業や哨戒中の定時連絡を受けている金剛。

本来ならば一番近くで仕事をしている筈の2人だが、さながら織姫と彦星のように離れ離れの毎日。

あまりのエミヤ不足で金剛の心はガリガリと削られていた。

「む、どうしたのかね？ 箸が進んでないようだが口にあわなかつたか？」

そんな金剛の乙女心など露知らず、全員の配膳を終えたエミヤが何気なく話しかけてくる。

そこに何の悪気もないのがエミヤクオリティだ。

「はは……なんでもないデース……エミヤ提督の作るご飯はとつても美味しいネ」

「そうか、だが無理は禁物だぞ？ 何かあつたら遠慮なく私に言いたまえ」

「ガフツ……」

金剛に痛恨のクリティカルダメージ。金剛の心は中破した。

「お姉さま……エミヤ提督、ちよつとよろしいですか！」

「どうしたというのだ!?というか、どこに連れて行く気だ!」

健気にも気丈に振る舞う姉の姿に思うところがあつたのか、勢いよく立ち上がった霧島はエミヤの腕を掴むとそのまま食堂の外へと出て行つた。

「エミヤ提督に悪気がないのはわかつてますが、あれではお姉さまがあんまりです!」
「ちよつと待て、あんまりとはどういう事だ? 私には霧島の訴えが全く理解できないのだが——」

「エミヤ提督が鈍感なのは理解しています。ですが、毎日のように執務室に独りぼつちで職務に励むお姉さまの気持ちも少しは考えてほしいものです」

「ど、鈍感……私が鈍感……いや、今は置いておこう。しかし金剛の気持ちか……つまり金剛は執務室での孤独感によつて心労を抱えているということなのか?」

「孤独感といいますか……概ねそれでは無いのですが……」

「ふむ、確かに最近では出撃任務より秘書艦業務に携わる時間が殆どだったな。私の至らなさに金剛に負担をかけていたとは……やはり未熟な自分というのも始末に負えないものだ」

「始末に負えないのは同意しますがここまで器用に勘違いできる人が未熟ですか……」

「む、何か言つたかね?」

「いえ、特に」

頭脳派の霧島ですらエミヤを切り崩す糸口すらも見えない。

どころか、霧島の中でエミヤという男性は『これまでの人生において、他人から好意を向けられる事が殆どなかったのでは?』という疑問が首を擡げてくる。

そうでなければ、あれだけわかりやすくアピールしている金剛の気持ちに全く気付かないなんて事があるだろうか?

今日も今日とて、金剛型姉妹のストレスはマツハである。

しかし、そんな悩みは思いがけないエミヤの一言で好転(?)を見せた――

「……よし、本日の午後の任務は予定を変更して金剛を旗艦とした特別小隊で遠征に向かうとしよう。私も同伴させてもらう」

「……はい?」

霧島は自分の耳を疑った。

耳が正常ならば頭がどうかしたのではと思うくらいにはエミヤの発言に理解が追いつかなかつたのだ。

「本部から送られてきた任務に気になるものがあつたのでね、丁度いい機会だ」

「待つて下さい! エミヤ提督が同伴されるといふ事は、海に出るといふ事ですか!」

「何を驚くことがある? 艦娘を引き連れて山に行くとても思つたかね? 沖合の無人島……以前、倉敷前提督が開発に携わつて以降そのまま放置されていた鎮守府建設予定地

の視察任務だ。彼の後任を担う以上、こういった仕事もあつて当然だろう」

霧島は今度こそ耳を疑った。

無人島の鎮守府建設予定地といえ、この艦娘であればイヤでも頭に浮かぶ事件がある――

倉敷提督の殉職だ。

彼はその無人島へと視察に向かう道中で深海棲艦に襲われて命を落としたのだ。

そんな場所へと気分転換のようなノリで行くと言うのだから理解どころか納得などできるはずもない。

「とてもじゃありませんが賛同しかねます！いくら任務とはいえ、そんな心持ちで行くような場所じやないことはエミヤ提督でもわかるでしょう!？」

「言いたい事はわかるが私も遊びのつもりはない。それにだ、本部からの勅令である以上は遅かれ早かれ遂行せねばならない任務だという事は霧島も承知だろう?」

「それはそうですが……しかし今日の午後に出発するのはいくらなんでも急すぎるわ！提督が海に出るなら本部から軍艦の要請をしなければいけませんし!」

「問題ない、それについては既に解決している。さらに言えばこの件については日渡提督から全権を任されていてね、タイミングを見計らっていたのだが金剛の件も踏まえれば今日がベストと言えなくもない」

艦娘という立場、そして軍という組織の特色上、日渡提督の名前が出てくると弱くなる。

たしかに倉敷提督の事件は忘れられない凄惨なものだったが、だからと言って任務を放棄して良い理由にはならない。仮に今日の出撃を見送ったとしても近日中には遂行しなければならぬだろう。

しかし艦娘とはいえ心はあるのだ、頭では理解しているものの、どうしても賛同できない自分自身に霧島は歯噛みした。

「Hey霧島、どうしたデース？あんまり大きな声を出すから食堂のみんなもビックリしてマスヨ？」

食堂の扉が開くと、何も知らない金剛が顔を出した。

幸いな事にエミヤによるダメージは回復したようで、純粹に霧島を心配するような表情を覗かせている。

「なに、午後の任務について霧島に頼みごとをしていてね。たまたま非番だった霧島に代休と引き換えに急務で副秘書艦の依頼をしていたところだ」

「副秘書艦？私は午後の出撃予定もないデス、どうして代理が必要デスカ？」

「前々から考えていたのだが、午後から私と金剛で外出したくてね。急で申し訳ないのだがそのつもりでいてほしい」

「外出!? つまり……デート! He y 霧島! 次の私の休みは霧島に譲りマス、だから今日は副秘書艦を勤めてくだサーイ!」

エミヤの言い方がそうさせたのか、瞬間的に金剛のバックに花が咲いた。

というか、金剛が咲いた。

「お、お姉さま? その……デートとは違うというか……」

「こうしてはいられないネ! さつそく準備をしないと! じゃあ霧島、午後の執務室は任せましたヨ!」

「お姉さま!? ちよつ——」

言うが早い、金剛は満面の笑みで走り去ってしまった。

「どうやら勘違いがあるようだが……まあよしとしよう。しかし霧島、君の心配も理解しているがそこまで思い悩む必要もない」

「今のお姉さまを見て違う心配も増えましたよ……」

「む? なんの事かわからないが……とにかく、倉敷前提督の件がある以上は身構える気持ちもわかる。しかし今の提督は私なのだ、そう簡単に沈められるほど弱く見られていたのなら心外なのだがね?」

「……エミヤ提督の実力を疑うわけではありません。ただ、このメンバー全員がある種のトラウマになっている任務です……どうかそれをお忘れなく」

「承知した。気苦労をかけてすまないな、金剛の言っていたお茶会には霧島の好物も作らせてもらうよ」

「そう言うのでしたら全員で無事に帰ってきてください。なし崩し的ではありませんがこの霧島、お姉さまが帰られるまで副秘書艦の任務を完遂しますのぞ」

「どうやら霧島は納得したようぞ。正確には諦めたというのが適切だが……」

とにかく、一応の落ち着きを取り戻した霧島とエミヤはそのまま昼食を済ませた。

その後、昼休みのうちにエミヤによつて選出された艦隊と、その旗艦を務める金剛には任務の説明がされたのぞが――

金剛のリアクションはお察しである。

ちなみにメンバーは金剛、摩耶、天龍、電、龍驤の5名にエミヤを足した計6名。

任務の内容は、沖合の無人島にて建設途中のまま放置されていた新鎮守府予定地の視察。

補足すると、この任務に選出されたメンバーのほとんどは倉敷提督が殉職した時に出席せず鎮守府に残っていた艦娘だ。

守るどころか現場にすら立ち会えなかつた艦娘を選んだのはエミヤなりの気遣いなのかもしれない。

そして昼休み明け、一同は船渠ドックに集まつた。

「ちっ……いずれは再開する任務だと思ってたけど、まさかこんなに早くなるとはな」

「それにしたって急すぎるぜ。せめて一週間くらい前には通達できなかつたもんかね？
アタシはまだ良いけど愛宕姉なんて顔面蒼白だったぞ」

船渠に繋がる海の上、不満とは裏腹に完全武装した天龍と摩耶が恨めしげに愚痴を零す。

「たしかに急ではあるが、あいにくと面倒事は先に片付ける性格でね。安心したまえ、万が一の事態になったとしても私が君達を守ると約束しよう」

「つぎけんなよ？ 提督こそ海の上じゃお荷物同然なんだからおとなしくアタシの後ろに隠れてな」

「それは心強い、ならば私の出番がないことを祈っているよ」

「うう……Dateだと思ってた私が恨めしいネ……これは私が犯したどの罪に対する
なんの罰デース!？」

「ははっ、告知も無しにこんなトラウマの再演とは誰も思わんやろうしなあ、エミヤ提督の唐変木っぷりも困ったもんやね。でも、前例もあるんや……ちよーつち気い引き締め
てかからなあかんと思うよ？」

「……そうですね。Dateは無事に帰還してから申し込みマース！まずは全員が無事に帰ってくるのが先決デース！」

それぞれに思うところがあるのだろう。

全員が不安や不満が入り混じった表情を浮かべている。

その中でも、旗艦を務める金剛は無理に元気に振舞っているようにも見えた。

それとは対照的に、エミヤはいつにも増して上機嫌というか……なぜか自信に満ちた顔をしている。

もつとも、今の艦娘にエミヤの機嫌の良さを感じとる余裕などあるはずもなく、むしろ彼女達の気がかりは、この場になくはならない物の欠如の方なのだが――

「あの、エミヤ司令官さん？」

「ん、どうした電？」

「エミヤ司令官さんが乗り込む船が見えないのですが……本部には手配したのです？」
電がこぼした疑問。

そう、沖合まで出るというのにもかかわらずエミヤが乗り込む船が見当たらないのだ。

本来ならば、横須賀の本部に申請して小型の軍艦なり護送用の船が用意されているはずなのだ。

ところが今の船渠には軍艦はおろか釣り船の一隻すら見当たらない。

これでは任務の遂行はおろか、出発すらできないはずである。

「そのことか、そらならば心配はいらない。今回の任務に私が乗る船は不要なのでね」

「不要？つちゆうとウチらがおんぶに抱っこでエミヤ提督を運ぶん？」

「なぜそうなる……不要とはこういう意味だ。投影開始」

トレリス・オン

言うなり、エミヤは防波堤から飛び降りた。

もちろん着地点は海だ、英霊とはいえ水にまつわる加護などを持たないエミヤではそのまま沈むのがオチなのだ——

「おいおい……マジでなんでもありだな」

天龍が呆れるのも無理はない。

エミヤは他の艦娘と同様に、海の上にその両足で立っていたのだ。

どころか纏う服すら軍服でもなければ普段着の黒シャツでもない、初めて見た時と同じ真紅の外套を纏っている。

そしてその足元——そこにはまるで艦娘のように艤装の一部である船用主機が装備されていた。

「ちよつちタンマー！なんでエミヤ提督が艤装を扱えんの！？妖精さんと喋れるいうてもリンクはできないはずやん！」

「そうだな。龍驤の言う通り、私に艤装は扱えない」

「なんでやねん！めつちや海上に立つとるやん!？」

一同はエミヤの足元に釘付けだ。

どこからどうみてもエミヤの足に装備されたのは艦娘が装備する艦装そのものである。

形こそどの艦種のものにも合致しないし、カラーリングもエミヤに合わせた真紅の見た目だが、同じ艦娘がそれを見間違うはずがない。

「わかりやすく説明すると、これは艦装ではなく魔術礼装だ。骨子の構成などは妖精さんに手伝わってもらったがシステムは君達の物とはまるで違う。そちらの艦装が妖精さんとのリンクで稼働するのに対し、私の礼装は魔力の噴射によって稼働する。全速力で疾れば魔力消費も大きいが艦隊として移動する分には問題のない設計にしておいた」

「つまり……魔力が燃料の水上小型スキーみてえなものか？」

「その認識で問題ない。これならば私も隊列に組み込んで陣形をとれるし、戦闘時にも大型船より機動力が増す分、回避性も上がるだろう。もっとも魔術師としては出来損ないの私が作った礼装だ、本来の魔術師が作る物と比べれば子供の玩具のような出来栄えだがね」

「なるほど、たしかに驚いたけど無駄にデカイ軍艦なんざ深海の奴等にしてみりや良い的だもんな。これなら守りやすいぜ」

「それにしてもいつの間にかこんな準備をしてたデース？」

「試作品に關してはずいぶん前からできていたのだが、海の上で自由に動くとなると苦勞してね。最近では夜中に訓練していたのだがその甲斐あつて今では陸地と同じくらいには動けるようになったさ」

「電達が寝ている間にそんなことを……もう少しちゃんと休んでくれないと心配になるのです」

呆氣にとられる一同だったが、なかなかどうしてエミヤの立ち姿はさまになっていった。

普段から足を使って移動するのは人として当たり前なのだが、それでも大地が海に変わるだけで勝手も変わってくる。

水面に浮かべた浮輪の上を歩いてるようなアスレチックで、大抵の人間はバランスを崩すのと同じような理屈だ。

もちろん艦娘として産まれた彼女達には練習などしなくても最初から海上を走る能力は備わっているのだが、英霊であるエミヤはその限りではない。

ニヒルな笑みで余裕を感じさせてはいるが、その裏では相当な努力をしたのだろう。「そういう訳だ、私が隊列に加わった所で問題もない。さつそくだが任務にとりかかう——いや、その前に」

水面を滑るようにして艦娘達の前へと躍り出たエミヤは、余裕のある笑みの消えた真

剣な表情で続けた。

「ここにいる全員、ひいてはこの鎮守府の全員が今回の任務に思う所があるのだろう。それも当然だ、なにせこの任務は前任である倉敷前提督が没した原因ともいえる任務なのだからな。だが、皆も知っての通り私のマスターは倉敷前提督その人に他ならない」
あえて誰も口にしてこなかった倉敷提督の名前に反応してか、自然と艦娘達の表情も真剣さを帯びる。

「勝手のすぎるマスターではあるがこれでも英霊なのでね、マスターのやり残した仕事の後片付けも私の仕事だ。付き合わせる形になって申し訳ないが、これからこのような事案は多々あるだろう。君達には悪いがどうか付き合ってもらえるとありがたい。知っての通り、この世界や提督というものに疎いからな私は……頼りない私を支えてやってくれ」

何の説明もなしに突如として決まった任務、その真意を知らない艦娘達にとつてエミヤの言葉は何より耳に落ち着いた。

ただの英霊として召喚されてきた過去のエミヤならばここまでの説明や弁明などしなかったかもしれない。

しかし、艦娘達に隠し事をしないと誓い、絆を育むと決意したエミヤはその説明を怠ることを良しとしなかった。

「ったくよ……しゃーねえな！それならそうと最初つから言えよな。ま、俺はとつくにあんたを提督として認めてんだ。今更支えるなんて言われるまでもねえよ」

「それに今回はこの摩耶様がいるんだぜ？いちいち心配しなくなつてちやんと五体満足で終わらせてやるよ！」

「はい、電も倉敷司令官さんや暁ちゃん達のぶんまで精一杯頑張るのです！」

「なーんや、発破かけられてしもたな。これはちよつち頑張らないとあかんみたいやね！」

艦娘達の表情が晴れた。

着任してからまだ半月程度なのだ、エミヤが今日までに勝ち取った信用がどれほどのものかは定かではない。

しかし、エミヤの言葉に艦娘の心を動かすだけの力がこもっていたのは誰の目にも明らかだ。

「よし、それでは改めて任務を開始するでしょう。たのんだぞ金剛」

「YES！それじゃFollow me！皆さん付いてきてくださいネ！」

しかし艦隊は出撃する。

天候は入道雲の白さが眩しい程の晴天、波も穏やかな絶好の初陣日和。

目指すは沖合の孤島——

そこで待つは過去の残滓か未来の顛末か、一同は水平線へと駆けていく。

所変わり孤島に佇む建設途中の施設。

「イ……ツカ……イツカツ………」

天候は晴れ——所により——

眠り姫と英霊の過去

鎮守府を離れて2時間は経つただろうか、既に陸地は見えなくなっていた。

最初は懸念されていたエミヤの礼装だが、本人の自信と比例して問題なく稼働している。

それに運も良かったのだろう、敵艦隊はおろか、はぐれの深海棲艦にも遭遇することなく順調に航行することができた。

そんな順調な海路の末、程なくして見えてきたのはその全貌が見渡せる程の小さな無人島。

おそらく徒歩でも半日ほどかければ一周できる程のその島には建設途中の寂れた建物が確認できる。

鎮守府として運用する目的で建設されたからだろう、海岸沿いの一部は船渠としての形を成しており、建物自体もガラス窓などはないが基礎工事は終わっていて漠然とコンクリートの箱が置かれているといった印象だ。

未だ工事の再開を待ちわびるかのように放置されたままの重機達が島の寂しさを誇張している。

「思ったより早く到着しましませ。敵との遭遇も無くて良かったデース」

「すんなりいきすぎて拍子抜けなくらいだぜ。深海どもの1匹や2匹くらい出てこいて話だよな」

「戦闘がなかったのは良いことなのです！天龍さんと摩耶さんは血の気が多過ぎて困るのです」

「アタシを天龍と一緒にすんなよ！戦闘狂は天龍型だけで十分だつーの。しっかし辺鄙な所だよなあ……」

島に到着した面々は思い思いの感想を口にする。

倉敷提督が殉職したその日から時間の止まった島——その実物を改めて眺めるのはいかにも感慨深いものがあるようだ。

「戦闘がなかったのは僥倖だろう。とはいえ、戦場において警戒は怠らないことだ。龍驤、索敵は任せて構わないかね？」

「はいなっ！艦載機のみんな、お仕事の時間やで！」

龍驤の指揮に合わせるように舞い上がる紙吹雪、よく見ればそのひとつひとつが人型を象っており大空へ舞い上がったそれは瞬く間に無数の艦載機となって旋回をはじめた。

「よし、それではここからは二手に別れるとしよう。私と金剛と電は施設周辺とその内

部の視察、天龍と摩耶と龍驤は周囲の警戒として残ってもらおう。敵の接近を確認したら速やかに知らせてくれたまえ」

「知らせろつてどうやって？ 誰も無線機なんぎ持つてねえぞ？」

「なに、簡単なことだ。これだけ小さな島だからな、派手にやってくればすぐわかるのも」

「あつ、なるほどな。そりゃわかりやすくして良いぜ」

ニヤリと笑うエミヤに対して天龍も悪そうな笑みを浮かべた。

確かにこれだけ小さな島なのだ、例えどこにいようと砲撃の1発でもあれば誰でも気付く。

「もつとも、慢心した君達が索敵を疎かにして後手に回るような事になれば、私達が駆けつけても手遅れという事もあり得るのだがな？」

「言つてろよ。天龍はともかくアタシや龍驤さんがそんなハマするわけねえだろ？」

「おーい摩耶、誰に言つてやがんだ？ この最強無敵な天龍様がそんな凡ミスやる訳ねえだろが」

天龍の言葉に誰もが思う……『フラグを立てるな』と。

余談だが、鎮守府大破率No. 1は断トツで天龍である。

「ま、こつちの子守はうちに任せとき。提督さんも中がどうなつとるかわからん以上は

油断大敵やで？」

「心遣い痛み入るよ。しかし陸地で建築物の中ともなれば深海棲艦との遭遇はあり得まい。未知の新生物にでも出会わなければ問題ないだろう」

「んー……ま、それもそうやね。じゃ、気張って警戒しとくわ！そっちも頑張つてな、色々とー！」

「色々？良くはわからないが承知した。では行つてくるとしよう」

こうしてエミヤ達と龍驤達は二手に分かれた。

陸に上がる際にはエミヤの礼装も光となって消え、金剛と電の艦装も解除された状態だ。

警戒が必要とはいえ、建物内で艦装を展開しては歩くだけで建築物を破壊しかねないのだからしょうがない。

電はともかく、戦艦である金剛の艦装はそれだけ大きいのだ。

当然、武装を解除した金剛達はエミヤとは違つてほとんど無力であり、何が起こるかわからない廃墟においては不安になるかと思われたのだが――

「いざという時はエミヤ提督が守ってくれるから安心ネ！」

「はい！エミヤ司令官さんの側にいれば大丈夫なのです！」

本人達はすこぶる楽しんでいた。

デートの誘いがまさかの遠征だったのにも関わらず、金剛の乙女脳はこの状況にある種のデートのように曲解していた。心の中はお化け屋敷で意中の男性に甘える乙女のような妄想が大爆発だ。

電も電で買い出し以来のエミヤとの外出にご機嫌な様子である。

「信頼は素直にありがたいが……もう少し警戒心を持つてくれると助かるのだがね」

「警戒はしてるヨ？ だけどこんな場所じゃあ私達に戦闘はできないネ」

「こんな所で砲撃したら建物が耐えられません。それに、陸地での戦闘が必要になったらエミヤ司令官さんの方が電達より強いのです」

「だとしてもだ、私の腕に抱きつく必要はないだろう……電もどうして私の外套を摘んでいる……」

まるで一昔前に流行った腕に抱きつく人形のように絡みつく金剛と、恥ずかしさを感じさせる照れ顔でエミヤの外套をチョンとつまんでいる電。

(龍驤の言っていた色々とはこういう事か……)

側から見る限り、このような廃墟地味な場所であればピクニックにでも出かける家族のような光景だ。

しかし、どれだけ微笑ましい光景だとしても今は任務中であり、そのおかげかエミヤの眉間と服のシワは一層深くなっていく。

「それにしても薄暗いところネ。こんな天気の良い日なのにこの建物内だけ雨の日みたいデース」

「おそらく電気関係の工事が始まる前に建設作業が中止されたのが原因だろう。居住が目的の建築物ではないからな、日光を取り入れるより堅牢さを重視したおかげで必要以上に暗くなっているようだ」

「それでも無人のままだったのに目立った損壊もないのは頑丈な証拠なのです。崩落でもしていたら工事の再開も大変になってしまうのでこれはこれで良かったのです」

「電の言う通りデース。ですが、それでも雨風に晒され続けてきた事に変わりありません。崩落まではしないかもデースが足を滑らせないように注意するネ」

「そう思うのなら私の腕にしがみ付くのをやめるべきではないかね？金剛がどうかは知らないが私が歩きにくく……2人とも止まれ！」

溜息混じりに会話していたエミヤが突然声を荒げた。

もちろんそれは腕に抱きつく金剛に耐えかねてという訳ではなく、その表情には焦燥が色濃く浮かんでいる。

(これは……魔力か？ひどく歪な、まるで召喚初日に対峙した深海棲艦のような……)

エミヤの睨むその先、薄暗く続く廊下の奥――

そこからは濃密な魔力が漂ってきていた。

それも純粋な魔力ではなく、まるで混ぜ物のような形容し難い力の塊。

それはまるで深海棲艦のそれとそっくりであり、だからこそエミヤには現状の把握が
できずにいる。

現在においても深海棲艦の生態は不明な点が殆どであり、その住処すら特定されてい
ない。

しかし、陸地への侵攻があつた際の資料では深海棲艦は陸上での活動が困難であり、
その力も半減するとされていた。

そこから推測するに、深海棲艦がこのような廃墟を根城にするとは考えにくいのだ。
万が一、艦娘達に強襲された時に能力を十全に発揮できないような場所を拠点にする
などありまいだろう。

しかし、現実としてこの廃墟に深海棲艦と思わしき存在が潜伏しているのは間違いな
い。

外の龍驤達に何の動きもない事から、エミヤ達の後を追って侵入してきた可能性も低
いと推測される。

何より――

そこから感じる魔力は初日に敵対した深海棲艦の比ではなかった。

数ある可能性の中から最悪を想定できてしまうエミヤ、その額からは冷たい汗が頬に

流れてくる。

「エミヤ提督？急に黙り込んでどうしたデース？」

「顔色も良くないのです……気分でも悪くなりましたか？」

エミヤの両サイドにいる2人はエミヤのように魔力を感知する事などできるはずもなく、屋内においての索敵能力もないことからエミヤの変調に対して心配そうな顔をしている。

「気分是最悪と言いたいところだな。確認するが……深海棲艦の中に陸上での活動を主にする種はいるか？」

「陸上なのですか？いるにはいると聞きますがこの海域では確認されていないはずなのです」

「私も艦娘としては長いデスが陸上タイプの深海棲艦と遭遇した事はないデス。って……まさか!？」

尋常ではない剣幕のエミヤに何かを感じとったのか、金剛が目を見開いた。

「そのまさかのようなだな。おそらくこの廊下の最奥の部屋に何かがある、残念だが私が初日に相手をしたイ級と呼ばれる個体とは比べものにならない強さだろう」

金剛の不安を肯定するエミヤ。

その言葉に先程までほのぼのとした雰囲気だった2人にも緊張が走る。

「こんな場所にどうして……それに外だつて……どうしますかエミヤ司令官さん？こんな場所では電も金剛さんも満足な戦闘はできないのです」

「そうネ……唯一期待できるのは軽空母の龍驤くらいデス。邂逅する前に一時撤退した方が——」

たしかに駆逐艦と戦艦である2人がこのまま屋内戦闘になつたとしても戦果に期待はできない。

どころか、その火力によつて予想される2次被害を思えば撤退こそ正しい判断だろう。

しかしエミヤの判断は違つた。

「いや、敵の姿くらいは捉えておくとしよう。姿が見えていない以上は深海棲艦であると断定もできないのだ、未知の脅威はできるだけだけ払拭しておくべきだろう」

「そ、そうは言つてもこんな逃げ場もない廃墟でどうやって敵を確認するデース!？」

「幸いなことに敵はこちらの存在に気付いてはいない、ならば私に任せておきたまえ」
「あつ、なるほど……」

電が納得を口にした時、そこにはエミヤの姿は無かつた。

霊体化——

霞のように姿を消したエミヤは何者にも感知されない。

その状態であれば敵に気付かれる事もなく接近する事も可能だろう。

霊体化したままでは戦闘もできないが、この状況であればそれは問題にならない。

エミヤは廊下に漂う魔力を追うように霊体となったまま奥へ奥へと進んでいく。

(おそろしくこの部屋の中か)

長い廊下の突き当たり。

扉も取り付けられていないコンクリートの枠部だけが不気味な部屋の中から濃密な魔力を感じ取れた。

部屋の中には窓もないのだろうか、まだ昼間だと言うのに室内は暗闇が広がるばかりで内部までは見通せない程だ。

とはいえ、鷹の目と呼ばれるエミヤの眼にこの程度の暗闇は問題にもならない。

エミヤは霊体化したままで室内へと侵入した。

そして、そこで彼が目にしたのは――

(子供……だと……?)

冷たいコンクリートの床に倒れこむように突っ伏している一人の子供の姿だった。

見た目は普通の少女のようではあるものの、部屋に満ちる力の根源は間違いなくこの少女だ。

雪のように白い髪、血液の全てを失ったかのような白い肌――判断するにこの少女が

深海棲艦である事は明白だろう。

エミヤのイメージの中での深海棲艦とはもつと人外の生物である印象が強かったのだが、この少女はその姿だけを見ていればとても深海棲艦とは思えないほどに幼さの残るあどけない顔をしていた。

漂う魔力がなければ無警戒に保護しようと思っていた事だろう。

しかし、なによりもエミヤの目を引いたのはその少女の置かれた状況だ。

(これはどう見ても瀕死だ……発見するのがあと2日も後だったなら何もしくなくても恐らく――)

少女は傷付いていた。

服の端は焼け焦げたような跡があり、白い肌も煤のような汚れが目立つ。

服や肌に関してもその白さが余計に際立たせているのだろう、身体のいたるところからは生々しい出血が確認できた。

儂げに上下する胸を見る限り、かろうじて呼吸はしているのだろうがそれもいつまで続くか定かではない。

(形はどうあれ所詮は戦争……起こりうる事には何の変化もないという事か……)

姿は見えないままだが、まるで歯をくいしばるような苦々しい所感を抱いたエミヤは音もなくその場を後にした。

その後、先程と同じ場所でエミヤを待つ金剛達と合流し、多少の説明だけしてから建物から撤退した3人は島の周辺を哨戒していた龍驤達と合流する――

「廃墟に深海棲艦ねえ……」

島から少し離れた地点で円陣のように向かい合った一同。

エミヤが見てきたものをありのまま説明された事で難しい表情を浮かべている。

「艦装等の展開は確認できなかったが満足な戦闘ができる状態ではないだろう。ところで、私の話した特徴から敵を特定できるものか？」

「駆逐艦より小さな子供っちゅう特徴だけやと微妙やね。せめて装備品でもわかればええんやけど……」

「愛宕姉か霧島さんなら何か知ってるかもしれないけどアタシも心当たりがねえよ」

「提督代理をやつてた私でもわからないからネ……いくら霧島でも望みは薄いデース」

エミヤによつて得られた情報から敵の正体を看破するには至らなかつた。

せめて艦種でもわかれば対策も立てられたのだろうが、現状において敵の姿を確認したのがエミヤだけである以上はそれもできない。

そうなれば残る課題はこの後の行動指針なのだ――

「ここで事態は思わぬ方向へと加速していく。」

「つつつても手負いの深海が1匹、仲間もいねえ状況なんだろ？ちやつちやつと乗り込ん

で殺しちまえば良いだけの話だろーが。小難しいことを考えるのはその後でもできんだろー？」

各々が重苦しい顔をしている中、それが当たり前と言わんばかりに口を開いたのは天龍だった。

敵の討伐、それ事態は何の問題もないし艦娘としての本懐とも言える事だ。

しかしこの場の艦娘達は諸手を挙げて天龍の意見に賛成ができずにいた。

その大きな理由としてはエミヤに伝えられた深海棲艦の特徴と現状だ。

駆逐艦よりも小さい子供という事は、もしかしたら生まれて間もない深海棲艦なのかもしれない。

そもそも深海棲艦が人間のよう繁殖し、人間のよう成長するのかといえば疑問符の残るところではあるが、少なくとも嬉々として殺害できる対象ではないだろう。

さらにその子供は命に関わるであろう傷を負っているらしいのだ。

そこに押しかけて集団で暴行するような真似は、いかに深海棲艦と戦うために存在する艦娘とはいえ気分の良いものではない。

「あん？急に黙り込んでどうしたっつーんだよ？」

「いえ……天龍さんはそんな小さな子供でも……その……殺す、のですか？」

重たい空気に耐えきれなくなったように電が天龍へと投げかけた。

「そりやそうだろ、ガキだろうとなんだだろうと深海は深海だ。それとも何か？ 相手がガキで重症だからつて可哀想だなんて言い出すんじゃないやねえだろうな？」

「で、でもっ！ こんな大勢で押し寄せて四方八方から攻撃するなんてあんまりなのです！ それは正義である前に道徳の問題なのです！ せめて鎮守府で捕虜として保護してから判断しても良いはずです！」

「はあ……俺はお前のそういうところが嫌いって訳じゃねえ。けどな、これが戦争つー事を忘れんじやねえよ。ここで見逃した敵が回復した時、お前の大切な奴がその敵に襲われない保証がどこにある？ 捕虜として手当てしたその深海のガキが提督や響を殺しにくる可能性が無いって言いきれんのか!？」

「そ、それは……」

口調や発想は乱暴なものでも天龍の言うことは正論だった。

戦場に生きる以上は理不尽や不条理など当たり前であり、だからこそ争いは生まれる。

それに元々の性格で言えば面倒見のいい天龍なのだ、好き好んで子供を殺したいなどと思うはずがない。

そんな事くらいこの場にいる誰もがわかっている。だからこそ電も言葉を詰まらせた。

「そのへんにしとけよ2人も。こんな所で仲間割れしたってしようがねえだろ？アタシだつて子供なんて殺したくないけどさ、こればかりはしょうがねえって……」

「そうやね、電の言いたい事は十分わかるけど今回ばかりはうちも天龍の意見に一票や。それにエミヤ提督の話やと放つておいても近いうちに死んでしまうような状態なんやろ？それなら介錯してやるんも情けなんちやうかな。なあ提督さん？」

すっかり消沈してしまつた電を支えるように語りかける摩耶と、それを論するような龍驤。

出来る事ならどうにかしてやりたい気持ちはあるものの、その気持ちの着地点だけは見つかりそうもない。

助ける事ができない以上、この場で殺すにしろ放置して見殺しにするにしろ最終的に判断を下すのはあくまで提督であるエミヤなのだ。

龍驤からの問い掛けに対し、それまで黙っていたエミヤはゆっくりと口を開く。

「たしかに、この場において間違いを言う者はいないのだろう。無論、電を含めた全員な……ところで金剛、君はあの深海棲艦の子供をどうするべきだと考える？」

「わ、私デスか!？」

「そうだ、今回はたまたま私が同行しているだけであつて、本来なら現場の判断は旗艦である君の仕事だ。そんな金剛の意見も聞いておこうかと思つてね」

突然ふられた話に慌てた様子の金剛だったが、拳を握りしめて俯く電を見て一息つく
と静かに発した――

「……私は、電の意見に賛成デース」

「おいおいマジかよ金剛さん!？」

「Stop、stop! 艦娘として正しい事を言っているのは天龍だと私も思うネ! た
だ……殺すばかりが戦いなのかと言えば私は違うと思うという事デース」

熱り立つ天龍を制すると金剛は語り始める。

「確かにこれは戦争デース、天龍の言う通り本来なら敵の殲滅を優先するべきでシヨウ
……でも、戦争だからといって敵を必ず殺さなければならぬと誰が決めたんデースか?
もしそうだとしたら私たち艦娘は平和を旗印にしただけの殺戮兵器と変わりませ
ん。うまくは言えませんが殺し合う以外にも戦いの場はあると思うのデース……それに――」

金剛は俯いて涙を零す電の背後にまわると、その両肩にそつと手を置いた。

「皆さん忘れた訳じゃないはずネ。かの大戦の中、海に投げ出された敵兵を救った電や
雷の勇姿を。その英断は後世にも語り継がれ、その後の世界平和にもたらした影響も決
して小さなものではないデース。目の前の敵を殲滅するのも大切ですが、時として後世ま
でを見通した判断も必要じゃないデースか? どうでしょうエミヤ提督?」

電の頭を撫でながらエミヤを見つめる金剛の顔は、少し申し訳なさそうでもあり、ど

こか縫るような表情を浮かべていた。

しかし金剛の言う通り、過去に軍艦であった頃の電や雷が敵兵を救ったというエピソードはあまりに有名だ。

そこで救われた兵士達が、その後の反日活動の緩和などに尽力した逸話も現代まで語り継がれている。

そういつた見識で判断するならば、電の言うように救いの手を差し伸べる事も間違つてはいないのだろう。

それを受けたエミヤは小さく頷いて全員を見た。

「なるほど、金剛の言う事もつともだ。ここにいる全員が、やはり間違つた事を言つてはいないのだろう。さて、ここで私から皆へ質問なのだが——」

いつもとは違う憂いを帯びた眼で空を見上げたエミヤは、まるで何かを思い出すかのように小さく続けた。

「君達が艦娘であることに関係なく、敵が深海棲艦ということも考慮せず、単純に人として考えてほしい。君達は戦争の最前線で戦う戦士だと過程しよう。そんなある日の事だ、敵側の子供が何の武器も持たず傷付いた身体で助けを求めてきたら……君達ならどうする？」

「回りくどい事言つてんなあ……そりゃ今の状況を言つてんのか？」

「全くの無関係ではないがそうではない。加えて言うならこんな質問に正しい答えなどないだろう、思った通りに答えてくれてかまわんさ」

何かを咎めるでもなく、論ずでもない。

ただ穏やかで寂しげな瞳のまま、エミヤは答えを促した。

「……敵が深海じゃなく俺が艦娘じゃねえってんなら、まあ助けるんじゃねえかな」

「そりゃそうだろう、アタシだって人間の子供相手に殺すなんて言わねえよ。ここに来てない奴らだって同じだと思っぜ？」

「うちもやな。その子がその後どうなるかまで責任はもてへんけど、その場では助けようとするやろ」

「Of course! 保護して手当をした後に安全な場所まで送り届けるネ」

俯く電以外の艦娘は次々と答えていった。

その誰もが子供を助ける事を考え、そのように行動すると答えたのだ。

それを聞いたエミヤは深く眼を閉じて何かを考えるような素ぶりを見ると、静かに告げる――

「そうか……それも正解なのだろうな」

まるで消え入りそうな程に小さく儂い一言に艦娘達は首を傾げた。

「えっと……私達はおかしな事を言いましたか? エミヤ提督、様子がおかしいネ」

「いや、君達がおかしな事を言つたという訳ではない。言つただろう？こんな質問に正しい回答など存在しないのだ」

「じゃあどうしたつーんだよ？さつきから少し変だぞ？」

誰もがエミヤに注目する中、少しの沈黙の後で耳を疑うような発言が飛び出す——
「先の質問だが、私は……殺してきた。老若男女を問わず多くの人々の平和や笑顔の為だと言ひ聞かせて、それを害する少数の人間を絶望の底へと叩き落としてきたのだ」

誰もが言葉を失つた。

俯いていた電ですら、その両目を真っ赤にしながらエミヤを見上げて固まっている。

日頃の優しく世話好きなエミヤを思えば想像もつかない言葉なのだ、彼女達の心中は察するに余りある。

それでもエミヤは悲痛な面持ちで続ける。

「どうしようもなかったと言えばその通りだ、それによつて多くの人が救われたのも事実だろう。しかし、命を天秤にかけて大多数の為に少数を切り落としてきた事に変わりはない」

「で、でもそれは戦争で仕方のない事だったんデスよね!？」

「幻滅させたのなら申し訳ないが仕方がないなんてものは単なる言い訳だ……見方を変えよう、こゝとは違う世界の話だ。ある旅客機に数百名の人に乗っていた、その機内で

は突発性の殺人ウイルスがばら撒かれた。当然機内は大混乱に陥る……誰もが罪の無い一般の人間だ。彼等は必死に生き残ろうと足掻いた、周囲の誰かを蹴落としてでも家族の元へ帰ろうと必死だったのだ。しかし、それを知った私は……その旅客機を撃ち落とすとした」

今にも泣き出しそうなほど弱々しく語るエミヤは、いつもの力強さなど感じさせないほどに小さく見えた。

さらにエミヤは続ける。

「その旅客機が空港へと降り立てば、瞬く間にウイルスの被害は広がり数百ではきかない地上の都市数十万の人間が犠牲になっただろう。私はそんな多くの人間のために旅客機に乗る数百の命を切り落とした。旅客機の人達は何も罪などないのにだ……ただ懸命に生きようとしていた。最後には誰か一人だけでも辿り着き、この悲惨な事件を伝えて欲しいと一丸となって戦っていた。そんな人々を私は殺したのだ。仕方ない判断だったかもしれない、それでも救われた人々はそんな事実を知ることはないのだから、私はただの殺人者と成り下がった……」

重い沈黙が流れる。穏やかな天気とは不釣り合いな雰囲気の中、穏やかな波音が耳に痛かった。

「提督は……後悔してんのか？」

「後悔か……していいと言えば嘘になるだろう。このような道を歩むという判断をやり直したいと思わなかった訳ではないさ。そんな私から一つだけ言っておこう、天龍、摩耶、龍驤」

エミヤは3人に向き直ると、先程までとは打って変わって驚くほどに真っ直ぐな瞳で語りかけた。

「君達の判断は間違いではない。それが戦争であり、そういった意味では君達こそ正論を唱えているとも言える。故に君達の判断を咎めたり止めたりはしないさ。だがな……無抵抗な者を手にかかる感触は生涯消える事はない。敵意を持って襲い来る相手を倒すのは何もかも異なるのだ、それはいつの日か後悔となって君達自身に返ってくる。それでも君達はあの深海棲艦の子供を殺すかね？」

まるで心の中までを見通すような鷹の目に射抜かれた3人は言葉を発する事ができずにいる。

全てではないにしろ壮絶な実体験を聞かされたのだ、口で言うのは簡単だが実際に命を手にかけるという覚悟に3人は揺らいでいた。

「それにだ、私の話ともかくとして電はまだ伝えきれていない事があるのだろうか？」

「は、はひっ!?!」

フツといつもの優しい顔付きに戻ったエミヤは、これもまたいつものニヒルな笑みを

浮かべて電に視線を向けた。

「電は……その、海と空を見ていたのです……」

その言葉にハツとした顔をする面々。

艦娘として日常的に前線に立つ彼女達は、電のその一言だけで何かに思い当たったよ
うだ。

「ふっ、私が敵の存在を知らせた時、真つ先に疑問を浮かべていたのは知っているよ。だからこそ電は敵の殲滅を止めようとしたのだろう？」

「その通りなのです……深海棲艦が現れる場所は決まって嵐のような天気になるので
す。なのに今は海も穏やかで天気も快晴、その子が弱っているだけで他に意味はないか
もしれませんが……それでも救える敵かもしれないと信じたいのです……」

「と、いうことだ。さて……もう一度だけ確認するが、君達はあの深海棲艦をどうするべ
きだと思う？」

天龍達の心境を考えれば意地悪とも言える問い掛け。

最初は殺すと宣言していた天龍と、それに賛同していた摩耶と龍驤はバツの悪そうな
顔をしながらもそれに答える。

「……だあーっ！わあーつたよ！殺すのは撤回だ！ひとまずは電と提督の意見に乗っ
かってやるよ！」

「私は意見などしていかないのだが？しかしその判断も間違いではないのだろう。天龍はこう言ってるが摩耶と龍驤はどうかね？」

「提督さんも意地悪なお人やね。こんな空気で蒸し返すようなマネでできるわけないやん。ま、うちも気乗りする話じゃなかったしここは様子見させてもらおう」

「アタシも提督がそれで良いなら問題ねえよ。けど、もしもの時は責任とれよな？」

3人は納得を示した。

とは言え、どこか腑に落ちないような感情が残っているのもまた事実であり、その甘さに不安を覚えてもいるのだろう。

それでも天龍達が電の意見に賛成したのは、エミヤの昔話が原因である事は明白である。

「あ、ありがとうございませう！天龍さんも摩耶さんも龍驤さんも……本当にありがとうございませう！」

「わかったからそんなに頭を下げんなよ、首がとれるぞ？それと勘違いすんなよ？今は様子を見るつつー話だが、そのガキが変な真似したら俺は即座にブツ殺すつもりだからな。提督もそこまでいったら止めんじやねえぞ？」

「何度も言うが私は最初から止めていないだろう？もちろん、相手が明確な敵意を持つて攻撃行動に出た時は私とて容赦はしない。例え相手が誰であれだ。それについては

電も十分に心得ておいてくれたまえ」

「大丈夫です。それでも手を差し伸べる機会をくれた事には感謝なのです！」

「ふつ、そうか……では改めて深海棲艦の子供の元へと向かうとしよう。編成は私と電と天龍が深海棲艦の元へ、残りの者は引き続き周囲の警戒だ」

『了解』という一同の揃った返事と共に円陣は解かれた。話も纏まり、再び島へと向かうエミヤ達。

各々が不安を抱えつつも、任務は再開された。

そんな中、島へと向かうエミヤの背中に声がかかる——

「——エミヤ提督！」

声の主は金剛。

先程、エミヤの過去についての話を聞いてから彼女の胸には皆とは違った不安が押し寄せていた。

このまま見送ってしまえばエミヤは二度と戻らないのではないのか……自分達の前突然現れた時のように、今度は突然いなくなってしまうのではないか……

数分前に見せたエミヤの儂げな姿がそんな不安を想起させてならないのだ。

「エミヤ提督……さっきのエミヤ提督の話、私は幻滅なんてしてないネ！だから、だから……」

任務に赴く提督を引き止めるような事はできない。

だからと言って金剛にはそれ以上の言葉を紡ぐことができずにいた。

「……私は君達に嘘偽りをしないと誓った事を覚えているか？」

金剛の言葉に応えるよう、しかし振り返らずにエミヤは語る。

「嘘偽りが無い以上、あの話も当然事実だ。私にはそういった過去がある……金剛を含め、全員が気になるところだろう。しかし、今は私を試すと思つて時間をくれないだろうか？ いずれその時がくれば全てを語ると約束しよう」

エミヤは言った、『いずれ』と。

嘘偽りをしないと誓った男が先の約束をしたのだ。

それを聞いた金剛を含め、その場の艦娘全員の胸に安堵の感情が湧いてくる。

何より、そう語るエミヤの背中はいつものような頼りがいのある大きな背中に見えたのだ。

「……了解です。約束しましたからね！ パパッと終わらせて帰ってきてくださいサーイ！」

「ふっ、承知した。君達こそ、くれぐれも油断のないように頼んだぞ」

英霊である以前に、エミヤという男が歩んできた人生——

それについて語られる日がいつか訪れるのかもしれない。

だが今は目の前の危険地帯へと赴き、任務を完遂することが先決だ。

【建設土地ノ鎮守府視察、及び、其処ニ潜ム深海棲艦ノ保護】

想定外に難易度の上がつた任務に向け、エミヤ達は再度出撃する。

守護者と保護者

「ちつ、湿気くせえ場所だな。本当にこんなところにいるのかよ？」

「電も直接見た訳ではないのです、ここはエミヤ司令官さんに付いてくしかありませんね」
そう話す2人の前には真紅の外套を纏う大きな背中があつた。

改めて深海棲艦の保護に乗り出した3人は現在、廃墟と化した鎮守府建設予定の施設内を歩いている。

電と天龍は万が一を想定して主機以外の艦装は展開しているものの、陸上な上に屋内ということもあつてか先頭を歩くのは提督であるエミヤだ。

エミヤ自身は武器の携帯こそしていないが、その背中から感じる緊張感に油断や慢心の気配は一切ない。

「……さて、この廊下の奥にある部屋が目的の場所なのだが準備はできているかね？」
階段を上った曲がり角で不意に立ち止まったエミヤは、振り返りながら2人に問いかけた。

「つたりめーだろ？いつでもぶつばなす準備は万端だつっの」

「ぶつばなさないでもらいたいのです！電も覚悟はできています、行きましようエミヤ司

令官さん」

「承知した、では行くとしよう……だがその前に——」

ただでさえ薄暗い廊下。

しかしそれは今の彼女達にとつては全てを飲み込む奈落のようにさえ見えた。

あらゆる不吉を孕んだ暗闇が、その口をぽっかりと開けて自分達を飲み込もうとしているような錯覚を感じないと言えれば嘘になるだろう。

エミヤの問いに対して準備は万端だと答えたものの、気弱な電は勿論、勝気な天龍でさえ待ち受けている者の正体がわかっていない以上は緊張くらいする。

ましてやエミヤの情報を中心に考えれば相手は人型なのだ——

容姿は幼いといっても「鬼」や「姫」である可能性も否定はできない。

しかし、そんな未知の暗闇を切り裂いて光をもたらすのはいつだって英雄だ。

「そう硬ばらずに安心したまえ、軍艦の化身である君達に対して大船に乗ったつもりで言うのはいくら私でも皮肉が過ぎると思うが……何があろうと君達は私が守る」

振り向いたエミヤは穏やかであり、それでありながらやはり皮肉屋な笑顔で言うのだった。

そんな彼の視線を向けられた電と天龍の緊張は霧散し、一瞬にして顔を赤く染め上げる。

「てっ、提督に守られるまでもなく何があっても俺がいるんだから問題ねえよ！なんつっても俺が一番強えんだからな！」

「それは心強い、では気を引き締めて行くのでしょうか」

エミヤは知らない。

全くその気のない一言や、態度……果てはその笑顔がどれだけの女性を悩ませてきたのかを。

それはエミヤがエミヤである証明あり、衛宮であった頃から変わらない数少ない短所だったりもする。

だつたりもする。

そしてその被害は今後も止まるところを知らずに増えていくことだろう。

「あれが無自覚だから困るのです……金剛さんに同情したくなるのです……」

「全くだ……あれが口だけの優男なら鼻で笑えるんだけど提督はガチな方だからなあ……金剛さんも前途多難だろうぜ」

先を歩くエミヤの背中を見ながら2人は深い溜息をついた。

電と天龍とてエミヤに下心の類がないことくらい理解している。ナルシストでもないだろう。

あくまでも悪意なく無自覚にジゴロつぷりを発揮しているからこそその溜息であり同

情なのだ。

同時刻、外で哨戒にあたっていた金剛が乙女らしからぬ豪快なクシヤミを披露して龍驤と摩耶に冷やややかな視線を向けられていた事に關して金剛に責任はない。

ともあれ、2人の緊張もいくらか晴れた。

確かに相手の戦力は未知数で、それは「鬼」や「姫」かもしれない。

だが、自分達の前を歩く男は陸戦において艦娘を上回る英雄なのだ。

その信頼が2人の重くなった足取りを軽くした。

「……生まれ。この部屋の中に対象がいる」

突き当たりには扉のない部屋の入り口がある。

やはり中の様子は伺えず、窓もないであろう部屋の中は不気味なまでの暗闇が広がるばかりだ。

その物々しい光景に電と天龍も生睡を飲む。

「まずは私が先頭となつて部屋に入る。君達は私の後ろから前に出ないよう後についてきてくれ」

「……了解なのです」

「そのガキが攻撃してきたらどうすんだ？提督が先頭だとヤバいんじゃないやねえの？」

「痛手を負った相手の初撃くらいどうにかするさ。その後は打ち合わせ通りに迎撃態勢

に入る」

「ああ、あの妙な花っぽい盾か。ま、自信があんのはわかるけど戦闘になったら下がってくれよな？いくら陸戦だつっても提督に全部任せつきりにするほど俺達だつて弱くねえんだからよ」

迎撃という言葉を聞いてか電の表情が少しだけ曇る。

しかし、これが戦争だという先程の会話も十分に理解しているからこそ何も口にしようとしなのだろう。

そんな電の頭に大きな手が置かれた。

「もちろん私とて無理をしようとは思わない。危なくなれば君達の事も頼りにしているさ……だが、そういつた事態にならないのが一番の希望だがね」

「——はい！勿論なのです！」

「うむ、では入るぞ」

なるべく足音を殺して室内へと入る3人。

その眼に魔力を集中したエミヤはともかく、電と天龍は視界が闇に慣れるまでは何も見えていない。

その事も承知してかエミヤは部屋の入り口付近で立ち止まると少しだけ時間をとる。

彼女達も夜戦において活躍する艦娘という事もあつてか間も無く暗闇にも目が慣れ

てきた。

そしてその眼が写したのはエミヤに言われた通りの光景だった。

「あれが私の伝えた深海棲艦と思われる子供だ。2人から見ても深海棲艦という認識は間違いないかね？」

「多分な……まあ人間より深海に近いって意味なら警戒対象で違いねえだろうけどよ……」

「……おそらく深海棲艦なのです。艦種までは特定できませんがそれくらいはわかります。ですが……」

ギリギリ聞こえる程度のボリウムで会話する3人だが、それとはまた違う意味で彼女達の声には覇気が無かった。

それもそのはずだ。実際に目の当たりにした伏している子供は、エミヤから聞いていたよりも遥かに痛々しく弱り切っているのだ。

呼吸も浅く、本来ならば敵であるはずの艦娘がここまで接近しても気付く気配すらない。

まだ乾ききっていない血痕が、その傷の深さを物語っている。

当初こそ殲滅するという意思を見せていた天龍でさえも言葉を詰まらせる程なのだ、電の心境など聞くまでもないだろう。

「やはり君達でもわからない個体か……まあいいだろう、それでは対象の保護を開始するとしようか」

そんな2人とは打って変わって、善は急げと言わんばかりに行動を始めるエミヤ。固まっていた2人は当然呆気にとられる。

「ま、待つてくださいエミヤ司令官さん！」

「むっ・どうした？あまり大声を出せばあちらも目を覚ましてしまうぞっ！」

「いや、そうじゃねえよ！あんなボロボロなガキをどうやって保護すんだ!?下手に動かしたら死ぬぞ！」

ズカズカと歩き出すエミヤの外套を驚掴みにして引き止める2人。

もう声のボリユームなど気にする気配もなく必死に呼び止めている。

状況を鑑みれば大声を張り上げるなど非常識だと思っ場面だが、この場合は恐らく彼女達の判断が正当だろう。

対象の子供は今にも生き絶えそうな程に弱っている。それを無理矢理に搬送しようとするれば間違いなく道中で力尽きるだろう。

それを当たり前のように保護すると言いつつ切ったエミヤを止めようとする彼女達に非はない。

しかし、エミヤはそんな事は百も承知と言わんばかりに返答する。

「そこまで心配する必要はない……というか私を何だと思ってるのだ……この子供が急を要する状態だという事くらい把握している。もちろん、何の処置もなく動かせば命に関わる事もな」

「ではどうするつもりなのですか？」

「急場を凌げる程度に応急処置を施す。それで鎮守府までの移動は可能はずだ」

「処置？なんだよ、提督は医療知識もあんのか？」

「いまだに真紅の外套を掴んだままの2人だが、その手に込められた力が僅かに緩む。

「戦場を渡り歩いてきた以上は必要最低限の知識は持っているつもりだが……今回はそういう意味での処置ではない。私の魔力を分け与えるのだ」

「魔力、なのですか？」

「ああ、魔力とは言い換えれば生命力そのものだ。傷そのものを治癒する事はできないが延命するくらいなら可能だろう。なに、見ていればわかるさ」

「魔術や魔力に精通していないからこそ電と天龍に対する説明は割愛したが、本来ならば魔力供給とはそんなに簡単ではない。

「魔力回路を通じてパスを繋げてこそ成立する行為であり、大前提として魔力回路と呼ばれる臓器を持っている事が必須条件だ。

しかしエミヤには確信があつた。

この場に漂う濃密なまでの魔力、それは間違いなく目の前の少女から漏れ出たもの、そして魔力が漏れ出すのに比例するように少女は弱っている。

深海棲艦や艦娘に魔力回路が存在するのは不明だが、この少女が生きる上で魔力が無関係ではないだろう事は明らかである。

エミヤは片膝をつく、少女の雪のような白い髪を撫でるように手を添えた――

「……ハア……ハア……ウグツ……ハア……スウ……」

添えられた手が薄く発光したかと思うと子供の呼吸が落ち着いていく。

肌が白すぎて血色が良くなったのかは判断に困るところだが、苦悶に歪んでいた少女の顔が少しずつ和らいでいくのが確認できた。

電と天龍もその様子を固唾を飲んで見守っている。

「やはり魔力で回復するか……このまま行けばすぐに目を覚ますだろう。鬼が出るか蛇が出るか、どうあれ警戒だけはしておきたまえ」

なんとも言えない緊張感が場を満たす中、エミヤの外套を掴む電の手は震える程に力が入り、天龍も太刀を掴む手にじんわりと汗が滲む。

そしてその時は訪れた――

「お目覚めのようなだな。気分はどうかね、お嬢さん?」

「ウ……ン……ッ!?!」

薄く開かれた双眼はまるで夕陽のようで、それだけで人ならざる者である事を雄弁に語っている。

やがて意識が覚醒したのだろう。少女はまるで振り払うようにエミヤの手から離れると部屋の隅へと飛び退いた。

もちろんエミヤや艦娘の2人に殺意はない。それどころか敵意や害意すら全くと言つていいほどに発していない。

しかし、少女はまるで何かに怯えるようにガタガタと震えている。

「やれやれ、そこまで警戒せずとも私達に戦う気はないのだがな。私達は君を保護しに来たのだ、話だけでも聞く気はないかね？」

人間の子供にするように、少し困った笑みで歩を進めるエミヤ。

その動きひとつにも過剰に反応する少女はやつとその口を開いた――

「――ツ！コナイデッ!!」

それは拒絶の言葉。

満身創痍の身体で、それでもなまりふり構わずに発したのは明確なまでの拒否だった。

少しだけエコーかノイズのようなものがかったその声は、エミヤの動きを止めたばかりか艦娘2名の身体を硬直させる。

(可能性としては予想していたのだがこれほどとはな……)

それだけその一言に込められた感情は激しく、エミヤ達を睨むように見つめている少女の眼には深い怒りと悲しみが伺えて——だからこそエミヤの心中は表現とは裏腹に緊張を自覚した。

少女が深海棲艦だと仮定して、まだ武装展開していないことが唯一の救いだが、それでも緊迫した空気が張り詰める。

こちらにそのつもりは無いにしても、心理的に追い詰められた少女がどのような行動に出るかなど予想はできない。

万が一にも攻撃行動に打って出ればこちらにも迎撃しなければならぬのだ。

エミヤの顔からも余裕を湛えた笑みは消え、どちらに転ぶかわからない現状を慎重に探るように言葉を紡ぐ。

「……君が何に怯えているかは測りかねるが私達は君に危害を加えるつもりはない。わかっているのだろうか？今は体力が僅かばかり回復しているとはいえ、そのまま放つておけば君は確実に命を落とす」

「……ウルサイ……カエレッ！」

「生憎だがそうもいかなくてね、助けられる命を助けられないという選択はできない。君のような子供なら尚更だ。君とて進んで命を投げ捨てたいわけではないのだろうか？」

「シニタクハ……ナイ……デモ……オマエタチハ……」

「私達は敵ではない。もし敵だとしたら気を失った君を介抱などと思うかね？ そのままトドメを刺しているはずだろう？ 私達は君を助けたいだけなのだ」

「タス……ケル……？ ワタシヲ……？」

片膝について目線を合わせるように語りかけるエミヤは静かに手を差し伸べた。

その行動の意味がわからないのか、それとも信じられないのか、少女はただ狼狽えるように震えている。

しかし、少女は見えてしまった。

エミヤの背後に控える電と天龍、その2人が展開している艦装を――

「さあ、まずは傷の手当てを――」

「ウソダ……ウソダウソダウソダウソダッ！ ワタシ　ハ……ナンドモ……コナイ

デッテ……ナノニ、ナノニツ！ オマエタチハッ！」

「おい待てっ――」

常に冷静で客観的な視点から状況を判断するエミヤだが、この時ばかりは眼を見開いた。

少女の眼が暗闇に浮かぶ程に火を灯したかと思えば、その周囲には不気味に浮かぶ球体が現れたのだ。

猫のような耳と深海棲艦のものと思われる口を備えた黒鉄の球体。

さらには少女を守るように、まるで艦娘の艦装のように展開された黒鉄の武装。

それはどう見ても彼女の戦闘態勢を意味しており、どうしようもなく深海棲艦である証明で、明確な敵意がエミヤ達に向けられる。

「ちっ、やっぱりこうなったか！おい提督、さっさと後退しろ！こうなつちまつた以上はこつちも引けねえぞ！」

提督を先頭に立たせている以上、何があつても倉敷提督の二の舞にならぬよう警戒していたからだろう、最初に反応したのは天龍だった。

咄嗟にエミヤを庇うように前へ出た時には既に砲口は少女を捉えており、手にする太刀も正眼に構えられている。

「ヤツパリ……オマエタチ……テキダツ！」

そんな天龍の姿に過剰なまでの反応を示す少女。

砲と思われる武装や浮遊する球体が一斉にエミヤ達を捉えた。

(ちい……もはやこまでか……！)

ギリギリまで打つ手を考えていたエミヤでさえも状況の回復は厳しいと判断したのだらう、次の瞬間には火を噴くとも限らない砲口を向けられて行動方針を切り替える。魔力回路にありつたけの魔力を回し、必要とあらば宝具の展開すらも覚悟したのだ。

その時――

「待つてくださいっ！」

少女とエミヤの間に電が飛び出した。

当然、エミヤも天龍も攻撃に向けた意識が一瞬途切れる。

しかし——誰よりも呆気にとられたのは他でもない深海棲艦の少女だった。

なぜなら——

「ばっ……馬鹿野郎っ！ テメエ電！ なんだっつて艦装を解除してやがんだっ！ 死にてえのか!？」

飛び出してきた電は全ての装備を解除し、文字通り丸腰の状態だったのだ。

艦装を展開した状態の艦娘ならば耐久力や腕力などのパラメーターは底上げされるが、逆に言えば丸腰の艦娘など普通の成人男性より多少強い程度でしかない。

こんな状態で深海棲艦の砲撃など受けてしまえば、考えるまでもなく即死だろう。

それが【鬼】や【姫】の攻撃なら尚更だ。

しかし、そんな事などおかまいなしに電は叫んだ。

「この子は……この子は戦う気なんて無いのです！」

両手を広げ、まるで少女を庇うように天龍と向き合う電。

武装はしてなくても、その眼に宿る力は一步も引く気がないことを物語っている。

「戦う気がねえっつて……お前の目は節穴か!? どう見たってやる気満々じゃねえか！」

「違うのです！この子は怖がっているだけなのです！」

「はあ？何にビビってるって？これだけヒリつく敵意を向けられてのに何言ってる！いいからそこを退け！」

「退かないのです！だってこの子は——」

電は一瞬だけ振り返った。

その眼に映るのは今も震える深海棲艦の少女。電にとってその姿は驚異などではなく、助けを求めて泣き出しそうな子供にしか見えないでいた。

『コナイデ』と言ったのです……『カエレ』と言ったのです……『シニタクナイ』と……言ったのです……ただの一言だって殺すだとか憎いだとか、そんなこと言っていないのです！戦いに臨む人はそんな事を言ったりしますか!？」

鎮守府では古参の天龍でさえ、電の怒鳴り声などほとんど聞いたことはない。

そんな電が張り裂けんばかりの声で必死に訴えるのだ。

この子は戦いたくないのだと。

死にたくないのだと。

その気迫に天龍でさえも思わずたじろぐ。

「……っ！だとしてもだ、そのガキがテンパって砲撃でもしたらお前が死ぬんだぞ！だいたい俺達には害意すら無かった、それどころか助けようとしてたんだぞ。そんな俺達

の何が怖いっつーんだよ!？」

「怖いに決まってるのです! だってこの子は——」

広げた両手を下ろして、電は少女へと振り返った。

「私達、艦娘に傷付けられたのですから」

今度こそ、天龍は本当に言葉を失った。

考えなかつた訳ではないのだろう。それでも自分が当事者ではないというだけで頭の片隅に追いやっていた。

相手が深海棲艦で、自分が艦娘である事を。

深海棲艦に対抗しうる唯一の力、それが艦娘なのだ。

つまり深海棲艦に傷を負わせる事ができるのは他でもない艦娘のみ。これだけの傷を負った少女が艦娘に怯えない筈がないだろう。

天龍達が知らないどこか遠い海で、この少女はどこかの鎮守府に所属する艦娘と交戦したはずだ。その結果として命に関わる負傷を負った。

そんな事、少し考えてみれば誰にでもわかる事なのにエミヤを含めて全員が失念していたのだ。

さらに電は続ける。

「この子は恐らく、一方的に攻撃されただけなのです。あんなに戦いを避けるような事

ばかり言う子が好戦的な筈がないですし、受けた傷も背面ばかり……必死に逃げようとして背後から追い討ちを受けたようにしか見えません……きつと想像以上に怖い思いをしてきたのです」

電の言葉は憶測にすぎない。反論しようと思えばいくらでも反論できただろう。

この少女が艦娘の命を奪っていないなどと言い切れる証拠はどこにも無いし、深海棲艦である以上は本能に近いレベルで艦娘や人間を襲うはずなのだ。

天候の事にしても今の状況の事にしても、理屈なんて存在しない甘いだけの希望的観測ではない。

しかし天龍にはそんな反論の言葉が何一つ浮かばないでいた。

対して電はというと、まるで自分が受けた傷かのように痛々しい表情のまま、それでも少女に歩みよろうと一歩ずつ進んでいく。

「ヒツ……コナイデ……クルナツ！」

「馬鹿っ！止まれ電！言いたいことはわかったから早まった事すんな！っつーか提督、あんたも何とか言っただのバカを止めろよ！」

依然として少女の砲口はこちらに向けられたままであり、今の電では掠っただけで命に関わる。

だからこそ天龍は必死にそれを阻止しようと叫んだのだが、それをふられたエミヤは

というところ——

「ははっ……なるほど。何かあつても守るとは言ったが、どうやら彼女は守護者よりも護る事において最強らしい」

とても愉快そうに笑うばかりで動く気は全く無いようだった。

「はあ!? いやいや、笑つてる場合かよ! このままじゃ——」

「心配するな。というか君も武装を解除して見ていたまえ」

「いよいよ何を言つてやがる!? 気でも触れたのかよ!」

「私は正常だとも。そもそもあの子供に戦う意思があるのならとつくにそうなっている。なに、見ていればわかるさ」

エミヤの見る視線の先、少女に歩み寄る電はとても優しい声で語りかける。

「ごめんなさい……怖い思いをさせたのです。電は何かあつたのかわからないけど、あなたから見れば同じ艦娘……きつと信じられないと思うのです。でも、電はあなたを助けたのです」

「ウソダ! オマエタチハ……ナニモキイテクレナカッター!」

怒りと恐怖が混合した眼で電を睨む少女は全ての砲口を電に向ける。

それでも電は歩みを止めようとはしない。

「電が聞くのです。あなたに何かあつたのか、あなたが何をしたいのか、電が聞くので

す。だから、電にあなたを助けさせて欲しいのです」

「イヤダ……コナイデ……コナイデッ！」

完全武装の少女と丸腰の電。

戦力差など論じるまでもない状況だというのに、少女はそれ以上後退できないほど壁際へと追い詰められている。

そんな少女に優しく微笑んで電は近づく。

その距離はもう手を伸ばせば届くほどに迫り、電がその腕を伸ばしたその時——

「もう、怖い思いはさせません。必ず電や電の仲間があなたを助けます、だから——」

「イヤッ……ヤメテ！」

少女が振り上げた手が電の頬をはたいた。

それは砲撃に比べれば可愛いものに見えるが、武装した深海棲艦の力で丸腰の艦娘が殴られたという意味では冗談では済まされない。

下手をすれば首の骨が折れたり脳に深刻なダメージを負ってもおかしくない行為だ。

瞬間的に太刀を握る手に力を込めて天龍が駆け出そうとする。

が、その肩をエミヤが掴んで止めた。

「テメエ……いい加減に——」

「まだまだ、黙って見ていたまえ」

エミヤに促され、爆発寸前の天龍は再び視線を戻し、そして目を丸くした。「だから、電達を信じてほしいのです」

天龍が見つめるその先。

そこには口元から血を流しながらも、少女の身体をしつかりと抱きしめる電の姿があつた。

「あなたを傷付けたりしないのです、ただ死んでほしくない……助けたいだけなのです……」

抱きしめられた少女は、何をされているのか理解できてないかのように目を見開いて固まっている。

電の肩越しに見つめる自分の右手、たった今電の顔を叩いたその手は小さく震えていた。

「……ワタシヲ……コロサナイノ……？」

「はい、殺さないのです」

「ニクク……ナイノ……？」

「憎む理由がありません」

「タスケテ……クレルノ……？」

「もちろんなのです、絶対に死なせません」

電の手が少女の頭を優しく撫でる。

次第に少女の震えは収まり、電の肩に顔をうずめるようにもたれかかる。

「……アツタカイ……」

「あなたも温かいのです。生きている証拠ですね」

「オナカ……スイ……タ……」

そう呟くと、少女は目を閉じて穏やかな寝息を立てはじめる。

「帰ったら、お腹いっぱい食べましょう……」

緊張と疲労、なによりも無理を押しつけて艦装を展開した事でダメージがぶり返したのだろう。

あるいは電があまりにも優しく抱きしめて頭を撫でるものだから心地良くてなのかもしれないが、少女はまるで気絶するように眠りに落ちてしまった。

「お、おい電！大丈夫かよ!? つつーかそのガキはどうした？ 死んだのか?」

「どうして天龍さんはそうやって物騒なことばかり言うのですか……寝てしまっただけなのです」

「よくやったな電、今回は君の大手柄だ」

「エミヤ司令官さん……その、あんな無茶をしてごめんなさい……」

「気にするな、と言いたいところだが肝を冷やしたのも事実だな。今回はそのおかげで

功を奏したのだが……それより、君のダメージは平気なのかね？ 口元に血が滲んでいるが」

「ああ……実はもう……限界なのです……世界があ……まわるのでしゅー……」

「うおい!? 電!? 電——っ!!」

脳震盪でも起こしたのだろう、まるでナルトのように目を回して電は意識を手放した。

抱き抱えた少女を押し潰さないように背中から倒れたのは、電なりのせめてもの矜持なのだろうか。

「無事、とは言い難いが任務完了だな」

「当初の予定とはだいぶ違う気がするけどな……」

倒れ伏す2人を見下ろしながらエミヤと天龍にも安堵の表情が浮かぶ。

まるで仲のいい姉妹のように抱き合って眠るその姿に敵対勢力などという関係性は全く見られなかった。

こうして、全く予想もしていなかった深海棲艦の保護も無事に終了。

一同は外で待つ金剛達の元へと戻った。

哨戒組の方もどうやら敵艦隊の襲撃などもなかったようで、エミヤ達の姿を見つけるとすぐに駆け寄ってきた。

この時の金剛は最速に名高い島風よりも早かったと語るのは摩耶の談である。

その後は建物内で起きた出来事の報告と、眠ったままの少女が少なくとも現状では脅威ではないという説明に追われた。

まるで囲み取材のように質問責めにあうエミヤと天龍だったが、あつという間にキレた天龍のおかげでその場での問答はほどほどに帰港する運びとなる。

その道中――

「……………ふわあ……………つてーんは?」

「つせーな! 耳元でデカい声出すんじゃねえよ!」

天龍に背負われた電が目を覚ました。

鎮守府に着いたら間違いなく入渠確定ではあるものの、重大なダメージは免れていたらしい。

眠気まなこを擦りつつ辺りを確認すれば、日は傾きはじめているものの穏やかなままの海を航行しているのがわかる。

まだ距離はあるが、水平線と重なる程の所に自分達の鎮守府も確認できた。

「ずいぶん長く寝てしまったのです。ごめんなさい天龍さん、重くないですか?」

「あん? お前みたいいなチンチクリンなんて重さの内に入らねえよ。もうすぐ着くからおとなしく寝てろ」

相変わらず、面倒見が良いくせにぶつきらばうな態度の天龍に電も思わず笑みが零れた。

そして背負われた体勢のまま天龍の肩越しにあるものを見つける。

「天龍さん、電をおんぶしながらその子も抱っこしてたのですか?」

それは天龍にお姫様だっこされた少女の姿だった。

重さなど感じないと言い張っていた天龍だが、重さよりもその器用なバランス感覚に電は感心した。

「どちらか一方は私が背負うと申し出たのだが、天龍が頑なに聞かなくてね」

声につられて目を向ければ、自分達の横を並走するエミヤがいた。

「どうやら天龍はあの場にいたのに何もできなかったと勘違いしているらしい。それに、なんだかんだ言っても君やその少女が心配で仕方ないようだ」

「んなつ……馬鹿言つてんじやねえよ!俺はただ、海上の移動に慣れてねえ提督がうっかりガキ供を落としたらめんどくせえつてだけで心配なんかしてねえ!」

「だ、そうだ」

それこそ茹でダコのように真っ赤な顔で反論する天龍だったが、その場の誰が見ても照れ隠しなのは一目瞭然だった。

エミヤ以外の艦娘達が電か少女を担ぐと言った時だつて――

「俺がいたのに怪我させちまったんだ、これくらいの尻拭いはしねえと職務怠慢になっちまう」

と、頑として聞かなかつたのだ。

もちろん、その場の誰もが天龍の本心など見抜いている。

現場で何が起きたのかをその目で見たからこそ、天龍は他の誰よりも電と少女の事が心配でならなかつたことくらいお見通しだ。

だからだろう、電はまるで甘えるように天龍の背中に頭を預けると、まるで憧れの人に語りかけるように口にした。

「何もできなかったなんて、そんな事はないのです。真っ先にエミヤ司令官さんを庇おうと飛び出した天龍さんは格好良かったのです」

それは紛れもなく電の本音だ。

結果として深海棲艦の子供を助けたのは電だが、一触即発の緊張感の中で真っ先に動けなかつたのも事実なのだから。

むしろ、電の勇氣ある行動は天龍の勇姿に後押しされたからこそと言つても過言ではない。もつとも、それを言えば天龍は尚のこと調子に乗るので電もそこまで言わないのだが。

「くっついたりめーだろ！提督の1人や2人守れなくて天龍型が名乗れるかっつーの

！……でもまあアレだ、お前も良くやったよ。格好良かったぜ」
「ふえっ!?……ありがとう……ございます……?」

これは珍しいものを見たと言わんばかりに艦娘達が目を丸くした。

自尊心の塊みたいな艦娘が天龍であり、誰よりも自分が最強だと信じて疑わないのが彼女だ。

だからこそ、仲間を気遣ったり心配したりすることはあつても功績を称えることはほとんどなかった。

そんな天龍が素直に電の功績を褒めたのだ。

天龍自身も自覚しているのだろう、エミヤの言っていた『護ることに於いて最強』という言葉の意味。

自分のやり方を今さら変えるつもりは無い。だからこそ自分には敵まで救って勝利するというやり方はできない。

そんな自分とは違う強さを見せた電だからこそ天龍は素直に褒めたのだった。

電からは天龍の顔は見えない。

それでも、耳まで真つ赤な天龍にこれ以上の言葉を投げるのは無粋だと思った。

かわりに電はエミヤへと語りかける。

「エミヤ司令官さん、さつきは勝手なことをしてごめんなさい……」

勝手なこととは勿論、命令もなく武装解除した挙句に攻撃態勢に入った少女と天龍の前に飛び出した事を言っているのだろう。

今回はたまたま事態が好転したから良いものを、あんな暴挙を毎回のように繰り返していたら命がいくつあっても足りやしない。

朦朧とする意識の中で謝罪したような記憶はあるのだが、それでも電は改めてエミヤに頭を下げた。

「その謝罪なら先ほど受け取った、私から言うことは特にないさ。だが、電が申し訳ないと思うのなら次からはもう少し考えて行動する事も覚えたまえ」

「猛省するのです……ところでエミヤ司令官さん、ひとつ伺っても良いですか？」

きちんと謝罪ができてスッキリしたのか、電は頭の片隅に引っかかっていた素朴な疑問を口にした。

「何かね？」

「電が飛び出した時、天龍さんは電を止めようとしていたのにエミヤ司令官さんは電に何も言いませんでした。それが電を捨て駒のように見捨てたという意味じゃない事はわかるのです……ですが、何で電を止めようとした天龍さんを止めたのですか？」

「あー、それは俺も気になってた。さすがに見捨てたとは思わなかったけど、あの時の提督は本気で何考えてんのかサッパリだったぜ」

電の言葉に反応して天龍も同様の疑問を唱えた。

あの状況で、無謀とも思える行動をとった電よりもそれを阻止しようとした天龍を止めた理由。

それは当事者である2人にとつても謎であり、それと同時にエミヤにとつては当たり前前の事だった。

「何を言うかと思えば……それは電の勝ちを確信したからに決まっているだろう?」

「電の、勝ち?」

「いや、正確にはあの時の電と同じように誰かを助ける事しか考えない者の強さと言つたところか……電とは全くタイプの違う者だったが、私はそういう愚直で融通のきかない愚かな正義漢を知っていてね。ああ、断つておくが電を愚かだと言っているのではないからそこは気にしないでくれ」

「それは……以前に話してくれた知り合いの方ですか?」

「ああ。奴は生涯、たったひとつの例外を除いて一度も負けたりしなかった。私はその頑ななまでの強さを嫌というほど知っているからな……あの時の電が死の運命に屈するとは到底考えられなかったというだけの話だよ」

「たったひとつの例外?なんだよそれ?」

「……さて、なんだったかな」

『己の理想』と言いかけて、その言葉を飲み込んだエミヤは彼方に見える鎮守府を見ながら薄く笑った。

「とにかく、強さにも色々あるということだ。天龍のように敵を打ち払う強さもあれば電のように敵すらも護る強さもある。今回はそんな電の強さを信じたというだけの話だ。満足してもらえたかね？」

「えっと、その……信じてくれて、ありがとうございます」

電や天龍にはエミヤの言っている事はほとんどわからないままだった。

しかし、天龍の腕の中で今もスヤスヤと眠っている少女を見たらそんな疑問もどこかへ行つてしまった。

電は自分の事を強いだなんて思った事は一度もない。

そしてきつとこれから先もそんな風に思える事はないだろう。

それでもエミヤが認めてくれたその強さが本物で、その強さがあつたからこの少女を救えたのかと思うと、電は少しだけ自分を誇らしく思えたのだった。

天候は快晴。いつもと何も変わらない平穏な一日。

しかしこの日は、1人の心優しい駆逐艦の少女によつて、長きに渡る戦争に新たな可能性が生まれた日になったのであつた。

お姫様の誓い

鎮守府の屋上――

遠くに聞こえる波の音、頭上には降り注ぐような満点の星空。

そんなロマン溢れるシチュエーションだというのに、眉間に深いシワを刻んだエミヤは耳に当てた白い折りたたみ式携帯に向かってうんざりとした口調で話しかけていた。

「キャパシティの限界など知らん。容量が足りないのならバックアップを取ってから脳内のフォルダを全て消去したらどうかね？その空いたスペースに新たな情報を詰め込みたまえ」

通話相手は機械人形かAIなのかと疑われるような内容だが、それはあくまでエミヤの皮肉が行き過ぎていてだけである。

電話の相手は疲れきった日渡提督だ。

機械人形オートマタでは無いにしろ、上司が相手である事を考えればやはりエミヤの皮肉も言い過ぎというものだろう。

しかし、エミヤの本音としては言い足りないくらいであった。

というのも、例の無人島を視察する任務に加えて深海棲艦の子供を保護したという結

果を報告したエミヤだったのだが、前例を見ない驚愕の任務結果に日渡提督の理解力が瞬く間に蒸発したのだ。

ちよつとコンビニへと買い物頼んでみたら、そのついでに車を購入してきたくらいの衝撃だったらしい。

そして待つていたのは呆れと疲労が入り混じった日渡提督による質問責めだ。

最初こそ敵対する生命体を保護してきた事や、その結果に生じた小さな戦闘のことを悪いと感じたのか黙って小言を聞いていたエミヤだったが、そんな我慢も数分で死んだ。

どちらかと言えば小言を言うのも説教臭くなるのもエミヤの性分であり、他人に責められる程に自身を低脳だとも思っていない自負ゆえの我慢の限界である。

報告に使った連絡手段が極秘通話用の携帯だった事がせめてもの救いだ。

『僕の頭はパソコンみたいに都合よくできてないんだよ……まあ、今更なに言つてもしょうがない。その深海棲艦の子供については僕とエミヤ君だけで情報共有しながらしばらく様子を見る事にしよう』

仮に他の鎮守府や艦隊司令部上層部に知られればうっかり内戦が始まりかねないレベルの判断なのだ。キャパシティをオーバーしたとはいえ日渡提督の理解力も相当である。

そのおかげか、電話口から聞こえる声は心底疲れた声ではあるものの、一応の納得はしたようだ。

「そうする他ないだろうな。それはさておき、話の内容と先に送った写真からあの子供の正体について何かわかるかね？」

『ああ、僕の管轄する海域でも目撃情報はないから断言できないけどね。おそらく彼女は「北方棲姫」と呼ばれる個体だろう』

「北方棲姫……しかし随分と曖昧な返答だな。これまでの戦争においてあの子供が前線に出てきた記録はないのか？」

『ない、という訳ではないんだけど彼女は深海棲艦の中でも異質でね。どうやら彼女には艦としての艦種というものが無いらしい。その上、北方棲姫が艦隊を率いて活動していたという記録も残ってないんだ』

日渡提督の言葉にエミヤはどこか納得した。

この世界に召喚されてそれほどの期間を過ごした訳ではないが、それでも深海棲艦については多少の知識も身につけている。

そんなエミヤから見ても、あの少女はどこか異質だった。

そもそも、単独であの様な廃墟に身を潜めている事が不自然なのだ。深海棲艦ならば隊列を為して海にいるはずだろう。

エミヤの沈黙を受けて日渡提督も続きを語り始める。

『どうやら彼女は艦をモチーフにした存在とは異なる在り方で存在しているようだね。あくまで人類側の認識ではあるけど、彼女は陸上基地型の深海棲艦として認識されている』

「基地？そんな物までが概念として顕現するといふのかね？いや、人形などに擬似的な魂を吹き込む魔術も存在する以上は否定しきれないのか……？基地にも何らかの原因で魂が宿り、そこに存在する逸話から英霊の座に召し上げられる事も無いとは言い切れないだろうしな……」

『いやいや、英霊の定義はわからないけど彼女についてはあくまで人類側の認識だと言ったろう？彼女の本質が何に由来するのか、その正確なところまでは僕達にすら把握できていない。便宜上は基地型というだけの話さ』

「なるほど。それで、彼女が基地型だという以外で何が異質だと言うのだ？」

『いくつかあるけど北方棲姫は海上移動が極端に苦手なようだ。決して出来ない訳ではないけど航行性能としては下級の深海棲艦並だと報告が上がっているよ』

「基地型と定義されるのであれば納得できるな。しかし異質と言うほどの事でもないだろっ？」

『たしかにこれだけならば異質とはまでは言えない。むしろ話はここからだ。彼女も子

供とはいえ〔姫〕だからね、動きの緩慢さが弱点にならないほどの火力と耐久力を有してるそう。基地型の特性なのか魚雷が全く効果を見せない事も大きな要因だろう。攻撃力にしたって戦闘記録によると、艦娘による爆撃の余波で起きた津波をたつた一撃で消しとばしたなんて話もあるくらいだ』

ここにきてエミヤに新たな疑問が生まれ、それは自然と口をついて出た。

「ちよつと待て、耐久力と言ったな？ それについての信憑性は確かなのか？ 私達が発見した時のあの子は控え目に言つて瀕死の重体だった。とても耐久力に定評があるとは思えんのだが」

少なくとも逃走する足が鈍足である事を弱点としない程にタフなのだとしたら、あそこまでボロボロになるだろうか？ エミヤは思ったのだ。

しかし、日渡提督が言う本当の異質さとはここからが確信だった。

『……それは違うよエミヤ君。彼女が本気で戦闘に及べば大抵の艦娘はよほど練度が高くない限り北方棲姫の耐久を破る前に轟沈するだろう、彼女が異質なのはそれだけの力を持ちながら艦娘を前にすると逃走に全力を尽くすという点だ。攻撃も最低限しか行わない上にほとんどが目眩しのような使い方だったと報告されているよ』

「それは……たしかに異質だな。という事は北方棲姫による被害は——」

『ゼロだ。比喩でもなんでもない、小破を含めた一切の戦闘被害が報告されていない。』

つまり彼女には戦う意志そのものが無いと見るべきなんだろう』

電話越しの日渡提督にはわからなかったが、エミヤは口元に薄つすらと笑みを浮かべていた。

(なるほど……どうやら電の言っていた事は紛うことなき真実だったようだ)

あの現場において命をかけた暁型駆逐艦の末っ子、電。

彼女は気を失うその最後まで北方棲姫を信じていた。それどころか、北方棲姫をここまで追い詰めた艦娘達を代表して謝罪したほどののだ。

付き合いは浅いものの、自慢の部下が見せた英断が真実に迫るものだったことを知ってエミヤとて嬉しくない筈がない。

『だからこそ少しだけ心が痛むね……あんな小さい子供が必死で非戦闘を訴えていたというのに、敵だというだけであんな大怪我を負わせていたとは……』

「あくまでそれは結果論だ、あの子を攻撃した艦娘とて嬉々として殺意を向けたとも限らないだろう。これが戦争である以上は日渡提督がそこまで気に病む事もあるまい」

『そうだね……少なくとも彼女を発見したのがエミヤ君で良かったよ。過激派の鎮守府に見つかれば無条件で殺されていたかもしれないし』

「それも今後の展開次第だ、あの子供がこちらに殺意を向けないとも言い切れないのは確かだからな。もつとも、そうならないよう手は尽くすつもりだが——」

ある程度の報告や情報交換を済ませて気を抜いたその時、エミヤは不意に驚かされた猫のように身体を硬直させた。

その原因は爆発でも起きたかと思うような破壊音。

その衝撃は凄まじく、電話越しの日渡提督ですらその音を捉えていた。

『どうしたんだい!?!エミヤ君の近くで爆発音のようなものが聞こえたけど、まさか敵襲を受けているのか!?!』

受話器からは心配そうに叫ぶ日渡提督の声が聞こえる。

が、対照的にエミヤの表情筋はわかりやすく死んでいた。

「……通話の途中ですまないが一旦切らせてもらうぞ。ああ、敵襲ではないから安心してたまえ」

『敵襲じゃない?なら今の音は?』

「さてね……どこかのたわけが聖女の逆鱗にでも触れたのだろう。おかげで聖女様は復讐者に反転したようだが」

『すまないがエミヤ君の言ってる事がさっぱりわからない……』

「こちらの話だ」と言って通話を終えたエミヤが深い溜息をつくのとほぼ同時、屋上のドアを蹴破る勢いで愛宕と隼鷹が駆け寄ってきた。

「あら、こんなところにいたのね提督!ついさつき電ちゃんとおの子供が目を覚ましたん

ですけど大変な事になってて……助けてもらえないかしら？」

「いやあ……アレに関してはあの2人の自業自得としか言えないんだけどねえ。まつ、犠牲者が2人に増える前にとつと『ズドンツ!!』……手遅れだったみたいだねえ。ともあれさっさと来ておくれよ提督さん！」

再び響いた轟音と、何かの救援を求める愛宕と隼鷹を前にして再び深い溜息をつくエミヤだった。

と、いうのも――

任務を終え無事に鎮守府へと帰ってきたエミヤと艦娘一同だったのだが、電は天龍の背中であぐらをかいており、北方棲姫はエミヤの魔力で急場を凌いだとはいえず断を許さない状況のままだった。

一刻も早く手当てする必要がある為、任務の報告書などは金剛に任せて、エミヤと天龍と摩耶の3名は入渠設備へと向かった。

入渠設備とはいっても形式は大浴場であるため、目を覚ました北方棲姫が万が一暴れた場合を想定してエミヤは脱衣所の外で待機。電と北方棲姫の入浴を天龍と摩耶で介護する形になったのだ。

そう、ここまでは良かった。

そして、ここからが良くなかった。

深海棲艦の傷を艦娘用の設備で治癒できるかという懸念はあったものの、それは杞憂で終わり、電が傷を癒したのを追うように北方棲姫の傷も完治した。

2人ともよほどの疲労があつたのか、簡単に髪を乾かした後で運ばれた保健室のベッドで深い眠りに落ちた。

で、その状況で何かしでかすのがこの鎮守府のお転婆娘である天龍と摩耶である。

——以下回想

「つたく、俺達に風呂の世話までさせといて本人は気持ちよく夢の中つてか？」

「まあまあ、アタシ達は今回の任務で大した事してないんだし良いじゃねえか」

「それもそうだな……それにしても」

「ん？どうしたんだよ天龍、深海棲艦のホツペなんかつついて？」

「いやあ、こいつがああ【姫】かと思うと信じられなくてよ。寝顔だけ見てれば電の妹みてえじゃん？」

「ああ……確かにね。ちようど駆逐艦と同じような背丈だし違和感ないわあ。つて、おいおい！何してんだよ天龍！」

「んー？せっかく寝てる事だし敵対はしなくてもイタズラくらいはしようかと思つてない！」

「だからって顔に落書きなんてするかねえ普通……？しかもそれ油性じゃん！後で電に

ぶっ飛ばされてもアタシは知らねえぞ？」

「ははっ、相手は電だぜ？こつちのチビだつてまだガキじゃねえか、返り討ちだつつの。っつーか摩耶こそ何言つてんだ？ここにもう一本マジックの用意はあるんだぜ？」

「いや、天龍……それを早く言えつて！」

「クツクツクツ、やつぱり摩耶もヤル気じゃねえか。んじゃ俺はこのガキだけだとイジメみてえだし電の顔にでも挨拶してやつかな！」

「おつしや！どつちが芸術的な落書きになるか勝負といこうじゃねえか！摩耶様の本気を見せてやる！」

「上等だぜ！落書きにおいても俺が世界基準を軽く超えてるつてところを見せてやらあ
！」

つまりはタネを蒔いたどころか畑を耕して田植えをするくらいの暴挙を最初にやらしたのは天龍と摩耶である。

ちなみにこの時エミヤは何をしていたかというと、相手が人間ではなく更には子供の姿とはいえ無闇に女性の眠る場所に立ち入らないという無駄な紳士っぷりを発揮して保健室の外で待機していた。

保健室の中から尋常ではない大笑いが聴こえてきたので何事かと思つて部屋に入つた時には電と北方棲姫をキャンパスにした落書き^{アート}は完成した後だった。

「……君達はいったい何をやっているのだ？」

「おつ、丁度いいぜ提督！どつちの落書きが完成度高いかジャツジしてくれよ！」

「なるほど、説明はもういい。私を巻き込むとだけ言っておこう」

「んだよノリが悪いな。アタシの最高傑作を見てクスリとも笑わないってどういうことだよ」

「恐らく、笑えない事になるのは君達の方だ。その2人はひとまず寝ているようだから私は他の用を済ませてくるが……悪いことは言わない、電達が目を覚ます前に綺麗にしておく事をお勧めするよ」

——回想終わり

その後、日渡提督へと報告の電話をしていたら愛宕と隼鷹に捕まってこの始末だ。溜息の一つや二つ、つきたくもなるだろう。

手を引かれるように現場へと急行したエミヤ達。

なにやら騒がしい様子の保健室にまたも気が滅入るが、それでも扉を開けて入室する。

「だから綺麗にしておけと言ったのだ、たわけめ……」

そこにいたのは紛れもなく天龍、摩耶、電、北方棲姫の4名だった。

電は北方棲姫の顔をハンカチで拭きながらオロオロとしている。

対して、天龍と摩耶はといえば――

「て、提督……助けてくれ……」

「死ぬ……割とマジで死ぬ……」

壁にめり込んでいた。

例えるならばヒーロー系漫画『ワンパンマン』のボロス戦ラスト、戦慄のタツマキに突っかかったジェノスがめり込んだのと同じように、面白すぎるポーズのまま現代風オブリエのように壁と一体化していた。

「まったく。電、いくらなんでもやりすぎではなかね？」

「ご、ごめんなさい！この子が怯えてたのでつい……」

「あの2人については自業自得だからな、私とて何も言うことはない。しかしだ、君のよ
うな優しく大人しい淑女が壁を破壊するのは関心しないぞ？壁に罪は無いのだ」

「おいコラア！どう見たって俺達が被害者だろおが！さっさと助けやがれ！」

「つつーか人を壁にめり込ませる奴のどこが淑女だよ!？」

「ふむ、何が原因でこうなったのか理解していないようだな？こんな壁の破損くらい、私の投影ならば瞬時に修復可能なのだが……そこまで強気な発言をするのだ。別に、君達を埋め込んだまま修理しても構わんのだろう？」

「スミマセンデシタ……」

「カンベンシテクダサイ……」

壁のシミ（物理）になるのが嫌だったのだろう、天龍と摩耶は即決で謝罪した。

エミヤはフンと鼻を鳴らして2人を壁から引っこ抜くと壁の修復を開始する。

「しかし意外だったな。さすがに怒るとは思っただが、まさかここまで逆鱗に触れるとは。普段は気弱な電とはいえ乙女の顔に落書きされるのは腹に据えかねるといったところかね？」

瞬く間に修繕されていく壁に手をかざしたまま、ニヒルというよりは苦笑いに近い表情でエミヤは電に語りかけた。

「うう……それもあるのですが……」

問われた電は、電に抱きつくようにして怯えていた北方棲姫の頭を撫でながら目を泳がせる。

「この子と電が天龍さんと摩耶さんに落書きを抗議したら『ああん？ 反抗的な態度だなあ？ そんな悪い子は煮るなり焼くなりして食っちゃまおうかあ!!』と迫ってきて……この子も半分泣きながら『クルナ！ カエレ！』と叫ぶばかりで……その……パニツクになつてしまい気付いたらこんな事になっていたので……」

「母性本能に關しては姉譲りという事か……いずれにせよそこまで気に病む必要はあるまい。諸悪の根源はこの通り反省しているようだしな」

おでこに大きく『プラズマ』と落書きされた電は肩を落とした。

それを慰めるようにして今度は北方棲姫が電の頭を撫でているのは見ていて微笑ましい光景だが、それよりもエミヤのジトつとした視線が天龍と摩耶に突き刺さる。

「私達が来た時には天龍は壁になった後でねえ、愛宕は必至に電を止めようとしたんだけど本気になった電はどうにもできないって事で提督にヘルプを求めたのさ」

「もう！摩耶は素直で良い子なのに、たまに変なトラブルを起こすんだから！人に迷惑をかけちゃダメでしょ？」

愛宕と隼鷹も呆れたような視線を投げかけた。

いたたまれなくなった2人は電と北方棲姫に深々と頭を下げた後、逃げるように去っていった。

その後、天龍と摩耶が『電だけは怒らせたらヤバイ』という共通認識を抱いたのは言うまでもない。

「さてと——」

逃げていく天龍と摩耶を見送ってから、壁の修復を終えたエミヤは北方棲姫の前へと膝をついた。

「傷については完治したようだが気分はどうか、お嬢さん？」

「……………ダイジョウブ、ハイキ」

微笑みかけるエミヤに対しては天龍達ほどの警戒心を抱かなかったのか、電に抱きついてはいるもののエミヤの言葉に小さな声で応えた。

「それは良かった、突然のことで戸惑っているだろうが君はこれからこの鎮守府で暮らしていく事になる。その間、君の安全は私達が守ると約束しよう。ただし選択するのは君自身だ……君はここで暮らすのは嫌かね？」

穏やかで優しい声色のままエミヤは問いかけた。

依然として怯えているような様子ではあるが、それでも北方棲姫は必死にエミヤの言葉を頭の中で反復しながら考える。

そして、自分の頭を優しく撫でてくれる電の顔を見ながら一つ確認した。

「プラズマモ……イツシヨ……？」

電のおでこに大きく書かれた『プラズマ』の落書きを読んだのだろう。それでも決してバカにしている訳ではなく、まるで継るように聞いてくる北方棲姫は真剣そのものだ。

この時、思わず吹き出しそうなのを堪えるようにエミヤと隼鷹と愛宕が顔を背けたのは貰い事故のようなものだろう。

問われた電も、まさか純真無垢な子供を怒る訳にもいかずに少しだけ苦笑いしながら答える。

「私の名前は電いなづまなのです……大丈夫ですよ、あなたがここにいる限り電も一緒なのです。さっきの天龍さんや摩耶さんも悪ふざけが過ぎてしまっただけで、ここの皆は優しく良い人ばかりなのです。電はここで一緒に暮らしてくれれば嬉しいのです」

北方棲姫は困惑していた。

深海棲艦として生まれてから、自分に優しくしてくれたのはたった1人だけだった。そんな1人ですら戦闘の中で逸れてしまい、それからは孤独しかなかった。

それどころか理由もわからないまま襲われる毎日を過ごしてきたのだ。

そんな日々の中で、いつだって願っていたのは楽しい海で平和に過ごしたいという思いだけだった。

そんな素朴な願いすらも爆炎で吹き飛ばしてくるのがこの艦娘と呼ばれる少女達ではなかったのか？

だというのに――

この電という少女が頭を撫でる手が、北方棲姫に優しさをくれた人物とそっくりなのだ。

正直に言えば怖い。

この少女達もいつかは自分に襲いかかってくるのではないのかと思わない訳ではない。

それでもこの優しい温もりから離れたくないと思う理由は北方棲姫にもわからない。北方棲姫は一度だけ目を瞑ると真つ直ぐにエミヤを見つめた。

「ココニ……イタイ」

「そうか。だがその前に……当然だが、ここにいるメンバーに攻撃したり人間を襲うような事があれば一緒にはいれなくなる。それどころか私達は君と敵対するだろう、もちろん全力で戦う事になる。その上で、誰も襲わないと約束できるか？」

北方棲姫が見つめるエミヤの瞳——それは先程までの優しいものではなく、まるで猛禽類のように鋭い眼光だった。

当然その眼に込められた感情に脅迫めいたものは含まれていない。真に北方棲姫を守るのならば避けては通れない条件であり、それだけ真剣だという心の表れである。

そこに害意や敵意が無いことは北方棲姫を含めたその場にいる全員が理解しており、だからこそ空気も緊張感を増した。

そして、その眼に気押されるように硬直する北方棲姫だったが、それは恐怖というよりもやはり緊張が主な様子だ。それを察してか、電が優しく微笑んでやると身体の強張りが幾分かほぐれた。

やがて大きく深呼吸をするように息を吐くと、今度は怯えた目ではなく確固たる意志を持つて言うのだった。

「ヤクソク、スルー！」

一切の迷いも無く、怯えて掴んでいた電の服さえ手離して北方棲姫はエミヤの正面から誓った。

「……承知した。ならば私達も命の限り君を守ると誓おう、約束だ」

北方棲姫の誓いを確かに受け止めたエミヤは、再び優しい眼で北方棲姫に約束を交わした。

守れるものならば、この手が届くのなら、何があつても守る。

そんな思想に基づいて機械のように在り続けたエミヤにとって、切り捨てる側だったはずの命を守ると誓う経験は、実はこれが初かもしれない。

しかし、それほど悪い気がしないのはどこまでいつても本質的にエミヤがお人好しだからだろう。その顔は満足気に微笑んでいた。

「さて、そうと決まればやるべき事は目白押しだな。手始めに君の名前を確認したいのだが、自分の名前はわかるかな？」

「ナマエ？ワカラナイ……」

「そうか、では私達の間で呼ばれている君の名前だけでも教えておくとしよう。君は『北方棲姫』と呼ばれているそうだ」

「ホッポウセイキ？ソレガ、ナマエ？」

「私達が勝手に呼んでいるだけだがね。気に入らなければ別の名を名乗るのも良いだろう。なんなら電が名付け親になっても良いんじゃないか？」

「はわわっ！電がですか!?!」

「どうやらこの子は電に最も懐いているようだしな。未婚のまま名付け親になるのに抵抗があるようなら無理強いはしないが……北方棲姫はあくまでも敵の個体識別用の名前だ、君としてもそんな物騒な名前で呼ぶのは抵抗があるだろう？」

名付け親やら未婚やらのキーワードに照れたのか、耳まで真っ赤に染め上げてワタワタと慌てる電。

しかし、北方棲姫という人間が敵につけた名前を呼ぶ事は電としても芳しくないようだ。

「で、では……名前というよりあだ名なのですが……ホツポちゃん、なんてどうでしょう……?」

顔から火が出そうな程に恥ずかしがりながらも、電の口から新たな呼び名が提案された。

「ホツポか。うむ、語感も良いし覚えやすい。それに電らしく可愛らしい名前じゃないか。君はこの名前で呼ばれるのは嫌かね？」

「ホツポ……ソレガ、ワタシノナマエ?」

「ああ、電が君につけてくれた名前だ。お気に召したかな？」

「ウン！ワタシ、ホッポ！アリガトウ、イナヅマ！」

「気に入ってもらえて電も嬉しいのです！ですが……なぜか物凄く恥ずかしいよお……」

さつきまで怯えていたのが嘘のようにはしやぐホッポと、悶えるように赤面する電。

そんな2人を見ながらエミヤや愛宕、隼鷹も嬉しそうに笑うのだった。

「よし、それではさつきそく約束を果たすでしょうか」

「約束？提督が誰とどんな約束したつてのさ？」

「そこのお姫様2人だよ。帰ったら美味しいご飯をお腹いっぱい食べよう、とね。私が直接した約束ではないが、耳に入った以上は叶えるのが大人というものだろう？それとも、その約束は隼鷹が愛宕が果たしてくれるのかな？」

「たははつ、愛宕ならともかく私はパスだね。とてもじゃないけどお子様に食べさせるような物は作れないよ。私にできるのは酒の肴くらいなものさね！」

「私も遠慮しておくわ。きつと提督が作ったご飯の方が美味しいでしょうし、この子達もそれがご希望みたいですすし」

「謙遜が過ぎるだろう、重巡洋艦愛宕といえば料理でも有名だった筈だが？とはいえ、私もこればかりは譲る気がないのだがね。そういう訳だ、今夜は特別豪勢な夕飯を振る舞

うとしよう」

「やったのです！今日はご馳走なのですよホッポちゃん！」

「ゴチソウ？ホッポモ、タベテイイノ？」

「当たり前なのです！エミヤ司令官さんの作るご飯は絶品ばかりなのです、ホッポちゃんも絶対に気に入るはずなのです！」

「ホントニ!?ホッポ、タノシミ！アリガトウ、エミヤ！」

外見相応の子供らしいはしやぎつぷりに呼び捨てされたエミヤですら怒る気にもならない有様だ。

「うちの提督を呼び捨てとはなかなか肝の座った子供だねえ。こりゃあ将来が楽しみだよ」

「あら、子供らしくて良いじゃない。それに電ちゃん側にいけば素直で良い子になると思うわよ？」

「そもそも私の部下という訳でもないのに提督と呼ばれても困るというものだ。私のことなど好きに呼べば良い。それよりもだ、電、ホッポ——」

スツと立ち上がったエミヤはいつもの意地の悪い笑みを浮かべて告げるのだった。

「食事の前にその顔をどうにかするべきだと思うがね？せつかくのレディが台無しだ」

お互いの顔を見てキョトンとした後、大笑いする電とホッポ。

天龍と摩耶の芸術も喉元過ぎれば笑いのネタにすぎないようだ。

こうして新メンバー加入の初日は幕を閉じた。

この日の晩御飯は同じ釜の飯を食べるというエミヤの粋な計らいでお好み焼きとなつた。

彼が子供好きなのかは不明だが、怖いくらいに気合いの入った献立と、食堂にズラリと並んだ投影の鉄板焼きセットはホッポの度肝を抜いたという。

ちなみに、天龍と摩耶は終始正座で固まっていたそう。

【幕間】 ホツポちやんのいる日々―前編―

— side エミヤ —

ホツポが来てしばらく経ったとある日の深夜。

草木も眠る丑三つ時、睡眠を必要としないサーヴァントであるエミヤは執務室で書類の整理に追われていた。

日中は艦娘達に白兵戦の稽古をつけたり食事の準備をしたりと忙しく動き回っているため、こうした事務作業は深夜にこなすのが常となっている。

決して金剛に押し付けているだけのダメ男ではないのだ。

そんなエミヤが作業もひと段落して秘蔵の紅茶を楽しみながら一息つこうとしたその時、執務室のドアを小さくノックする音が聞こえた。

(こんな時間にいったい誰だ?)

チラリと時計を確認するものの、夜間哨戒の任務を撤廃している現在の鎮守府では艦娘が起きていような時間ではない。

茶葉の入った缶を戸棚に戻すと、エミヤはドアに向かって声をかけた。

「入りたまえ」

エミヤの声を受けてドアが開かれる。

そこに立っていたのは艦娘ではなく、全身が雪のように純白の少女だった。

「ホッポだったか。どうしたのだ、こんな時間に」

「……………」

ドアを開けたホッポはモジモジとしながら俯いて何も喋ろうとしない。

心なしか頬や耳が赤く染まり、どこか恥ずかしがっているような様子だ。

わざわざこんな深夜に尋ねてきたというのに何も話さないホッポに疑問を抱いたの

か、エミヤは彼女の近くまで歩み寄ると片膝をついてできるだけ優しく語りかけた。

「まいったな、黙っていられては私もわからないのだが。怖い夢でも見たのか？ 同室の

電や響には何も言わずに来たのかね？」

「ウウン……違ウ。電ト響ハ、眠ッテルカラ起コシタラ、カワイソウ……」

「ならどうしたのだ？ 私に何か用があったのだろうか？」

余談だがこの数日でホッポの語彙力(?) はかなり向上した。

というのも言葉数が少なく、どこかノイズがかかった話し方だったホッポを氣遣って、

エミヤや電が必死に国語のお勉強を手伝っているからである。

その甲斐あつてか、現在では初日に比べてハッキリと言葉を話すようになり、どこか

ノイズのように聞こえていた声も年相応の少女のように明快なものへと変化してきて

いる。

そんなホツポなのだが、今夜は珍しくハッキリと喋ろうとしないのだ。

既に眠っている電や響を起こしてしまつてはかわいそうだという氣遣いができるのは素晴らしいが、わざわざ起きている事がわかつているエミヤの元までやつてくる理由とはなんだろうか？

元から子供の扱いに長けているわけではないエミヤは、こんな時の子供に対する対応がわからない。

故に困つたような苦笑いでホツポが口を開くのを待つ事しかできないのだが——
今回はその時間をかけた判断が裏目に出た。

「エツトネ……アノネ……」

やつと顔を上げたホツポの表情を見た時、エミヤは不覚にもドキリとしてしまった。その瞳は蕩ける程に潤んでおり、顔は真っ赤に染まつている。

外見には不釣り合いな程の妖艶さなのだが、髪や肌まで真っ白な少女が赤くなりながら夕焼け色の瞳を潤ませるといふミスマツチさが背徳的なまでの艶やかさを演出するのだ。

もちろん、エミヤにそういった紳士の嗜好はない。

だからこそ出来る限り冷静に対応したのだ。ここまでは。

「う、うむ……言いにくい事ならば焦らなくても良い。他の者が寝静まった時間に私を尋ねてくるという事は、君にとっても重要な要件なのだろう？」

「……………トイレ」

「……………は？」

「トイレ……………出チャウ……………」

閑話休題

草木も眠る丑三つ時。

国の平和を守るために存在する鎮守府の建物内を、草木を叩き起こす勢いで疾走する小脇に少女を抱えた英雄の姿があった。

「大丈夫か！まだ我慢できるか!?というか私の所まで来る余裕があるのならなぜ最初から厠へと向かわなかった!」

「一人ダト怖イカラ……………ダメ、モウ我慢デキナイ」

「良しわかった！もう喋らなくて良い！今は全ての力を忍耐に回せっ!」

さすがは英霊、魔力による強化を施した全力ダツシユは音速もかくやという勢いだ。

その反動で廊下の床が所々破壊されていくのだが、そんなもの現状では些事に過ぎない。

（落ち着け落ち着け落ち着け！この程度の窮地ならば他に幾らでもあつただろう！かの聖杯戦争に比べれば少女一人を手洗いに送り届けるくらい造作もないはずだ！おのれ、こんな時にマスターさえいれば令呪をもつて瞬間的に――）

「アンマリ揺ラサナイデー！ホント二、モウ――」

「うおおおおおおおおおつ！」

クー・フリーンのゲイ・ボルクを防いだ時でさえここまでの危機感を覚えたか怪しいだろう。

ちなみにだが、この鎮守府は元学校の校舎を改築したものだ。

その名残りからか、構造も昔の小学校に近い物になっている。

エミヤがいた執務室は校長室だった部屋をそのまま使っており、つまりは教員用のフロアにあるという事だ。

そしてトイレに関しても、もちろん教員用のトイレを提督や客人用として使用している。

元々は女性教員のトイレもあつたのだろうが、現在ではスペースの確保などの理由から取り壊しており男性トイレしか存在しないのだ。

この時のエミヤは冷静さを欠いていて気付いていないのだが、緊急であるのなら男性トイレでも大の方であればホッポも使えただろう。

それでなくとも、食堂に行けば女性トイレは設置されていたのだが……残念なことに今の切羽詰まったエミヤには艦娘達が住んでいる校舎の女性トイレしか連想できなかった。

そして目的の女性トイレなのだが、それは艦娘達が宿舎として使っている元学童用校舎に設置されている。

英霊のスピードであればあつという間に到達できる距離ではあるが、今はその数秒すら惜しい状況だ。

普段であれば女性達が生活する区域内に侵入を試みるといった下衆な行為などエミヤがするはずはない。それもこんな真夜中だ、雄叫びを上げるなどもつてのほかだろう。

しかしこの時ばかりは脇目も振らずに叫んだ。

脇に抱えた少女の名誉の死守と、次の瞬間には訪れるかもしれない最悪の結末を回避するために。

そして――

「着いたぞ！限界は――間に合ったようだな！良し、行ってくるのだホッポ!!」

目と鼻の先ほどの距離が水平線の向こうに思えるほど遠く感じた。

しかし間に合ったのだ……幾たびの戦場を超えて不敗を貫いてきた錬鉄の英雄は、見

事に少女を御手洗アヴァロンいへと解き放つてみせた。

が――

「怖イ……ツイテキテ」

「なんだと!?!」

緊急任務発生。

遙か遠い理想郷を目の前にして、少女は第2のミツシヨンを発令した。

考えてみれば道理であるが、ホツポは何も深夜の校舎が怖かつたのではない。もしそうならば夜中の校舎を歩いてエミヤの元を訪ねたりはしないだろう。

つまり、ホツポが怖かつたのは深夜の校舎ではなく深夜のトイレなのだ。

(馬鹿な……こんな歳とはいえ女性だろう!?!何を言っているのだこの子は!?!……いや、こんな歳とはどんな歳だ?そもそもホツポの年齢とはいったい幾つなのだ?……違う、そうではない!オレが中まで付き添って何ができるといふのだ!?!ここは女子トイレだぞ!こんな時に世間の親というものはどうしているのだ!?!クソツ!こんな事ならば生前に結婚を……だからそうじゃない!馬鹿かオレは!こんな時に何を考えているのだ!)

「早く!モウ限界ナノ!」

「~~~~ツ!!ええいままよつ!」

エミヤ自身にも良くわからない類の覚悟を決めてトイレの扉を開け放つた。

ホッポをトイレに押し込んで自分は外で待機してやれば良いだろうという甘い考えと、我慢の限界が近いという焦りが安易な行動をとらせたのだ。

その結果

「……あらあ、残念です。まさかエミヤ提督にそんな趣味があつたなんてえ」

待ち構えていたのは天使のような笑みを浮かべた悪魔^{悪魔}だった。

おそらくホッポ同様、夜中にふとトイレに行こうと目を覚ましたのだろう。その姿は普段の服装ではなく大人びたネグリジエだ。

裾や襟にはフリルがあしらわれて胸元は大胆に開いており、姉と同様に世界基準を軽く超えた胸部装甲がこれでもかとその存在を主張している。

ネグリジエの生地はシルクのように滑らかでありながらとても薄く、下着までハッキリと確認できた。

つまり、エミヤは詰んだ。

「ち、違うのだ！これはホッポが——」

「ふふつ、言い訳はいらないわあ。こんな夜中に小さな子供を人気のない場所へと連れ去るような悪い人はあ……お仕置きですわね」

甘ったるい声とは裏腹に、その手には龍田の装備である薙刀が顕現した。

激昂した天龍のように臙装をフル装備しないだけまだマシなのだろうが、やはり天龍

型はどこまでいっても天龍型である。

「待て！話を聞け！君は誤解しているだけだ！」

「そうやって必死に弁解するところが余計に怪しいですよ？それに、私の下着を見たのは誤解じゃ済まされえないじゃない？ねえ、そんなに死にたい？」

「バーサーカーか君は!?!ええいつ！ホッポ、今のうちに行つてこい！」

「……？ウン！エミヤ、サツキハ凄カッタ！エミヤ、早インダネ！イツテキマス！」

「なぜ誤解を深刻化する言葉を残していくのだ!?!」

「死刑確定ねえ」

翌日、妙にボロボロになったエミヤが鎮守府内の不自然な破損を修復する姿が目撃されたらしい。

彼は小さな声で『なんでさ……』と呟いていたという。

——side 金剛型——

のどかな昼下がり、麗らかな春の陽気に思わず欠伸が漏れそうになるのをこらえて事務作業にあたる金剛の元へと妹の霧島が訪ねてきた。

「失礼しますお姉さま、午前の哨戒任務の報告にきました」

「お帰りのサイ霧島、午前哨戒が帰港したならLunchの時間ネ！霧島も一緒に行くデース」

「はい、一緒します」

ひとつ伸びをしてから金剛は席を立った。

本来ならば提督が常駐している筈の執務室だが、提督であるエミヤは今頃キッチンであくせくと働いている事だろう。

もう見慣れてきた光景とはいえ自分さえ外に出てしまえば伽藍堂のようになってしまふ執務室がどこか寂しく見えてしまうのは、倉敷提督が殉職してから今も変わらないままだ。

「あ、そういえば——」

食堂へと向かう廊下、隣を歩く霧島が不意に質問を投げかけてきた。

「ホッポちゃんはどこに行つたのですか？執務室には見当たりませんでした」

「ああ、ホッポちゃんは提督と一緒にいるネ。電が任務でない時はほとんど提督の側を離れませーん」

「やはりそうですか……うーん、なるほどなるほど……」

何の気なしに返答した金剛とは対照的に、なにかを熟考するかのような様子の霧島。

当然、金剛にはそんな霧島の脳内などわかるはずもなくキョトンとするばかりだ。

「えつと……どうしたデスカ霧島？ 難しい顔になってるネ、Smile、Smile！」
「いえ、少し懸念すべき案件といえますか……お姉さま、率直に聞きますがエミヤ提督と将来的にはケツコンカツコガチまでお考えですか？」

「ひゃい!？」

まるで瞬間湯沸かし器のように真つ赤になる金剛。

そんな姉を内心で『金剛お姉さまはやはり可愛い』と再確認しながらも、霧島は真面目な顔のまま話を進める。

「いえ、漠然とした未来の話なのでお姉さまが困惑するのも無理はないのですが……エミヤ提督と仮に結婚するとなると私の分析では様々な問題が発生するといえますか……」

「わ、わわわ、わわつ、私とエミヤ提督が結ばれる事に何の問題があるデスカ!?! いや、そもそも結婚できるかもわからないというか……できればしたいというか……でも私から言うのは恥ずかしいネ……」

「落ち着いてくださいお姉さま。問題というか……あの方が英霊で、いつまでこの世界に存在していただけるかという点はひとまず棚上げするとして、目下の課題はホツポちゃんでしょう」

「うっ……霧島は冷静な顔で深刻な悩みをつけてきますネ……それにしても何でホッポちゃんのデース？」

「どうやら金剛は何も気付いていないらしい。」

「そんな無垢なお姉さまも素敵なのだが……それで興奮するのは次女の比叡の役割だろう。」

「仮にも艦隊の頭脳を自称する霧島は眼鏡をクイツと直すと、静かな声で語り始めた。」

「この戦争がいつまで続くのかは定かではないですが、私達艦娘には国の定めた終戦後の社会的保証があります。制海権を取り戻しつつある鎮守府に在籍する艦娘の中には、資格を取得したり企業見学に出ている娘もいるとか」

「あー、それなら私も聞いたことがあります。終戦後は艦娘に人権を認め、人として社会に順応するための運動だとか……え？それがどうしたデース？」

「つまりですね……仮にエミヤ提督がこのままこの世界に留まってくれたとして、あの方の将来は軍が保証するでしょう。あの日渡提督がバックに付いているなら安泰です。しかし、ホッポちゃんはどうか？」

「どうでしょうかつテ……確かに無邪気で可愛い子供とはいえ深海棲艦、世間に溶け込むのは難しいかもしれないネ」

「そこですよ、お姉さまー」

ガシッと金剛の両肩を掴む霧島。その眼鏡は碇ゲンドウばりの光を放つ。

「おそらく終戦後もホツポちゃんについては秘匿される筈です。つまりは誰かが引き取って面倒を見ていく事になるかと……そして恐らくですが、その誰かとはエミヤ提督になる可能性がもつとも高いと私は分析しますね」

「……え？ちよ、マジで？」

「マジです」

この金剛、理解がキャパシティを超えた時にアイデンティティが行方不明になりがちだが、今回ばかりは相当に青天の霹靂だったようだ。

が、その理由は存外に優しいものだった。

「という事はエミヤ提督と結ばれた暁には私がホツポちゃんの……ママという事デスカ!?」

「へっ!?!」

霧島としては、愛する男性に本人の子供ではない子供が付いてくる事を懸念するのかと予想していたのだが……：どうやらこの姉、想像以上に心根が優しいらしい。

邪険にするどころか一切イヤそうな顔もせず、まるで息をするくらい当たり前前にホツポの事を認知したのだからそれも相当だろう。

——とは言っても、エミヤと金剛が結婚すると決まった訳ではないのだが。

このガールズトークに関してはエミヤに人権は認められていない。

「これは盲点だったネ……これからはホッポちゃんと親子の絆を深めなくては!! Hey 霧島! さっそくホッポちゃんを Lunch に誘いに行くデース!」

「お、お姉さまがそれで良いのならばお供します!」

走り出す金剛——

その背中を追いながら霧島は思う。

(まったく……我が姉ながら本当に優しい人ね、金剛お姉さまは……)

思い返すは榛名や比叡が轟沈してからの日々。

いつも4人で一緒にいたはずの姉妹がいなくなつた喪失感、力の無い自分を憎みもした。

冷静沈着を装っていたが、それでも眼鏡の奥の両目は毎日真っ赤に腫らしていたあの日々——

この姉はいつだって自分を支えてくれた。

誰よりも、何よりも辛いはずなのにいつでも霧島に寄り添って笑顔を向けてくれた。

誰もが失意のどん底にいる中、鎮守府を守るために必死になつて提督代理を務めた。

たまにはドジなところや残念な部分もある姉ではあるが、それでも霧島にとつては胸を張つて自慢できる最高の姉なのだ——

「ほら、早く行きマスよ霧島？」

「——はいっ！」

常に自分の前をいく姉。だが、決して離れぬように振り返つて手を引いてくれるお姉さま。

その向日葵のような笑顔に霧島は今日もついていくのだった。

「Hey、ホツポちゃん！今日から私と一緒にご飯を食べませんか？」

「……電ト、食ベルカラダメ！」

「ガフツ……」

金剛大破。

「ああ……ねえホツポちゃん？ホツポちゃんはこの鎮守府で誰のことが好きなのかしら？」

「……？エミヤ！電！響！」

「ゴフツ……」

「お姉さまあああああ？！」

金剛轟沈。

思わぬ伏兵、届かぬ激愛、金剛の恋路は遥かに遠く険しい事だろう。

頑張れ金剛、明日は今日より一歩でも前へ――

――side 天龍型――

天龍型のイメージといえば良くも悪くも戦闘狂だ。

常に好戦的であり、鬼神の如き勢いで勇猛果敢に敵へと挑む一番艦の天龍。

その見た目や言動とは裏腹に、天使のような笑顔で冷酷に命を刈り取る死神こと二番艦の龍田。

そんな天龍型だが、だからといってバーサーカーのように戦場のみを求めている訳ではない。

非戦闘時は2人とも面倒見が良く、何かと頼りになるお姉さんなのだ。

トラブルメーカーといえれば否定はできないのだが、それ以上にムードメーカーである天龍。それをフォローしながら見守る龍田という絵は鎮守府の共通認識だろう。

今回は、そんな2人が演習で海に出ようとした時に起きたお話――

「さて、と……おい龍田、今日は何を賭ける？」

「そうねえ、確か今日のお夕飯はお刺身だった筈だから……負けた方はお刺身を献上でどう？」

「ほんつと刺身が好きだなあ？上等だぜ！んじゃ行くとすつかあ！」

鎮守府に在籍する軽巡洋艦が天龍型のみという事もあり、2人が揃って演習に出るところは珍しい。

エミヤが来てから夜間哨戒がなくなった事や、シフト制の休日設けた事によつて姉妹が揃って行動する事ができるようになったのだ。

ちなみに今日の天龍は非番だ。だというのにこうして演習に出るあたりは、戦闘狂と呼ばれるにふさわしい自信に繋がっているのだろう。

そんな2人に声がかかる――

「おや、これから演習かね？」

海面に立ちながら船渠ドックを見上げると、ホツポを肩車したエミヤが立っていた。

「んだよ提督、こんな所で珍しいな？」

「それにホツポちゃん一緒なのねえ。また良からぬ事を考えてなければ良いんですけど？」

「んんっ……コホン。今日の夕飯は仕込みが少なくてね、ホツポが海を見たいと言うから出てきたのだ」

何か都合の悪い事でもあったのだろうか、バツの悪そうな顔で目を逸らした。

「天龍ト龍田ハ、何処ニ行クノ？」

「演習だよ演習。あそこに見える的を狙って砲撃すんだよ」

天龍が指差す先、遙か彼方には豆粒程に小さく見える的が浮いていた。

波間で漂うブイに括り付けられた的を狙って着弾精度を高める訓練らしい。

「遠イネ、アレニ当テラレルノ？」

「おいおい、俺を誰だと思ってるんだ？世界最強の天龍様だぜ？あんなもん……オラア！」
不敵に笑う天龍の方向が火を噴いた。

その弾道を目で追うと、3発の砲弾のうち2発が的に当たって爆炎を上げる。

「ちつ……1発はずしたか。まあ、この距離ならこんなもんだろ？」

「スゴイ！天龍カツコイイ！」

「フフフ、怖いかな？俺にかかりやこんなもんよ！」

「ホッポモ！ホッポモ、アレヤリタイ！エミヤ、イイデシヨ？」

エミヤの肩の上ではしゃぐホッポ。

戦闘は嫌っていても的当てゲームには興味深々のようだ。

「やりたいと言ってもだな……ホッポがやるとなれば難易度に問題があると思うのだが……」

「あらあ、良いじゃない。子供は元気に遊ぶものでしょう？私達も夕飯のおかずを賭けてたところだし、ゲーム感覚で演習するのも肩の力が抜けて良いかもしれないわあ」

「夕飯ノ、オカズ？」

「おう！一番多くの的を沈めた奴がビリから刺身をもらうってルールだ。やってみるかあ？ま、どうせ俺が勝つんだから辞めとくのも勇気だぜ？」

「夕飯……才刺身……ウーン……デモ楽シソウ！ホッポ、ヤル！」

「うっしやあ！そう来なくっちゃな！言つとくが勝負となつたらガキンチョ相手でも手加減はしねえぞ？なあ龍田」

「そうねえ、お姫様の実力も見てみたいし今回は真剣にやってみようかしらあ」

どうやらホッポの飛び入り参加で話はまとまったらしい。

ホッポは可愛らしくエミヤの肩から飛び降りるとそのまま海に着水した。

「航行が苦手というのは本当らしいな。大丈夫かホッポ？良ければ手を貸すが？」

「ンーン、大丈夫！ホッポ頑張ルカラ、エミヤハ見テテ！」

「ふっ、承知した。では僭越ながら私が審判を務めるとしよう。ルールはどうする？」

「そうねえ、キリが無くなつても困るし1人10発の持ち弾でどうかしらあ？あ、天龍ちゃんはずつき3発撃つたから残り7発ねえ」

「マジかよっ!!?チクシヨ、それならもつとマジで狙つとけば良かったぜ……ま、残り7発もありや十分だけどな！」

「勝負において正々堂々と泣き言を言わない辺りは流石といったところだな。その素直さが普段からあれば言うこともないのだが……ホッポはそのルールで問題ないか？」

「ウン！10回撃ッテ1番2ナレバ、ホッポノ勝ち！」

こうして天龍 v s 龍田 v s ホッポの戦いが始まる。

順番に関しては公平にジャンケンで決め、1番手は天龍となった。

「さて、それじゃあ始めるとすつかあ！」

既に1発ハズしているとは思えないほどの自信で的を見据える天龍。

波間に揺れるブイに標的を合わせると、ほどなくして真剣な目付きへと豹変した。

「……………いくぜっ！」

寧猛なまでの笑みで放たれる砲弾。

1発ずつ間を空けて撃つのではなく、まさかの息もつかない連続砲撃。それはまるで吸い込まれるように的へと向かっていく。

7発の砲弾が一瞬のうちに放たれた数秒後、遙か彼方に7本の水柱が打ち上がった。

「まさか早撃ちで望むとは、よほど腕に覚えがあるということか。さて、判定のほどは——」

耳には砲撃の余韻がまだ残っており、あたりは硝煙の匂いが満ちている。

そんな中、エミヤは遠方の的を数えていく。

「浮いたままの的は2つ。先の3発を加えて合計7つの的に的中させたか、あの早撃ちでこの結果とは恐れ入ったよ」

「調子が良けりや全弾命中なんだけどな。ま、ガキンチョ相手にや良いハンデだろ？」
全弾命中とまではいかなかったものの、どこか満足気に笑う天龍。

結果から見る限り、早撃ちなどせずに丁寧を狙っていたならば本当に全ての的を仕留めていたのかもしれない。

「天龍ちゃんに慎重なんて言葉はないものねえ。うーん……それじゃあ私も同じ条件でやってみようかなあ？」

「君も早撃ちで挑むのかね？ 確実に勝ちを求めるならお勧めはしないが」

「ふふ、慎重に狙って勝ったとしても天龍ちゃんは早撃ちだったし仕方ないなんて言われてもねえ？ 癩じゃない」

「……やはり姉妹艦だな、君達は良く似ているよ」

こうして2番手の龍田が所定位置につく。

早撃ちに挑むと宣言した以上、波を読むようにその時を待つ。そして――
「……………それじゃあ、いくね？」

浮かべた笑顔は穏やかそのものだが、その笑顔には余りにも不釣り合いなまでに苛烈な砲撃音が辺りに響く。

天龍の時と同様に、その砲弾のほとんどが真つ直ぐの向かかって飛んで行った。

「ひゅうー！ さすがは俺の妹だぜ。やっぱ天龍型は最強だなー！」

「ああ、見事な早撃ちだ。早さも精度も申し分ない。しかし龍田……どうして9発しか撃たなかったのだ？」

エミヤは確かに見ていたのだ。弓兵であるエミヤをして見事と評する早撃ちではあったが、その数はリミットに1発たりていなかった。

未だに爆炎と水飛沫が晴れない水面を見ながらエミヤは尋ねる。

「そうねえ、私は天龍ちゃんみたいに早撃ちなんて滅多にやらないからかしらあ……妖精さんがビツクリしちやったみたいねえ。少し調整してみるから残りは後にしてちょうだい」

「そういう事か、承知した。では結果だが……7発命中だな。1発残して天龍と同点につけるとはやるじゃないか」

「天龍ちゃんに比べたらまだまだだよ、やっぱり慣れない事はしたくないわあ。それじゃ、最後はお姫様の出番ねえ」

龍田は残弾を残す結果になったが、いよいよ大トリのホッポの出番である。

「ネエ、エミヤ……」

「む、どうしたホッポ？」

「ホッポ、早撃ちって、デキナイカモ……ドウシヨ？」

「そんなことか。それはあの2人が好きでやったに過ぎない、ホッポが気にする必要は

ないさ。君は落ち着いて一発ずつ丁寧に狙えば良いだろう……というか、恐らくそれを気にする必要はない」

「……う・ワカラナイゲド、ホッポ頑張ル！」

拳を握って意気込むホッポは龍田と入れ替わるようにして所定位置に立った。

初日ぶりに目にする彼女の艦装は既に修復されており、深海棲艦である事が一目でわかる異形のそれは、遠方の的にしつかりと狙いを定めている。

「おお……艦装を見たらやっぱり深海って感じがするよなあ。問題は〔姫〕の名に恥じない実力かっつー事だけだよ」

「そうねえ、少なくとも初日と違って調子は万全でしょうしお手並み拝見ねえ」

それぞれが見守る中、場の緊張感も最高潮に高まっていく。

そしてその時は訪れた。

「……………沈ンデー！」

ホッポの声と共に放たれた砲撃は超弩級戦艦と思う程の轟音と衝撃余波を伴った。

打ち出された砲弾はたったの2発だったが、それだけでホッポを中心とした海面に大きな波が起きる程だ。

想像以上に想像以上の衝撃を受けて、天龍と龍田も驚愕の表情を浮かべている。

しかし、真に驚くのはここからだった。

たった2発の砲弾――

それがもたらした結果にこそ2人は度肝を抜かれたのだ。

着弾地点に的があつたかはわからない。

少なくともピンポイントで当たつたかの判定はできるはずがなかつた。

砲弾が海面を叩いた瞬間、天龍たちとは比べものにならない規模の爆発が起き、その

衝撃は天を衝く程の水柱を生み出した。

遠方で発生した波が自分達のところへと届く程である。

「ホッポ……次弾の砲撃は少し待つように」

「ナンデ？ 後、8発アルヨ？」

「弾はな。だが、恐らく的が無い」

表情筋が完全に硬直した2人に対して、この結果をどこか予想していたかのようなエ

ミヤ。

苦笑いを浮かべながらも、大きく波打つ海面を注意深く観察するよう到的だった物の

存在を確認していく。

「……どこを見渡しても的はないようだな。ホッポの成績は見ての通りだ。勝負の結果

は天龍型は同点でホッポの1人勝ちとなるが異論はあるかね？」

「ちよ、ちよつと待て！ あんなのアリかよ！ 砲撃精度もクソもあつたもんじゃねえだろ

「！」

「この勝負のルールは一番多くの的を沈めた者が勝者、これは天龍自身が言い出した事だったはずだが？それとも、こんな子供を相手に物言いをつけるか？」

「いや、そりやそうだけだよ……ガアアア！おい龍田！お前は納得してんのかよ!！」

「ん……しようがないわねえ。ルールはルールだし今回はお姫様に勝利を譲るわあ。あんな砲撃を見せられたらお姫様のご機嫌を損ねたくないし」

「マジかよ!！」

「龍田もこう言っているのだ、今回はおとなしく負けを認めたまえ。夕飯のことであれば心配しなくとも——」

「ちよつと待てつ！まだ負けた訳じゃねえ！提督はどうなんだよ！ここまで来て提督だけ傍観なんてダセエ事言うなよ!?!提督も参加しやがれ!いや、参加しやがれ!！」

「言い直せていないぞ……しかし、どちらがダサいかはさて置き天龍の負けず嫌いは承知の上だ。本来ならばこのように幼稚な勝負には決して参加などしないのだが、君達はどうしてもというのならば本当に仕方なくだが渋々と参加するのめやぶさかではない。君がそれで納得するならば付き合うとしよう……あくまでも仕方なくだがな!しかし覚悟はしておけよ天龍。私にまで勝負を挑む以上は夕飯における手心はなくなると覚えておくがいい!！」

「上等だつ！天龍型は逃げも隠れもしねえ！」

延長戦、エミヤの特別参加が決定した。

気乗りしない風な事を言っただけだが、誰がどう見てもノリノリである。

根こそぎ吹っ飛んだ的の補充を終えた後、エミヤが最後の舞台へと立った。

余談だが、黒シャツと黒パンツという普段着スタイルだった筈のエミヤはいつの間にか真紅の外套を纏っている程の本気っぷりだ。

「いいかー！7発だぞー！提督が7発以下なら提督の負けだからな！その時は晩飯における全ての権利を没収してやる！」

「作り手の権利を没収したら私達の晩御飯も無しにならないかしらあ……楽しそうだから別にいいけどねえ」

「エミヤー！頑張ッテ！」

「ふつ、頑張るのは構わんが……別に、全ての的を射抜いても構わんのだろう？——I am the bone of my sword」

普段からなにかと目にするエミヤの投影魔術だが、武器の投影となるとやはり迫力から違ってくる。

魔力の奔流が肌で感じられる程に本気になったエミヤ、その背中には空中に固定されたかのように浮かぶ8本の刀剣が投影された。

「イチ、二、サン……エミヤ、数ガ足りナイヨ？」

「私は提督である前に弓兵だからな、7つ以上という条件ならば私には8本の刀剣があれば事足りる」

「舐めやがつて！あとでやり直しつつても遅えからな!!」

「良いだろう、一本でも外せば私の負けだ。一本でも外せばだがね……さあ、刮目して見るといい！」

弾けるように射出された刀剣は鋭い風切り音と共に的へと向かっていく。砲撃のような派手さは無いものの、まるで意思を持って獲物を穿たんとするその様は余りにも幻想的だ。

しかしその刀剣がどうなったのか、それを目視で確認するには的が遠すぎる。

「ふう……こんなところだろう」

「いや、何を満足気な顔してやがる!?!これじゃあ的がどうなったか——って、なんだコレ？」

「私が投影した双眼鏡だ。それで的をしてみるといい」

双眼鏡を手渡してニヤリと笑うエミヤ。

何のことか理解できないまま、天龍は言われた通りに双眼鏡での確認する。

「マジかよ……8本ともの的のど真ん中に刺さってやがる……」

「これが実力の差というものだ。君も精進するのだな」

「グッ……いや、まてよ？ルールは的を沈めた数で勝負だよな……つつー事は的が沈んでねえ以上、カウントはゼロって事に——」

天龍が言い終わるよりも早く、エミヤはまるでマジシヤンのように『パチンツ』と指をスナツプする。

その音に反応するかのように遠方で8本の蒼い火柱が上がった。

「カウントが……何かね？」

「チツクシヨウがあああああああ!!これじゃあ天龍型の2人負けじゃねえかああああああ!!」

「——えいっ♪」

苦悶して頭を抱える天龍のすぐ隣、可愛らしい声と共に1発の砲撃音が響いた。

「やったあ、的中ねえ。残り1発が当たって私の成績は8発成功……エミヤ提督と同点だから天龍ちゃんの1人負けだよお」

「……………マジ？」

「お刺身は貰い損ねちゃったけど、減らないだけ良しとするわあ。じゃ天龍ちゃんはお姫様にお刺身献上ねえ？」

「ガアアツデエムツ!!!」

この日、カウンターの隅で漬物と味噌汁だけでご飯をかきこむ天龍の姿があったとい
う。

【幕間】 ホッポちゃんのいる日々―後編―

— side 高雄型 —

「……愛宕姉、この状況はどうなってるの？」

「それが私にもわからなくて……どうしたのかしらねえ？ 可愛いから私は構わないんだけど」

困惑する高雄型重巡洋艦姉妹。

その原因は、愛宕の膝の上を陣取ったホッポに起因する。

普段はエミヤか電と一緒にいることがほとんどのホッポなのだが、ここ最近はどういう訳か愛宕の膝の上を気に入っているようだ。

愛宕が非番の時や、哨戒任務を終えた休憩時間など、ちよつとした時間を見つけては膝の上にもちよこんと座ってくつろぐ事が多くなった。

現在も、昼食時の食堂で愛宕の胸にもたれかかるようにしてご飯を食べているホッポなのだが、その表情は心なしか安心しきっているようにも見える。

「よおホッポ、そんなに愛宕姉の膝は居心地いいのか？」

「ウン！ 暖ツタカクテ良い匂イナノ」

「あらあら、ホッポちゃんは甘えん坊なのね。でもこんな可愛い子に甘えられたら私も嬉しいわ」

「おお……我が姉ながらハンパない母性だ……」

ホッポの口元をハンカチで拭いてやる愛宕を見て、摩耶も思わず頬が緩んだ。

「しつかしわかからねえよなあ……何がきっかけでこんなに懐くようになったやら。愛宕姉には覚えとかないの?」

「そういえば何日か前に廊下でホッポちゃんとぶつかった事があつたわ。私の胸に頭から飛び込んできてビックリしたけど……それから私に抱きついてくるようになったよ。うな気がするわね」

「ははっ、なんだそりゃ? その辺のスケベオヤジじゃあるまいし、まさか愛宕姉の胸に惚れたとかじゃねえだろうな?」

摩耶はからかうように笑った——が、ホッポから返ってきたリアクションは予想に反して射的を射ていたらしい。

「愛宕ノ胸……? ウン! オツキクテ好き!」

「ぶふっ!? 本当に胸目当てかよ! おい愛宕姉、何かされる前に逃げた方が良いぞ!」

「気にしすぎよ摩耶……うーん、もしかしたらホッポちゃんのお母さんが私に似てるのかしらっ?」

あえて胸がとは言わないものの、ホッポに下心がないことなど誰の目から見ても明らかなので愛宕も不快そうな顔をすることはなかった。

加えて言えば摩耶も冗談半分に騒いでいるだけで、本気でホッポを警戒している訳ではない。

「深海棲艦に親子関係なんてあるのかよ……おいホッポー、お前の母ちゃんが愛宕姉に似てんのか？」

「才母サン？ 違ウヨ、愛宕ハホッポノオ姉チャンナノ」

「お姉ちゃん？ ホッポにも姉ちゃんがいるのか？」

「ウン！ イツモ後口カラ、ギユツテシテクレルノ！ 愛宕ミタイニ、大キクテ柔カクテ暖カイノ！」

「ああー、なるほど。だから愛宕姉の膝がお気に入りなのな」

ご機嫌な様子で愛宕の胸に身体を預けるホッポ。

その顔を見ているだけでホッポがいかに姉を慕っていたのかが見て取れる。

そしてそんなホッポを見ていけば、嫌でもホッポのお姉ちゃんという人物が愛宕級のワガママボディだと察してしまう摩耶であった。

「ふふ、だからホッポちゃんは私に甘えてくれるのね？ お姉ちゃんだと思ってくれらなら私も嬉しいわ」

「愛宕姉は高雄姉がいた頃から長女つばいとところあつたからなあ。ところでホツポ、そのお姉ちゃんってのは今どうしてるんだよ？」

食べ終えた食器を重ねて食後のお茶を飲みながら、なんの悪気もなく摩耶は尋ねた。しかし余りにもホツポとの距離感が近くなりすぎたからだろう、摩耶も愛宕も失念していたのだ。

たとえホツポ個人とは敵対してはいないとしても、ホツポの姉だつて深海棲艦であり自分達は艦娘——それはどうしようもなく敵対関係なのだということを。

「オ姉ちゃん……何処カニ行ツチャツタノ……」

「ちよつと摩耶……仕方ないわね……お姉ちゃんとはいつまで一緒にいたの？」

摩耶も咄嗟に『しまった』という顔をするものの、時すでに遅し。

上機嫌だつたホツポの表情はみる間に曇つてしまった。

そんなホツポの頭を優しく撫でながら愛宕はホツポに問いかける——

「エミヤ達二会ウ少シ前マデ一緒ダツタノ……デモ、オ姉ちゃんハ、ホツポヲ逃ガス為二艦娘ニ向カツテ行ツテ離レチャツタ……」

「そうだったのね……ねえホツポちゃん、ホツポちゃんはお姉ちゃんが好き？」

「……ウン！ホツポノ自慢ノオ姉ちゃんダモン！」

「ふふ、じゃあいつかお姉ちゃんに会えた時は私の事を紹介してもらえるかしら？ホツ

ポちゃんのお姉ちゃんなら私も仲良くなりたいわ」

後ろから抱きしめられながらも、ホッポは振り返って見上げるように愛宕の顔を見上げた。

その顔にはありありと驚きの感情が浮かんでいる。

「愛宕ハ艦娘ダヨ？オ姉チャント、戦ワナイノ!？」

「戦わないわよ？ホッポちゃんのお姉ちゃんなら戦いたくないわ。ねえ摩耶?」

「うえ!?!アタシ!?!……そ、そうだな！もちろんホッポの姉ちゃん相手に殺し合いなんてしないさ！……多分……」

「……デモ、オ姉チャン生キテルカ、ワカラナイ……」

「大丈夫よ、ホッポちゃんがまた会えるって信じてれば必ず会えるわ。でもお姉ちゃんだってホッポちゃんが艦娘と一緒にいるのを見たら驚くと思うの。だからその時は、お姉ちゃんが安心できるように私達の事を説明してもらいたいの。お願いできるかしら?」

戸惑うような顔のまま固まるホッポは、それでも愛宕の顔を見つめている。

小首を傾げるように柔らかな笑顔で頭を撫で続ける愛宕は、まるで在りし日にそうであつた姉のようで——

どこまでもホッポの心を落ち着かせた。

対面の摩耶は頭を抱えて何かを悶々と悩んでるようだが、それでもホツポの身内と聞かされては本気の敵意など向けられないというのも本心だ。

ホツポの事を思えば姉に会わせてやりたいとも思うのだが、そうなれば戦闘狂の天龍型をどうしようかというのが目下の悩みだろう。

やがて、愛宕の服をギュッと握ってホツポが口を開く。

「才姉チャント、仲良くシテクレル？」

「勿論！それに、それがきつかけで戦争が平和に終われば素敵じゃない？」

「……ホツポ、才姉チャン説得スル！ミンナ仲良くシテモラウノ！」

「マジかあ……あ、いや！それは素晴らしいと思う！うん！だからそんな目で睨むなよ愛宕姉っ！」

ホツポの姉が現在どうしてるのかはわからない。

それでも姉を受け入れてもらえたホツポは少しだけ救われた事だろう。

依然として世界は戦争の真っ只中であり、艦娘と深海棲艦の関係性は敵同士である。しかし、いつの日かそんな敵同士が肩を並べて笑いあえる日がくるのかもしれない――

今日もホツポは愛宕の膝の上で笑うのだった。

— side 軽空母 —

その日は前日の夜から降り始めた豪雨が翌日の昼になっても続いていた。

激しく振り付ける雨が海面を叩き、曇天の空には雷鳴が轟いている。

こんな嵐の逆巻く荒れた日は、決まって出撃できずに待機を命じられる艦娘がいる。

軽空母の龍驤と隼鷹だ。

夜間飛行に比べて荒天での飛行はまだ可能ではあるものの、確実な安全性の確保ができない事と近海の制海権を握った事もあり、緊急時以外は基本的に鎮守府待機である。

「こりゃあかんわ。この調子やと今晚まで晴れへんやろねえ……手持ち無沙汰もしんどいわあ」

「私は元から出撃じゃなかったからねえ。午前は白兵戦訓練だったし午後は艦載機の調整で工廠に行く予定だけど龍驤さんも一緒に行くかい？」

「んー、緊急招集もなさそうやしそうしよか」

出撃前に編成変更で待機になった龍驤は訓練に参加していない。

緊急時に即時出撃できるように待機を命じられている以上は訓練で消耗する訳にもいかないのだ。

そんな退屈そうな顔の龍驤に隼鷹が話しかけたのが昼食の事である。食事も終えた

2人は現在、鎮守府の廊下から外を眺めている。

鎮守府の廊下から見える海の様子は近年稀に見る程の豪雨であり、仮に出撃を命じられても全力には程遠い活躍しか見込めないだろう。悪天候は軽空母として憂鬱でしかなかった。

「——あれ？あそこにいるのホッポじゃない？」

工廠へと向かう途中、開けっ放しになっていた体育館の中にホッポの姿を見つけた。

時間はまだ昼休みなのでホッポがどこにしようと思議ではないのだが、珍しく1人でいる事が2人の目を引いた。

「おーい、ホッポー！こんな所で何やってんのさ？今日は電やら愛宕と一緒にじゃないのかい？」

「アツ、隼鷹！電ト愛宕ハ午前ノ任務デビシヨビシヨダツタカラオ風呂！響ハ、エミヤノオ手伝イシテルヨ！」

「そういえば電と愛宕は出撃しとったね。こんな雨で抜錨したらダメージ無しでも風呂くらい入るやろ。じゃあホッポちゃんは1人で何しとるん？」

「飛行機ゴッコー！」

満面の笑みで誇らしげに手を差し出すホッポ。その手には艦娘の持つ艦載機より一回り小さな飛行機が握られていた。

「えっ……この飛行機、黒くてパツと見じゃわからへんけどよう見たらゼロやん!? なんとホッポちゃんが零戦なんて持つてるん?」

「——? ホッポガ生マレタ時カラ持つテルヨ?」

「生まれた時から? うーん、どうにも戦闘向きの艦載機つて訳じゃなさそうだねえ。つて事はホッポにとつてのアクセサリー的な艤装つて事?」

「チャント飛ブンダヨ! 見テテ見テテ!」

不思議そうに首を傾げる2人をよそにホッポは黒い零戦を宙に放つてみせた。

放たれた飛行機はホッポの周りをクルリと旋回するように舞つてみせると、再びホッポの手元に収まる。

とても小さくエンジン音も聞こえ、プロペラも回つているのを見る限り、艦娘の艦載機と根本的な部分では同じ原理で動いているのかもしれない。

「へえー、玩具みたいなもんかと思つたけど仕様は艦載機と変わらなそうだねえ。さすがに爆撃まではできないだろうけどこれはこれで可愛いもんじゃないか」

「あんなちゃんまい艦載機で爆撃しても火傷させるんが精々やろ。けど妖精さんが搭乘してへんだけで艦載機に似てるつちゆうのはうちも同意やな。つちゆうとホッポちゃんは艦載機持ちの深海棲艦なん?」

「ホッポニハ、コノ子達ガイルヨ」

展開した艤装が龍驤達にぶつからないように数歩後ろへ下がったホツポは漆黒の艤装を顕現させた。

そして周囲に浮遊する球体のひとつを手につと龍驤に向かって掲げて見せる。

「いや……これが艦載機で……猫耳と口が付いたタコ焼きやん」

「猫耳と口が付いている時点でタコ焼きじゃないと思うけど……しつかし、やつぱ艤装を見ると深海棲艦つて実感するねえ。それにしてもこのタコ焼きはどういう原理で飛行してるやら」

「可愛イデシヨ？」

ニッコリ笑顔のホツポとは対照的に、凶悪そうな口を開けて良くわからない声を発するタコ焼き。

「……か、可愛いかどうかはさておき艦載機つて感じはせんわなあ。やつぱ艦載機いうたら羽とプロペラあつての艦載機やし」

「龍驤ノ艦載機ハ、ゼロ？」

「あー、残念やけどうちの艦載機は零戦ちやうよ。なんなら見せたげよか？」

「ホント!?見タイ見タイ！」

瞳をキラキラと輝かせるホツポに対し、今度は龍驤が一步下がって艤装を展開する。ニヤリと笑って巻物を翻すと、一枚の紙でできた人型が宙に舞った。

「ほれ、お仕事ちやうけど出番やで！サービスしたつてや！」

指先に「勅令」の文字が浮かぶ炎を灯すとそれを人型へと向かって振るう。

まるで指揮者がタクトを振るかのようなその所作に応えるように、宙に舞う人型もその姿を変えていく。

やがて体育館の中をグルリと旋回するようにして龍驤の元へと舞い戻った人型は一機の艦載機の姿へと変貌していた。

「どや？これがうちの艦載機、紫電改や」

龍驤の横に並ぶように着陸した艦載機、その中では可愛らしい妖精さんがピシッと敬礼している。

「こんな狭い場所で飛ばせるんだから流石は軽空母の百戦錬磨と呼ばれる龍驤さんだわ。私にやとても真似できないねえ」

以前この場所でエミヤと天龍が戦った時、龍驤が零した「爆撃してでも止める」発言が本気だった事を知って苦笑いする隼鷹。

確かに屋内で艦載機を飛ばすなどという離れ業をやったのけるのは軽空母の中でも龍驤くらいものだろう。

「こんな慣れや慣れ、隼鷹もあと少し練度向上したら余裕やで。で、ホッポちゃんは満足してくれたかな？」

「ウン！凄く格好イイ！魔法使イミタイダツタ！エミヤモ凄イケド龍驤モ凄イネ！」

「ははっ、そこまで喜んでくれたらうちも嬉しいわあ。言うても提督みたいな本物の魔法とはちやうけどな……ん、魔術やったっけ？しかし晴れの日やったら空一面の艦載機も見せてあげられたんやけどなあ、今日はこんな天気やしこれで勘弁な？」

「本当二？晴レタラマタ飛行機見セテクレル？」

「ホッポは本当に飛行機が好きなんだねえ。じゃあ晴れた日に時間が合った時は私と龍驤さんで飛行機シヨウでもやってやるかい？」

「おっ、ええなあ！その時はホッポちゃんのタコや……艦載機も一緒に飛んだら面白いやろー！」

「ヤッター！約束ダヨ！」

「ああ、約束や！ホッポちゃんが良い子にしてたらまた一緒に飛行機ゴッコして遊ぼうな」

「ウン！ホッポ、良い子ニシテル！テルテル坊主作ラナキヤ！龍驤モ隼鷹モ大好き！」

「おっとお！急に抱きついてくるなんてそんな嬉しいかつたん？ホッポちゃんは可愛いなあ」

「この鎮守府でも唯一艦載機を操る艦娘の2人がホッポと飛行機ゴッコで遊んでくれると言ったのがよほど嬉しかったのだろう。」

感極まったように大はしやぎしたホツポはそのまま龍驤に抱きついた。

そして——

事故は起こった。

「……………アレ？」

「ん？どうしたん？」

「龍驤……………ホツポミタイダネ」

この時、全てを悟った隼鷹が内頬を噛んで腹筋の崩壊に耐えていた事は誰も知らない。

「ホツポちゃんみたいってなんのこつちや？」

知らぬが仏を現在進行形で体現している龍驤だが、知らないのだから仕方ない。

ここでホツポの言葉を聴き流せていたのなら後々の悲劇は起きなかつたであろう

……………

当事者にして何も気付かない龍驤は抱きついたままのホツポを見ながら首を傾げる。

そんな龍驤をよそにホツポによるラストダンスが始まった。

おもむろに龍驤の胸に手を当てたホツポ、そして次の瞬間——

「ホラ、ペッタタンコ。ホツポト一緒」

天使のようなべらぼうの致死性スマイルと共に投下された無慈悲の爆撃。

その威力たるや凄まじく、最速で一直線に叩き込まれたその言葉は龍驤のハートを秒で大破状態へと追い込んだ。

満身創痍なブレイクマインド……しかしそこは歴戦の勇者である龍驤、膝をつきそんな程のダメージを必死に堪えながらも引きつった笑みで応戦する。

「そ、そつかあ？まあ隼鷹やら愛宕に比べたらちよーつちアレやけど、うちも少しはあるんやで？さすがにホッポちゃんと同じって事もないやろお、ハハハ……」

「エ？ソウナノ？デモ、電ト響ノ方ガ大キイヨ？」

「ブフツ!!」

余程のダメージだったのだろう、龍驤の横に待機していた艦載機が光の粉となって消滅した。

そして隼鷹の腹筋も大破した。

「そ……そつかあ！まあ電やら響は成長期やしなあ！それにホラ、うちは空母やから余計な凹凸はいらんねん！あんなんあつたら発着の邪魔やし！」

「ジャア龍驤ハモウ成長シナイノ？隼鷹ハアンナニ大キイノニ？」

「クツ……ちよ、ホッポ……それ以上はいけないって……グフツ！」

無邪気さとは時に残酷だとは誰の言葉だったか、色々と限界な隼鷹は腹を抑えて過呼吸気味に膝をついた。

龍驤は龍驤でハイライトが消えた目で遠くを見つめている。

しかし子供と言えど【姫】の名を冠するホッポは止まらない。

容赦のない集中砲火は最終局面へと突入し、最後の薄皮一枚を無残に引きちぎった――

「ソレトネ、エミヤノ方が大キイヨ?」

「ブツ! だははははっ! ダメ……ダメだ! 腹がよじれるっ! ぷははははっ! よりによつてトドメは提督つて……あーっはっはっはっはっ!!」

自分が何をしたかわからないホッポは可愛らしく小首を傾げる。

対してダムが決壊した隼鷹は床を転げ回って大爆笑。

そして龍驤は――

「……………ツギ……………」

「はあはあ……へ? 龍驤さん?」

「ンツギイイイイイイイイイ!!」

「ヤバいつ! 龍驤さんが壊れた!」

受け止めきれない現実（胸部装甲）が龍驤のハートをきつちりと轟沈させた。

「なんやつちゆうねん! うちかてどこぞの高雄型やら金剛型みたいなワガママボディに生まれたかったわ! 夏のビーチでブイブイいわせたかったわ!! 歴史の強制力? 史実の

顕現？知るかそんなもん！シバクぞつ！誰がまな板やねん！タピオカチャレンジ？責任者連れてこいや！んがああああ！！！！」

「ドウシチャツタノ龍驤!？」

「落ち着きなつて龍驤さん！誰もまな板なんて言つてないつばー！」

「じゃかあしいわつ！ちよつち胸があるからつて寄つてたかつてうちをバカにしくさつてからに！どうせホツポちゃんもあと何年かしたらうちを置き去りにしてプリンブリンのヤンチャでエツロい身体になるに決まつとる！軽空母最強なんて言われたないねん！うちは軽空母最胸強になりたかつたんや！しかも提督て！提督てつ！あれまで巨乳にカテゴリーされるんやつたらうちは……うちはつ……やつてられるかドアホ！うわあああああん!!!」

血走つた目で、しかし大粒の涙を流しながら、まるで子供のように声を上げて泣きじやくる龍驤はそのまま胸を押さえて体育館から走り去つた。

「ああーあ、行つちまつたよ……ビツクリさせちやつてゴメンねえ」

「龍驤、泣イテタケド大丈夫?」

「ああー……大丈夫じゃないけど大丈夫さ！ホツポが気にしなくても平気さねー！」

つい笑い過ぎてしまった罪悪感と、なんの悪気もない純粹なホツポの氣遣いも相まつて苦笑いを浮かべる隼鷹。

「龍驤、怒ッテル？ 飛行機ゴツコ、一緒ニヤツテクレルカナ？」

「大丈夫っ！ 軽空母は約束を守るからね、気持ちよく晴れた日が来たら一緒に艦載機を飛ばすの楽しみにしてるよ！ 私も龍驤さんもね！」

「……ウンツ！ ホッポモ楽シミ！」

ワシワシとホッポの髪をかき混ぜるように撫でてやる隼鷹。

電や響とはまた違う、歳の離れた姉妹のように笑いあう2人は穏やかな笑顔で微笑みあう。

それはまるで曇天の空とは程遠い、柔らかな陽だまりのような笑顔だった。

一方その頃――

「なっ、なんだというのだ!? というかその泣き腫らした顔はどういうことだ!？」

「うっさいわこの巨乳提督っ！ しのごの言わずに午後はうちも出撃せんかい！」

「きよにゆっ!?! ゴホンっ、何の話だというのだ……ともあれ、この天候では空母である君を出撃させる訳には――」

「そんなん言うてたら鎮守府の中でありったけの艦載機飛ばして絨毯爆撃したんぞ！ うちの気持ちも知らんと好き放題言いよって……この恨みは戦場で倍返しせな晴れへんのやー！」

「何があつたらそうなるのだ!?! というか艦娘はクラスチェンジすると全てパーサーカー

になる決まりでもあるのか!？」

「やつかましいわ! あんまゴチャゴチャ言うてると耳の穴から指突っ込んで内側から乳もぎ取んぞ!! んがああああああ!!!」

鬼も裸足で逃げ出すような形相でエミヤを襲撃した龍驤。

明確な理由はわからないまま自身の胸部に対して致命的な危機感を覚え、押し切られる形で出撃を許可するエミヤ。

その日の龍驤は後に「嵐の空に血の雨を降らせる女」として伝説となったという。

— side 暁型 —

この鎮守府に在籍する艦娘は寛容だ。

提督不在という現実には腐る事もなく戦い抜き、英霊という不確かな人物を提督として迎える理解力もある。

敵対関係である深海棲艦ですら個として捉え、暖かく接するだけの度量も備えているのだから寛容と言う他ないだろう。

しかし、全てが最初から上手くいったわけではない。

前任の倉敷提督や姉妹の艦娘達が殉職した時は誰もが絶望の底にいた。

エミヤが召喚された時は誰もが半信半疑であり、中には反発する者もいた。

そしてホッポが鎮守府にやってきた時は――

これはそんなある日の、ある艦娘と深海棲艦が手を取り合ったワンシーンである。

「緊急無線以降の連絡は以前なし！待機の艦娘は出撃体制を整えて船渠に招集したネ！」

「私とした事が目測を誤ったか……敵艦隊の旗艦が戦艦レ級とは。過去の記録にもレ級が出没したなどという情報は無かったというのになぜ……」

「日渡提督にも応援を要請したヨ！近海を哨戒中の艦隊を応援として向かわせてくれるみたいデス！」

「承知した、これ以上霧島達と連絡が取れないようなら私も出陣しよう。金剛は彼女達を迎え入れる体制を整えて船渠で待機、現場の指揮を頼む！」

「了解！」

―その日は少しだけ天気の良い朝だった。

いつものように全員が揃って朝食をとり、他愛もない話をしながら笑い合うお馴染みの光景。

出撃編成の艦娘達が資材回収および哨戒任務のため海へと出て行く姿をエミヤが見送り、その後は待機の艦娘に白兵戦の指導を行う。

何もかもが日常の風景。

しかし、そんな平穩は体育館に飛び込んできた金剛の声で一変する。

「緊急無線デス！霧島達の艦隊が襲撃されてるネ！敵艦隊の旗艦は……戦艦レ級！」

戦艦レ級――

艦娘ならばその名を聞くだけで心に緊張が走るだろう。

戦艦とは名ばかりと言わんばかりの装備、「鬼」でも「姫」でもないにも関わらず部分的にはそれらを凌駕する程の強さ、そして何よりも獰猛で凄惨な笑み。

その存在自体がそれだけで艦隊とも言えるのが戦艦レ級であり、数多くの艦娘を海の下へと沈めてきた仇敵である。

しかし、その戦艦レ級がエミヤ率いる鎮守府の近海に出没した前例はない。

比較的平穩で制海権を取り戻した海域に発生するような生温い個体ではないはずなのだ。

前例を見ない凶悪な個体の出現――

その出現はまるで倉敷提督が殉職した日のように不可解であり、艦娘達の心を揺さぶるには十分な理由たり得た。

「エミヤ提督！霧島達の艦隊が帰還したデス！」

船渠にて待機していた金剛からの通信を受けた直ぐに駆け出すエミヤ。

そこで目にした光景は、今朝の平穩からは信じられないほどに凄惨を極めていた。

「エミヤ提督……はあはあ……旗艦霧島をはじめ、以下5名旗艦しました。敵は依然としてこの鎮守府へと向けて進行中……被害状況は私と龍田と愛宕は中破、隼鷹と電が大破です……ぐっ……と、特に電は……」

艦装の至る所がズタズタに傷付き、額から血を流しながらも霧島が報告を口にする。

全員が鎮守府まで辿り着いたとはいえ満身創痍に変わりなく、その中でも愛宕に背負われた電は一際危険な状況だった。

まるで糸の切れた人形のように動く事もせず、血に染まったその身体はまるで生命力を感じさせない。

誰かがこうして連れ帰らなければ、間違いなく轟沈していただろう事は火を見るより明らかだった。

「レ級の魚雷に気付かなかった私を庇って電は……」

「もういい、それ以上喋るな！金剛達は霧島達を入渠させろ！」

「し、しかしそれではこちらに迫ってくるレ級の艦隊が——」

「オレが何とかすると言っているのだ！金剛達は全員を入渠させてから出撃体制を整えろ！」

冷静なエミヤらしからぬ怒号が船渠に響く。

必ず守ると誓った者達をここまで傷付けられたのだ、そこに提督という肩書きは既に無く、ただ一人の錬鉄の英雄がいるのみであった。

だからこそ、怒りに駆られた英雄は気づかない。

己が傍に、自分以上に怒りを露わにしながらその瞳を紅蓮の焰で染める存在がいる事に――

「捉えたぞ……随分と好きにしてくれたものだな」

鎮守府の屋上に佇むエミヤ。

その眼は遙か遠方の水平線を睨みつけて離さない。

人間には目視などできないような遙か彼方、しかしエミヤの眼はそれを捉えた。数隻の深海棲艦を従えてこちらを目指してくる艦隊。その旗艦である戦艦レ級の姿を。

当然、視線が交わるような距離ではない。しかしエミヤにはレ級の醜悪な笑みが深傷を負った艦娘達を嘲笑っているようにしか見えなかった。

それを見た瞬間には全身の血が沸騰するかのような錯覚を覚える程に激昂した。

「貴様が何者であれ、その起源が何であれ、オレが守るべきものに手を出した報いだけは受けてもらおう」

手にした弓に漆黒の剣をつがえて引き絞ると、そのままの体制で静止する。

そして時間をかけることたつぷり30秒――

「フルンディング
赤原獵犬！」

音速をはるかに超える速度をもって放たれた一本の劍。それは海を割る程の魔力を纏つて一直線にレ級へと直撃した。

はるか遠方でありながら爆発の閃光に少し遅れて鎮守府へと届く轟音がその破壊力を物語る。

が、

「ふん……存在が艦隊と称されるだけある。その強靱さはかの大英雄以来だぞ」

爆炎の中、ギラリと光る獰猛な笑み。それはまさしく戦艦レ級がエミヤへと向けたものだった。

かつて騎士王ですら寸手のところまで追い詰めたエミヤの赤原獵犬であるが、どういった力が働いているかはさて置き敵を殺傷するには至らなかった。

その進行を止めはしたものの、そんな安息も束の間。敵艦隊の砲口は鎮守府へと向けて火を吹いた。

「甘く見るなよ深海棲艦、ここを落とすのはそう簡単だと思わないことだ！——I a m the bone of my sword。」

展開される無数の劍。それは一斉に射出されたかと思うと、飛来する砲弾を空中で相殺していく。

中間に位置する海上には水面を照らすように爆炎が舞い、耳をつんざく衝撃が地鳴りのように轟いた。ひとつの爆発が飛来する砲弾を巻き込んで更なる爆発を産む――

鎮守府の護る海は瞬く間に地獄絵図のような戦場へと変化した。

そんな中、単騎で戦艦レ級を含む艦隊を相手にしているエミヤの集中力たるや凄まじく、故にその眼は遠方の敵を見据えて離さない。

ただ1発の被弾さえも許さないという覚悟の元に戦いにのぞむ錬鉄の英雄は敵だけを意識を向けているからこそだろう、エミヤは気付かなかった。

その眼下でエミヤと同じく単騎で抜錨するひとつの影に――

「調子ニ……ノルナツ!!」

それはエミヤにとつても既に聴き馴染んだ声だったはずだがしかし、それでも背筋を正してしまう程の怒気を孕んだ声だった。

直後、海上に咲き乱れていた爆炎がたった1発の衝撃音で掻き消える。

「ホッポ!? どうしてお前が――」

校舎の屋上から見下ろす荒れた海の上、打ち付ける波の中にひどく小さく雪のように白い少女が立っていた。

エミヤの声に反応したのか、一瞬だけ振り向いた彼女の眼は初めて出会った時にそうであったように夕陽のような光を宿しながら、それでも申し訳なさそうに眉を下げた寂

しげな表情をしている。

しかし再び前を向いたホップの顔にはもう暗さを帯びた感情はなく、目に見えるほどの憤怒の炎を眼に宿しながら胸いつぱいに空気を吸い込んだ。

そして――

「カエレッツ!!」

咆哮一閃。

その声は押し寄せる波飛沫すらも掻き消す圧をもつて放たれた。頭上からその様子を見ていたエミヤですら度肝を抜かれる衝撃なのだ、とても幼い子供が発する声では無かっただろう。

しかし、真にエミヤが度肝を抜かれたのはその後。

「なに!? 深海棲艦が……引いていく、だと」

遙か遠方とはいえエミヤの眼にはハツキリと見えていた。

ホップの怒号に反応するかのように戦艦レ級を始めとする敵艦隊が背を向けて引いていく姿が。

「ホップ……お前は……」

こうして、謎に包まれた強力な個体による鎮守府への侵攻は静かに幕をおろしたのだった。

その夜――

『なるほど……これはあくまでも推測だけど、敵艦隊が撤退したのは深海棲艦における命令系統の優劣によるものじゃないかな?』

「命令系統?それはつまりホッポが戦艦レ級より上位にあたる個体であり、そのホッポの命令だから撤退したという事か?」

いまだに激戦の後処理や治療などの為に慌ただしい様子の鎮守府、その執務室の中でエミヤと日渡提督は通話していた。

『前にも言ったけど北方棲姫は基地型の深海棲艦だ、つまりその本質は陸上基地に由来する。本来の海軍に置き換えれば一目瞭然だと思うけど船より基地が強い命令権を有していても不思議ではないだろう?』

「理屈としては、だ。それに君自身が以前言っていただろう?深海棲艦の艦種についてはあくまでも人類側の解釈であって本質は謎のままだ」と

『そうだね、だからあくまでも推測にすぎないのさ。単純にホッポちゃんがレ級よりも強いから逃げ帰っただけかもしれないからね……でも、純然たる事実だけは誰よりもエミヤ君が1番よく解っているんだろ?』

「……ああ、言われるまでもない」

純然たる事実――それはホッポが己の意思で戦場に立ち、そしてエミヤをはじめとす

る鎮守府の面々を守ったという事。

真意のほどはホッポだけが知るところではあるものの、その事実だけは揺るがない。

『何にせよ、今回の戦闘はこちらでも解析して対策させてもらうよ。エミヤ君の海域に戦艦レ級が現れるなんてそれこそ前代未聞だからね』

「そうしてくれると助かるよ、私もこちらの後処理に追われそうなのでね」

そう言うのと深い溜息をついて通話は終了した。

エミヤの言う後処理、というより目下の課題はこれから対面しなければならぬ重すぎる現実なのだ。

（やれやれ……敵対関係だった者同士、今回の戦闘が残す爪痕は浅くはないだろう。果たしてどう転ぶ……）

エミヤは重たい足取りで執務室から出ていった。

所変わって医務室、扉の上には例の如く学校であった頃の名残りから【保健室】と書かれた札が取り付けられた部屋。

その中で3人の少女が沈黙していた。

1人は重体で運び込まれながらも一命を取り留めた電。

備蓄の高速修復剤で急場は凌いだものの、ダメージが抜けきらない電はベッドに寝かされたまま眠り続けていた。

もう一人、電が眠るベッドに寄り添う形で座っているのは暁型の中でも電の姉にあたる響だ。

つとめて冷静に読書しながらも、苦しそうに苦悶の表情を浮かべる電の汗を拭いてやったりシーツを直したりと、常に電の様子を気遣いながら見守っている。

そして最後、ベッドを挟んで響と向かい合うように座りながら俯いたままで固く拳を握りしめているのは他でもないホツポだった。

もちろん、戦闘が終了した時点でホツポが戦艦レ級達を追い返した事はエミヤから報告されていた。

今回の襲撃がホツポの手引きではないことも明白である。

だというのにホツポはまるで自分のせいで電が命を落としかけたかのような感情に支配されていた。

さらにこの状況でホツポが押し黙る理由がもうひとつ、それは目の前に座っている響だ。

ホツポが鎮守府に来てからというもの、最初こそ掴みきれなかったホツポと艦娘の距離感は、電やエミヤのおかげで幾らか近くなった。

しかし、その中でも響だけはホツポとの距離感を保ち続けたのだ。

特に攻撃的だった訳ではない、ただ単純に馴れ合いや対話をしたがらなかった。

いくら子供とはいえ、そういった部分にホツポが気付かない筈もなく、周りも無理強
いしてまで仲を取り持とうともしなかった事もあつてかホツポ自身も響を得意としな
くなくなった。

ホツポはこの鎮守府でなにが起き、何人の命が散つていったかを知らない。

響も仲間や姉妹、提督を失つた事をホツポのせいだと思つている訳ではない。

しかしその隔たりは彼女達が思うよりも根深く心に刻まれて、終ぞ埋まる事はな
かった。

そして、そんな関係性そのまま起きてしまつた今回の事件である。

眠っている電には預かり知らぬところだが、医務室に漂う空気の重さはハンパのそれ
ではなかった。

「……少し、良いかい？」

己の心臓の鼓動すらも煩く感じる程の静寂、それを破つたのは響だ。

響がパタンと手元の本を閉じた音だけでビクリと身体が跳ねるホツポ。恐る恐る響
の顔を覗き込むように顔を上げてみれば、響は怒つているでもなく悲しんでいるでもな
く、ただただ儂げな笑みを浮かべていた。

「今日、この鎮守府が襲われそうなところを助けてくれたらしいね？」

「……ダツテ、ホツポ達ノセイデ電ガ怪我シチャツタカラ……」

こうして真面まともに会話するのは初めてだというのに、最初の話題がこれではホッポが萎縮するのも無理はない。

しかし響は普段と変わらない調子で言葉を続けた。

「今日の事を自分のせいにするのは違うんじゃないかな？それでも電やこの鎮守府を守ってくれた事はお礼を言うよ、スバспасибоスィーバ」

「デモ、デモ……電が大怪我シチャツタノハ……ホッポノセイ……」

「ふう、困ったな。少し隣に失礼するよ」

薄く微笑んだ響は自分が座っていた折り畳みのイスを抱えると、それを持ってホッポの隣へと移動した。

怒られたり責められたり、場合によっては鎮守府から出ていけと宣告されるとさえ思っていたホッポにとって響の接近はこれまで敵対したどの艦娘よりも恐ろしく感じた事だろう。

しかし、そんなホッポの心中とは裏腹に響はポツリポツリと語り出した。

「ちよつとした昔話なんだけど聞いてくれるかい？」

「……ウン」

「この鎮守府にエミヤ司令官がやってくる前の話だ。私達にはもつと多くの仲間とエミヤ司令官とは違う司令官がいた」

「エミヤジャナイ人？」

「……そう、今はこんなに少人数だけど昔はそれなりに活気のある鎮守府だったんだよ。特にその司令官はエミヤ司令官とは違って熱血で活発な人だったから毎日が騒がしいくらいだった。でも、とても頼りになる立派な人だったよ」

「エミヤ、イツモ静カデ落チ着イテルモンネ」

「そうだね、エミヤ司令官はエミヤ司令官で頼りになる人だけど前の司令官とは正反対のタイプだったかな。他の艦娘達も個性豊かで毎日がうるさいくらいに賑やかだった」

「ソノ人達ハ、ドウシタノ……？」

恐る恐る、まるで腫れ物に触るように尋ねるホッポに対して響は少しだけ切なそうな表情を見せた。

暫くの静寂が部屋に満ちた後、いまだに眠り続ける電の髪を撫でながら響は答える。

「みんな沈んだよ。最後まで懸命に戦った上で海に散っていった」

大きく目を見開いて響の顔を見つめるホッポだったが、響は窓の外に広がる海を見つめたまま小さく微笑むばかりだった。

まるで在りし日の鎮守府を懐かしむようなその表情に、ホッポの胸は締め付けられる。

「……ゴメンナサイ、ホッポガ……ホッポ達ガ……」

泣き出しそうになるのを必死でこらえ、まるで絞り出すように謝罪の言葉を唱えるホツポ。

しかし、それに続く響の言葉はホツポを責めるものではなかった。

「謝らなくていい。さつきも言ったようにみんな懸命に戦った上での結果だ。悲しい事だし敵を憎んでいない訳でもない……それでも無関係な相手に八つ当たりしようとは思わないさ。それに艦娘や人間だって深海棲艦を殺してきたんだ、お互いさまだろう」

「デモ、ホツポ……深海棲艦ダヨ？敵……ダヨ？」

「そうだね、君は深海棲艦で私は艦娘だ。それでも今日、私の妹を守ってくれた。なら敵ではないと思うんだよ」

「ナラ……ドウシテ響ハ昔ノ話ヲシテクレタノ？深海棲艦ヲ責メルンジャンイノ？」

「……私と電が姉妹なのは知っているかい？」

「ウン、電カラ聞イタ」

「本当は私達姉妹にはあと2人、姉と妹がいたんだよ。2人とも私や電とは違ってとてもハツラツとした性格で、面倒見が良い世話好きの姉妹だった。特に末っ子の電はお姉ちゃん達にベツタリだったからね、2人が沈んだ時は私以上に消沈していた」

「電ノ……オ姉チャン……」

日頃からホツポの面倒を1番よく見てくれている電が末っ子の甘えん坊だったとい

う事実を聞かされたホッポには、そんな電の姿が想像できないでいる。

「対して私はこの通りの性格だからね。姉妹達が轟沈した時でさえ悲しい反面、どこか諦めのような気持ちが無かったでもないんだ……ああ、やっぱりまたこうなつてしまつた、つてね」

「マタ？響ハ他ニモ悲シイ経験ガアルノ？」

「ごめんごめん、こつちの話だよ。不死鳥なんて呼ばれるようになる、とそれなりの経験もしているということさ。だからこそ私は姉妹に沈んでほしくなかつたんだらう……そして、電にも自分より先に沈んでほしくないと願つてしまつている。おかしな話さ、およそ姉らしい事なんて何一つしてあげてないのに無事だけは願うなんて都合が良いいにも程がある。それは私が電の姉だからではなく、私がまた一人になるのを恐れているだけなんだらう……」

響は気付かない。

その言葉が一人残される事を恐れるだけの言葉ではない事に。

本当に大切に思う相手と死に別れる事の辛さを知っているからこそ、一人で生き残るのが辛いのだ。

裏を返せば倉敷提督や暁や雷、他の仲間達のことをそれだけ大切に想つていたからこそ響は2度目の孤独を誰より恐れるのだらう。

しかし、目の前の幼い姫君は響よりも事の核心に気付いていた。

「……ワカルヨ。デモ、響ハ自分ノタメダケニ孤独ヲ怖ガツテルンジャナイト思ウ」

「……どうしてそう思うのかな？」

「ホッポモ同ジダカラ。ホッポネ、オ姉チャンガイタノ……デモ、艦娘ニ襲ワレタ時ニホッポヲ庇ツテ離レ離レニナツチャツタ……」

今度は響が息を呑んだ。

全く同じだとは思えないが、それにしても敵対する深海棲艦の口から自分と似た境遇が語られるなどと予想もしていなかったのだから言葉を失うのも無理はない。

「ホッポモネ、エミヤ達ニ見ツケテモラウマデー人デ怖カッタノ。デモ、エミヤ達ト会ツテカラハ寂シクナイヨ？」

「そう、だったんだね……」

「ダカラ電が大怪我シタ時ハホッポモ怖カッタ。デモソレハ、ホッポガ一人ボツチニ戻ルノガ怖カッタンジャナイヨ？」

恐る恐るではあるが、それでもホッポは真っ直ぐに響の眼を見つめて宣言した。

「なら……君は何が怖かったんだい？」

「大好きナ電ガ死ンジャウノガ怖カッタ……ダカラネ、響ガ怖イノハ一人ボツチニナル事ジャナクテ、大好きナ人ガ死ンジャウノガ怖インダト思ウノ」

響は反論できない。

艦娘となる遙か昔、艦として大戦の大海原を駆けたあの頃、姉妹艦が次々と沈んでいく中で1人生き残った頃の記憶——

生き残った達成感など皆無だった。そこにあったのはひたすら底の見えない虚無感と罪悪感。

最愛の姉妹を亡くし、終戦を迎えてから目的もなく海を漂う響の心に「あの子達ではなく自分が沈むべきだった」という思いが無かった訳がない。

姉妹や仲間達を差し置いて自分だけが生き残ってしまったという感情は、響をどれだけ苦しめた事だろう。

暁型姉妹において響だけが銀色の髪を持つのは、案外そのトラウマによるものかもしれない。

それほどまでに磨耗した心を壊れないように必死に繋ぎ止めているうちに、彼女はやがて感情の起伏すら乏しくなっていた。

自分が1人を嫌うのは、自分が寂しい思いをしたくないからだと勘違いしてしまうほどに心を擦り減らして生きてきた。

故に彼女は願うのだ、次こそは仲間や姉妹よりも自分が真っ先に沈みますようにと。

全員が生き残る未来を夢見ない訳ではない。それでもそんな夢が叶わないのが戦争

だと誰よりも知っているからこそ、次こそは命をかけてでも仲間を救おうと誓った。

しかし、運命とは無情であり現実はどこまでも現実だ。

艦娘として第二の生を授かった響を待っていたのは、またもや自分が生き残って姉妹や仲間が沈む結末だった。

倉敷提督を失った事で日に日に衰退していく鎮守府。その中で響は姉妹を守れなかった事を誰よりも後悔し、自分が生き残ってしまった運命を誰よりも呪った。

故に、ホッポが指摘する大好きな人を失うのが怖いというシンプルな感情すらも忘れてしまっていたのだ。

あたかも自分の身代わりに仲間が死んだかのような錯覚をし、不死鳥などと呼ばれる自身を呪わなければ壊れかけた心を守れなかった。

「ダカラ、電ガ死ナナクテ安心シテルンデシヨ？」

「そうだね……そうだった……いつの間にかそんな単純な事も忘れていたよ。私は姉らしい事なんて何もしてあげてないけれど、それでも電の姉で電が大好きなんだった……」

最初に抱いたとてもシンプルな感情、それを再確認してから眠る電を見つめれば、先程まで胸に蠢いていた黒い気持ちはどこにもなく、ひたすら妹が無事だった事に安直する気持ちだけが押し寄せてくる。

電の身代わりになれなかった事を悔やみ、また一人で取り残される事を恐れていた響はもういない。

「……私の大切な妹を助けてくれた事、改めてお礼をさせてもらうよ、спасибо」

「デモ……電が怪我シチャツタノハ、ホッポト同ジ深海棲艦ノセイダカラ……」

「それはそれだ、それにホラ」

響は隣に座るホッポの髪をすくって微笑む。

「この髪の毛、私とそっくりだ。暁型姉妹の中でもこんな髪色は私だけでね、まるで深海棲艦みたいだろう？」

「ソ、ソナナコトナイヨ！ 響ハ艦娘デ、電ノオ姉チャンダモン！」

「ふふっ、でも私達の髪がそっくりな事には変わりはない。ねえ、君は電をお姉ちゃんのように慕っているんだよね？」

「……ウン。響ハ嫌カモシレナイケド……」

「嫌だなんて思わないさ。ただ、電の妹というのなら君は私の妹という事になる。君の方こそそれは嫌かい？」

先程まで電にそうしていたように、響はホッポの頭を優しく撫でた。

「響ガ……ホッポノオ姉チャン？」

「そう、嫌なら無理には言わないけどね」

「嫌ジャナイ！デモ……響ハ良イノ？」

「勿論だ。私の妹やこの鎮守府を助けてくれたんだ、電も君も私の大切な妹だとも。そしてこれまでの態度を誤っておくよ、どこかで線引きして素っ気ない態度をとつていてゴメンね」

「ホツポ、響二嫌ワレテルト思ツテタ……」

「そんな事ないよ、これから出来ない姉達をよろしくお願いするよ……ホツポ」
夜の帳もおりてきた。

部屋の外に佇む鍊鉄の英霊は小さく微笑むと静かにその場を後にする。

艦娘と深海棲艦、互いが許し合える立場にはないのかもしれない。

それでも歩み寄れると証明された、そんなある日の出来事だった。

それから、鎮守府の中では以前よりも少しかだけ姉らしく振る舞う響の姿が見られるようになったという――